

伊勢次郎。(八正。) 伊勢八郎。(十二正。) 喚次。

宮小次郎。(九正。) 伊勢八郎。(十一正。) 喚次。

伊勢右京亮。(貞遠。) 永正六年五月廿一日(於三吉良殿。御所様御馬場在之。日記付伊勢六郎左衛門尉。再拜高孫次郎。)

伊勢備中守。 永正六年六月一日(於三吉良殿。御所様御馬場在之。日記付伊勢六郎左衛門尉。高孫次郎再拜。)

廿四日。乙賞。大内義興家臣忠勤。給御書於義興。

二日。癸。依。犬追物事。有被尋伊勢守貞宗。旨。

御内書案載

旨。

就今度入洛之儀。陶。問田。其外諸侍無三疎畧。由被及三聞食。候訖。尤以神妙。能々可三褒獎。候也。

伊勢貞助記云。於御樓敷ノ前。外ヲ追矢ナハナス事如何。此段公方様ヨリ以貞遠。永正六六二日。貞宗へ御不審アリ。返事ニハ上意尤之儀ナリ。但雖爲御樓敷前。ヤウニヨリ矢ヲ放事モアルベシ。射標ニヨルベシ。只イカニモ斟酌可然ナリ。又矢サシテ外追事。是ハ雖爲御前。不可苦ナリ。

五月廿四日 大内左京大夫どのへ

一外ヲ追テ馬場ノ末ノツマリタルニテ。ムチヲ打事如何。上意尤儀ナリ。不可打事ナリ。ムチヲ打事ハ馬チハシラカスベキ爲ナリ。既馬場末ナラバ。ムチヲ打テ無用ノ事ナリ。又馬ニ曲モ付ナリ。又ヨセイモスキムト返事可有御申ナリ。

朔日。壬戌。有。犬追物。

四日。乙。依。朝倉貞景献物。給御内書。

伊勢家書云

御内書案載

犬追物手組事。(圖次第。) 富山興次郎。(十一正。) 伊勢右京亮。(五正。) 吉見民部少輔。(十五正) 吉見九郎。(十正) 伊勢又次郎。(七正) 種村三郎。(四正) 伊勢次郎。(十正)

六月四日 初倉彈正左衛門尉どのへ

大追物手組事。(圖次第) 細川右馬頭。(十一正) 富山興次郎。(八正) 吉見民部少輔。(八正) 伊勢左京亮。(八正) 伊勢備中守。(十一正) 伊勢右京亮。(十四正) 伊勢八郎。(十二正) 宮小次郎。(三正) 小笠原六郎。(五正) 伊勢次郎。(十三正) 吉見九郎。(七正) 喚次。

十日。辛未。御參内。小番御勤仕。

拾芥記云。室町殿禁裡御番始。以三麗苑院御例。被參云々。

有。御酒宴。予依。當番。伺候。 高代寺日記云。六月。義尹參内復職。依。内意。嚴命。二應。公卿補任云。六月十日御參内。小番御勤仕也。

十二日。癸酉。犬追物興行。

拾芥記云。三好筑前守父子等。自近江國。出張。於三如意嶽。取陣。及三三千人云々。即日午刻。京兆被官。其外大内衆杉。陶等。島山被官遊佐衆番。皆二三萬人。向彼嶽。今夜可攻落。之處。夜半以後甚雨。其險三好以下落行。徹秋岡以下。奉公衆。神部被討。生捕及三六十人。開陣也。

伊勢家書云 初。犬追物手組事。(圖次第) 伊勢備中守。(貞隆。五正) 富山興次郎。(二正) 宮小次郎。(六正) 小笠原六郎。(十八正) 吉見民部少輔。(九正) 伊勢又次郎。(二正) 伊勢右京亮。(十一正) 伊勢次郎。(廿正) 細川右馬頭。(八正) 喚次。

十七日。戊寅。三好之長父子出張如意嶽。諸勢馳向攻之。之長父子遁走。

伊勢守。(貞宗) 永正六年六月十二日(於三吉良殿。御所様御馬場在之。日記付伊勢六郎左衛門尉。)

廿一日。壬午。野參議守光卿爲武家傳奏。 公卿補任云。參議正三位藤守光。六月廿一日被仰。武家傳奏。

後醍醐天皇二百七十四 義植將軍後記二

廿三日。甲給御書於山門本院衆徒。勵其忠勤。御内書案載

就今度敵出張。各無疎略旨。被感思召一候。彌抽忠節一者。可爲神妙一候也。

六月廿三日

山門本院衆徒中

廿九日。庚内裡御樂。將軍家御參内。

拾芥記云。禁裏御樂。武家御參内御聽聞。其後有二獻云々。

七月大

三日。癸白拍子賜調。

武雜禮云。白拍子公方様へ御禮申上事。(永正六七三)貞仍從殿中貞宗へ尋申處に。御禮申事先規無御覺悟之由被仰之。自然御陣などにて御禮申事も可有之歟。殿中へ祇候之事。勢々不可有之。か、女は殿中へも參候事自然在之。

四日。甲觀世大夫及田樂法師奉調。

武雜禮云。觀世下田樂次第之事。(永正六七四)大夫被御覽一時。先田樂可進候由。被仰出候條。貞隆并細川殿。種々雖下被申上候。無御許容。上意候旨には。御當家之御事は。等持院殿様より始申也。然に田樂以三増阿彌。觀世首阿彌を。

被召出候條。觀世より田樂前なる故に。田樂可進候由被仰出也。貞隆言上には。普賢院殿様。東山殿様以來は。觀世進申旨御申ありといへども。今日は田樂進申なり。

九日。己有射儀。

伊勢家書載。

大追物手組事。(圖次第)

細川右馬頭。(八疋) 大館刑部大輔。(三疋)

伊勢八郎。(九疋) 種村三郎。(二疋)

小笠原六郎。(十五疋) 伊勢次郎。(十疋)

吉見民部少輔。(九疋) 宮小次郎。(十二疋)

伊勢又次郎。(四疋) 伊勢右京亮。(九疋)

島山與次郎。(九疋) 吉見九郎。(六疋)

檢見。 次。

伊勢守。(貞宗)

永正六年七月九日 (日記伊勢六郎左衛門。於吉良殿)

御所様御馬場在之。再拜高孫次郎)

是月於關東。上杉顯定入道可淳攻入越後國。長尾爲景敗走。

關東管領記云。同年ノ秋上杉前管領顯定入道可淳。同子息當管領山内五郎隆房兩將八千ノ軍兵ヲ將テ。居城上州平井ヲ

候。恐々謹言。

閏八月十四日

義興判

廿六日。卯有揚弓戲。

武雜禮云。於殿中。御揚弓有之。(永正六閏八廿六)御人數。(岡野殿。烏丸殿。藤侍從殿。飛鳥井殿。右京大夫殿。房州。右馬頭殿。吉見九郎殿。一色兵部大輔。伊勢備中守。同八郎。)仍御矢取事。同朋衆に雖被仰出之。公方様あそばされば。尤も御會所之同朋可取申之。仍東山殿様之御代には。立阿取申候間也。然に今日御勝負御延引也。

九月小

是秋。被進名筈於内裡。

體源鈔引私記云。永正六年秋之比。將軍家一管ノ御器ヲ被召置。後ニ予ヲ召テ是ヲ見セサセラル。於御前ニ是ヲ拜見ス。言語道斷御器也。奇特ノ由申上。筈古物ニテ一向ニ不レ被吹試。新キヲ被立替ニテ吹試度由申上。尤之由被仰下。然ハ私町持筈。今度南都行元ニスカシタルアリ。御器ヲ被下。可調申歟由申上。則被出之間。私宅ニテ調之。仍竹ヲノゴソセ侍バ。字ヲホリツケタリ。能々見之者。公里秘藏ノ器也。永ク家ニ失ベカラザル由書付。不思職ノ由申上

朔日。辛佳儀如例。

宣胤記云。室町殿御太刀。(廿九日付御承任傳進之)御返御太刀。

閏八月大

十四日。卯大内介義興與書於蒲生刑部大輔。

傳將軍家仰。

古文書載

就御敵御退治之儀。被成御内書一候。當國衆殊連々致相談一候衆。一味同心可有御馳走一候。依二左右。京都諸勢發向日限可相定一候。委細之旨。民部卿可令演說一給上

テ。調畢テ進之。公方様ニモ御自愛ノ由被_レ仰下。音勢勝々ル事名物ニナトルベカラス。此器先中御門大納言宗綱シテ御申アレバ。近比ノ御器也。サレドモ美ノ竹一別ノ竹ニテ色替ヨシ御申。コレハ疵ナルベキカトノ御沙汰ナリト。畢三ノヨク見侍バ。節モ同。スナヒモ同シ。又竹ノウラモ同フルサナリ。只面ノ色チガ非タリ。是ハ音モ同アルベシト存ナリト申上侍。爰ニ私記録ニ。マサニ見及タル所アリシナリ。サレドモ卒爾ニハト存。當坐ニテハ不レ申。イカサマ名ノナキ事ハアルマシ。隨分尋可_レ申由申上。是テ當今キコシメシテ。數覽アリタキ由内々被_レ仰下。由申上。是ニ召進上之。以外之御敬感也。暫チカレテ可_レ被_レ遊由御申アリ。サヤウニ思食サルル上者奈御事也。イカヤウニモ被_レ召置一様ニ。統秋可_レ申沙汰一由。以_レ數阿一被_レ仰下。其仰則可_レ披露申一由申上。折節御稽古ニ被_レ召應。間延候任。將軍家御申旨申上。サテハ神妙之御申ナレドモ。御器アマタモ無_レ御坐ナ。無骨ナル様被_レ思食一由勅定アレドモ。統秋イカヤウニモ申成テ。御物ニ被_レ成様ト仰旨重々申上之間。サラバ御返事ニ。一段御秘藏アルベシ。名チ被_レ付。名物ニ可_レ被_レ入由御申アリ。仍而私カ記ナ擇。右ニ注所明白也。疑フベカラス。此器者三宮輔仁親王御器。變黒也。竹一白シト侍。不審ナキ所也。則記所上迄御覽アリテ。不思議由被_レ仰下。悉者也。内裏ヘモ此旨可_レ申上。

ト被_レ仰下。即御次次之御樂時。以_レ中御門大納言殿一申上。尤御自愛ノ事擇申入。神妙由被_レ仰下。家面目不_レ可_レ過之。此記者數載前抄也。可_レ仰可_レ覽之。

十月大

十六日。甲辰命鹽川家人一赴近江。

高代寺日記云。十月十六日。義尹備_レ促鹽川。家人同心一族五十騎。上下八百人。江州ニ赴シム。半途ニシテ歸陣。但シ催促ノ日限ハ十六日。勅坐ハ二十八日ナリ。

廿六日。甲寅此夜有_レ賊。入_レ御寢所。將軍家親誅_レ其四人。給_レ依_レ之令_レ蒙_レ疵。人々感_レ其雄猛云。

拾芥記云。今夜。室町殿有_レ御酒。御寢之處。クワン阿彌爲_レ引手。一夜討亂入。武家一人被_レ殺。及_レ七ヶ處被_レ負_レ御手。今夜番次少々被_レ參之間尋申者也。不_レ苦御疵也。

公卿補任云。十月廿六日子刻。凶賊濫_レ入内殿之處。自身振_レ武威。追夜之給。未曾有之事歟。九ヶ所雖_レ被_レ疵無_レ恙。天運神妙々々。

永祿年代記云。十月廿六日夜。義尹御所ヘ夜討入。公方様御手九ヶ所負云々。是江州義澄將軍ヨリト云々。八林政賴記云。六年十月廿六日ノ夜。江州ヨリ究竟ノ夜討ノ

波集。御殿別當。金仙寺。道鏡全室。法名常安。夢窓拜塔。永正六十廿八卒。

十一月小

十二月大

三日。庚寅依_レ年始獻物。給_レ御書於吉良左京大夫。

御内書案載

爲_レ二年始祝儀。太刀一腰到來。悅入候也。

十二月三日

左京大夫殿

十九日。丙此日。御疵平愈。諸人進_レ劍馬一奉賀。

足利季世記云。色々御養生アリ。十二月十九日ニ始而表ヘ出坐有。諸大名御太刀持參。御馬ナド進上ノ御禮アリテ。目出度御祝アリケリ。

公卿補任云。十月十九日始御出坐。大名以下進_レ太刀。

廿一日。戊申春日社正遷宮。

高代寺日記云。十二月廿一日。春日遷宮。勅使藏人弁伊信。式色々アリ。是年。宋素卿往_レ朝鮮國。

是年。宋素卿往_レ朝鮮國。

上手圓珍トヤラム云時。義澄將軍ニ被_レ頼申。御前ニテ被_レ召遣ケル繁阿彌ト申合。ムムノト御所ニ忍入。其外手柄ノ者三人計リ推參任。既ニ太刀長刀ニテ切奉シニ。御所様モ御打刀ニテ。散々ヒヤウシアイシ玉ヒケレ。知人更ニナカリケリ。御立烏帽子御衣ナンドハ繼所モナク切奉リケルガ。御身ニハサシテ深手ハマシマサズ。薄手少ゾアリケル。御所様燈チハワザト打ケシ給ヒシ時。御宿直者チ散々ニ切リツメ。又ハツキナドシテ出タリケル。一定討止奉タルゾト心得罷出。江州ニテハ討スマシタル由申タルト聞エシ。

御用心サウケタマル御所様ノ御働キハアツコ、チヨシトゾ落着チ立タリケル。

足利季世記云。永正六年六月廿六日子刻計ニ。御殿中ヘ凶賊シノビ入。御重寶チウバヒトリケリ。當番ノ面々折節イタクホ入テ是チシラザリケルニ。公方様ノ御所マテ押入ケルチ。義植公御ネマキ計メサレ。御太刀チヌキ合。夜打ニ入シトモガラ四人マテ切伏玉フ。然レ九處疵チ負玉フ。誠ニ天運トハ申ナガラ無_レ双御働ナリ。

高代寺日記云。近來義尹被_レ疵タマフ。義澄所爲トサタアリ。

廿八日。丙辰伊勢守貞宗卒。

伊勢系圖云。貞宗。伊勢守貞親子。兵庫助。備中守。伊勢守。從四上。應仁之亂五歳御時義尙公扶持。殿中總奉行。歌匂入_レ筑

舊證日本考云。正德四年。王源義澄遣宋素卿來貢。素卿者蜀人朱縞也。逃入倭。有寵于其王。易姓名充使。其旅人相與耳目爲奸利。守臣自發之。禮臣恐尖外夷心。置不問。素卿厚賂關理。賜飛魚服。還歸。

後鑑卷之二百七十五

義植將軍後記第三起永正七年正月

永正七年庚午

正月小

九日。丙寅御參内。

拾芥記云。室町殿每度十日雖御參内。去年冬被負御手。御平愈以後。初御參之條。十日就禁裏御德日。今日御參内也。元長記云。今日。室町殿御參内也。可爲早速之由。昨日右大弁宰相所示送也。已下刻直衣參内。相伴秀房爲著裝束來也。參任人々。中御門新大納言。宗綱。予。飛鳥井中納言。雅俊。大藏卿。和長。新中納言。守光。伯二位。忠宣。三條宰相中將。公條。右大弁宰相。尙顯。阿野宰相中將。秀綱。頭中將。康親。雅樂。御劍。官綱等朝臣。永家。

賴繼等也。恒例三献之外。二献被加之。三献之末。武家近習給之如例。五献各守次第。天酌也。於御直座。三献之外御盃取重。二云々。事畢御退出。於車寄。陪居。不出阿外。近習之衆少々出歟。即退出。西下刻許也。

十日。卯公卿參賀。

公藤公記云。參室町殿。各參集。予一人遲參也。著座以後即有御對面之儀。一條前關白。近衛前關白。關白。九條。前右府。久我。予。退出。

拾芥記云。武家參賀如例。

元長記云。武家參賀也。坊城前中納言。賴繼等同道。

十四日。辛未細川高國進一献。

武維禮云。とく日の母。諸人共に物を不可出之。仍公方様にも御とく日には。御太刀風情何にても不被下候。然に永正七十四細川殿御嘉例之御盃御進上にて。御一献之時惣檢按祇候につきて。貞隆へ御尋之時。如此御申在之。然間今日御とく日たる間。何をも不被下候。

廿一日。戊寅宗讚岐守貞盛賜一字。改名義盛。

宗系圖云。義盛奉書于將軍義尹。以龍源院主宗開侍者。天受寺主宗孝爲使僧。永正六年七月廿一日辛亥。對州出船。同十月七日乙丑京著。同十二月十日丁酉謁義尹。同七年庚

午正月廿一日戊寅賜義字。宗開傳之。同二月十六日壬寅下向。同四月四日己丑歸國。義盛拜受御教書。對馬屋形自此時始。時義盛年三十五。法名宗喜。號悅翁。號龍源院。歷代鎮西要畧云。六年己巳。對馬守宗貞盛賜屋形號。且拜受義字。名義盛。蓋是因去年於將軍再興之時。見功也。

二月大

七日。癸巳此日。於關東。結城修理大夫朝脩自殺。

結城系圖云。朝脩。參河守直常子。修理大夫。永正七年二月七日自害。法名宗鎮。

十四日。庚子被命御祈於祇園社。

祇園社記載

御殿退治御祈禱事。近日殊可被抽。懇精之由。所被仰下也。仍執達如件。

永正七年二月十四日

對馬守判 近江守判

祇園執行御房

十六日。壬寅依近江征討。細川右馬助以下發京。

公藤公記云。今日。近江出陣也。自去月山門閉籠同心發向云々。

拾芥記云。爲近江國伊庭九里等對治。細川京兆被官遣世者云々。

阿彌誠云。龍軒。向打手也。惣大將右馬助云々。今日晚氣右馬助出陣也。細川京兆稱行應野。相向在。今應野。公卿補任云。二月十六日江東征伐。同廿八日諸將敗北。長享年後畿内兵亂記云。同七年江州二月二十日靈電軒出張。同二十九日打死。

廿三日。己酉就近江征伐。給御書於近江諸將。

昔御内書符案載

就江州敵退治事。早速令出陣。抽忠節者神妙。依其功可有恩賞一候也。

二月廿三日

- 佐々木五郎どのへ
- 佐々木黒田四郎左衛門尉どのへ
- 佐々木尼子刑部少輔どのへ
- 佐々木岩山四郎どのへ
- 佐々木鏡兵部大輔どのへ
- 佐々木高橋兵部大輔どのへ
- 多賀四郎右衛門尉どのへ
- 多賀豊後入道どのへ
- 若宮左衛門大夫どのへ
- 河瀬正左衛門尉どのへ
- 河瀬右馬九どのへ

市村備後守どのへ
藤堂九郎兵衛尉どのへ
上坂治部入道どのへ

就江州敵退治事。早速令出陣。佐々木中務少輔入道願
手。抽忠節者神妙。依其功可有恩賞也。

二月廿二日

草山又次郎どのへ

草山彦次郎どのへ

土肥美濃入道どのへ

熊谷次郎どのへ

廿八日。甲。近江合戦。京勢敗歸。

公藤公記云。近江陣破而諸勢等死云々。○廿九日條云。雲龍
軒(等阿)康首座。富田等打死之由風聞。言語道斷。不便不
便。

拾芥記云。雲龍軒攻九里之處合戦。雲龍軒并戸田等大畧被
打。殘軍共被追散。

高代寺日記云。去ル十四日京勢江州へ發向。當旗下二千餘騎
催促ニ從フ。廿八日京勢敗北ス。

三月小

五日。辛。今熊野御詣。○依近江合戦無利。重

給御書於諸將。

拾芥記云。細川就近江義可。逆世之由風聞。然而室町殿
御參詣今熊野。被宥細川。仍今日歸京。

昔御内書符案載

今度於江州。戰功神妙候。先勢依利。既右京大夫雖
可有渡海。先被仰留。重可在上者。各相談。忠
節肝要候。巨細猶大内左京大夫并貞隆可申候也。

三月五日

佐々木小三郎入道どのへ

佐々木九郎どのへ

蛭野軒

七日。癸。依若狹國事。奉行人傳。仰本郷新三郎。

本郷文書載

若狹國本郷(除同名三郎扶養跡)事。先年於北國。任御
成敗之旨。對阿野維學。去年雖被成奉書。大内左京大
夫執申之條。被返付記。早可被全領知之由。所
被仰下也。仍執送如件。

永正七年四月七日

上野介判

近江守判

九日。丑。奉行人傳。書於三條家雜掌。沙汰松平

和泉寺質券地事。

古證文載

對松平和泉寺質券地。城州西京雀森四町事。任今度德政
法。進納拾分一之上者。於被借書者。被弄破畢。可
被存知之由。所被仰下也。仍執送如件。

永正七年三月九日

丹後守判

伊勢守判

四月大

三條宰相中將雜掌

十四日。己。賞賊徒退治。給太刀及御書於朝倉

貞景。○又依獻物。給御書於相良近江守。

昔御内書符案載

加賀越前兩國一揆。度々蜂起候處。依戰功早速加退治
由。被聞食候。尤以神妙。仍太刀一振(國泰)遣之候
也。

四月十四日

朝倉彈正左衛門尉どのへ

御内書案載

爲入洛祝儀。太刀一腰。(國泰)面革百枚到來。目出候。

也。

四月十四日

相良近江守殿

十七日。壬。清和院御參。

公藤公記云。武家今日令參詣清和院地蔵給。

十八日。癸。又渡御清和院。

公藤公記云。武家今日早天。令參詣清和院地蔵給。

廿日。乙。被定大工職事。

式目追加載

一。社方以下大工職事。(永正七十四廿。)

三。社并四ヶ寺之外者。一切可被停止彼等訴訟乎。自今
以後者。可被任本所之意矣。

廿九日。甲。猿樂興行。

公藤公記云。有武家御使。一色兵部大輔。今日御猿樂雖可
被見。上蔭局不被搦在所之間。無其儀之由仰之云
云。

是月。宗能登守盛弘攻朝鮮。敗死。

宗系圖云。盛弘。賊岐守盛盛子。能登守。永正七年奉盛盛命。
率兵攻朝鮮。四月四日渡海。攻落唐位止城。不日又攻破

江具度儀城。其後進到熊川城下相戰。朝鮮兵多集如雲圍。盛弘。々々兵大半討死。盛弘亦戰死。年卅一。其精魂猶生。同年六月朔乙酉。其靈魂於對州豐崎高崎之濱云。里民經營一社。號高崎大明神。其宮至今在焉。鎮西要畧云。夏四月九日。朝鮮之舟師與對馬一相鬪沒落。

五月小

十一日。丙寅。於假御所有一獻儀。伊勢貞助記載。進上。(永正七五十七)於吉良殿御所一獻申沙汰在之。

初獻。御太刀 一腰。(持) 御馬 一匹。(鶴毛) 三獻。御給二幅。 御盆一枚。 五獻。唐糸十斤。 御盆一枚。 御太刀一振。 御刀一腰。 以上。 六內左京大夫 義興

公藤公記云。今日有武家猿樂云々。武雜禮云。於吉良殿御所。(永正七五十一)御鹿在之。面々

之供衆に。面々於庭上御通被下之。一番に細川殿供衆兩人。(寺町石見。大田藏人)二番島山修理大夫殿供衆兩人。(加治。遊佐左)三番大内殿供衆。(杉次郎左衛門。同彦三郎。杉兵康助。飯田)御酌。(一色兵部大輔)御提。(一色宮内少輔)房州貞陸殿上に祇候。御一獻以後に御太刀(持)各御禮申之。貞陸披露之。此時之御酌。土器を御てうしの上に被置て御出也。

十九日。戊申。依鹿苑院住職事。給御書於文徳和尚。御内書案載

鹿苑院住持事。御斟酌旨。委細承候。雖無相違御領掌本意候。尙貞陸可申候。恐惶敬白。

五月十五日 文徳和尚

廿二日。丁未。於關東。結城彌七郎顯朝戰死。結城系圖云。顯朝。讚岐守政胤子。彌七郎。永正七年四月廿一日於小佐久。田原助五郎下討死。

六月大 十二日。丙申。於吉良亭。犬追物張行。伊勢家書載

- 犬追物手組事。(於吉良殿御所。御馬場御座。)
- 細川右馬頭。(八疋) 伊勢兵康助。(五疋)
- 小笠原六郎。(十六疋) 伊勢次郎。(廿二疋)
- 伊勢左京亮。(六疋) 種村三郎。
- 宮上野介。(十疋) 伊勢右京亮。
- 島山式部少輔。(十三疋) 喚次。
- 伊勢守。

永正七年六月十二日 (日記付伊勢六郎左衛門尉。再拜朝日本□)

後犬追物手組事。

- 右京大夫。(十疋) 島山式部少輔。(六疋)
- 伊勢守。(四疋) 伊勢右京亮。(十五疋)
- 伊勢兵康助。(八疋) 宮上野介。(四疋)
- 小笠原六郎。(十七疋) 伊勢次郎。(十七疋)
- 伊勢左京亮。(七疋) 種村三郎。(七疋)
- 細川右馬頭。(五疋) 喚次。

大内左京大夫。

永正七年六月十二日 (日記同前。再拜同前。)

廿九日。癸丑。於吉良亭。犬追物張行。

伊勢家書載

- 犬追物手組事。(於吉良殿御所。御馬場在之。)
- 右京大夫。(十四疋) 島山式部少輔。(六疋)
- 伊勢守。(十二疋) 伊勢下總守。(四疋)
- 小笠原六郎。(十三疋) 宮上野介。(五疋)
- 伊勢兵康助。(四疋) 伊勢右京亮。(十疋)
- 伊勢左京亮。(三疋) 種村三郎。(七疋)
- 吉見民部少輔。(五疋) 伊勢次郎。(七疋)
- 細川右馬頭。(十疋) 喚次。

細川安房入道。

永正七年六月廿九日 (日記伊勢六郎左衛門尉貞久。再拜同于夜又丸。)

是月。於越後國。上杉民部大輔顯定入道可諱與長尾爲景戰敗死。

關東管領記云。七年ノ夏高梨權津守先亡ノ殘徒ヲ集メ。七百餘騎ニテ椎屋城ニ据ル。所々ニ火ヲ放テ兵糧ヲ亂妨ス。顯定憲房大ニ怒テ。爲三追討。國中ノ士ヲ催サル。ト雖モ。背政ヲ怒ミテ一人モ不來從。雖手勢纒二百騎計。同六月廿二日。椎屋城ヲ攻ル。城兵貳百騎及合戰ノ處ニ。顯定父子軍ニ打負テ妻有庄へ引退テ。猶上州ノ勢ヲ招キ暫時令逗留ニ處

ニ。爲景並ニ高梨攝津守權屋ヲ拂テ。千二百騎大軍ヲ將テ押寄ス。顯定出向テ。同國長森原ニ於テ合戦ス。顯定入道可諱長刀ヲ持テ敵兵ニ切懸ル處ニ。高梨攝津守馬ヲ馳寄組テ落。終ニ顯定ヲ討取ル。上杉勢悉ク敗北ス。顯定今年五十七歳。上杉中興ノ名將今日不致ノ討死。諸人惜レ之云々。長尾高梨ガ威勢國中ニ振フ。猶憲房ヲ討ント議ス。於是憲房越後ヲ引取上州ニ歸陣。平井ニ在城。是當時管領職也。于レ時上州ノ住人長尾四郎右衛門景春入道伊玄等爲景同苗タルニ依テ。別心ノ色ヲ立テ。當國沼田ノ庄ニ陣取。上杉ニ敵對ス。伊玄入道ガ近親三戸駿河守。太田備中守等色々諫言スレテ。入道不レ用シテ謀叛スト云々。

上杉系圖云。顯定。四郎。民部大輔。右馬頭。實越後上杉相模守房定次男。房顯無三子息。依レ之長尾景信迎レ之。令顯定繼ニ家督。于レ時應仁元年任管領。年十四。初築平井城。移三山内。永正六年七月廿八日長尾太郎爲景於三越後一謀反。顯定發向合戦討勝。爲景同國西流敗走。同七年越州又一揆。顯定敗軍。同六月廿日信州興三越州一揆於三長森原。爲高梨一討死。五十七。法名海龍寺可諱暗峰。

七月大

廿日。甲依ニ献物。給ニ御内書於河野刑部大輔。

御内書案裁

爲三年始祝儀。太刀一腰。烏目二千匹到來訖。日出候也。七月廿日

河野刑部大輔殿

此月。於關東。上杉憲房拔ニ武州權現山城。又上書於京。請レ伐ニ長尾爲景。

關東管領記云。同年ノ初秋武州ヨリ飛脚到來。相州小田原城主北條入道早雲越州ノ長尾爲景ニ一味ノ。相州住吉ノ城ヲ取立旗ヲ上ル處ニ。上杉治部少輔高敏入道建芳ガ被官上田藏人ト云者早雲ニ一味シ。人數ヲ催シ武州ニ押入。神奈川ノ庄權現山ニ城ヲ構ヘ楯籠ルト云々。上杉管領憲房先ニ軍兵ヲ割キ分。沼田ノ陣ニ押ヘテ置。治部少輔高敏入道建芳ヲ大將トシ。從兵ニ成田下總守。澁江孫次郎。藤田虎壽。大石源左衛門。長尾孫太郎名代矢野安藝入道。長尾但馬守名代成田中務丞等。武州南一揆。彼是人數二萬餘人。北條氏追伐ノ爲ニ。神奈川ヘ被ニ差向。同年七月十一日權現山ノ城ヲ取卷ス。當城ハ無双ノ要地也。南方ハ溟海也。北方ハ深田也。西方山ニ縋ク。其山ノ根ヲ堀切。奥ノ山本覺寺ノ地藏堂ヲ根城ニ構ヘ。越州相州ノ加勢ヲ入置ク。東方ハ平地ニシ。城主上田藏人選兵ヲ卒ノ彌シク防ク。神奈川住人同宮慶四郎等四目結

ノ笠驗ヲ著ケ。甚猛威ヲ振テ働ク。寄手ノ内當國稻毛ノ住人田島新五郎鐵鑓ヲ以城戸ノ繩ヲ切落ス處。城兵大石ヲ投懸。田島甲ノ鉢ヲ破リ忽ニ響ヒ落タリ。敵味方合戦烈シク。今月十一日ヨリ同十九日ノ晚景ニ到テ。晝夜ヲ不レ分攻戰處ニ。十九日ノ夜城兵等城ヲ自燒ノ上田藏人以下悉落失。不レ知行方。上杉勢勝軍ノ利ニ乘ソ遠近ニ威ヲ振フ。憲房大ニ喜悅シ。木村式部少輔ヲ以京都將軍家ヘ訴ヘ申。長尾六郎爲景ヲ討ント議ス。

東亂記云。憲房使者ヲ以テ京都ヘ訴ヘ申シ。六郎ヲ可レ誅由サ、ヘ申ス。其狀云。

御上洛之路次如何。無御心元一候。抑一心院事。大概無三相違ニ相調候處。去年越州ヘ罷立以來。彼寺領等有違亂之族ニ相煩候。口惜存候。然而不圖御上。於レ其偏失ニ本意一候。雖レ然於レ時宜ニ者事成候間。門主之御前。公方様之被レ得ニ上意。被レ差ニ越御代官等。御副候者。定治部少輔入道建芳モ。不レ可レ及ニ兎角一候。拙子モ彌漣分可レ致ニ異見一候。不レ可レ有ニ御退風一候。抑去ル六月十二日。於ニ權屋一戰失レ利候。所存之外ニ候。然ル處長尾六郎。高梨攝津守親來候間。廿日遂ニ一戰ニ可諱討死。不レ及ニ申次第候。權屋一戰以後。要有之庄ニ某立レ馬候。國中如此之上不レ及レ力。關東江入馬。白井候長尾左衛門入道伊玄起ニ逆心。彼六郎致ニ一

味。沼田之庄内江打入。號ニ相俣一地令張陣一候間。于レ今有ニ此方一取向候。古河様無ニ御餘儀。建芳モ無ニ等閑一候間。別條之子細無レ之候。伊勢新九郎入道宗瑞。長尾六郎與相談相州ヘ令ニ出張。高麗寺井住吉之故要害取立令ニ峰起一候。然間建芳被官上田藏人入道令與力宗瑞。神奈川權現山々取ニ地利。致慮外一候間。建芳自身向レ彼地ニ罷立候。然間自當方勢道。自去十一日一相攻彼城一候處。同十九夜中令ニ没落一候。然間所々要害令ニ自落一候由注進到來候。相州口者。先此分ニ候。將亦長尾六郎非ニ弑ニ民部大輔房能ニ耳。重而可諱身軀如レ斯之條。爲三家郎亡ニ兩代之主人一候事。天下無比類ニ題目候歟。關東越州之爲レ味。幸淵底御存知之事候上者。以御次ニ而被レ違ニ上聞。彼六郎并高梨被レ加ニ御追伐一候様御申奉レ願候。然間近國之諸士之方ヘ。被レ成ニ御内書一候者。何レ可レ應ニ上意候。特細川右京大夫。畠山尾張守。大内左京大夫。伊勢伊勢守方ヘ。此方寄々有ニ御書語。可レ然様申御沙汰頼存由。御届可レ爲ニ肝要一候。關越如レ斯之上。剩可諱討死之間。公方様御入洛御禮可ニ申上ニ事延引候。彌漣失本意一候。少シ靜謐之形候者。可ニ言上仕ニ覺悟候。隨而就ニ越州松山之儀。被レ成ニ下御内書一候間。先其御禮。又者越州之味如レ斯次第爲レ可レ違ニ上聞。雖ニ老者候。清森式部入道差上候。能々御面談。有ニ可レ然御取

刷瀝存候。合彼口上。可レ得意。恐惶敬白。

八月三日

藤原憲房在列

拜皇 上乘院 御同宿中

八月小

七日。卯諸國大震。

足利季世記云。八月七日ノ夜大地震ナビタシクシテ。國々堂會佛閣顛倒シ。天王寺ノ石鳥居モタナレケリ。其地震七十餘日不止シテ云々。

高代寺日記云。八日七日夜大震。

長享年後鑑内兵亂記云。八月八日大地震。天王寺石鳥居。河内堂塔崩裂。人民多死。

永祿年代記云。八月七日夜大地震。天王寺石鳥居崩ル。浦々高麗充滿波荒。人家損失云々。

十一日。乙此夜。内裡有御夢想發句。

翰林蒞蓬萊禁裡御夢想記云。維時永正歲次庚午八月十一日夜。今皇帝夢侍三先帝。先帝曰。命三僧有柏二作連歌發句。有柏詠詠和歌一篇而言。某以此歌意爲句。則可臨席以奏焉。其歌曰。葦曳之山遠月於空に置而月影高之末之梯。宮瀨傳呼。帝夢覺矣。遂以三夢事告三條前内府。内府傳之有柏。有柏于時感三罪陽。據三卷一號夢經。其名不詳。其者

句にきては當座に申へし。此歌の心にてなん風情をおもひめぐらし侍とて。足曳の山遠き月を空にきて月影たかき末のかけ橋といふうたを申上たりと御覽せられぬるよしかたりおほせしかば。さてもさてもめづらかに。哀ありがたかりける御ことかな。天曆以在の歌にとりても。まさしく楠本山邊の風林の外。かゝるはまれにやあらむ。もとより凡人の見る所にあらざれば。凡庸の所詠にはあらざるべし。おほよそ青雲紫霞の夢に入たぐひ。もろこしには傳野の遺賢の舟楫補佐の名を残し。巫山の神女の雲雨妖艶の情となれるためしもぞ古語に有けん。今この老法師の。かゝることばなきこそあけぬ。數處をおどろかしけんは。いにしへ今道たへにたる事にこそ。年頃夢應とよびきたりけるも。かゝるべき事の識のみにやとまであやしくおぼえ侍りしかば。折ふしたよりに文つかはすつめてにしろしなくりしかば。おもふにもこえける感悅。手の舞足のふむ所をしらすとて。九月十日のほどにふりはへのほりきたられしも。まことにやさしころるさしなるを。おなじき十三日そらのけしきころよく晴て。吾國の月のなもげにかひありぬべきおりのなれば。御連歌あそばさるべし。發句は下官申へきよし仰られしかば。此事をおもひいて。あらばわたくしにあひゆづるべきよしうけ申て。

乎。感嘆無レ措。得々入レ維。帝即召見殿前。仍賦レ筵而連歌。有柏奉三詔旨。唱曰。空に置而見世而幾世秋月。御製續之曰。庭に不レ盛玉敷之露。百句成レ章。々學傳三玉杯。帝親酌焉。榮莫レ若焉。實九月十三夜也。本朝以此夕與八月十五夜。併以賞之。昔者殷高宗夢得レ說。乃審厥象。傳以レ形旁求于天下。說樂三傳岩之野。惟肯作レ說命。殷道興矣。爾來未レ聞。如是瑞夢二矣。帝恭默思道。輔弼良佐自レ此而升矣。有柏其族出レ自二天曆後中書王。所レ謂通具通光者其祖宗也。傳手記之。不レ克レ辭。謹記其略云。春夢草云。永正七年八月十一夜。禁裏御夢想の事うけたまはりて上洛せしめ。御會にまいり。あまさへ發句を申へきやうにありしかば。とかく申上におよばず申侍り。過分とも中く申にたへぬことなりき。其夜心中につゞき侍りし。およびなきほどは雪の夢うつゝあやしきみともおもほゆる哉。御夢のうちよりの次第をしるしとめたましを。前内府にしきりに申しかば。筆に染られ侍るを。こゝにしろしなくものなり。さいつ頃 内のみかどの御夢に。先皇の御代に。御連歌あるべきにて。發句は有柏法師申へきよしありしかば。まづうちうちに御覽あるべきよし。當代のおほせことなりしに。發

後鑑卷二百七十五 後植將軍後記三

永正七年八月

五百八十九

御内書察裁

廿四日。申給御内書於上杉兵庫頭。

古槐散木御判

永正第七幕秋記之

御内書察裁

永正七年八月

五百八十九

御内書察裁

廿四日。申給御内書於上杉兵庫頭。

古槐散木御判

永正第七幕秋記之

御内書察裁

永正七年八月

五百八十九

御内書察裁

廿四日。申給御内書於上杉兵庫頭。

古槐散木御判

永正第七幕秋記之

御内書察裁

今度入國之事。早速違本意。由。注進到來。日出度候。委細右京大夫可被申候也。

八月廿四日

上杉兵庫頭殿

廿七日。辛亥。遠江國大風。

足利季世記云。八月廿七日。廿八日兩日ノ間。遠江國へ大浪オヒタシク來リ。陸地忽ニ海トナル。今ノ今切ノ渡ト申ハ是也云々。

高代寺日記云。去ル八月廿七日遠州今切崩ル。

九月大

二日。乙卯。依高砂明神領事。奉行人傳仰于大内

左京大夫。

山城名勝志載

高砂大明神領蓮蓬寺分紛失之由。就訴申。遂糺明之處。支證分明之間。如元被返付一所也。并七野之内散在田島等。同可領知者也云々。

永正七年九月二日

近江守判

下野守判

大内左京大夫殿

廿三日。丙子。依多田院領御即位段錢免除。奉行人

傳仰彼名主沙汰人。

集古文書載

多田院領攝津國多田庄七郡并加納分米谷村。山本村。小戸村等御即位反饋事。先々爲免除之地一條。恐守護催促之上者。早可致沙汰彼代。更不可有難進之由。所被仰出候。狀如件。

九月廿三日

長俊判

長秀判

政規判

當所名主沙汰人中

十月小

十日。巳。依渡唐船警固事。給御書於島津陸奥

守。

御内書案載

渡唐船事致警固。於自然儀。無疎畧者可爲神妙。仍太刀一振。刀一腰遣之候。巨細猶大内左京大夫可申候也。

十月十日

島津陸奥守殿

永正七年十一月十四日

對馬守判
左衛門尉判

廿日。癸卯。奉行人等定意見條件。式目追加載

同條々。(永正七十廿。)

一 每月十日廿日晦日三ヶ度。(會合之時刻五打半時。)

一 披露之次第。可爲如先々事。

一 意見一ヶ條事切之時。被相決定右儀。於當坐被認認草

案。其以後可有披露自餘之儀事。

一 披露之時。不可被相交別儀。至其外事者不及是

非一事。

一 著坐之時。於非公儀之事者。各不可被立坐事。

一 披露之篇目。任先例可爲日限次第事。

一 意見終後。各一同可被退坐事。(但於御宿直。各可被相談之。)

十一月大

十四日。丙寅。依十念寺敷地事。奉行人傳書於彼

住持。

山城名勝志引古文書

十念寺當敷地事。去文明年中夜盜時。文書令紛失云々。被開食訖。任當知行之旨。領掌不可有相違。若文書有出帶之張者。可有糺明之由。所被仰下一也。

後鑑卷二百七十五 磯植將軍後記三

永正七年十一月十二月 五百九十一

廿一日。癸酉。依上杉兵庫頭獻物。給太刀及書幅。

御内書案載

就今度分國錯亂儀。爲下知禮。太刀一腰。(盛光。馬一匹(鹿毛。到來。神妙候。仍太刀一振。(長光。給二幅。(牛李迪筆。盆一枚(堆紅。遣之候也。

十一月廿一日

上杉兵庫頭殿

十二月大

廿日。壬寅。被令訴訟人日限事。

蟪川親孝日記載

一 訴訟人日限事。(永正七十二廿。)

於三論人出對儀者。(正長十二。壁書炳焉也。至訴人解狀日限者不三分明。所詮一問一答之間。可爲三七箇日。若又於被感問答延引奉書者。彼此可爲四十二箇日。馳過此日限者。可伺申之矣。

廿四日。丙午。宗讚岐守義盛謝賜一字獻物。依之給御内書。

昔御内書符案載

就字儀。太刀一腰。(持)段子二端。照布三端。油布二端。烏目三千匹到來候訖。悦喜候也。

十二月廿四日

宗政岐守とのへ

廿九日。亥。土佐國司一條房冬叙ニ從五位上。任ニ待從。

歷名土代云。從五位上藤房冬。同七十二廿九。同日侍從。

是月。被_レ禁_レ賣_レ御判地一事。

堀川親孝日記載

一御判地等賣寄進事。(永正七十二)。

於_レ自今已後者。隨被_レ停止訖。但從_レ上裁_レ至被_レ成_レ御下知以下者。不_レ及_レ是非矣。

後鑑卷之二百七十六

義植將軍後記第四起(永正八年正月)

永正八年 辛未

正月小

元日。癸。地震。

永祿年代記云。正月一日卯刻地震。

十日。戊。公卿參賀。御參内。

元長記云。武家參賀也。御對面之後退出。一條殿入御。々小直衣被_レ改_レ御衣冠。可有_レ御參内云々。未刻計着_レ直衣參内。

爲_レ參會也。參任人々。予。飛鳥井中納言。(雅俊)左大弁宰相。(尙願)阿野宰相中將。(季綱)右大弁宰相。(冬光)頭右中將實胤朝臣。雅樂朝臣。言綱朝臣。秀房等也。三獻之後御退出。於_レ御直座有_レ三獻。酉刻御退出。參_レ御乘輿之處。宿歸候。依_レ當番也。

體源鈔云。けふは永正第八曆正月十一日なり。昨日者武家御所御參内なり。依_レ病氣_レ祇候してをがみたてまつらす。

是月。畠山宮内少輔多田社代參。

高代寺日記云。八年辛未正月義尹名代トシテ。畠山宮内代參タリ。

二月小

三月大

五日。乙。此日。前將軍家若君於_レ近江國_レ降誕。是

爲_レ萬松院義晴公。

足利季世記云。八年三月ノ頃義澄公方ハ。近江ノ九里ガモトニ御坐シケル。爰ニテ若君一人誕生アリ。然レドモ佐々木六角高頼ハ京公方義植公へ無_レ二ノ味方ナリシカバ。若君ヲ養ヒ申サルベキヤウナクテ。義澄公若君ヲ御同道アリテ。赤松ヲ御頼ミアリ。播州ニ御下向アリ。無_レ程二男ヲカ君誕生アリ。一人ナバ赤松アツカリ奉ル。一人ハ澄元ニ預置玉フ。是ハイツレモ無_レ二ノ忠臣ナレバ。且ハ又此ノ人々ノ心ヲモトラセ玉ハントノ儀ナリ。赤松ニ御坐若君ハ後ニ義晴公ト申ケル公方是也。四國ノ御所ハ左馬頭殿義維是ナリ。

足利家官位記云。義晴。永正八年三月五日降。

高代寺日記云。三月五日義澄男子生ズ。公方共ニ合軍半放。其母ト共ニ播州ニ令_レ送。密々植禰其家人三十餘輩ヲシテ。播丹ヲキ路ヨリ三木越テ播州へ送ル。

廿日。庚。御鞠始。

元長記云。室町殿御鞠始也。申刻着_レ葛袴參。御人數。予。飛鳥井中納言。(雅俊)左大弁宰相。(尙願)阿野宰相中將。(季綱)右大弁宰相。(冬光)康親朝臣。雅樂朝臣。雅綱。永家。頼孝。鴨社光爲三位。光藤縣主。武家一色兵部大輔等也。學進。上御太刀。

卅日。庚。有_レ一獻儀。

武雜禮云。永正八三卅ニ御一獻御坐候時。面々之供來ニ御酒被_レ下。於_レ御座立揚板上也。御酌。(貞遠)御提。(貞久)一番ニ酒師寺與一。二番畠山修理之御供。(加治)三ニ飯四。四ニ大日藏人。五ニ弘中小太郎。此時も御てうしの上ニ盡被_レ置之。

四月小

五月小

三日。壬。給_レ御内書於佐々木四郎。

昔御内書符案載

爲_レ内書禮。太刀一腰。(助行)馬一匹。(栗毛)烏目三千匹到來。神妙候也。

五月三日

佐々木四郎とのへ

是月。仍_レ年始獻物。給_レ御内書於朝倉貞景。

御内書案載

爲_レ年始獻儀。太刀一腰。(持)青銅三千疋到來。目出候。仍太刀一振(助行)道候也。

五月

朝倉彈正左衛門尉との

六月大

十二日。庚寅三寶院持殿大僧正献物。

伊勢良助記載

御折

御折

以上

三寶院

晦日。戊戌大德寺大工職事。奉行人傳仰於彼

寺雜掌。

古文書載

大德寺同諸塔大工職事。大工三郎左衛門尉宗久申子細一之條。被遂糺明淵底之處。於宗久者無支證之間。一向不能對論。至大工十郎宗次者。云手續云證文。理運顯也。所證對宗久被成下。永正五年十二月五日於御下知。被弄被訖。申付十郎宗次。可被專寺家之造營之由。所被仰下候也。仍執達如件。

永正八年六月卅日

下野守判

大德寺雜掌

七月大

十二日。庚申被命御祈於神宮祭主。

伊勢神宮引付殿

天下安全并兵革御祈事。一七ケ日殊可抽丹誠之由。可被下知神宮之由。室町殿被仰下候也。仍狀如件。

七月十二日

祭主三位殿

右中將判

十三日。辛酉泉州深井合戰。京勢敗走。

拾芥記云。今日敵右馬頭與攝州衆合戰。

足利季世記云。去程三細川右京大夫澄元。三好筑前守播州へ落行。赤松チカカタヒ。播州ノ勢チツク。四國ノ勢チ催シ。細川右馬頭政賢。同名和泉守護高山神州。遊佐河内守チ相備和泉國へ買上リ。深井ニ陣チ取タリケル。高國是チ聞テ先五百餘騎攝州へ指下ス。此方代庄ニ陣チ取リケルガ。四國モカ、ラズ互ニ日チ送リケルニ。七月十三日京方大勢ニテ深井へ押寄テ責ケレバ。澄元衆ノ横合ニカ、ラレケルニ。京方打兵三百人打レ。殘ル勢ハ堺へ引退。澄元キヤイ中島マテ寄タリ。細川淡路守兵庫へ押波リ難波マテ買上ル。

古文書載

御敵退治御祈事。近日殊可被致精誠之由。所被仰下也。仍執達如件。

永正八年七月十六日

近江守判

對馬守判

廿三日。辛未細川高國命家人。防南方敵。

拾芥記云。南方敵淡路守。攝州兵庫島。なだ邊徘徊之間。細川遣柳本。波多野。馬廻衆。長繩以下。

廿六日。甲戌攝州蘆屋河原合戰。四國勢敗績。

拾芥記云。合戰間。淡路守衆。なだ衆二三百人被打。首百計上云々。敵右馬助衆在二中島邊云々。其外高山上越衆出頭也。

足利季世記云。高國方河原林對馬守正頼。同國蘆屋庄ノ上蘆尾城ニ柳籠ケルヲ。淡州勢ハ是チ買ヨトテ深井ニ陣チトリケレバ。河原林驚。此由注進シケレバ。高國此注進チ聞ヤ否。馬廻ニ柳本宗雄。其子波多野孫左衛門。能勢因幡守。荒木大藏チ初卅餘頭指下ス。同月廿六日蘆屋川原ニテ合戦ス。蘆尾ノ城ニ籠ル勢是ニ氣チ得テ。切テ出テ、横合ニカ、リケレバ。京勢軍ニ打勝。淡路衆數百人討死ス。

永正八年七月

五百九十五

細川兩家記云。永正八年辛未七月に澄元武略をめぐらし。赤松殿を御たのみありて播磨勢を催し給ふ。先軍の大將には御二門右馬頭政賢。同和泉守護殿。此外山中遠江守。諸浪人立ちれけり。また高山上観介より遊佐河内守等を立ちられたり。先和泉國へ切入給ふ。此より高國聞召追討せよとて。攝津國勢を差下さる。然るに澄元方の諸勢は和泉の深井に陣をとる。高國方の諸勢は同方代庄といふ所に陣を取。同七月十三日にふかひをなし合せ合戦あり。京の高國方衆萬餘騎。阿波方は城中には無勢にて。籠内の鳥とかや。もれて出へきやうなれば。おもひ切面もふらず切かゝる。高國方の衆切まけて。大將分替々討死する。雜兵以下三百餘人死する也。殘る勢はいづみの堺へ漸々逃入也。然ばその日に澄元方欠郡中島まで切り上る。

十六日。甲子被命御敵退治御祈於神宮及祇園社。

伊勢神宮引付殿

御敵退治御祈事。近日殊被抽丹誠。同此旨可被下知社家禰宜等之由。所被仰下也。仍執達如件。

永正八年七月十六日

美濃守判

祭主殿

後醍醐天皇二百七十六

義植將軍後記四

細川兩家記云。淡路守殿は攝津の兵庫口へわたり。灘へ上り給ふ。こゝに高國方の兵河原林野馬守正頼は。攝州蘆屋庄の上蘆屋城に據籠。淡路守殿の城を責へしとて。灘深井といふ所に陣取給ふ。此由正頼より京高國へ注進申。高國聞し召。今度は馬廻り柳本又次郎入道宗雄。子息波多野孫左衛門。能勢因幡守。荒木大藏等は。はじめて三十餘頭指下さる。此人々おもひ切て。同七月廿六日に蘆屋河原にて合戦あり。また蘆屋より河原林手を合て戦ひけるに。京高國方討勝て。淡路兼首あまり討取て。京勢は明日廿七日に上洛して。此よし申上られければ。高國聞召。御惑なかく申計なし。

廿七日。乙高國家人歸洛。

拾芥記云。京勢自攝州一開陣。

八月小

八日。丙攝州勢陷鷹尾城。

足利季世記云。然ル處ニ赤松兼ヤクソクヲタガヘズ勢ヲ出シ。同八月八日九日鷹尾ノ城ヲ責ラル。岸ガケトイハズ堀ヲ埋ミ。チメキサケンテ責ケレバ。サシモニタクキ川原林ニ日目ノ戦ニ打マケ。同十日夜ニマギレテ城ヲ出テ。落行ケル。赤松兼手合ノ軍ニ打勝テ。則伊丹ノ城ヘ取カケ、レメ云云。

細川兩家記云。播磨兼は此合戦の事を聞。思案におよばれけれども。一度約束の上は。八月の初比播磨の國を立て。同八月九日に鷹尾城をとりまき。さかしき谷高き處ともいはず賣られける間。城の内にもこゝをせんといひ戦ひければ。その日にくれて寄手も籠へ引。しかれども城の中に此分ならば叶はじとおもひ。同十日の夜半に城を明けにけり。播磨勢はよろこびて。則伊丹の城へとり懸りける。

十四日。壬前將軍家於近江國岡山ノ薨去。

足利季世記云。此時先公方備澄公モ。播州ヨリ近江ヘ御上リアリ。岡山ノ城ニカクレテハシケルガ。近日御在京アルニシトアリシニ。御遠例額ニテ永正八年八月十四日。卅二歳ニテカクレサセ玉フ。法住院殿是也。

足利家官位記云。八年八月十四日。於江州岳山ノ薨。誠法住院殿清晃旭山大居士(卅二歳)。

十五日。癸細川右馬頭等走丹波。

拾芥記云。京勢并右馬助在二山崎ニ之處。南方敵四國衆蜂起間。落行丹波ニ云々。

十六日。甲依敵勢出張。亞相家遜丹波國一給。

細川高國。大内義興等供奉。拾芥記云。今朝敵就二可二出京。室町殿。(義尹)細川右京大夫。

夫。大内左京大夫。能登大夫以下。不レ及三月矢ニ落行丹波一給而武家御所焼失。今日敵右馬頭。山中新左衛門以下上洛也。予云。當番ニ云。物密。自早朝祇候禁中。近臣。外様衆各參任。今夜無爲無事條退出。近江御所。細川右京大夫未ニ上洛。九里餘力少々上洛云々。

祐圓記云。十六日京都破了。公方様。大内殿。細川殿。一万計ニテ丹波迄被レ披畢。印更京ニ入テ。前公方様江州御座之間。可有御上洛之由令申云々。

公卿補任云。八月十六日。將軍出レ洛。陣子丹州。東西凶徒入洛。

往年記云。八月十六日。公方并大内。神吉。丹波へ没落。京中之義以外之次第也。自江州。公方兼并竹内以下。赤松衆。其外諸軍人悉亂入。

細川兩家記云。然る間河内よりと播州よりと。二手に成て京へ切上りければ。かなはじとやおぼしけん。八月十八日公方様。(義植公)高國。大内左京大夫殿。都を餘所に見なしつゝ。丹波國へ落行給ふ。

廿二日。辛將軍家自丹波一發向給。

公卿補任云。同廿三日。自丹州一踏勢發向。

廿四日。壬船岡山合戰。細川澄元以下敗走。

拾芥記云。丹波細川。大内。就レ可二出京。西山燒棄。入レ夜無レ據四時分。細川並大内衆。自二山上ニ次第。近日下京衆出二船岡ニ取陣。其外衆於今宮林取陣之處。柳本以下向今宮林。大内衆向二船岡。京衆一合戦。體被二攻破。落行之處。或被レ取レ頭或蒙レ疵及二千人ニ云々。右馬頭落行之所於二羅漢橋一被レ討了。亦蒙レ瘡死了。竹内。山中。遊佐。印更以下。悉大將被レ伐。和泉守被レ伐云々。但其頭不見知二乎。今日體細川大内京入也。

公卿補任云。同廿四日。於二船岡ニ合戦。凶徒悉滅亡。將軍陣子高橋。洛中靜謐。

足利季世記云。義植御所ハ丹波ノ内藤ガ館ヨリ。大内左京大夫。島山尾張守。細川高國。同右馬頭。伊勢兵庫頭。齋藤法印。土岐美濃守。大友備前守。佐々木彈正少弼。同中務大輔。細川式部大輔。島山修理大夫。遊佐彈正。神保。小坂。長九郎左衛門。朝倉彈正。同太郎左衛門。其勢三万余騎引シテ責上リケレバ。京方ノ細川澄元三好等小川ニアリケレバ。丹州ヨリ責上ル敵ヲ防ケントテ。紫野々上ノ丹岡山ヲ陣城ニカマヘ。澄元ノ妹豐細川右馬頭政賢ニ。島山上總介義英。遊佐河内守ヲ大將軍トシ。三好筑前守。同山城守ニ。一万餘騎ヲ相ソヘテ待カケタリ。大徳寺。今宮。小川邊ニスキマナク陣取。大將軍右京大夫。丹州住人竹内刑部大夫以下引卒シ。五百餘人小川

ノ屋形ニヒカエタリ。同八月廿四日實上ノ勢已ニ長坂山ニ陣取。先ガケノ勢齊藤三位法印ノ手者共。土岐殿。佐々木六角殿ノ軍勢一番ニカ、リ。越州。安富。神保。平湯ノ川ニ切立ラレ。立足モナク引退ク。二番ニ内藤備前守。河原林。島村彈正息モツガセズ資來ル荒手ニ破ラレ。湯佐彈正。同河内守ヲ初テ。越州ノ勢皆愛ニテ打タレケレバ。大内左京大夫馬廻五百騎短兵急ニトリヒシギ。チメキサケンテ實上ル。大内一番ニ進ンテ。重代ノ長刀ニテ向敵三騎ナギ伏テ。四方ヲ拂テ切廻ル。三好筑前守。同山城守愛ヲ先途ト防戦。大内方ト三好方ト自身ノ太刀打度々也。耶等ドモカケ隔フセギケルニ。佐佐木定頼荒手ニテ一文字ニ切りカ、リケレバ。三好不レ叶引退。大將右馬頭政賢小川ニ殘止リ打死シタマフ。其間ニ先京兆ヲ落シ申セトテ。澄元チ三好御供申テ攝津國へ落行ケリ。惣而討死二千三百人トソシルシケル。赤松衆ハ伊丹城ヲ攻シカドモ。舟岡山衆打マケシカバ。早々引返シ生瀬口へ落行ケル。

細川系圖云。政賢。右馬佐。實和泉守之二男也。政國養之爲子。使續家督。永正八年八月廿四日船岡山合戦時。於三廻漢橋ニ討死。法名照公。號天耀長慶院。

御隨身三上記云。永正七年に常備進上仕候。其御節を永正八年八月十三日丹波へ御陣取の時。御用ありて爲御本意。同

月廿二日に丹波神吉より細川へ御陣をよせられ。細川より同廿三日に高雄へ御陣替在之。何も龍節を御用なり。仍同廿四日に京都合戦。悉以落居。爲御本意。然に次月九月初日御上落。妙本寺也。此時御護龍節なるによつて。此龍節を被レ置皮上意にて。直に被レ下候。

船岡記云。廿四日。公方極重而京都へ。彼丹波ヨリ入御。先陣大内殿。細川殿。其外御方二万五千人アリ。件ノ印宗舟岡山ニ出陣ヲ取之。大内衆細川衆丹波口ヨリ切テ出。度々太刀打有之。終ニ印宗方切マケ二万計ノ者共悉ニケ、リ。彼舟岡山ヨリ北野紫野ヨリ上京一條迄之間ニ。五千人計ハ打死。公方極懸ニ御目三千人云々。御方大内方。細川方合三百人討死云々。印叟ハ生執ニテ同廿五日生害アリ。

高代寺日記云。八月廿三日。舟岡山合戦。種緒二十五騎ヲ遣シ爲ニ加勢。安村。澤豆。鶴川。本井。山間。横川。福田以下ナリ。討死眾多アリ。

東寺過去帳云。永正八年。諸國亂逆。(山城。攝津國。河内。嚴岐。和泉。紀伊國。備中。大和國。)別而者於三船岳山戰場。細川右馬助以下率數千人令云亡一畢。

廿六日。甲辰播州勢解攝州伊丹圍一敗走。

細川系圖云。播州勢攝州伊丹の城實戰ふといへども。一陣破れて殘黨全からずといふ。船岡山合戦の事を聞。同廿六日

生瀬口へ落行ける。

廿七日。乙巳給御書於本郷宮内少輔政泰。賞其

戦功。

本郷文書載

去廿四日。於西門口及合戦一條。尤以忠節候。向後彌抽

忠功一者。可爲神妙一候也。

八月廿七日

御判

本郷宮内少輔とのへ

九月大

朔日。戊御歸洛。着御妙本寺。

足利季世記云。公方義植ト右京大夫高國ハ。高雄山ニ御陣

サレケルガ。洛中無爲ノ由ニテ。同年九月初日御歸洛アリ。

此度合戦トトヘニ大内方ノ忠ニヨルモノ也ト管領ニ任ツ。

明年從三位ニ補セラレケル。去年合戦ノ賞ト書付ケルト聞

エシ。

拾芥記云。室町殿自高尾御出京。

公卿補任云。九月朔將軍歸京妙本寺。

五日。壬公卿參賀。

拾芥記云。就室町殿御出京。各御禮被參。進三銀兩。

十二日。己細川讀岐守久之入道々空卒。

細川系圖云。久之。讀岐守滿久子。初號三成之。生阿波國。守

爲三持常之養子。領阿波讀岐兩國(從四位上)。寬正三年爲

管領代一督諸軍。攻金胎寺嶽山城。永正八年辛未九月十

二日卒。歲七十八。諡道空。道號大川。號慈雲院。在阿州。後

花園上皇賜桐御紋三管領之時。久之同賜之。凡下屋形及

山名。一色。島山修理大夫。此四氏於室町管中稱四殿。其

禮儀次三管領。就中以下屋形爲第一。下屋形之流。以

久之爲盛矣。

別本細川系圖云。九月十二日細川讀岐守久之(給名成之)

入道道空卒。歲七十八。慈雲院と號す。道號大川。平生和歌

を好み。又能書也。下屋形流此人を以て盛なりとす。

十七日。甲依謝家督一献物。給御書於細川彦

四郎。

昔御内符案載

爲讀岐守家督禮。太刀一腰。馬一匹。烏目萬匹到來。目出

候也。

九月十七日

細川彦四郎とのへ

十月大

六日。癸未。依御料田地事。奉行人傳。仰於東大寺年預。

東寺文書載

土御門有宣知行下圓覺寺田事。有子細。從去年。此御所橫江雖進上候。年買物以下。名主百姓等當申據。于今無沙汰之條。言語道斷之次第也。然者只今爲御備促。被遣御使一候。万一及慮外之返事等。或有不儀之動。爲寺家一被成。此方御使一味。被覺悟。被抽忍節。者可爲神妙之由。被仰出候。此旨被相願寺中一者肝要候。仍執達如件。

十月六日

秀國列
基清判

東寺
年預御房

十一月小

十四日。辛酉。依洛中靜謐。申樂有御祝。

拾芥記云。爲武家御歸洛御祝。細川大内兩京兆申沙汰有御能。

十六日。戊戌。五條大内記爲學謝領邑事。献劍參調。

拾芥記云。參武家中御禮。進銀劍。右子細ハ。東久世庄(號三樂山)本役三十石可知行一之奉書。去十二日被成下之間。令祝著二者也。

十七日。癸亥。申樂興行。

拾芥記云。鳥山雞壽并能登大夫爲申沙汰御能云々。

十二月大

六日。壬午。定伺事條件。

式目追加載。

伺事條々。(永正八十二六。)

一守結番之次第。各可令參勤也。既陳之儀爲巡番。先一箇條可伺申事。(但既陳之儀有子細多逗留者。自餘之伺事可辭附仕。)

一非急事者。非番之輩可辭附仕。於被仰出之子細者。不及是非事。

一被仰付御返事等。非指急事者。當番可伺申事。

十六日。壬辰。自今日。興福寺維摩會始行。

公卿補任云。十二月十六日。維摩會始行。

筒井家記云。十二月十六日。興福寺維摩會始行ハル。故使アリ。此儀古時アリテ。中國久敷斷シテ。今度新儀ノ爲ニ

アリ。筒井順盛諸事ノ下知ナナセリ。

廿四日。庚子。依祇園會延引。奉行人傳。御書於彼執行。

祇園社記載

祇園會事依三日吉祭禮。延引有令。連々既及月迫之條。地下人等山鉦雜調候旨。離申候間。以後失墜料被付當社一畢。不可爲向後例一段。可被存知之由。被仰出候也。仍執達如件。

十二月廿四日

貞延判
長俊判

當社執行御房

廿五日。辛丑。此日。大内義興冒雪遊西芳寺。

多々其義興雪のあした西芳寺に遊べる辭云。永正八年十二月廿五日雪いとおかしく積れり。かゝる朝に馬をこゝるむるは。いにしへよりよしあることに侍れば。嵯峨野のかたに出侍し。眺望きはまりなきあまりに。遙に西芳寺の佳境にいたれり。四方は鏡をかけたる中に。比叡の山は。こゝらの峯をかさねあげたらんやうに物にもまぎれず。まことの富士のれもかばかりぞとおぼえて。一首詠せられしを見侍し。何のよしあしなわきまふべきにあられど。殊勝のあまりに

たゞにはいかゞとて。明る春のころ各層答にをよべ。いまこれを一いつに誦し侍るになん。

晦日。丙就御料所事。奉行人傳。仰於伊勢守。

古文書載

御料所丹波國桐野河内(除左京亮良泰分)事。如元可被存知之由。所被仰下也。仍執達如件。

永正八年十二月廿日

近江守判
前丹後守判

伊勢守殿

後鑑卷之二百七十七

義植將軍後記第五起(永正九年正月)

永正九年申

正月大

十日。丙辰。公卿參賀。

拾芥記云。武家參賀。

元長記云。室町殿參賀。從未明川意乘板與御。比丘尼御所等於三所々賜御盃。沉瀆及晚歸宅。攝家以下參賀。數高

申次頭弁候之。

十六日。壬戌伊勢守享災。

元長記云。子刻許。當良火。伊勢守宿所云々。

廿一日。丁卯細川讚岐守之持卒。

別本細川兩家記云。永正九年正月廿一日讚岐守之持卒。最勝院と號す。讚岐守之勝次子也。兄澄元管領政元の養子たるに依て。下屋形の家嫡とす。

二月小

十八日。甲午御隨身三上三郎奉謁。有御乘馬。

御隨身三上三郎記云。當年始て出仕可申上。品山式部少輔殿へ申候。伺被申候。明日十八日四時分可三祓候申。(下略)○十八日出仕申。三郎同則御對面在之。御對面す候。即御前へ被召候。御馬の儀とも御尋在之。其御次に明珍作の御轡を拜見せられ候。色々御尋の時。三郎をも被召。御前。祓候せられ候。三郎左右の手をつき。祓候仕候處。素襖の袖を敷候を被御覽。御詞を被副候。覺悟可仕之趣。御袖を直されてみせられ候。忝上意候。其後御既へ被召。祓候仕候。三郎同。參候。つきの御馬上にめされ候處。御馬すまひてめさせ候あいだ。其時某御馬の口にそ

ひ。御馬の足を不引めさせ候。品山式部少輔殿ばかり祓候也。

廿四日。庚子細川高國於吉良亭會飲。

元長記云。左京光向吉良亭云々。吉良大内等送使者可來之由種々申之。雖治之趣頗難。然使者難去想忍之間。向彼亭有三大飲。携三腰。

廿七日。癸卯三上又謁。有御訊問。

御隨身三上三郎記云。同廿七日被召候。條々御尋候儀在之。時の支干の事。御尋の子細條々申上候。又手綱の御不審ども條候々申上。

三月小

五日。庚戌三上奉口授騎法。

御隨身三上三郎記云。二句の儀のきにつき一段秘傳有之中上。同九月九日に。此二句の儀を御用の儀申上。また片履の禮の事。又佛神の御前を御馬にて御道の御覺悟。また馬上にて上へ物を申上覺悟の事。又は馬の口をとりに覺悟の事。又片履持てまかり可出覺悟の事。また履を左よりはき右よりわぐ子細の事申上。此外條々御尋在之。(又息願進上可仕之由。被御付候。同三光の御策同前。)

七日。壬子三上奉謁。

御隨身三上三郎記云。八時分に參候。品式御前へめされ。直に得秘文をあらばされ被下候。是は去五日御口傳のきを。御自筆にて七日に被下候也。その後御既へ可參之由。直に被御出候。可三祓候申。くろつき毛の御馬被召。其後條々御尋之儀有之。

九日。甲寅御參内。

御隨身三上三郎記云。未刻御參内有之。元長記云。室町殿御參内也。若直衣參内。參會之人々。予。廣橋中納言。新中納言。左大弁宰相。新宰相中將。頭中將。三條中將。雅樂王。官綱。雅綱等朝臣。永家等也。三獻外御盃濟濟。七獻之後御退出。

十三日。戊午渡御北野及鹿苑寺。

御隨身三上三郎記云。御遊山に北野馬場にて。御馬を可被賣にて御出の砌。細川房州河原毛の御馬進上。則それによされ御出在之。黒つき毛も奉せられ候。其はたぐり。背の御馬を被賣候。於馬場度々かけさせられ候。一みよくながく由御ほうび也。殊に北野より鹿苑寺へ御成。北野東鳥居にて御下馬在之。

十八日。癸亥二條家園池御覽。

御隨身三上三郎記云。昨日二條殿の御馬被三御覽候。河原毛の御馬めさるのよし被御聞候。

廿六日。辛未大内左京大夫義興叙從三位。

公卿補任云。從三多々良義興。三月廿六日叙。去年八月軍功。歷代領四要畧云。九年春三月。大内介義興昇進而叙三位。大友義長叙四位。其外九州諸侯拜任官位置衆。

四月大

十三日。丁亥自濃州一献馬。

御隨身三上三郎記云。理阿御使。美濃より御馬進上。

十六日。庚寅渡御細川高國家。

御隨身三上三郎記云。右京大夫殿へ御成。(下略)

十九日。癸巳臨駕島山修理大夫亭。

御隨身三上三郎記云。今日は品山匠作へ就御成。不參。

廿一日。乙未被令諸社訴訟事。

式目追加載
一就諸社訴訟以下神事訴訟事。(付法會等可准之)於三向後者。廿日以前令言上者可致披露。若此日限之内及三訴訟者。雖爲理運不可有其沙汰矣。

永正九年四月廿一日

廿五日。己朝倉彈正左衛門尉貞景卒。

朝倉系圖云。貞景。孫右衛門尉氏景子。孫二郎。彈正左衛門尉。立明五十二五生。長享元年九月十二日佐々木爲退治江州御助座。爲三上意。當國衆坂本數十日在陣。明應三年十月廿一日豐原寺敵依三出張。貞景被三出馬。敵數十人射捕之。不三時日。敵令退散。即日歸參。文龜三年四月三日孫四郎景豐依三野心。貞景有出陣。致實播磨居。永正元年孫九郎景綱從三甲斐二宮。從三加賀國界。雖三取出。貞景被三馬寄。敵敗北。同三年七月十四日越州賀州能州越中一揆峰起。同追散。同四年七月廿九日一揆取出。又敗北。洛陽清水寺法華堂建立。當國一乘經堂建立。南陽寺佛殿方丈再興。永正九年三月廿五日卒。四十才。號天澤寺殿。法名宗清。

廿六日。庚子親王御元服。依之被尋御習禮事於廣橋中納言守光卿。○依北畠入道獻物。給御內書。

守光卿記廿七日條云。爲室町殿御使。伊勢右京亮入來。親王御方御元服御習禮間事被尋下。所存分内々令言上了。公卿補任云。四月八日立親王宣下。同廿六日庚子親王御元服。小御所殿中。密儀也。加冠關白。理髮頭中將實胤。皇年代累記云。後奈良院。永正九年四月八日爲親王。十七。

同年四月廿六日於小御所御元服。加冠關白尙經公。理髮頭中將實胤朝臣。殿中最密儀。昔御內書符案載。爲二年始祝儀。太刀一腰。馬一匹到來。日出候。仍太刀一振進候也。謹言。四月廿六日。北畠大納言入道殿。閏四月小。十五日。己就賀茂社人喧擾事。飯尾近江守同下野守向甘宰相享。元長記云。飯尾近江守。同下野守來。就喧嘩事也。爲室町殿。内々有御入魂。子細不承引申。各歸畢。○廿一日條云。賀茂社務并氏人宿老可來由申遣了。就喧嘩。依有被仰出。旨也。各不出京。五月小。四日。丑大内義興馳使於甘露寺宰相許。依去月諍鬪事也。元長記云。左京大夫送使。喧嘩咎人申請度由懸。令頭狀了。

六月大

八日。庚戌八幡御參籠。

拾芥記云。室町殿内々八幡御社參。一七日御參籠。御隨身三上記云。八幡御社參。未刻に御出。御いたし也。内々の御きなり。御馬も不可被牽。走來二十人。御供五騎也。細川右馬頭殿。高山二郎殿。高山宮内大輔殿。高山式部少輔殿。勢州。以上御出前。五ヶ番共。終夜如一本番。祓候可申之由被仰出候。當番は二番也。一番と三番と。又四番と五番と相副て。つれの御所と御殿に。各夜に相替祓候候也。(下略)

九日。辛亥大震。

拾芥記云。亥刻大地震。(賀家大神動。安家水神動。)七十五日内兵亂云々。

十三日。卯高國。義興參謁八幡。有御一献。

御隨身三上記云。右京大夫殿。大内左京亮御對面。一献。左京亮は。十二日晚氣より八幡宮に被付。十三日右京亮同時參上なり。

十四日。丙自八幡還取。

十八日。庚細川高國下向攝州。

拾芥記云。細川下向攝州。與赤松二和陸義申合云々。○又云。細川下向攝州。與赤松二和陸之義。於三尼崎。與赤松故左京大夫後室申合云々。

七月小

八月大

朔日。壬御憑如例。○武田彦四郎出仕。有御對面。

宣胤記云。九年。室町殿御太刀。雖在國一申置進之。御返御太刀。武雜禮云。永正九八月朔日。武田彦四郎出仕在之。御對面之次第。細川奥州より前々可懸御目之由被申之。御相伴并御供衆にもあらざる間。國持分なるべし。御紋着用之輩。而遣事。無之。被仰出候。惣々御對面以後。武彦一人御對面在之。

七日。戊被命變異御祈於神宮。

伊勢神宮引付殿
去月廿六日變異御儀不輕。從來十一日一七箇日。抽丹
誠。可致公武御祈之由。可發下。知神宮。狀如件。
八月七日
四位史殿
中辨判

廿日。辛酉。西芳寺御成。

御隨身三上記云。早朝に召使在之。則致祇候之處。さかの
西芳寺へ御遊山に御成のめいた。栗毛の御馬御下乗可仕由
之上意にて。發御覽被乘候。御馬ども。しらしらへ。可申
付上意にて。還御成候。

晦日。辛未。奉行人定撰錢事。

東寺文書殿
一百文内。口さしの分。ふるせに。十文。洪武。二文。宣
體。二文。永樂。六文。已上廿文なり。
一。地せにの内。よき永樂。五文。大觀。嘉定以下うらに文
字のあるせに。よき錢の内たるべし。
一。少分づも。これをあつて用べし。
一。日本せに。われせにをのぞく。但少かけたるはよき錢の
内たるべし。
一口さしの程うり物をかふぢきになす事あらば。罪科同

右條。聖被三定置一説。若有三違犯之罪者。男は頭をきり。
女はゆびなきるべき也。悉ふり又ふらざる罪あらば。町人
として注進せしむべし。見うくるは同罪たるべし。私けん
だん。同爲町人。可致注進之由。所被仰下也。仍下
知如件。
永正九年八月廿日
對馬守平朝臣
故位神宿願
近江守三善朝臣
美濃守藤原朝臣

是月。於關東。北條早雲陷相模住吉城。進圍新井城。

關東管領記云。永正九年八月十三日相州ノ北條早雲多勢ヲ
將テ。同國岡崎ノ城ヲ攻ル。城主三浦介從四位下陸奥守平義
同入道々寸合戰ニ利ヲ失ヒ。入道並佐保田。大森等悉ク城ヲ
落テ。同國住吉ノ城ニ籠ル。北條早雲續テ是ヲ攻ル。此城又
攻落サレ。鎌倉ニ入ル。道々ノ合戰。其外小坪。秋谷。長谷。馬
右。佐原山等。於所々々相支ヘ。雖三防戰。不相叶。敗北ノ。終
ニ同國新井城ニ逃入。此城ニハ兼テヨリ。道寸嫡子從五位下
彈正少弼義重(號荒次郎)據籠處也。城ノ林東方ハ陸路也
トイヘ。三方入海ニシテ山險ク岸高シ。據籠ル人數皆以證

代ノ士也。爰テ以テ父子心ヲ同シ。當城ニ居城シ。早雲ヲ引
請防戰スル事及三箇年。早雲又城ヲ取奪攻圍テ年月ヲ送ル
云々。

九月大

十七日。戊辰。朝倉孫次郎孝景獻物。給御内書。
昔御内書符案殿
刃一腰(吉廣)到來。自愛不斜候也。
九月十七日
朝倉孫次郎どのへ

廿三日。甲午。自。此日。内裡法華懺法興行。

公卿補任云。九月廿三日以來三ケ日。於清涼殿法花懺法
講。

十月大

十六日。丁巳。御參内。
拾芥記云。室町殿御參内。

十九日。庚寅。神宮門炎上。

伊勢神宮引付云。十一月十九日亥刻玉串御門ヨリ火出。薪垣
御炎上。

十二月大

此冬。依有。一番衆言上趣。令上。總番着到。
永享以來御番帳五ヶ番着到與書云。右五ヶ番之着到事。永
正九年中。此。一番之中。從三河。有上落。爲外檢衆。可
有。出仕。言。被申上。候間。一番衆言上之趣者。往古者雖
爲外檢衆。悉照院殿檢御代。中條依有。自新子細。一番衆
被入。出頭。無其。其。所詮先々惣番着到可備。上覽
之由申上。伊勢守貞隆注置着到。檢葉近江入道借出備。上
覽。候處。則被。開召分。爲一番衆。可致。出頭。趣。被。仰出。
訖。然。其。此。着到。各。處。置。所。持。之。候。者。也。
是年飢饉。
永祿年代記云。永正九。大飢饉。人多六七月死。

後鑑卷之二百七十八

義植將軍後記第六起。永正十年正
正月大
永正十年西

朔日。辛未。此日。細川左京大夫高國納願書於八幡宮。

座右集載 敬白 入幡宮 祈願事。

右意趣者。爲武運長久子孫繁榮諸願成就。河內國蓮庄事所奉寄進也。仍願文如件。

永正十年正月朔日 左京大夫源朝臣列

七日。丁丑。細川高國於甘露寺亭會飲。

元長記云。左京大夫來。勸三盃。飛鳥井中納言。權右中弁等來。數刺及二大飲。

十日。庚辰。歲首拜賀如恒。御參內。

元長記云。武家參賀。召進頭弁。室町殿御參內。參會同召進頭弁了。

二月小

七日。丁未。那智山千手堂回祿。

長寧年終歲內兵亂記云。二月七。那智山千手堂火。

十四日。甲寅。播州若君晴。依御合體。赤松使臣參謁。自若君及赤松義村獻物。

伊勢貞助記云。永正二十四。就若君檄御合體之儀。赤松在

田式部少輔上洛出任。御對面如常。貞隆披露。若公襟ヨリ御太刀。(眞久)御馬。(白鶴毛。雀目結)赤松兵部少輔御太刀。(久國)御馬。在田自分御太刀。御馬。干正進上之。何も目錄在之。仍右京大夫殿。左京大夫殿御參アリ。然ニ赤松披露狀。右京兆人々御中難村ト在之。

廿七日。丁卯。御右京兆亭。松拍興行。

元長記云。傳聞。於右京大夫亭。有松拍子。大樹渡御云々。是月。依江州御動坐。奉行人傳書於多田院御家人。

高代寺日記云。二月。飯尾近江守奉書。江州動坐其餘事アリ。

二月小

十三日。壬午。日吉禮拜講興行。

拾芥記云。爲室町殿御一代一度御沙汰。被行日吉禮拜講。要脚及三千貫云々。

十五日。甲申。依禮拜講參賀。

拾芥記云。就禮拜講被行。今日室町殿へ御太刀參云々。

十八日。丁亥。近江甲賀給。

元長記云。大樹去夜御返電云々。對諸大名。可被仰子細有之云々。御在所後聞。江州甲賀郡之内々々々々。

廿四日。癸巳。給御書於本郷宮内少輔政泰。賞其忠勤。

本郷文書載

無二忠節悅入候。入洛事相調時分之後。彌可抽粉骨一老。可爲神妙一候也。

三月廿四日

御判

本郷宮内少輔どのへ

四月大

八日。丙午。從内裡。被命御歸洛祈於神宮。

伊勢神宮引付載

大樹御歸洛御祈事。一七箇日殊可抽丹誠之由。可令下知神宮之旨。被仰下候。仍執達如件。

四月八日

右中將公長

祭主三位殿

十七日。乙就御動座。被賞本郷宮内少輔扈從忠勤。古河政氏朝臣給書於僧智宗。賞其軍功。

本郷文書載

三月廿二日

基雄 政親

後醍醐天皇二百七十八 義植將軍後記六

永正十年四月

六百九

伊勢貞助記云。義植様至。被移御座ニ付テ。於貞隆亭。高國。畠山。大内。左京亮。畠山。勝仙院御談合之儀アリ。仍終日大御酒。各御出之刻。既下端ノ四間ノ縁へ貞隆被出合。申請被申也。下山ハ少御出迎々候間。各被待申之。高國ハ前ニテ一禮アリ。其マ、上座へ御ナチアリ。左勝仙院。(下山) 修理大夫殿。大内左京大夫殿。右藤宰相殿。右京大夫高國。此外各御着座アリ。

公卿補任云。源義尹。三月十八日出奔江東。(甲賀山中)五月三日歸洛。

高代寺日記云。三月十八日江州軍役儘。十二路上下二百人出サル。五月三日版軍。

長寧年後歲內兵亂記云。三月十七日夜。義植甲賀御出。五月朔日御入洛。

廿二日。卯依神宮造營。奉行人傳命於造宮使。伊勢神宮引付載

連々申候。依兩方福宜等不和。御造營于今不事行一候。就今度二宮聖皇令和睦。抽御歸洛之御祈禱丹誠。急御造營之儀可令沙汰之旨。可被仰聞一事專一候。恐々謹言。

今度京都被取退一。供奉忠節一段無比類一候。爲如本意二。可有恩賞一候。彌向後無二政略一者。可爲神妙一候也。

卯月十七日

御判

本郷宮内少輔どの

今度取退候處。供奉抽二忠節一。尤神妙候。仍若州本郷領之事。一圓可知行一候也。

卯月十八日

本郷宮内少輔どの

諸家文書寫載

敵寄來候時。於三崎要害一。勳一戰功。被一疵之條神妙也。彌可抽二粉骨一之狀如件。

永正十年四月十七日

政氏

智宗僧

廿二日。庚申。依御達例。從内裡一被命一御祈於神宮。

伊勢神宮引付殿

大樹御不例御祈事。自明日一。七日。殊可抽二丹誠一之中。可令下二知神宮一之言。被一仰下候。仍執達如件。

四月廿二日

祭主三位殿

右中將公長

五月小

朔日。巳大霰。

年代記云。五月一日。大霰降。其大如梅實一也。

三日。辛未。從甲賀一還取。

拾芥記云。室町殿(義尹)自甲賀一還御也。兼日細川大内兩京兆。島山尾張入道。細川右馬助等參御迎。室町殿御歡樂。御中風之後減云々。

實信記云。野村殿ニ實如上人御座候時。江州山家へ將軍義植御没落ノ時。都へ御歸洛ノ時。伊勢守貞宗江州へ御迎ニ參候時。山科葬所通リ候トテ。御坊へ被一申入一候事ハ。此葬所チ御所御通候ベキ由申テ。葬所如何候間。无常堂ノ跡前ソト包マセラレバ可然由。貞宗被一申入一シカバ。安キ事。報恩講大庭ニシカル、イナハキヲモタセ。ウチカケく包マセラレ。即時ニ堂モ見エヌ程ニ包マセラレ候ヘバ。勢州肝ヲツブシ。此大ナル堂包マシタル事ハ。何方ニモ有ベカラズトテ感シ候ケルト。其頃ノ汰汰ニテ候ツル事ニ候。

廿七日。乙未。武田伊豆守信懸卒。

高代寺日記云。五月廿七日。武田伊豆守信懸卒ス。

六月小

七月大

五日。辛三。御所御事始。

正月以下御事始記云。永正十年七月五日。下京三條御所御普請初御事始。一御普請初。(辰刻)細川右京大夫高綱勳之。被官人兩藥師寺罷出也。一御事始。(未刻)同日惣奉行島山修理大夫。同小奉行伊勢右京亮。宮下野守。結城七郎。一右味方松田丹後守。齋藤美作守。齋藤上野介。同御普請奉行金山三郎。一御事始。當座ニ番匠ニ御太刀御馬被一下之。檢大工同前。檢大工同前。都合御太刀三振。御馬三疋。御太刀ハ伊勢右京亮渡之也。一惣奉行以下。并伊勢守貞隆著座敷皮一也。此以後御太刀各進上之次第。右京大夫殿。島山修理大夫殿。大内左京大夫殿。以下如常。一惣奉行以下。御普請初御事初之御禮御太刀二振進上。面には持太刀也。惣番以下は金ナリ。同朋は各相注候て御禮申也。惣々御太刀以前に。島山修理大夫初而。先役人一番ニ。御太刀進上候也。

十一日。丁丑。此日。於豐後國。大友修理大夫義長卒。

大友系圖云。義長。備前守親治子。真林院殿賜諱字一曰義親。後改曰義長。童名鹽法師丸。五郎。從四位下。修理大夫。法名天真清昭。號大雄院。母菊池木野氏。領豐後豐前筑後

三ヶ國并筑前肥前肥後之内。永正十癸酉年八月十一日於三府内館一逝去。豐府紀聞云。永正十癸酉八月十一日義長卒。碑銘 大雄院殿天真清昭大禪門

八月小

朔日。丁酉。佳儀如例。

宣胤記云。十年。室町殿御太刀。御返同。

廿四日。庚申。島山尾張入道卜山與同氏上總介。於河内國一合戰。

拾芥記云。島山尾張入道於河内。島山上總守手合戰。上總守弟播磨被一打云々。未分明之由。有某沙汰。上總守引退在二和泉堺云々。兩方手負死人及三四五百人云々。

九月大

十四日。巳。於細川高國亭。犬追物張行。

伊勢貞助記載

一永正十九十四日。於細川殿馬場三手犬追物在之。内檢見貞隆。外檢見寺町石見守。射手卅六騎。

十月大

廿二日。丁巳。依神宮造替要脚事。奉行人傳一仰於

造宮使
伊勢神宮引付殿

假殿御造替事。先度雖被成御下知。猶以內宮製相爭前。後之處。被下向被相看之間。二宮禰宜等和談云々。尤可謂神忠乎。次御造替要脚事。今度以折中儀被仰付。訖。更不可成向後例之由。所被仰下也。仍執達如件。

永正十年十月廿二日 美濃守判 權津守判

造宮使殿

十一月小

九日。申依御改名。諸人參賀獻劍。

拾芥記云。室町殿就被替御名字。(義尹被改義植)大藏卿勸進之。各參御禮進銀劍。

十二月大

廿六日。西奉行人傳禁令於加茂社人。

加茂社家文書載

加茂山事。無謂之輩。或搦新關。成其煩。或號所實。置而賣物。并地下人所。或神田。經所田等。無是非。神族狼在之旨。煩申之段。被開召之事候歟。所說向後於此。

故其心日益清。志日益淨。偶不期離而自異。塵不待待。而已絕矣。茲有歸思。吾國與之文字友者。若太宰公及諸諸神靈。皆文儒之擇也。咸惜其去。各為詩章。以顯飾。固非實而溢者。吾安得不序。皇明正德八年歲在癸酉五月既望餘姚王守仁書。

後鑑卷之二百七十九

義植將軍後記第七 起永正十一年正月 訖十二月

永正十一年 戊

正月大

四日。長青蓮院尊應准后薨。

東寺過去帳云。青蓮院尊應准后。永正十一年正月四日御入滅。天台座主。御年八十四歲。

關白後福照院持基公男。永正十一年正月八日入滅。二條殿攝政。未給新春御內書於細川右京大夫高國。

御內書案載。年用吉兆雖事苗候。不可有休期。猶期面候也。

非分之儀二者被停止之上者。堅可被加制止。但至有子細之儀者。可教言上。隨其左右。速可有御成敗之由。被仰出候也。仍執達如件。

永正十二年二月廿六日

貞運判 元秀判

是年。丁菴和尚自明國歸。

當社氏人中 王守仁真蹟載。

送日東正使了菴和尚歸國序。

世之惡奔競而厭煩華二者。多遜而之釋焉。為釋有道。不日清乎。挽而不濁。不日濁乎。狎而不染。故必慮慮以洗塵。獨行以離偶。斯為不詭於其道也。苟不如此。則雖下皓其髮。緝其衣。杜其書。亦逃租絲而已耳。樂縱馳而已耳。其於道何如耶。今所日本正使增雲桂悟字了菴者。年踰上壽。不倦為學。領彼國王之命。來其珍於大明。舟抵鄱江之滸。寓館於駟。予嘗過焉。見其法容深修。律行堅潔。坐一室。左右經書。鉛朱自陶。皆楚楚可觀愛。非清然乎。與之辨空則出。所謂預修諸殿院之文。論教異同。以並吾聖人達性閑情安。不譁以肆。非淨然乎。日來得名山水而遊。賢士大夫而從。靡曼之色不接于目。淫注之聲不入于耳。而奇邪之行不作于身。

七月七日

細川右京大夫殿

二月小

十九日。近江國伊庭貞說敗走。

長享年後畿內兵亂記云。十一年二月十九日。伊庭貞說父子沒落。

三月大

廿七日。一條前關白冬良公薨。

高代寺日記云。三月一條前關白冬良薨。五十一歲。父兼良ノ業ヲ著ス。公卿補任云。前大政大臣從一位藤冬良。前關白。三月廿七日亥刻薨。五十一歲。四月七日葬于尊門寺。號妙華寺。

四月小

十日。被令故戰防戰等事。

式目追加載。一故戰防戰事。(永正十一十四。長秀。)

於故戰者。雖有確論之宿意。可經上訴之處。及二關殺之條。被收公所帶之段。度々制炳焉也。然今度被定置。故戰之儀尚被停止。有不叙用之輩上者。可被

レ行三人於死罪。若令逐電者。尋搜同意之族。可レ處罪科。次防戰事。被レ遂御糺明。隨事。可有其沙汰也。一就三名百姓等年貢地子錢以下。無沙汰事。不可レ依此御法一矣。

十五日。戊申。青蓮院新門主尊猷參府。

永正十一年記云。門主權室町殿へ御參始。兼而勢州へ可有御參之由。被レ經案內一處。依日次惡。自彼今日マテ御延引。先規御遺物之沙汰アラバ。今度モ御進可レ然之由。内々自勢州被レ申之。仍親書記之處。無御遺物之沙汰。又御參始御禮次第見書記。無御持參之物。但今度者旁御持參可レ然之由在之間。十荷十合被レ持之。此十荷十合。自禁裡先日門主權室御之時。可レ被レ進御權ヲ今日被レ進之了。勢州へ五荷五合。此ハ御母儀御局ヨリ御門跡へ被レ進候ナ。則被レ遣之。伊勢右京亮三百匹折幣。是ハ天王寺々務事ニ公儀取合候故也。今日公武へ御參了。御供定法寺僧正。(公助)是ハ御幼稚之間。爲御介錯也。泰延法印。伊與法橋兩人也。

廿四日。丁巳。大震。

永祿年代記云。四月廿四日巳刻。大地震。

五月大

六月小

七日。己亥。佐々木中務入道宗意献物。

雜々書札破

公方權細美五端。圓座二十枚進上仕候。可レ然様御披露可レ爲三祝著一候。恐々謹言。

六月七日

宗意

十二日。乙巳。從此日。大旱。

永祿年代記云。自六月十三日。至八月下旬。大旱。

七月小

八月大

朔日。辛卯。佳儀如例。

宣胤記云。十一年。室町殿御太刀。(金)御返同。

廿二日。壬子。武田伊豆守信親卒。

武田系圖云。信親。大膳大夫國信子。彦太郎。伊豆守。治部少輔。從四位下。文明十二年爲御伴衆。永正十一年八月廿二日卒。栖雲寺樹岡宗鏡。

九月小

十一日。辛未。就高麗船勘合事。左京大夫雜掌有言上旨。

雜々書札破

左京大夫雜掌言上。

永正十一九十一。

一高麗船勘合事。以前申上候處。對高山新左衛門尉。既被二仰付一候之上者。不レ被レ及二御許容一。但其次事者。於二申請者。可レ被レ仰出候由。以高山式部少輔殿。申調候。可レ預二御披露一事。

十月大

十三日。庚子。依御力者祐正給物事。奉行人傳二仰於赤松兵部少輔。

雜々書札破

御力者祐正給物參貫文事。爲分國役。任例致其沙汰。可レ被レ執進請取狀之由。所レ被レ仰下一也。仍執送如件。

永正十一年十月十三日

美濃守

伊勢守

赤松兵部少輔殿

十一月小

十二月大

是冬。和暖如春。

永祿年代記云。冬暖梅花發如二月。

是歲大飢。○遠江國合戰。

高代寺日記云。今口大飢饉。種滿平野ニテ七日粥ヲ調。飢人救ル。

宗長駿河日記云。大河内備中守おほけなきはたく瀧松庄に打入。引馬にして當國半人等百姓以下を楯籠らす。則發向。今度は悉寺庵在家放火。大河内及三生害一處。され共吉良殿御代官につきて懇望。先以免ぜられ各歸陣。泰然其冬不慮に病死力をよばず。泰能幼少にして伯父泰以しばらく補佐。本正十一年。又大河内信濃河尾張をかたらひて大亂くはだつ。今度は御進發。笠井庄楞嚴寺に御馬立ち。諸軍勢河を打越。大菩薩といふ山に著陣。北に伊井次郎(遠州住人)深嶽といふ山武衛(治部少輔義達)を覺悟申。又半人以下相あつまり。毎夜の篝曉の星のごとし。泰以やすくと打落武衛。同奥の山に退。則尾張歸國。

今川家譜云。斯ヲ五七年過テ。尾張ノ武衛義遠遠江ノ深嶽ト云山ニ城ヲ取立。大河内已下ノ諸人ヲ催シ掃蕩リ。氏親不日打立テ。笠井庄枳敷寺ト云處ニ旗ヲ立ラル。先年人數早雲ヲ初。河ヲ越テ大菩薩ト云山ニ著陣ス。サテ朝比奈左衛門泰ヲ先手トシテ一日一夜攻取ヒ。終ニ城ヲ攻落ケレバ。武衛義遠ハ其曉擲手奥山ヘ引退。ソレヨリ尾張ノ清須ヘ歸陣ス。

後鑑卷之二百八十

義植將軍後記第八起永正十二年正月一迄

永正十二年乙亥

正月大

十日。戊辰。公卿參賀。○御參内。

元長記云。武家參賀。召進頭弁。大樹御參内。參會。今日不參。伊長朝臣同不參。

二月大

閏二月小

三月大

十五日。寅。依内裡御料事。給御書於長野與次郎。

御内書案載

禁裡御料所栗真庄代官職事。去年度々成敗之處。予今難澁不可然候。所詮關是非之意趣。先以懸下知。急度去渡候者。尤可爲三神妙一候也。

永正十二年三月十五日

長野與次郎とのへ

四月小

五月大

六月小

朔日。丁巳。命。惟異攘災御祈於伊勢祭主。

伊勢神宮引付載

惟異攘災御祈之事。近日可被抽丹誠之旨。可被下知兩大神宮禰宜等之由。所被仰下也。仍執達如件。

永正十二年六月一日

美濃守列

祭主三位殿

攝津守

三日。己未。小笠原信濃守貞朝卒。

小笠原系圖云。貞朝。信濃守長朝嫡男。母女房。寛正二年九月十八日生。于信州林館。童名豐松丸。文明三年正月十一日於神社二元服。號又二郎。從五位上。右馬助。修理大夫。信濃守。信州刺史。永正十二年六月三日卒。年五十五。法名圓山宗堅。

七日。癸亥。被進神馬於祇園社。

祇園社記載

祇園社爲御神馬。一疋(青毛。印雀目結。)可牽進之由。所被仰下也。仍執達如件。

永正十二年六月七日

伊勢守 貞隆列

八日。甲子。依累世寶傳御笙知門。出現。群參奉賀。

拾芥記云。室町殿就設御笙。(遠知門。)各參御禮。被進銀劍云々。予依不具不參。此笙久在三鞍馬邊云々。大外記師象朝臣參詣鞍馬寺之次。二百疋出之。歸宅了。進此笙於室町殿云々。累代被副置御小袖之御器也。其後爲御褒美。御馬堂定井御太刀二腰。(名物。)二千匹被下

之。

廿六日。壬午。就三條御所重建。右例參賀。

拾芥記云。就室町殿三條御所被立御門。爲御禮。各參仕。被進銀劍。予與高辻宰相同道。申御禮者也。各御對面。永祿年代記云。高倉御所。六月始築。十一月造畢。十二月御移徙。

足利季世記云。永正五年六月八日。義尹ノ公方中國ヨリ御入洛有テ。(中略)三條殿ノ古御所ヲ轉シテ御殿ノ御遊請アリ。

七月小

廿二日。丁未。依別例。祇園祭儀兩度行之。

永祿年代記云。永正十二爲三上意。祇園會兩度在之。七月廿二日。七日祭禮。同廿五日。十四日祭禮也。

廿六日。辛亥。就九條田地年貢事。奉行人傳仰於大内左京大夫義國。

古文書載

菊亭家雜掌中左馬寮領内北野寄進分九條田地年貢。百姓等依令難澁。不及本役沙汰之條。神馬以下及關志云々。以外次第也。所詮云未進云當納。共以可究濟之旨。被感奉書云。於自然之儀者。可被加下知之

由。所被_レ仰下也。仍執送如_レ件。

永正十二年七月廿六日

河内守列

下野守列

大内左京大夫殿

八月大

朔日。乙卯御憑如_レ例。

宣胤記云。十二年。室町殿御太刀。御返向。

廿五日。己卯此日。島津又三郎忠治卒。

島津系圖云。忠治。陸奥守忠昌子。又三郎。母大友豐前守政親女。永正十二年八月廿五日卒。年廿七歲。法名津友寺蘭窓。

九月小

十月大

十三日。丙寅三條御所台屋番所等立柱。依_レ之群賀。

拾芥記云。室町殿就_レ建三條御所台屋番所。今朝各參賀進_二銀劍_一。

十四日。丁酉依_二御力者祐正事_一。奉行人重傳_二仰於赤松政則_一。

匹井万匹進上。是元服之御禮也。一御太刀。御馬一疋。御劍并御腰物御拜領之御禮也。一御太刀。御馬一疋。御相伴御免之御禮也。一御太刀。御馬。被官衆御對面之御禮。被官衆六人。遊佐河内守。遊佐又五郎。松田。三宅。譽田。井地。各御太刀(持)進上之。一三箇度之出仕。先一番ちやうけぬ。二番裡打。紋鶴。三番小素袍。

十二月大

二日。甲寅三條御所遷徙。

公卿補任云。十二月二日。將軍家三條亭新造移徙。

是頃。依_二阿茶局着帶_一。被_レ命_二御祈於青蓮院_一。

永正十三年記正月條云。同月日御着帶之御加持之事。此門跡

被_レ仰出_二了_一。御殿山名治部少輔姫。(阿茶局云々)水本爲_二御手代_一參勤也。一旦雖_二故障被_レ申入_一。伊勢守申云。御産之儀者。每事様カマ敷事キラハル、事也。只無_二相違_一。御領狀被_レ申入_二テ可_レ然云々。仍則領狀被_レ申入_二了_一。於_二中山亭_一御加持被_レ申也。伊勢兵庫助帶_レ持_二向彼亭_一云々。伊勢守御父ニテ悉皆執申_二云々。水本子_レ時大僧都。生年廿六也。千日護摩中之間。京都へ壇_レ被_レ持_二上_一云々。其後又同十二月廿日頃御誕生爲_二平安之_一。門跡へ御祈禱之事被_レ仰出_一。供料千匹被_レ出_二云云。仍水本爲_二御名代_一參勤也。彼護摩之修中。御懷妊之局

永正十三年記正月條云。舊冬十一月十九日。三條御所御領宅。尊勝院光什僧正參勤_二云々。業衣觀音法小御修法也云々。本尊新圖。其樣皆添青色像也。御供料三千匹云々。此門跡へ可_レ被_レ仰出_二歟_一之由。傳奏勤修寺_二御談合_一之由。山座主梶井宮へ被_レ申_二テ可_レ然之由_一。御返事被_レ申_二上_一云々。仍山座主へ被_レ仰出_二候處_一。卅箇年之間無_二下山_一。今御下山之儀御迷惑之由。御辭退也。仍尊勝院殿之爲_二御手代_一。光什僧正參勤也云々。伊勢貞親以來傳_二書云_一。永正十二年十一月十九日。出山殿鶴野殿元服。申刻於_二出山式部少輔亭_一。伊勢守貞陸刺髮在_レ之。號_二次郎殿_一。實名植長。一出仕三箇度。御太刀。(持)御馬一

得沙汰之處。目チマツシ圖絶_二云々。重而發_二仰出_一者。別而猶々御祈禱可_レ致沙汰_二之由_一被_レ仰出_一。結願時御持物返進被_レ申之處。則又被_レ返下_二。御祈禱可_レ被_レ申由也云々。○又云。御産事至七月一_レマテ無_二其儀_一。世上風聞流産或血塊ナド種々説計也。其比與無念之事也。

是年。於_二關東_一。上杉四郎顯實卒。

上杉系圖云。顯實。右馬頭顯定養子。上杉四郎。早世。永正十二年也。實古河公方源政氏男。

後鑑卷之二百八十一

義植將軍後記第九

永正十三年正月

二月。甲寅御乘馬始。

中次條々被

一御乘馬始在_レ之。伊勢同名中勤_二役之_一。

一御鞍一懸。御手繩腹帶一具。御沓一足。伊勢守進_二上_一之。御座孫次郎御服被_レ下_二之_一。依_二御乘馬_一也。

永正十三年正月

二月。甲寅御乘馬始。

中次條々被

一御乘馬始在_レ之。伊勢同名中勤_二役之_一。

一御鞍一懸。御手繩腹帶一具。御沓一足。伊勢守進_二上_一之。御座孫次郎御服被_レ下_二之_一。依_二御乘馬_一也。

永正十三年正月

二月。甲寅御乘馬始。

中次條々被

一御乘馬始在_レ之。伊勢同名中勤_二役之_一。

一御鞍一懸。御手繩腹帶一具。御沓一足。伊勢守進_二上_一之。御座孫次郎御服被_レ下_二之_一。依_二御乘馬_一也。

五日。丁御筈始。豐筑後守獻物。依之賜物。其外亦同。

中次條々載

上杉右衛門佐 渡邊出仕。

- 一御太刀一腰。(金)年始御筈始之御禮。豐後守。
- 一御太刀一腰。(持)同儀ニ付而被下之。同。
- 一御太刀一腰。(持)於御新造御筈始被下之。同。
- 一御太刀一腰。(持)被下之。御隨(銅子武恒)。
- 一御太刀一腰。(持)昨日御德日ノ間。今日被下之。相阿。
- 一御服被下之。今日之儀同前。觀世大夫。

八日。庚青蓮院門主尊猷參賀。○神護寺若王寺獻物。

永正十三年記云。正月。門主於上醍醐御越年。八日武家へ御參賀之間。七日御出京也。近年如此也。○八日條云。御參賀御對面已後。以伊勢兵庫。今少可有御座之由被仰出。諸家對面之後。而又有御對面。御一獻被參ト云々。其後御コキノコ十計。御扇二本カノ相アミ被進了。御退出之後。則以少納言上座御祝着之山。被申入候處。又來十三日御能サセラルル間。可有御見物之由被仰出了。御棧敷被下打之間。御座所以下之儀。重而可被申入候由也。

中次條々載

一久喜二桶。例年進上之。^{宮嶺山}神護寺。

十一日。癸巳伊勢祭主獻符籙。○御普請始。

中次條々載

- 一御被。祭主 造宮司。
- 一御普請始御事始在之。
- 一御太刀一腰。(金)御普請衆御禮。次郎殿。
- 一御太刀一腰。(金)金山三郎。伊勢右京亮。結城勘解由左衛門。宮下野守。松田丹後守。齋藤美濃守。齋藤上野介。

右役者各進上之。

十二日。甲午宇治大路三郎獻物。

中次條々載

- 一久喜二桶。梅漬一桶。梅刺一桶。例年進上之。宇治大路三郎。

十三日。乙未三條御所申樂興行。○細川右京兆以下獻物。

武雜禮云。於三條御所(永正十三正十三)御能在此。在京之面々等七十合十荷。御供衆美物進上。御通之次第。一番に

中次攻衆走來。二番に中次攻衆まゝ。三番に中次攻衆走來。度々走來參事不審之沙汰あり。依上意一儀中より被召出一事有間數事。然に翌日に被對眞違。御あやまりの由被仰聞也。官兵に更に可被受用ために被仰出候由上意なり。

永正十三年記云。門主武家御參。御服御織物御水干也。御供衆大貳法橋。大藏彌寺主兩人。御力者四人。御棧敷一間之内。當門跡。パンセウ軒御師。弟子院領祇候ト云々。其外御棧敷三四間被下打。御比丘尼御所送御座歟。一向御前へ者門跡無御參ト云々。御一獻御棧敷へ被參。御配膳公方之御供衆沙汰ト云々。尤時宜珍重也。宗珍被談云。照禪院殿之御童體之時歟。細々御能ニ御參。其時モ御棧敷別ニ被搦。御見物ト云々。時同御棧敷之内ニ。先公方未キヤウケン院殿ニテ御喝食之時同御座也。其時御一獻御配膳之事。御供衆ヲ被分可令沙汰之由。故伊勢守眞親被申候處。御供衆別ニ御棧敷ニ可參事。迷惑之由種々及異亂了。眞親漸思案。三寶院殿御運枝也。其外キヤウケン院殿御座之間。御供衆列誰人御配膳可被申哉。雖然別ニ御棧敷へ分參事迷惑之由。是又其理也。所詮彼門跡之坊官衆ヲ被召出。於御棧敷ニ可被召使候由。異見被申了。仍宗珍民部卿ニテ兄弟御供也。大藏彌寺主經光。民部卿寺主宗親。兩人御棧敷ニ祇候。御配膳

沙汰ト云々。其後モ又一兩度如此也云々。今度公方之御供衆。御伴盛沙汰之間。是尤可然。珍重々々。

宇都の山記云。去年今の公方様(義尹公)三條の昔の跡あらため作りみがせ給て御移りしはずとぞ聞えし。(永正十二年徙移新御所)元三以後の出仕等持寺門前通玄寺殿の左右。奥をならへ馬をひかへ。三條坊門東洞院三條河原まで。男女の見物雲霞のやうに皆人かたりし。

中次條々載

- 一御盃台二。白鳥一。雁二。鯛十。鯉一。貝鮑一折。柳十荷。例年進上之。但今日參。
- 一御太刀一腰。(持) 右京大夫殿。
- 一御太刀一腰。(持) 大内左京大夫殿。
- 一公家御供衆申次。攻衆。走衆。就二獻之儀。各御太刀進上之。
- 一就同儀。公家衆御供衆。申次奉行衆。御美物二色ノ、進上之。
- 一御折五合。御禮五荷。 三寶院殿。
- 一御折十合。 柳十荷。 次郎殿。
- 一御折十合。 柳十荷。 大内左京大夫。
- 一御折五合。 柳五荷。 伊勢守。

猿樂在之。

十四日。丙申。總檢按於御所。談平家。○大館上總

介獻卯杖。

申次條々載

一惣檢按掛御目。平家中之。

一御卯杖二。大館上總介嘉例進上之。

十五日。丁酉。有爆竹賜物。

申次條々載

一左義長五本。雖申之。被御覽。仍御太刀被下之。

十七日。己亥。御的始。○八幡善法寺以下獻物。

申次條々載

一善法寺奉賀。年始。西より奉也。三重又ハ二重拜領也。

一同御太刀一腰。(金)鯛廿枚。進上之。例年之義也。

一御的始有之。仍御太刀(金)糸。公家少々。大名外様少々。

御供衆。申次當番衆。御酒奉行等進上之。

一御ゆがけかた。小笠原又六。

一御太刀一腰。(金)伊勢左京亮。

一御弓二張。(御太刀被下之)八幡田中。

一御弦廿張。(御太刀被下之)弓細工。

一御弦廿張。(御太刀被下之)弦懸處。

正印御太刀御覽之。細川四郎。

給御代官多御覽同。

廿日。壬寅。諸僧奉加持。

申次條々載

一御加持衆御加持在之。金藏。松禪。正教。山徒。

淨花院。花開院。四條上人。

晦日。壬子。陰陽頭加茂在富候。御身固。○細川右馬

頭尹賢獻物。

申次條々載

一御足袋三足。染革三枚。細川右馬頭。

自永正十三至三十八年。例年進上之。御足袋革三枚共在

之。

一御身固在富。有春。何如如常。

一御扇一本。(自永正十三至三十八年一同前。)

土佐刑部少輔。粟田民部丞。

一同。

朔日。癸丑。諸家獻物。

申次條々載

一御弓二張。(御的矢工子例年進上之)細川彦四郎。

一御挿物有之。

一御太刀一腰。(金)就御挿物。後於御前被下之。小笠

原又六。

一同。(就同儀進上之。仍御盃頂戴之)同。

一御供衆以下伺公之者。各御太刀進上之。

永正十三至同十八年一同前。

十八日。庚子。御的始。射手被下御盃并服。○細

川四郎奉謁。

申次條々載

一御的射手六人御盃并一重冠被下之。

一圓鏡一面。久喜二桶。字放生院。

(自永正十三至三十八年一同前。)

一八幡御代官參。細川四郎。

(仍御挿物御劍今日被下之) 雖申之。

一三木丁。妙蓮寺。

十九日。辛丑。細川四郎賜御盃及御劍。

申次條々載

一御幣等。七列奉役之。伊勢又七。

一千疋。右京大夫殿。

一御太刀一腰。(持)筒井。

一餅廿。佐々木四郎三郎。

一餅二籠。例年進上之。善智院殿。

一生成三十。佐々木四郎三郎。

三月大

二日。癸未。大震。

永祿年代記云。三月二日卯刻。大地震。

三日。甲申。蜷川親孝任大和守。

足利家書法式載

補任。常大和守

永正十三年二月三日。貞宗

十六日。丁酉。依多田院塔婆造建。被引御馬。

高代寺日記云。三月十六日院塔婆建立ノ時。馬一匹(青毛)。

御寄。且三千疋添加。依去高質。以伊勢兵庫介貞遠が方迄

謝申。

四月大

四日。卯乙。九條大閤政基公薨。

公彌補任云。藤政基。前左大臣從一位前關白准三宮。四月四

日葵。七十二歳。號慈眼院。

永正十三年記云。四月四日。九條大關御他界。連々御中風有之。仍俄御歡樂大事之間。門主可被入申之由。御注進也。就中御イミ事。武家御猶子之上者。雖爲御實父。御イミ不可有之歟。由。内々沙汰候。イツレモ御行フレノ儀可有之。火ヲモ聞召接カルベキ由也。仍武家へ其通被申入之處。上意御思案アリテ。所詮吉田ニ可被仰尋之由也。則被尋仰之處。御返事申云。雖爲御猶子。御實父ノイミ五十日ノ間也。世人トリ親ナド申テ實親ノイミヲノカルル事。更以無其故一ト御返事申入了。仍五十日ノ間御ケカレ也。御中陰等如形被行之畢。

六日。丁管領高國參宮。

河崎氏神宮年代記云。細川高國參宮。

十一日。戌雨。雹。大如梅子。○下給祇園社禁令。

高代寺日記云。四月十一日。大雹如梅。

永正十三年記云。四月十一日ノ夜初夜之時分。大雹如梅。雷電振地云々。或小家之棟ヲ打破。或小夢大夢經損。其外於四條五條之川原。水鳥皆死ト云々。是於洛中一下京計也。上京者大方之儀也云々。其後至翌日未消。不可說云々。

祇園社記載

禁制

祇園社

- 一 甲乙人等。於林中伐木刈草事。
 - 一 於境內殺生事。
 - 一 放飼牛馬事。
 - 一 不及三案內。擅自取社領住宅事。
 - 一 爲三川水通路。堀破大道事。
- 右條々堅被停止。若有違犯之輩者。可被處三嚴科之由。所被仰下也。仍下知如件。

永正十三年四月十一日

近江守三善朝臣判
上野介藤原朝臣判

十四日。乙依西七條地事。奉行人傳仰於東寺

雜掌。

古文書載

伊勢又七良能申知行分城州四七條右京職内。仰木右京亮作職分田地三段事。近年々其一向無沙汰之條。之上者。召放下地。可被宛行餘人云々。早可爲領主進退之旨。被成奉書。令存知之。於自然之儀者。可被合力之由。被仰道候也。仍執達如件。

基雜判

伊勢家制札書條載

禁制

誓願寺(付諸寮舎)

右軍勢甲乙人等寄宿事。一切被停止。若有令違犯之輩者。速可被處三嚴科之由。所被仰下也。仍下知如件。

永正十三年六月二日

前丹後守平朝臣判
近江守三善朝臣判

七日。丁此日。下野國合戰。

那須記云。下野國那須太守大膳太夫藤原資親は。肥前守明資の嫡子。大膳太夫資孫也。始は三郎と云。嗣子なく。結城の東白川義永の二男を養子として娘に嫁し。資永と稱す。其後資親實子出生して資久と號す。寵愛の餘りに是を家督にせんと思ひ。太田原出雲守胤清。同備前守資清父子に違言しけるは。いかにもして資永を討て資久を立べしといへり。此故に太田原父子兵を發し。資永の居城福原を攻る。然るに資永謀を以て。闇夜に軍士七八人忍ばせ。黒羽根城の東の出櫓に火をかけ。其紛に西河岸より彼軍兵忍入。資久を生捕て福原に歸りしが。終には資永利を失ひ。資久を指殺し生害をとげける。是よりして上那須の家絶て。下那須の大炊介資房上下の兩庄を合領す。此人は越後守資持が孫。伊豫守資實が子也。永正十三年丙子六月七日上下の那須一統し畢り。

永正十三年五月一六月

六百二十五

東寺雜掌

英致判

十九日。庚就渡唐船事。給御内書於大内介義興。

伊勢家書載

渡唐船事。代々存知之處。近年相違之旨證文之條。被成御内書一畢。早任先例。永可有執沙汰之由。所被仰下也。仍執達如件。

永正十三年四月十九日

近江守
上野介

大内左京大夫殿

五月小

是月。仍新年獻物。給御内書於土岐美濃守。

御内書案載

爲二年始之祝儀。太刀一腰。(持)馬一匹。鷹三千疋到來。目出候。仍太刀一腰(一文字)遣候也。

五月

土岐美濃守との

六月大

二日。壬誓願寺建制札。

子誓願寺建制札。

長經卷二百八十一 義植將軍後記九

結城系圖云。寶永。彌正少輔政朝二子。那須太郎。那須資親養子。永正十三年六月七日自害。

十日。庚子。佐々木中務入道獻物。

蟻川親孝日記云。一十日。佐々木中務少輔入道(宗意)初瓜進上。一細美五端并圓坐廿枚進上。一御私江細美二端被進之。以淵田與五郎殿中へ被參。御中大右京亮殿。○同十八日終載

公方様江初瓜一籠。細美五端。圓坐貳拾枚御進上之旨。致披露一候了。尤以珍重候。恐々謹言。

六月十一日

伊勢守貞隆

十一日。辛酉。議定御門役事。

蟻川親孝日記云。禁裡御門役。畠山殿當月中。來月之儀。外様衆江可被仰出候歟。如何之由伺被申候。御意得候旨江在之。一御所様東御門役之事。當月中益田。仍來月之事。可爲吉見殿二歟之由被申。尤其心得候由返事在之。以罪阿二任申。松對へ以山内源四郎(十二)中道。出仕之間奏者。謹二申置云々。

十八日。辰。禁裡御門役被命仁木次郎。

蟻川親孝日記云。禁裡御門役之事。丹波仁木次郎殿可被二勤

上。同三十正置殿へ參る。御披露御返事

十五日。乙。青蓮院門主尊欲獻御生見玉。

永正十三年記云。七月御生見玉門主武家へ御參。先々千正ノ御折紙ト云々。雖然依御不弁。近年御料紙計。千正ノ分ニテ三百正被進云々。當年ハ別而御梅五荷三合被進。申次伊勢兵庫見也。門主へ御給テ可被書申之由。内々上意之由。兵庫已被申候。俄仍二被被發。不能其儀。當年ハ新御所ニ御座。女中飛御祓候之間。御前之御配膳已下。女中衆可被申歟と相存之處。無其儀。御供衆沙汰之。其故ハ常ノ御所未無御座二故也云々。

廿五日。甲戌。此日。毛利少輔太郎興元卒。

毛利家譜云。永正十三年丙子八月廿五日興元卒。二十四歲。法名秀岳常松。

八月小

朔日。庚。御憑如例。

宜胤記云。十三年。室町殿御太刀。御返朔日。

廿八日。丁。細川右京大夫高國參拜八幡。

拾芥記云。細川右京大夫代始參詣八幡云々。

伊勢貞親以來傳書云。永正十三年八月廿八日。細川右京大夫

仕中一候由。御請被申云々。一公方様東御門。吉見殿勤仕可被申候云々。一四御門役。來月より三箇月分。能登守護殿勤仕可被申云々。此三箇條。執事代被申分。則令披露。尤可然之旨御返事在之。

廿三日。酉。上池院獻妙香圓。

蟻川親孝日記云。上池院より妙香圓(百粒)被進之。以御祝被仰也。次[]以[]出申[]者也。

此月。朝倉教景白傘鞍覆御免。

足利季世記云。永正十三年六月。朝倉彌正左衛門教景大内殿ノ吹舉ニテ。白傘鞍覆ヲ御免アリ。後ニハ家ニタエシ御相伴衆ニ加リケル。是ハ武衛ノ被官也ケルガ。去ル比ヨリ日本六十六國ノ大名ノ數ニ入ケル。宇都宮ノ被官ニ芳賀。結城ノ被官ニ多賀谷。千葉ノ被官ニ原。武衛ノ被官ニ朝倉。一度ニ六十六人ノ中ニ入ケレドモ。京童ハ猶合子ハリト申シケル。

七月小

六日。丙。宍道兵部少輔及佐々木中務入道獻物。

蟻川親孝日記云。宍道兵部少輔殿年始之御禮御申候。御太刀殿中へまいる。御馬代三百正御倉(請取在之)御披露。御返事親順調進。一佐々木中務少輔入道殿(宗意)江瓜百箇進

殿高國入幡宮へ社參之事。御供衆三百人計。供の騎馬十二騎。一番二内藤彦四郎以下。悉うつばを付。同月を持也。

是月。丹後國合戰。○近江伊庭敗走。

東寺過去帳云。於丹後國。一色左京大夫義清與同九郎二合戰。去年永正十三。

九月大

九日。丁。此日。越中國合戰。

東寺過去帳云。於越中國。越後長尾彈正忠胤入之時。被誅人數三百人。(永正十三年九月九日。)

十月小

四日。壬。被命御禱及營事於淨花院長老。○又依獻物給御書於吉良左武衛及珍王丸。

御内書案載
祈禱事。任例可被致二精誠二候。次當寺再興。相談詰末寺。遂二遣營一者可被候。狀如件。

十月十四日

淨花院長老

爲三祝儀。太刀一腰。馬一匹(青毛)給候。目出候。狀如件。

十月四日

左兵衛佐殿

爲三代替祝儀。太刀一腰。馬一疋。烏日千疋給候。仍太刀一振(弘風)進候。狀如左件。

十月四日

珍王丸殿(吉良殿御孫)

十六日。甲子。秀譽拜謁。

伊勢貞助記云。秀譽御對面之事。惠林院殿様ヨリ可レ致。祇候也。依レ被レ御出。俄出仕ナリ。御折五合。御禮五荷進上之。かな目録貞久調進之。如レ常。御盃頂戴。御菓子ノ翌日也。仍御服ムラサキ拜領。而目之至。近代希之次第也。

永正十三年十月十六日未刻出仕。内々今日祇候之題目ハ。山名殿御局御ちやの御かたと申。御懷妊ノ御沙汰アリ。左様なかと諸人中レ之。因幡守護山名小次郎殿御妹なり。仍此段常恰日記ニ在レ之間。援書之者也。

十一月大

廿九日。丙午。伊勢兵庫助奉ニ御使ニ登ニ叡山。○一色伊豫守熙榮卒。

永正十三年記云。十一月廿九日。伊勢兵庫助爲ニ武家御使ニ登山。門跡祇候御經アリバサセ被レ申儀也。美濃御影寺觀音へ

後鑑卷之二百八十二

義植將軍後記第十月記十二月一

永正十四年丑

正月大

朔日。丁元日節會再興。以ニ舊冬進ニ献用脚一也。

宣胤記云。今夜節會再興云々。當御代。去文龜二年。此一節會再興以後退轉。(中十四年無レ之。)可有ニ再興之由。依レ被レ申ニ武家。舊冬万疋被レ進。被レ撰ニ買馬用脚。此下行傳奏事。宣秀卿(中納言)依レ仰令ニ存知ニ者也。仁和寺記云。傳聞。禁中元日節會被レ行之。近年無レ之。當年被レ行之段珍重。内辨三條内府。外辨久我大納言。

十日。丙戌。公卿參賀。○御參内。

宣胤記云。今日。室町殿(權大納言義植)御參内如ニ例年。於ニ勾當局ニ令レ着ニ御袍ニ給云々。今朝。諸家參ニ賀室町殿。(三條万里小路御亭)予得度以後。中納言所參也。拾芥記云。室町殿各參賀如ニ例年。夕方御參内。二水記云。御參内。七献參云々。三献度武家御酌。五献天酌。從ニ四献度一近臣各候御前。三献之度武家直近之衆許召出了。

御自筆ニテ。紺紙金泥ニテ。門品ヲソバシテ。可レ有ニ御寄進之由御立願也。雖レ然依ニ御中風氣。アソバシ不レ終。端少アソバシ畢。仍此殘ヲアソバシテ可レ被レ進之由也。御自筆ト同前タルベキ同知レ此被レ申候由。御懇之上意共也。則アソバシツカレテ極月中旬頃御進上。體而又以ニ伊勢兵庫助。御祝著之由懇被レ申入ニ了。檀紙十帖。盆。香箱被レ進了。珍重々々。東寺過去帳云。一色伊豫守熙榮大法師歿。永正十三(丙子)年十一月廿九日死去。依レ爲ニ先々講衆ニ入レ之。元ハ當寺執行也。

十二月小

八日。乙卯。於ニ關東。宇都宮右馬頭成綱卒。

宇都宮成綱云。成綱。下野守正綱子。四位少將。下野守。右馬頭。母佐竹掃部助女。永正十三年丙子十二月八日卒。四十八歲。法名繼嚴長胤。

十日。丁巳。北畠具國叙ニ從五位上。

歷名王代云。從五位上源具國。同十三二十。

元長記云。武家參賀。召ニ進頭辨。

晦日。丙午。一條殿來賀。

宣胤記云。今日。一條殿御ニ參公武云々。年始御禮也。

二月小

四日。庚戌。依ニ盜入ニ唐門。殿中騷擾。

二水記云。戌刻許。三條御所夜討入之由風聞。世上騷動仰天以外也。於ニ紫宸殿一見レ之。三條邊所々炬火如ニ晴星。陣下之衆少々馳參。外機。番衆。武家直近之衆馳ニ參三條御所云々。頭而難說之由世皆稱。雖レ然實否未レ定。物念未レ休之處。伯雅業從ニ武家早出。則參内中ニ事由。其子細。於ニ唐門役所。聊盜人之職有レ之。即出聲聞レ之。由皆稱ニ夜討歟。奇異之事也云云。後聞。細川京兆若ニ真足一各令レ參云々。希代之事也。又聞。兒女子云。天魔。此日有三祝儀云々。洛中騷動併其故歟。

廿九日。乙亥。鷲尾宰相隆康卿賀謁。

二水記云。今日。爲ニ當年御禮ニ參ニ武家云々。

是月。京極中務少輔高濑卒。

佐々木系圖云。高濑。大膳大夫持清子。六郎。中務少輔。政光弟。家督。法名道意。號ニ道仙院。永正十四年二月卒。高代寺日記云。二月十六日。京極氏卒ス。官山寺卜號ス。

三月大

十三日。戊子。此日。於關東。佐竹右京大夫義舜卒。
佐竹系圖云。義舜。左衛門佐藤治子。四位少將。兼右京大夫。
永正十四年三月十三日卒。年四十八。法名道浦。道號還慶。
是月。上坂治部大輔景重卒。

上坂系圖云。景重。寬正五年五月三日誕生。永正十四年三月
病死。歲五十三也。法名泰貞齋。上坂平次郎。後改治部大輔
景重。實父。上坂平兵衛尉景家也。京極勝秀是子爲養子。上
坂村ノ城ヲ讓ル。

四月大

十六日。辛酉。仍年始獻物。給御書於畠山左衛門
佐義綱。

御內書案載
爲二年始之祝儀。太刀一腰到來。喜入候也。
四月十六日

畠山左衛門佐とのへ
四月十六日

十七日。壬戌。此頃。細川高國勸進備中一宮法樂和
歌。

宣胤記云。自入道相國(德大寺)使。細川右京大夫高國法
樂和歌。

樂備中一宮和歌題(來廿八日)四首被傳送之。(中納言方
三首先日被送之。)

廿七日。壬申。依大和國騷亂。被下御使。

祐國記十七日條云。筒井半人出頭云々。則奈良迄被出陣
了。然處京口上使ヲ被下處。其上使ヲ不待。筒井衆罷出
之條。上意ヲ不承引。歟。官語道斷。聊爾之由。上意以外御腹
立之間。所々字治邊迄。下京衆悉歸了。筒井ヲ上。次遊佐沙汰
之處。上意以外之間。六條道場過世云々。仍廿二日卯刻。筒
井ハ奈良ヲ被放了。○三十日條云。去廿七日。號公方標上
使。爲三和州無爲之儀。取合ニ下向了。同大内殿ヨリ。神代紀
頭下向了。則十市。岡白上。戊亥脇之衆無爲云々。筒井之儀未
一途無之。

廿八日。癸酉。清瀧宮遷座。依之被進劍馬。

永正十四年記云。四月十九日御得度。(有別記)同廿八日清
瀧宮御遷座有之。座主御若坐始也。(記別有之)爲三寺家沙
汰。奉成御遷座。出立共以寺家沙汰也。自武家。御馬。御
太刀被奉納也。御太刀一腰。(金覆輪)御馬可引現馬之
處。可然御馬折節無御座。道而可被納候由也。後日則現
馬被引進一候了。

晦日。亥。青蓮院門主尊猷得度後參謁。

永正十四年記云。卅日。御得度已後。初而武家へ門跡御禮御
參。御馬。太刀(代)御持參也。御對面。御盃可被參候處。面
向之御對面候間無其儀。何様總而可被申入之由仰也。次
御得度無爲無事。定而理性院。報恩院祝着可仕。目出度思食
由。能々可被申聞。由上意也。珍重々々。

五月小

三日。戊寅。畠山式部少輔順光參拜春日社。

祐國記云。畠山式部少輔方參社云々。

十三日。戊子。大和越智某敗走。依之參賀。

宣胤記云。今日。諸家參賀大樹云々。大和國越智敗北御禮
云々。非殊事。御禮。及攝家清華之條。不可然事也。畠山
式部少輔出陣。近日歸陣也。
二水記云。三條御所諸家御禮有之。大和國御敵追討。無事珍
重之故云々。予依三不具三參賀也。

十六日。卯。於寺町石見守家。有申樂。

二水記云。於寺町石見守家。有能。大夫宮千代丸。細川京兆
罷出云々。

廿五日。庚子。奉行入依一色義清合力事。傳仰於
朽木彌五郎。

朽木文書載

一色左京大夫義清合力事。來月二日以前。至丹後國。相
備人數。自身致進發。被相三誠義清。被抽戰功一者。尤可
爲神妙。若及異儀。於離進者。一段可被加御恩案
之由。被仰出候也。仍就達如件。
永正十四
五月廿十日
時基列
貞運列

佐々木朽木彌五郎殿

是月。大水。

永祿年代記云。五月下旬。洪水。

六月大

二日。丙午。就美濃國新寺初建。給御書於遊行上
人。○又領御書於朝倉教景及勝仙院。

御內書案載
近年於美濃國。一寺建立之由。神妙候也。敬白。
永正十四
六月二日
御列

他阿上人

延永修理進事。至若州和田。暫陣。然者不。移時日。令
合力武田大膳大夫。則而抽戰功一者。可爲神妙一候也。

六月二日

初倉彈正左衛門尉との、進退之事。無事之由。大内左京大夫執申之餘。被聞召。訖。尙義與可申候也。

六月二日 勝仙院

七月小 十三日。丁亥。此日。畿内洪水。

皇年代略記云。四十七年。暴雨洪水。高代寺日記云。七月十三日。暴雨洪水。畿内耳。

廿三日。酉。此頃。石見國騷擾。

宜胤記云。福光將監兼修來。(中略)石見國物念。(守殿山名紀伊守出張。)

八月大 朔日。甲辰。御憑如例。

拾芥記云。公武御憑。劍進上之。武家御憑。奉行伊勢右京亮也。御返同被下之。

宜胤記云。十四年。室町殿御太刀。御返同。八日。辛就。丹後倉橋落城。給御書於朝倉教景。御内書案敷。

丹州倉橋城落居。先以可然候。既一色左京大夫河越之上者。不日申談元信。抽戰功者。可爲神妙之候。猶貞隣可申候也。

八月八日 朝倉彈正左衛門尉との、

十二日。卯。御參内。燕飲及深更。

二水記云。有御參内。從武家。可被參之由被申了。十荷十合被進。於御□□有之。宮御方。中務卿宮。室町殿等皆上壇也。女中御庇也。候男衆御學問所三疊敷也。三獻度武家御酌。男衆召出也。飛鳥井大納言。大藏卿。廣橋中納言。冷泉前中納言。帥中納言。勤修寺中納言。四辻宰相中將。正親町宰相中將。予。伊長朝臣。雅業王。言綱朝臣。重綱朝臣。季房朝臣。永家朝臣。範久。源諸仲。橋以緒等各次第參進了。則候御前。五獻親王御方。七獻天酌。各沉醉忘前後了。從五獻美聲有之。巡舞等不可說之。及深更。有御退出。臣下同退下。今日遠臣衆。飛鳥井。藤兵衛佐兩人計也。外様衆道路。從清涼殿。可參之由被仰了。雖然内々衆經一二。參進之時。一度二則參之間。事之儀不届。近臣同道也。以後不可然之由。有沙汰。今日辻同無之。年始外無之歎。但又令尋歎。可申候也。

河坊城雜掌

禁裏御料所右京職領洛中散在巷所用品等事。帶應安以來証文。當知行之處。或混亂現地。或號權家被官。地子以下有名無實云々。太無謂。早有押妨之族。者退之。任先例。彌領知不可有相違之由。所被仰下也。仍執達如件。

永正十四年八月十五日 美濃守 近江守

廿八日。辛未。東山知恩院災。

宜胤記云。早且。東山知恩院燒失。

晦日。癸酉。於殿中。大内義興沙汰申樂。

二水記云。室町殿有御能(觀世)。大内中沙汰也。□獻。令通上種々物云々。伊勢貞助記載。

進上。(永正十四年八月晦。於三條御所。御能在之。) 御太刀 一腰。 御馬 一匹。 御腹卷 一領。

九月小 七日。庚辰。此頃。遠江國靜謐。

宜胤記云。道賢以使云。遠江合戰落居。大河内父子切腹。今河歸國之由聞及云々。 宗長駿河日記云。其後甲斐國武田。同次郎鉢橋に付て。(相濟各歸國。)兵親合力の事あり。(甲州勝山城に今川勢二千人籠圍人別心故。)又此刻をえて大河内(正月廿八日)至三月

- 御太刀 一腰。 御刀 一腰。
- 御太刀 一振。 御鞍 一口。
- 御太刀 一腰。 御腹卷 一領。
- 以上 以上。

二日相談。當國牢人等信濃の國人を催し。武衛(務邊)改名發教。濱松庄川間在陳。をかたらひ申。天龍川前後左右在々所々押領す。其冬當城に入幡をたてらる。八幡の祝の發句。

是や世にこほらぬながれ石しみづ。

泰能伯父時茂(下野守)八幡を守護し。當國同駿州までの御留守嚴重也。明日夏五月下旬彼城に打向はる。(氏親)折節洪水(天龍川)大うみのことし。ふな橋をかけ。ふな數三百余艘。竹の大繩十へ廿へ。只陸地に似たり。此橋の祝とて干句あり。發句。

水無月はかち人ならぬ瀬々もなし。

いまおもへばみなかち人のわたりかなと申べかりけり。敵河のむかひにうちいて射矢雨のごとし。數万の軍兵やすやすとうちわたす。敵はずなほち引入ぬ。敵の城六つ七つめぐり。五拾余町の内おひこめ。六月より八月まで賣らる。城中そこばくの軍兵。數日をへて八月十九日に落居。安部山の金堀をして。城中の筒井悉堀くつし。水一滴もなかりしなり。大河内兄弟父子。巨海。高橋。其外楯籠傍輩數輩あるは討死。(凡千餘人)あるは討捨。あるは生捕。男女落行跡目もあてられずぞ有し。武衛又子細有て出城。ちかき普濟寺(駿州關府)と云會下寺にして御出家。(永正十三年入道。法名安心。)

供の人数をのゝ出家。尾張へ送り申されき。今川家譜云。永正十三年甲州武田次郎信繩兄弟不和之事アリテ半橋ニ及ブ。加勢合力ノ事再三請ヒケレバ。氏親。葛山。菴原。福島等ニ命シテ千餘人差遣シ。甲斐國勝山ト云處へ陣ヲ取ル。此時駿州人数スキタリト聞エケルニヤ。先年大河内一昧ノ浪人等。又武衛ヲ大將ニ招キ楯籠リ。天龍川ノ前後ヲ押領ス。氏親出張シテ掛川ノ城ニ旗ヲ建ラレ。翌年五月ニ彼敵城ヲ攻メラル。折節洪水シテ天龍川海ノ如シ。船橋チカケラレ。大綱數百渡シ。軍勢チヤス〜ト打渡シ。敵城一タリ。五十餘町ヲ追籠。六月ヨリ八月マテ日々ニ休ム隙ナク攻ラル。城高山ナレバ。安部ヨリ金堀ヲ召レ。城中ノ筒井ノ水皆掘抜ケレバ。敵次第ニ弱リ。大河内。巨海。高橋以下今度ノ敵ノ張本共不殘討レ。大將ノ武衛殿色々降参望有ケレバ。命計リ助被レ申。城ヲ退出。普濟寺ト申寺ニ入出家アリ。法名安心ト名付。主従五人厚張ノ地へ送被レ申。氏親數度ノ戰功ニ恐レ。道三ノ諸士皆ナヒギ從ヒケリ。

九日。壬午此夜地震。

永祿年代記云。九月九日夜半。大地震。

十二日。丙今夜。依明月御參内。和歌御會。

二水記云。有御參内。今日從禁裏被申爲之。實明月也。

仍申刻許御參會。路次第如常。於御直座被改御裝束。則有御參。今日御室禮小御所南方二間懸御座。三獻以後卷之。親王御方。中務卿宮。大樹。以上傍御座。東上北面令三祇候。給。主上北御妻月間也。御引直衣。御垂纒。三獻以後。御大口計也。三獻之度。大樹御酌。依御手不三合期。從女中二前勾當内侍局相代之。五獻之時有御當座。飛鳥井大納言可候。御前一之由有仰。則進候。東縁。帥中納言被出勅題。御短冊。大納言取之。押折懸御硯蓋。於御前承仰令持參。主上。親王御方各次第探題給。次男衆各次第進取之。二十首也。主上二首。各一首。六位不給。祇候男衆。甘露寺大。飛鳥井大。大藏卿。冷泉前中。廣橋中。勸修寺中。帥中。四辻宰中。右宰中。予。雅業王。官綱。重親。永家等朝臣。範久。(各候。東南縁。敷。殿上人圓座也。各令清書。武家於長橋局。有御清書。(但依御手所勞。飛鳥井大書之。御名字計ヲ御自筆也。)即候御前。次第置御硯蓋。皆置了。飛鳥井大參進次第重之。甘露寺大納言依便。互令扶持之。重了置御前。退下。讀師事飛鳥井中。入大樹。有御辭退。仍甘露寺大納言參進右方。先之殿上人取蠟燭。置左方。次召讀師人。依召重親朝臣參候。次第參進。後方兩宮。大樹御前也。聊無骨也。仍少々召之。四辻宰相中將。予。雖有上首。依爲郎曲之者。被召之。冷泉前中納言。勸修寺中納言。右宰相中將等

不召之。各着了讀師讀上之。御製五反。發聲飛鳥井大納言。親王御方三反。中務卿宮。大樹各二反。與御製三反。發聲歌四辻宰相中將出之。披讀了從下。鷹退下。三獻後參御酌。五獻中務卿宮也。有美聲。七獻天酌。今夜月陰。及三五更明白。十獻親王御方御酌也。時大納言御沉醉之間有御退出。則入御。臣下退出。今夜時宜快然。可歌太平。

十六日。己松殿宰相息家豐於御前加元服。

宣風記十月五日條云。松殿宰相(忠顯卿)自去一年與三家門相刻。止出仕了。就兵庫福原庄御年貢無沙汰事也。及武家御沙汰。去月十六日。被召出子家豐。爲宸形之處。參御禮之次。俄臨期於三亞相御前。被加首服云々。名字此間忠豐也。當時尹豐同訓之字。賜家字。改名云々。

十七日。庚伏見家青侍座盜賊被拷詢。

二水記云。伏見殿御所侍有生島右京亮云者。強問之。盜人同類之由令白狀云々。仍關閣捕之。既及強問云々。伏見殿中有馳走。先不可有聊爾失之由。被申武家。御返事之趣。當時堅御成敗之處。已同類之由白狀之上。不可及。由被申了。不便至極也。今夜令強問。無申旨。連日四度令強問。申旨無之。虛名隱体也。不便次第。言語道斷也。

廿三日。丙西塔院聖村法印献物。奉謝執行職。

宣胤記云。聖村法印(西塔南尾)來。就西塔執行職。今日爲三御禮。參大樹。千疋并高壇紙十帖。扇等進上云々。

十月大

閏十月小

二日。甲戌爲浴。攝州有馬湯。御出京。○依獻物。給御書於朽木彌五郎。

二水記云。武家御所爲御湯治。令入有間之湯。給爲見物。早朝一兩拜令同道一罷出。辰刻許有御出。御輿。(女房垂簾)騎馬五騎也。世上有雜脫。聊令物念。爲恐怖也。

宣胤記云。今日。室町殿(權大納言義植)爲有間山溫泉。令下攝州。給依御中風氣也。御忍分。被用女房與云々。御騎馬九人。不著鳥帽子。持弓云々。

拾芥記云。室町殿就御養性。御下向攝州湯山也。仁和寺記云。晝以後雨降。大樹攝州有馬湯泉爲御湯治。御下向。大內介。細川。畠山等御警固。赤松以高名。警固了。京中就中極物念。

永祿年代記云。閏十月二日。義植將軍攝州湯山江御湯治。是御中風御養性。又、先年夜討之時。御手之御爲也。細川殿。大內殿爲御用心。御供也。

翰林五鳳集云。相公頃赴攝之溫泉宮。右京兆爲之啓。左京兆爲之殿。其餘官屬。車馬闐々而扈從。都下爭觀者如堵。衣冠之美人物之盛。古未有之。昨夜詣[雅丈閣下。嘲風弄月之次。話及時處。不覺更替已移。其翌時以致謝。云。相公南去赴天津。官屬森然車馬塵。何管溫泉不替我。佳人笑語暖於春。朽木文書載。太刀一腰到來候事。神妙候也。

潤十月二日

御判

四日。丙子大內義興下向攝州。

二水記云。早朝左京大夫下向攝津國。令見物。十騎余也。雖有種種雜說。至今日無事。唯各令川心計也。

廿一日。甲午從攝州御歸洛。

二水記云。室町殿從湯山御歸洛。御中風氣聊被得高減之由。尤珍重也。

宣胤記云。今日申針室町殿(權大納言義植)自溫泉(攝州有間山)御歸洛云々。種種荒說。心腑之處。無爲珍重珍重。

廿二日。乙未獻物內裡。

二水記廿四日條云。室內有二獸。堂上大尊祇候也。昨日從武家二十種二十荷被進之故也。美聲延舞有之。今度雜說無事。誠以可歌太平者乎。各沈醉。及五更退出了。

廿七日。己未公武參賀歸洛。宣胤記云。室町殿自溫泉御歸洛。今日公武參賀云々。

廿八日。庚子又有參賀。二水記云。爲御歸洛御禮。諸家有參賀。未明若直垂令參了。乘物不令期之爲沙行也。歸洛之時。乘物之衆在二前後。太以見苦也。後聞。妙法院宮。青蓮院宮御參次第。各被中御所存。其間有數刻云々。妙門御中之旨。法中之儀。可專戒之。終歷然也。更不可有異論云々。青門之御所存。戒之。勿勿論也。雖然宮寺御猶子之宮。可有差別。其上當門主者入道親王也。此段又爲規模者也。太以不能異儀云々。

兩段臨期難決。所經今日者青門則可有御參之由。爲上意。仍各參進以後一人有御參云々。(又聞。此中被尋申禁。參之處。以戒騰可爲上首之條。可宜之由。勅答云々。)

十一月大

七日。戊申細川右馬頭以下發向攝州。

仁和寺記云。細川右馬頭已下軍兵下向攝州。是澄元攝州入國云々。

廿三日。甲子細川高國下向浪速。仁和寺記云。細川右京大夫高國率諸將攝州下向。今月中攝州之陣旅冥々。澄元神尾山陣取。合戰少々。雖有之。自他不決。勝負。

十二月小 八日。己卯此日。於陸奧。葦名盛高卒。會津四家合考云。十二月八日。葦名盛高卒矣。葬實相寺。誠常院。今其堂影保存也。(明曆元年乙未三月十五日。實明寺回。此影亦在三灰裏。雖表帶盡滅。影像而已存。今在焉。昔年殘夢和尚贊焉。贊詞燼滅去也。)

廿二日。癸巳二條尹房公關白事御執奏。○以平野社神職。被付吉田三位兼永卿。

宣胤記云。二條殿關白事。中納言中入之儀。以前御即位事。自武家一ノニノ數被中之間。可爲其以前御約也。其後御即位事不及御沙汰。(中界)兼滿朝臣狀到來。見左。當時兼永卿父兼俱卿存生時。父子義經。其後平野社主職事。父子既論。及武家之御沙汰。被付兼永卿了。

廿七日。戊戌被停歲抄參賀。

宣胤記云。今室町殿諸家歲末之參賀被停止云々。依被痛思食也。

後鑑卷之二百八十三

義植將軍後記第十一月 訖于二月

永正十五年 寅

正月大

九日。己細川安房守政春卒。

細川爾家記云。永正十五年正月九日安房守政春卒。法名道宜。

拾芥記云。細川阿波守入道死去云々。

二水記七日條云。御神樂可爲來廿九日之由。兼有_三其儀。仍今夜_三欲_レ始_レ神事_二之處。昨日甲乙人令_三見物_一。殊細川安房守入道死去。被官皆參。仍禁中觸穢也。御延引云々。

十日。庚新賀如_レ例。○御參內。

宣胤記云。今日。室町殿諸家參賀式日也。(中略)武家御參內如_三例年_一。

二水記云。今日。御參內可有之由也。仍掃_三地路次_二了。諸家參賀如_レ常云々。依_三不具_二不_レ能_一出頭。未_レ終刻有_二御參內。細川右京大夫被官人辻々令_三誓固_二云々。委會衆如_三例年_一於_二置石_一立。御劍御與一色彌五郎役也云々。於_二御直廬_一被_レ改_二武衣冠_一。則令_レ候御前_一給。(從_三黑道_二片間_一御出入。)三獻度武

家御酌如_レ常。飛鳥井大納言。勤修寺中納言兩人許被_三召出_一了。予參_三當番_一。依_三袍不_レ發_一候_二丹陰_一了。於_二長橋局_一三獻參。例年之儀也。乘烟之程御退出也。

廿一日。壬伊勢守貞陸奉_二御使_一下_二向堺浦_一。

宣胤記云。爲_二天內上洛_一仰。今日伊勢守貞陸爲_二御使_一下_二和泉堺_一云々。

二月小

朔日。辛未此日。於_二關東_一里見刑部少輔義通卒。

里見系圖云。義通。刑部少輔成義子。刑部少輔。上野介。陸奥守。母三浦安藝守運秀女。永正十五年戊寅二月朔日卒去。三十八歲。法名天笑院高山正踏居士。(白濱村三峯山林院葬入。)

十八日。子依_二四月御登山_一被_レ命_二伊勢右京亮可_一

爲_二布衣侍_一旨。○以_二鴿一器_一送_二進_一二條家。伊勢家傳載

來四月四日。山門根本中堂供養御成。

伊勢右京亮

爲_二布衣_一可_レ被_二參勤_一候由候也。

宣胤記云。自_二三條殿_一給_レ之。自_二武家_一被_レ進_二云々。

三月大

十七日。丙辰渡_二御島山式部少輔順光家_一。

二水記云。島山式部少輔始申_二御成_一。從_三所々_二美物_一其外楯不可_レ勝_レ計云々。不慮果報不思儀云々。朝程雨下。可有_三延引_二之沙汰_一有_レ之。從_二午終刻_一晴。又可_レ有_二御出_一之由也。貴賤見物如_三雲霞_二云々。觀世今春相交穢染有_レ之。時宜快然云々。從_二申刻_一又雨降。聊無興歎。

伊勢家傳云。永正十五年三月十七日。島山式部少輔順光亭へ御成。八時御興。御供衆。細川右馬頭御劍。二番大館上總介。三番細川次郎。四番細川四郎。五番一色兵部大輔。六番一色彌五郎。七番伊勢兵庫助。八番伊勢備中守。九番伊勢因幡守。十番伊勢守。十一番右阿。同朋也。一能敷十三番。此内三番。今春大夫仕_レ之也。一粟脚万疋。舞臺_二積_一之。此役者之事。一番伊勢備中守。二番伊勢兵庫助。三番伊勢因幡守。四番伊勢又次郎。五番伊勢右京亮。六番伊勢與一。七番伊勢六郎左衛門尉。以上七人勤_レ之也。一田樂四人祗候。松阿。堅阿。藤阿。道阿。今春大夫各々折紙被_レ下_レ之。一十一獻參。初獻_二御馬_一。太刀進上也。一式三獻御酌。細川右馬頭。初獻之御酌。(御酌大館上總

介。御提島山七郎。(二獻之御酌。(御酌一色彌五郎。御提大館上總介。三獻之御酌。(御酌細川四郎。御提一色彌五郎。四獻之御酌。(御酌細川次郎。御提島山七郎。五獻之御酌。(御酌島山七郎。御提細川次郎。六獻之御酌。(御酌一色兵部大輔。御提島山七郎。七獻之御酌。(御酌島山次郎。御提島山七郎。八獻之御酌。(御酌右京大夫。御提細川右馬頭。九獻之御酌。(御酌飛鳥井殿。御提伯殿。十獻之御酌。(御酌伊勢守。御提伊勢備中守。十一獻之御酌。(御酌公方機。御提飛鳥井殿。伊勢貞久武藏記云。永正十五年三月十七日。島山式部少輔所へ御成時。御一獻之水。初獻。龜甲。雜煮。二獻。冷珍。茶會_レ御成。三獻。くらし。鯛。四。御湯液。一。鹽引。燒物。ふくめ。からすみ。燒鳥。御汁。二。大あ_レまじ。すしにし。鱈。御汁。三。香物。蒲鉾。このわた。四。海月。かきめ。御汁。五。鯛子。かさめ。御汁。六。はむ。足打。海老。御汁。七。鮎。か。はら。子。御汁。八。四獻。式三獻より御湯液まで。五獻。つまがされ。鯛。六。鯛。た。く。い。はまぐり。

六献。つぐみ。こち。七献。饅頭。御膳所の者。
八献。からすみ。つみ入。九献。はい。餅。
十献。巻するめ。まび。十一献。かまぼこ。鱈。
十二献。鯛のさしみ。鮎。十三献。かさめ。いろか。
十四献。やう羹。御膳所。
十五献。赤がい。わの子。さくら煎。
十六献。いのわた。くちら。十七献。すいせん。御膳所。
十八献。鹽引。鳥。十九献。はりたこ。なまづ。
廿献。ひばり。鷹。こらぐる。鷹。

廿日。紀昌山亭猿樂興行。

二水記云。式部少輔今日又有二會始猿樂云々。仍以表頭之
林一密。令見物了。觀世今春等相交有能。晚頭踊了。後開
酒宴及二半夜。能十四五番有之云々。

廿六日。乙被議。中堂供養雜役。

宣胤記云。秀房朝臣狀到來。中堂供養大樹御聽聞供奉。御座
御劍。御沓。此三ヶ役。以何可爲上首役云々。以御座役
可先之山返答了。廣橋黃門今度武家儀申沙汰也。御沓各

可爲上首之由申之云々。武家大將拜賀。三ヶ度例注遺
之。其外每度御座首也。同官之大納言勤之。御沓ハ中納言
及參議。

四月小

三日。壬。就延曆寺中堂供養。從板本御登山。

宣胤記云。明日延曆寺中堂供養也。(中略)今日室町殿自東
坂本御登山云々。御供殿上人踏次不供奉。
二水記云。傳聞。武家今日御登山。從坂本云々。山上手與之
外不用。雖然武家依御懸望。御宿坊迄爲御板本。御宿坊
者爲三座主坊云々。雨終日不止。深泥以外也。明日陰晴如
何。未定之由有沙汰。遠國賤賤群集。路次一向難通之林也。
尊朝至大鳥居懸之。女人上下令參詣。連日如雲霞云
云。

四日。癸。延曆寺中堂供養御參會。

二水記云。朝程深霧。細雨時々交降。實否如何之處。天氣不
屬晴深泥旁以不弁之間。可爲延引之由。從傳發二有使
者。仍各無與之。從已刻一漸屬晴。又有使者。如何様ニモ
今日可然之由。武家仰也。然間可執行之由也云々。各又馳
參。若束帶。予以異林之姿。密々於三樂屋。令見聞。同道之
衆有兩三。終刻各參仕也。武家從宿坊御手與。供奉之

植相公御成。

五日。甲。御下山。

二水記云。武家今日同御下山了。

十九日。戊。伊勢守貞陸爲御使。下向越前。依賀州通路事也。

宣胤記云。今日。伊勢守貞陸爲大樹御使。下越前。賀州通路
及三十餘年。胡倉父子伐之。可開之由被仰也。

廿一日。庚。此日。於關東。上杉治部少輔朝良卒。

上杉系圖云。朝良。修理大夫定政子。五郎。治部少輔。實朝昌
男。永正十五年四月廿一日死。法名瑞芳。

五月大

朔日。亥。日蝕。

宣胤記云。日蝕(六分。申酉。)不正現。

五日。癸。賀茂競馬御覽。此頃。神宮在恠異事。

宣胤記云。賀茂競馬如例。大樹御見物云々。
公卿補任云。五月五日。豐受大神宮御垣内有二淨事。
河崎氏神宮年代記云。三日酉時。外宮ヨリ内宮へ光物飛。亦
外宮へ。五月ヨリ年中穢物持運。待見レ不來。カヘレバ
持來。

殿上人五六許輩。各狩衣也。布衣之侍二人。御座所三間。
懸御座。殿上人其外御供養各候。細川右京大夫。島山二
郎等。裏打候。綠。先例如何。不相應之由有沙汰。公卿。殿
上人着極屋。衆僧各着左右之極屋。未初刻。導師咒願兩師。
同時從左右之邊門。御參進各行。導師座主。胤胤法親王。(梶
井宮。住山廿五年也。成經披覽。行德無双之譽。世以奉稱
美者也。伏見殿御連枝也。後大通院御子。咒願御室覺道法
親王。(當今第二御子。御年十九歲也。爲御幼年。導師御禮
項。今又御參勤。當于時。御冥加奇特也云々。(下略)
宣胤記云。今日。延曆寺中堂供養也。(中略)内々御聽聞也。
據御局。室町殿御出方事。廣橋中納言申沙汰。當日不參。
供奉殿上人季房朝臣。(御座役也。雅綱朝臣(御劍役)永家
朝臣。賴孝。平時。尹豐。(以上各狩衣。御宿坊參會。御宿坊圓
融坊云々。
拾芥記云。中堂供養也。室町殿内々爲御見物。爲御直垂。林。
自前日御登山也。座主宮。同御室御參也。
東寺執行雜。日記云。一比叡山中堂供養。(永正十五年四月
四日。色衣八十口。兩方極屋坐ノ四ヶ法用アリ。并拾人拜
殿舞。導師天台座主南方。咒願御室。(兩方高座居北方)路
次ハ手與。天蓋指懸。公方横ハ中堂北方御棧敷アリ。
長享年後。內兵亂記云。十五年四月四日。山門中堂供養。禮

外者如例願口能之歎。○十四日雨下。晚晴。路次掃除自今日之所々作之云々。伊勢兵庫助以三大法橋申送云。下關關御社參之。僧正房御下與處參向。被申寺中之儀。自然御尋子細等。具可被申入之由。內々上意云々。僧正房當于時御面目哉。○十五日晴。山下寺中之掃除。年預禮祐法印。殿誠阿闍梨兩人奉行。拜殿北小石橋。二天前小石橋等。假以板懸之。拜殿内外之莊嚴以下。悉皆年預申付歎。御與昇兩人罷下。御與立所等入儀申定之云々。○十六日晴。山上路次一昨日雖作之。今日猶被仰付地下人。重而致掃除了。就御成。自伊勢守五合五荷進上之。(使者嶋川。從院家一可申入之由書狀到來。仍僧正房御登山也。山下御社參之時拜殿御座。可爲三座主御禮云々。然而以外破損前之爲門跡。被仰付之由。從寺家注進。仍俄爲門跡御新調也。門跡(于)時尺迦院御借住也。内外御掃除。其外御間半。御小便所等新造之。次御堂。御時所。當月御月次護摩所等別而被莊嚴之。御膳。御茶湯具。御茶碗具。香呂。御硯。椀。手洗。(此三種自院家。於入江殿申渡之。)御枕。文書。燭臺。餅子。提等。金屏(自金勝院借進之。)以下。於所々御借用。(注文有別。自今日。御座敷等被三調一之者也。○十七日晴。自早且僧正房。予兩人出仕拜殿。奉待。刻限。辰半刻御成。御供衆細川右馬頭。同駿河守。島山七郎。伊勢左京亮。同兵庫

助。其外伯中將。藤兵衛佐供奉。直阿闍梨。御走六人。御小者等如常。御與金堂四於三石橋之上程一被立之。自其御步行。僧正房一人其初參向被申。則有供奉。被奉示拜殿御座。御拜之間四緣祇候也。御馬御太刀御奉納。年預請取之。寺中不及御入堂。清瀧御社參之後則御登山。自南大門外御乘與。其間者御步行也。僧正房御乘與之後立。還善提寺。山越登山。予同之。御成以前爲令參着也。抑武家御登山之事。於三當山一初例歎。然而今度御與被上事。先規無之。座主御登山之時。御手與之外者不。被用之條。如何之山及沙汰。雖於去四月叡山中宮供奉御登山之時。雖無先例。依二雨儀御檢與也。但於御手與二者。八瀬童子。御檢與後昇之。(被用御手與儀式也。既延曆寺御登山之時如此。殘暑之折節。御步行難。叶。山路狹少。御笠可參事不三合期之間。以御忍之儀。可爲御檢與云々。仍於御手與者。當門跡力者御檢與之後昇之。從院家二干鶴一人被履召之間進之。先尺迦院中門開之。門主庭上御禮辨。(宮門跡之外如此也云々。則御與被寄東椽入御坐。御飯後右馬頭。領家衆參向。中門外踏踏令警風了。御一獻已前。御成後水邊門主誘引被申。折節山鳥徘徊。御自愛不尋常云々。御一獻事。先日不可有。其用意之由。內々雖被仰出。如形御蓋可被參分也。初獻雜煮。御蓋通。伯中將。藤兵衛佐。御供衆五人。御配膳者右

馬頭。七郎。駿河守等沙汰之。御手長門跡房官刺寺主。大藏卿寺主。宰相寺主三人。御次二間迄運送之也。第二獻冷麵。御通如前。其後領家衆進上御太刀。(金銀輪。御禮華。僧正房。報恩院。(絹衣。絹袴。紫小袈裟。松橋。童形。水干。予。紫小袈裟。金剛王院。次房官衆進上御太刀。大貳法橋。少納言上坐。大藏卿。寺主等也。予。松橋。始而御對面之間。重而御太刀(金)進上之。申御禮了。其趣兵庫助披露也。次山上山下。寺家十合十荷進上。山務法印。(隆助。山下半年預(隆助。祇候於御通。可被御覽之由被仰出。仍御馬。御太刀(金)進上之。第三獻御湯漬。御通伯中將。僧正房。藤兵衛佐。報恩院。右馬頭。予。左京亮。金剛王院。七郎。駿河守。兵庫助。此後門跡出世紹信僧都。殿誠阿闍梨被召出。其後房官。大貳法橋。少納言上座。大藏卿寺主被召出之。前々御成之時。於三房官者少々被召出。出生無其例云々。然而今度殿誠親。(左京亮。依致御供。申成事歎。次寶幢院。(童部。伊勢兵庫助爲子息。仍以取合。御懸御目者也。次自三門跡。御馬御太刀(持)御進上之。伊勢兵庫披露。御成御祝着之由被申入了。次門主內々依被申御物器。付屬御袈裟。五大尊等可有御拜見之由被仰出。則被懸御堂御拜見也。僧正房。報恩院祇候御前。御尋之子細等。一々御返事被申入。御堂檢迄者。紹信。殿誠兩人。御本尊箱等運送也。此間

於二初次間。御供衆等一獻有之。僧正房。報恩院相伴也。配膳信濃。石見以下待衆勤之。第四獻御吸物。御折二合參。御通藤兵衛佐。伯中將。御供衆五人。御走衆六人。直阿。其後門跡出世。大藏卿公康怡。依金剛王院訴訟。被召出之。兵庫取合也。第五獻御吸物。御折二合。門主以御酌被申入。則大樹以御酌。門主被申。猶御酌。伯中將。藤兵衛佐。僧正房。報恩院。予。金剛王院給之訖。猶御蓋可參之由。兵庫助披露之處。御沈醉之間。可有還御一之由上意。時宜尤快然。珍重珍重。還御半午。御與如前被寄御椽上。門主被下。庭上。御禮被申入。領家衆四人。出門外一障隔如前也。今度御一獻方。爲三門跡御用意。悉皆宗珍奉行歎。御末者雖不被仰付。時宜爲見計。下津野與次郎祇候。還御之後。被召門主御前。被下御酒了。事終領家衆并出世房官。侍衆等。進上御太刀(金)御成無爲珍重之由申入。其後御蓋御通事終。各退出也。還御路次不被經寺中。御下與之儀無之。自南大門前。西。無量光院辻子北。自亦門通馬場。御下也。供奉衆者從三馬場末(下馬札邊。乘馬云々。依爲還路御成。被引御馬。乘而各依無其覺悟。御殿不被立之。仍馬場邊聚之歎。不可然。舍人令三腹立云々。今度諸事。宗珍奉行才覺之故也。雖然爲一身御一獻等之儀申付之間。每驚越度出來。向後能々可有二用意事也。伯中將。藤兵衛佐御供之間。木

永正十五年八月

六百四十六

具等用意不足。仰天比與事歟。御檢。手洗御ヤノノ(奈其紙)不置之。有御用事被之之時。馳走不可然云々。御酒奉行三河法橋居(閑所)之間。御加御酒運送遲々。尤不立事。御膳之供御與惣之飯一度用意。尤聊爾。旬後可爲各別一事也云々。松橋早出。幼少之間。進退不弁之故歟。妙法院依所勞無三山頭(部屋)無念之山中云々。自公方。御太刀被進之。(銘)可問之。(御走榮綱所祇候。一獻配膳者。門跡垂髮。(千菊)紅阿彌以下勤之歟。御小者迄者一獻有之。御與昇御酒給之歟。可尋之。御膳者山下祇候之間。御酒不給之云々。

八月大

朔日。辰佳儀如恒。

拾芥記云。公武御願。銀劍進上之。室町殿御太刀。内々付。諏訪左近大夫一進之。

宣胤記云。八朔。公武進上儀。宣秀卿沙汰之。

十日。丑美濃國合戰。

宣胤記十三日條云。四條宰相來談云。濃州去十日敗。(齊藤新四郎。伴三土岐子。引越前堺。土岐父ノ殘云々。齊藤彦四郎此間入國。)

十六日。癸奉行入建。清水寺制札。

坐右集載

禁制 清水寺

一寺内坊舍押而令寄宿事。

一於山林伐採竹木事。付刈草事。

一至寺中殺生事。付指鳥括犬事。

右條々堅被停止之詔。若有違背之族者。可處罪科之由。所被仰下也。仍下知如件。

永正十五年八月十六日

美濃守藤原朝臣判 上野介藤原朝臣判

廿三日。庚寅大内左京大夫義興下向周防。

足利季世記云。永正十五年八月廿三日。大内左京大夫義興卿周防國へ下向アリ。郡ニハ細川左京大夫高國管領ニテ。公方

義植ヲ仰ギ奉ル。

高代寺日記云。八月。從三大内左京大夫義興管領ヲ辭シ周防へ皈ル。在京十餘年。公武ノコトヲ執行。財寶減。故ニ皈國ス

ト云々。

翰林五鳳集云。贈防州太守大光居士歸國。

忠勤前世郭汾陽。何不レ少留陪レ唐堂。千里分レ憂同レ咫尺。三

台錢レ踏出レ尋常。禁城池館孤露月。放國江山一劍霜。若有レ西

人レ問レ期事。龍飛新主是成康。

瑞溪

廿四日。卯松木宗綱卿依從一位任准大臣。

依御執奏也。

宣胤記廿九日條載

永正十五年八月廿四日 宣旨

正二位藤原朝臣

宣叙從一位。

藏入頭右大辨藤原内光

宗綱卿也。准大臣事。依武家之御執奏。雖無御庶幾勅許云々。武家儀無殊山緒。只以綠強申入云々。

公卿補任云。准大臣從一位藤原宗綱。(七十四)八月廿四日

准大臣。可令朝參一候由宣下。征夷大將軍御執奏云々。

九月小

廿三日。庚申細川高國下國。

宣胤記廿八日條云。聞和泉出張敵去廿四日引退根來寺云云。細川右京大夫去廿三日下國。廿四日可感天王寺之山。

聞之退散云々。

是月。大飢。多餓死者。

高代寺日記云。大飢饉。人多死云。

十月大

十一月小

三日。己被付伊勢一社奉幣料足。

拾芥記云。伊勢一社奉幣被レ行之。自武家被レ付其足。(七

千足)上卿以下各有御訪。奉行頭右大辨内光朝臣。參陣弁

有少辨細繼也。

廿八日。甲子仍山名次郎獻物。下給御書。

御内書案載

爲當年之祝儀。太刀一腰。鸞眼千疋到來。神妙候也。

十一月廿八日

山名次郎どのへ

十二月大

二日。丁就被官人事。有被仰示赤松兵部少

輔旨。

御内書案載

被官人等澄元度々企物念。不可然。所發於同意盟者

加三成敗。天下靜謐之儀。可爲神妙一候。委細猶中合殿四

堂一候也。

十二月二日

赤松兵部少輔どのへ

永正十五年九月

六百四十七

廿六日。卯就土岐次郎事。給御書於朝倉貞景。依佐々木舊地事。奉行人傳仰於伊勢孫次郎。御內書案載。

土岐次郎事。其國逗留。不可然候。早々令參洛之機。急度加三意見者。尤可爲神妙之候也。永正十五年十二月廿六日。

朝倉彈正左衛門尉どのへ 雜々書禮載

佐々木黒田四郎左衛門尉苗地洛中万里小路之地事。被預置之訖。可被全領知之由。所被仰下也。仍執達如件。永正十五年十二月廿六日 散位 美濃守

伊勢孫次郎殿

是冬。細川高國與岡山合戰。

長享年後畿内兵亂記云。冬高國與岡山。日々合戰。是年。春日山神木枯槁。

宣胤記九月廿五日條云。今年。春日山神木自七月至八月九日。枯槁。三千八百八十本云々。

後鑑卷之二百八十四

義植將軍後記第十二 起永正十六年正月 訖十二月

五日。庚子齒固御祝及御乘馬始。

申次條々載 永正十六年 一御齒固。辰刻。

一御服。伊勢備中守。就御齒固之儀。被下之。

一同。齋藤上野介。就同儀。被下之。

一御乘馬始在之。如例年。但今日へ御延引。

一御服。就御乘馬始之儀。被下。御孫次郎。

十日。乙公卿參賀新陽。

宣胤記云。室町殿諸家參賀日也。御參内如例年。十一日。丙御參内。

二水記云。御參内也。(昨日雖爲例日。從常御所。爲始御參之間。被擇吉日云々)見物罷出。於近衛邊。令見物了。未終刻許有御出。御與如常。騎馬六人。同朋一人。行粧。自於置石。令下與給云々。其邊之後。程遠之間不見。後聞。今日御參内之儀如常。三獻武家御酌。廣橋大納言。勸

修寺中納言。頭辨内光朝臣。舊冬昇進之新室相尊被召出云云。五献天酌。此時參會之衆悉召出了。

十四日。己三寶院義堯任大僧都。幕府御養子也。

門跡譜云。三寶院義堯大僧正。九條關白左大臣政基公男。後三條院關白滿家公孫。征夷大將軍源義植公爲子。永正二十三

廿三誕生。同十六正十四任大僧都。十五歲。二月大

十日。甲戌渡御細川高國亭。有申樂。

二水記云。細川猿樂令見物(猿頭)今日。武家御所申入。未刻許渡御。座敷之林奔走。見物衆如雲霞。(下畧)

廿八日。壬辰此頃。勸進能興行。

二水記云。參三方松御棧敷。能四番之間也。從今日始之。式部少輔經上意。令勸進云々。觀世大夫爲扶持云々。七番了。人各退散。

三月小 十八日。壬子地震。

永祿年代記云。三月十八日卯刻。大地震。

廿六日。庚申仍年始献物。給御書於北畠中將。

御内書案載

爲二年始之祝儀。太刀一腰。馬一疋(黒毛)到來。悅喜候。狀如件。永正十六年三月廿六日

北畠中將殿

此春至夏。飢饉。

永祿年代記云。春夏大飢饉。死者多之。於悲田寺。施行逐日在之。然者助者有云々。

四月大 四日。丁卯此日。於鎮西。島津又六郎忠隆卒。

島津系圖云。忠隆。隆興守忠昌二子。又六郎。母大友豐前守政親女。永正十六年四月四日卒。年廿三。法名隆盛院與岳。

島津家譜云。忠隆兄弟共致家督之候。然共忠治男子早世候。忠隆弟之致家督得共。是も無繼子。二十計に而早世候。忠隆家督之。備中國連島住人三宅和泉守琉球國を從へ可申進

兵船十四艘作立。薩州坊津迄參候心。琉球國之儀。當家へ拜領之國にて候間早速追返候。其以後終彼國へ人手を指申者無御座候。

十二日。丙子於細川家馬場。犬追物興行。

二水記云。於細川上馬場。有犬追物。仍晚陰。近邊衆兩三輩

令同道。令見物了。射手十四人也。百正見了歸家。更又有百正云々。

十六日。己卯。細川高國參宮。

二水記十五日條云。明日右京大夫令參宮云々。仍方々賈賤以三次參宮云々。老母御察等。未明出立云々。

是月。細川高國築攝津尼崎城。

高代寺日記云。四月高國尼崎二城ヲ構フ。

五月小

三日。丙寅。入江家境内事。奉行人傳仰於彼家雜掌。

古文書載

當寺境内事。任度々御下知。差圖并當知行之分。可令全領知給上之由。所被仰下也。仍執達如件。

永正十六年五月三日

丹後守判

河内守判

入江殿雜掌

廿三日。丙辰。給御内書於赤松兵部少輔義村。

御内書案載

就西宮冬澄元與輩成敗事。遣内書一處。嚴重之請文到來。神

妙。尙以和尋與輩。急度加成敗者可然候。委細殿西室可申也。

永正十六年五月廿三日

赤松兵部少輔どのへ

六月大

十六日。戊寅。於濃州。土岐左京太夫政房卒。

土岐歷代記云。長男政房ハ中興ノ名將ニテ。革手ニ在城シテ家臣齋藤新四郎利長。長井藤左衛門長弘等國政ヲ執。伊賀稻葉氏家等國中ノ武士國守ト仰ケレバ。國中甚太平ナリ。政房子八人アリ。長男ハ太郎盛頼也。家督ヲツギ左京太夫頼繼ト申シケリ。二男ハ三郎頼義。三男ハ三郎治頼。常州信太ノ庄江戸崎ニ住ス。四男ハ勢州梅戸ノ養子。梅戸民部太夫光高ト云。五男ハ濃州大野郡三輪ノ城主攝斐左近太夫基春ノ養子攝斐五郎光親ト申ナリ。六男鷲津六郎光教ト號。七男ハ七郎頼充。八男ハ八郎頼香ト云。後ニ兄五郎光親ト一所ニ三輪ニ住シテ。三輪與三左衛門光長ト號ス。後ニ四郎ニ住ス。嫡男太郎頼繼ニ家督ヲ讓リ。政房城田ノ館ヲ取立移リ住シ。夫ヨリ又米田ノ館ニ隱居シテ。永正十六己卯六月十六日逝去ナリ。遺骨ハ正法寺ニ納ルナリ。次郎頼義ハ鷲山ニ城ヲ築テ在シ革手へ出仕セラレケリ。

土岐系圖云。政房。美濃守成頼子。美濃守。號承陸寺。法名宗壽。海雲法印。永正十六年六月十六日於米田一死。年五十三。

七月小

八月大

朔日。壬戌。御憑如例。

拾芥記云。公武御憑。御太刀進上如例年。

四日。乙未。依御即位。有下行。

拾芥記云。就御即位儀。各有且下行。大内記叙位就可參陣。五百正配當云々。自廣橋(守光卿)被遣出。付攝津掃部頭(元道)出折帶。付奉行。々々相判之後。又攝津加判形。於玉泉被渡レ之。今日三百正被渡レ之。

廿一日。壬午。依獻馬。給御書於越後國高梨攝津守許。

御内書案載

馬二疋(鶴毛。鹿毛)到來。祝肴候也。

永正十六年八月廿一日

高梨攝津守どのへ

是月。就九州牢人出張。給御書於細川高國。

○於關東。北條長氏入道早雲卒。

御内書案載

就九州諸牢人出張之儀。急度差遣一勢。順光ニ合力候者。可爲神妙一候也。

永正十六年八月

細川右京大夫どのへ

關東管領記云。同十六年八月十五日。豆州蘆山ノ城ニ於テ北條新九郎平長氏入道早雲病死。相州小田原湯本金陽山早雲寺ニ葬リ石碑ヲ立。法名早雲寺天岳宗瑞大禪門ト號ス。是近年豆相ノ二州ヲ領シ。嫡子左京太夫氏綱ニ家督ヲ讓リ。小田原ノ城ニ居セシメ。氏族家臣悉ク繁昌ス。早雲ハ蘆山城ニ隱居シ。今年八十八歳天年ヲ終フ。世以美談トナス者也。北條系圖云。長氏。新三郎行長子。伊勢新九郎。生國勢州。母伊勢備中守貞岡女。初不稱北條氏。擊平豆相之後。稱北條氏。弱年在備中。夢吉備津宮明神賜太刀。翌朝或人持雕毘沙門文字太刀上來。授長氏一曰。他日可受價。約去又不來。以爲累代之重寶。其後歸住伊勢。文明年中。不求而得神符。併太刀而納家。至今相傳在氏宗手。(中略)永正十五年。長氏作文書授氏綱。其詞略曰。自今以後可爲北條家宗領者。此太刀神符。可相傳授護身云々。同十六年八月十五日卒。法名天岳瑞公。號早雲寺。

九月大

朔日。壬辰風雨洪水。

永祿年代記云。八月晦日夜半。九月一日中刻。大風雨。處々大水吹倒。洪水。人死。

廿七日。戊將軍家被補氏長者及兩院別當。

公卿補任云。從二位源義植。征夷大將軍。九月廿七日補源氏長者。淳和并學兩院別當。消息宣下。

十月小

十日。辛未奏聞御即位用脚事於內裡。

二水記云。傳聞。今日從武家以傳奏被申入旨。御即位要脚。相殘到事無了簡。世上又依有雜說。既右京大夫近日可下國云々。然者役所之者雖一人參。可申付之由申入了。仍勞以先可爲御延引之由也者。勅答趣。延引及二度々了。今已廿一日爲近之處。延引不可然歟。雖何様有御申沙汰。可爲御悅喜之由被仰云々。雖然武家御申分同簡云々。仍敬心御不快以外也云々。當時早速可被送其節一事可然歟。世上可物忿之由。雖非實說。多分說已滿耳。尤爲恐怖。勝事之義也。

十二日。甲戌此頃有細川六郎出京風聞。

拾芥記云。可有叙位之處。就右細川六郎(澄元)可出頭之沙汰。被仰出武家御動座之儀。仍勞御延引也。今日御即位日時定云々。

細川兩家記云。永正十六年己卯歲秋の頃より。四國また播磨をもよほして。切上り給ふべき御談合ありけるに。御内に攝州の住人池田前筑後守息三郎五郎申されけるは。今度御上洛候は。攝津國口の先陣は何かし仕り候へしとて申請。攝津有馬郡田中といふ所へ上り。入敷を揃ふる云々。

十四日。乙亥仍吉良珍王丸元服。被下御書及御太刀。

御内書案載。爲三元服之禮。太刀一腰。馬一疋(青毛)給候。喜入候。仍太刀一振進之。狀如件。

十月十四日。三郎殿(吉良殿。珍王殿御事)。

廿二日。癸未河原林正頼以下責攝津田中城一敗走。

細川兩家記云。高國の河原林對馬守正頼。池田民部丞。細川孫太郎相談し。かの田中へ同十月廿二日夜半に夜討する處に。かの田中へかへり忠のものありければ。田中にはし

爲三感悅候。猶花開院可申候也。

十一月三日

赤松兵部少輔との

今度下向尤辛勞候。仍再三如被仰候。一途之儀。儘可申届一奉肝要也。

十一月三日

九日。己巳四國勢着陣尼崎。

二水記云。傳聞。四國衆出頭。已令渡海。着兵庫。安麻賀崎等云々。京中又驚動。右京大夫毎日令談合云々。

十日。庚子細川右馬頭等發向攝州。四國勢責越水城。

拾芥記云。細川右馬頭。長鹽。土田以下四五千人。向攝州云云。阿波細川六郎在三兵庫邊云々。

細川兩家記云。澄元四國淡路播磨を備して。三好筑前守之長御供にて兵庫浦へ着。灘へ上り給ふ。高國方河原林對馬守今

へて待たし。かひければ。寄手案内はしらす。廿日あまりの事なれば。くらまはくらし雨はふる。散々に切あらされて。細川河原林衆身にかはらぬ人あまたうたせ。漸々に引に付け。池田三郎五郎は首三十あまり討取。則阿波國へ注進申されければ。澄元御惑あつて豊島郡一圓に下され。彈正忠になされ申と也。

十一月大

三日。癸巳今川修理大夫献物。給御内書。○又

赤松兵部少輔義村。僧花開院同給御書。御内書案載。

爲三感年之禮。太刀一腰。黄金拾兩到來。悅喜候也。

十一月三日

今川修理大夫との

馬二疋(鹿毛。鹿毛駢)到來。神妙候。殊見事。秘藏候。仍太刀一振守家。道候也。

十一月三日

今川修理大夫との

就澄元出張。不可致向憲之由。差下殿四堂。被仰候處。嚴重之御請到來。尤神妙候。仍細川右京大夫不快。不可然候。聞萬事令和睦。天下靜謐候様致忠節者。可

度は越水の城に播磨。まづ此城を貸して。壹万餘騎にて取
 卷給ふ。澄元は神咒寺の南の嶺の尾といふ山に陣取給ふ。三
 好。海部。久米。川村。香川。安富。廣田。中村。西宮。蓮華。畑。陣
 取。毎日合戦あり。
 興福寺署年代記云。永正十六年己卯從四國二六郎殿御上洛。
 攝州へ細川右京大夫下向。自阿波二御上洛來へ。神咒寺。鷲
 林寺陣取。川原林城者從京方。日々夜々及合戦。下
 云へ下。自他無二勝負。

廿一日。辛。細川高國發途。

二水記云。傳聞。今日右京大夫合出陣云々。今日爲吉日。
 乃先門出云々。宿山崎邊云々。

拾芥記廿三日條云。曉天。細川右京大夫下向攝州。爲二戰治
 云々。

細川兩家記云。高國は丹波山城攝津國相屬させられて。同十
 一月廿一日都を立せ給ひ云々。

廿一日。壬。依。御方達。渡。御細川第。

二水記云。今夜。武家爲二御方達。仍右京大夫歸洛云々。
 廿二日。癸。高國出陣。

二水記云。傳聞。未明右京大夫又出陣云々。及午後。追々合
 出陣云々。都合其勢四五千許云々。於攝津國。近川度々

合戦有之。但勝負兩方無之云々。
 十二月大
 二日。戌。高國着。池田城。

細川兩家記云。高國十二月二日池田城へ着給ふ。越水の城の
 後卷のために。小屋。野間。九十九町。高木。河原林。武庫。寺
 部。水堂。瀧田。大島。新田。武庫川のかた。上から下迄陣を
 入。辰。給。御書於高國。被。尋。軍陣時宜。

御内書案載
 其後者。時宜如何候哉。無二心元二候。早速勝利被。待思食
 候。猶良辰可。申候也。

十二月八日
 細川右京大夫とのへ
 十九日。己。此頃。攝津合戦。

二水記云。傳聞。攝津國合戦事。昨日大貨也。即刻攻。敗四國
 衆。數百人打死。京勢。勝云々。治定。雖。未。決。洛中。風聞。大
 郡同戰也。都鄙大慶。尤此事也。三好父子合。打。死。云々。猶以
 御方本望此事歟。今度洛中恐怖。令。師。安堵之恩也。公私珍
 重珍重。何事如。之乎。

廿八日。戌。給。御内書於佐々木四郎。

御内書案載
 連々不可。存。疎略。之儀。被。聞。召。訖。願。致。三。忠。節。者。可
 爲。神。妙。二。候。也。

十二月廿八日
 佐々木四郎とのへ

後鑑卷之二百八十五

義植將軍後記第十三。起。永正十七年正

永正十七年。辰

正月小

十日。庚。依。御咳氣。無。參賀及御參内。○是日。

攝津國合戦。
 二水記云。武家依。御不例。諸家參賀無之云々。御參内同前。
 ○十一日條云。理乘坊語云。攝津國合戦及三度々。而兩方多勢
 之間。雖。有。死人。數。輩。不。及。三。勝負。一。決。二。云々。

拾芥記云。室町殿御咳氣云々。被。停。止。參賀。無。御參内。
 細川兩家記云。正月十日に高國より諸陣に相觸させられて。

十二日。壬。此夜。下京騷擾。

二水記云。後聞。半夜許。鄉民百人許相引。下京邊所々令。出
 張。之。條。以外物。恐。云々。

十三日。卯。就。澄元出張。給。御書於今川修理大
 夫氏親。

御内書案載
 就。澄元攝州出張之儀。飛脚到來。尤神妙候也。

二萬餘騎にて打出。諸口にて合戦終日に有。高國方丹波の守
 護代内藤備前守火花をうちし合戦させ。切負て二百人許討
 せて引にけり。阿波衆も百人許討死す。双方手負敷しらす。
 又高國方攝津國の住人伊丹兵庫助國扶は中村口へ取懸。木
 戸逆茂木を切落し内へこみ入。申の時より西の終りまで合
 戦し。伊丹衆討勝て。河波衆の首五十餘り討取。勝時つくり
 取入たり。又同日に城のうちより追手の木戸をひらき。我等
 當國大島住人雲部興一。同弟次郎太郎と名乗。高國のため
 又は家のため命おしからず。敵方唯も寄合給へとはば
 りければ。澄元方田井藏人と名乗。合せ切あふたり。雲部切
 勝て藏人が首討取。雲部兄弟も痛手負城の中へ入り。四五
 日して死したり。對馬守初て上下共におしまぬ人はなかり
 けり。

正月十三日。今川修理大夫との。

廿二日。壬子劫盜公行。

元長記云。今夜土一揆蜂起。燒山寺。

仁和寺記云。世上依念劇。近郷所々。飲惡冤等號。德政。或道

廿三日。丑土賊蜂起。

仁和寺記云。去夜。近所土一揆蜂起。以外也。廿五日又一揆少

廿八日。戊御所木藏炎上。

永正十七年記云。公方御擲物。北斗供御卷敷。傳奏波道之。

使小三郎。禁裡へ御栗一折進上。同公方。同島山式部少輔。同

相國寺養源軒被道之了。今夜。公方御木屋火付。雖然被二打

消云々。今夜。洛中上下七ヶ所付火云々。

二水記云。今夜。武家御所木屋焼上。其外下京所々付火。是等

一揆之所爲也歟。各隨參殿中。物念騒動。雖可令參候申

二月小。酉夜中騒擾。

二水記云。戊刻許。武家夜射押入之由風聞。仍又騒動。公私万

三日。壬戌攝州越水落城。

元長記四日條云。及晚間。攝州小清水城没落云々。都鄙之安

危在此事。

永正十七年記云。今日。攝州越水城自燒落云々。官語道斷也。

細川兩家記云。城の中日月を送る程に退風して。同二月三日

夜半に。對馬守安部の藏人と談合して城を明けられければ。

若槻伊豆守は老林にて候へば。いづく迄と思ひきり。腹十文

字に切死たり。去間後卷勢衆池田。伊丹。久々知。長洲。尼崎

へ引籠たり。然に澄元方三好統前守之長雄波へ陣取給ふ也。

足利季世記云。然レドモ城中ニ兵糧盡勢モ盡ケレバ。同二月

三日對馬ト阿部藏人相談シ城ヲ明テ退ケレバ。若槻伊豆守

申シケルハ。我身老林也。命幾バクナラン。此城ヲバ除ケマ

シトテ自害シケルガ。源三位頼政ノ老後ノ自害ヲ思出シ。扇

ヲ打敷テ。

花サガズ今ノ裸身モ古ヘモ身ノ成果ハカハラザリ鬼

トヨミテ腹十文字ニ切テ死ニケリ。感セヌ人ハナカケリ。

二水記五日條云。於四足御門。欲令打擲浪人ノ之處。却

刻許御退出也。就世上物念。早速還御云々。

十七日。丙昨夜。攝州合戰。細川高國敗走。

二水記云。攝州右京大夫没落之由有雜説。又世上騒動仰天

無是非。仍先御樂延引畢。遠近臣共隨參禁中。但實否未定

之處。落人數多道上面必定也。自他廢亡不可説也。申刻許。右

京大夫已令上洛。於路次。數十人爲郷人民被殺害云

云。於攝州者無指合戰歟。官語同斷之次第也。

元長記十六日條云。今日。攝州合戰敗北。右京大夫没落云々。

○十七日條云。右京大夫上洛。一宿可落行江州云々。今日

若坂本一由風聞。室町殿可御供申由申入之。無御承引云

云。於四國一爲三揆數輩。蒙留命云々。

拾芥記云。細川右京大夫(高國)。自舊冬二下向攝州。與澄

元對陣之處。今日池田城并伊丹城不レ及敵攻一落云々。其故

者昨日於三尼崎一有合戰之處。長藤衆并和泉守護柳木衆被

攻崩云々。去間兩城落。兩京兆以下上京。暫在六角堂。誘

引申室町殿可落行云々。雖然室町殿無御招引。依京兆

被歸我屋形。

永正十七年記十六日條云。今夜。攝州陣破。○十七日條云。右

京大夫高國。其外丹波津國陪侍。八千計ニテ京ヘニケ上ル云

云。馳走以外也。

祐維記云。十六日酉刻。津國細川方陣破了。細川方勢散々打

而役所者被刃傷。二三ヶ所蒙疵。不可説次第也。今度勢州

始勤御門役。其徒黨隨參物念畢。傳聞。攝津河原林之城令

没落云々。仍京中聊又令物念。諸道具等上下持運云々。

六日。乙給御内書。令催佐々木中務少輔參洛。

御内書案載

京都怨劇之餘。不レ移時日。令參洛。抽忠節者可レ爲神

妙一候也。

二月六日。佐々木中務少輔入道との。

八日。丁卯被令軍機事於細川高國。

御内書案載

越水城不慮之儀。無二心元一候。雖然諸陣堅固之由。可レ然

候。勝利被待思食一候。猶與運可レ申候也。

二月八日。細川右京大夫との。

十一日。辛未御參内。

元長記云。室町殿御參内。召連左大辨。

二水記云。今日御參内也。午時爲二見物。近邊衆兩三輩令二誘

引畢。午終刻令參給。其儀如例。參會衆依二程遠二不見。傳

聞。於三常御所。三獻如例。於三御直座。又孟酌如常云々。申

死了。則細川右京大夫高國近江へ落行給云々。公方様へ無殊儀二京都へ御座也。六郎殿。同三好ハ未津國在之。大河内尾張殿御曹司井遊佐。タカヤノ城ヲ未遊之者也。越州并越智大和衆悉以タカヤノ城へ打寄了。雖ニ然尾州無ニ合力ニ云云。又筒井順興ハ陣立無之。赤澤新兵衛ハ西國ニ在之。一圓ニ三好ニ令屬。万軍令ニ成敗之由其間在之。

十八日。高國敗走近江。二水記云。早朝右京大夫令没落。可赴近江國心也云々。武家之義如何之由有説々。晚頭陰。不可有御難殿之由治定畢。各安堵。珍重也。

拾芥記云。高國十八日曉天落。行近江國云々。柳本父子於二兩國邊。逢二突一打死云々。

殿助往年記云。十八日。高國其外諸將。江州没落云々。永正十七年記云。高國八千計ニテ江州へ没落云々。

興福寺略年代記云。二月十七日。於三攝州。有合戰。細川殿没落。六郎殿。於三攝州。御遊例ニテ他界。三好一人令三在京。細川兩家記云。澄元方は三好筑前守之長難波へ陣取給ふ也。此外小屋。宮松。生島。七松。濱田。新田へ陣取。同十六日に二万七千餘騎にて。尼崎。長洲へ取懸合戦あり。大物北の横堤には高國方香西與四郎打出。三好孫三郎と渡合。太刀打して双方名を上られたり。その日は暮雨もふりければ。兩方互に

引たり。然る間高國叶はじと思召城々へ仰合られ。其夜中に一同に京へ上給ふ。かやうに成行事は。正月十日は四宮の神事御かりなり。居籠とて人音をもせざる日。取かけ給ひし御爵と人々申也。然ば落武者のかなしきは。京にもいらせ給はずして近江國へ落行給ふ。今度公方様。澄元一味にて京に御座候なり。然るに伊丹城の中に。同名但馬守。野間豐前守二人申けるは。當城此數十年の間。陪侍士民以下煩として。こしらへたるそのしるしなく。のがれける事口おしさま。我等二人は此城の中にて腹きらんと。四方の城月をさし家々へ火をかけ。天守にて腹切ぬ。是又剛なる人説とかんせぬ人こそなかりけれ。

元長記十九日條云。從澄元方打宿札云々。○廿日條云。世上物慾猶未休。

廿四日。命奉行人。令揭德政札。二水記云。傳聞。今日御德政之札被レ打之云々。此事郷民等去年度々及二所訟一畢。雖ニ然不及二御沙汰一之處。今度物慾之砌。郷民出張不可然之間。如此云々。札寫留之。

拾芥記云。被レ打德政之札。日次者十二日分也。丹波守平朝臣。松田。上野介藤原朝臣。齋藤。在列。貨物等。置月之外。可レ爲三十二ヶ月云々。悉皆勸三十三月之分。可レ取三貨物云云。

制札書様

定 德政事

一 けんぶのるい。まさんの物。しよじやくのたぐひ。かつぎの具足。かぐ。さうぐ等。おき月のほか十二月たるべき事。
一 ぼん。かうば。茶わん。花びん。かうろ。金物以下。廿月たるべき事。
一 付ぶぐのたぐひ。廿四ヶ月事。
一 米こく井さこく等。七ヶ月たるべき事。
右條々。せんれいにまかせて。まためおかる所也。しよせん十分一をきたし。おんびんに女をもつてはくちうにとるべし。若このやく月をばせすきは。ながれしちたるべきうへは。德政のきたにおよぶべからず。万一事をさうにふせ。がうぐのぎにをよば。おきてといひ。取てといひ。ともにもつてさいくわにしよせらるべし。このほかの借銀以下事。相たがいちうしんせしめ。御下知をもつて其沙汰あるべきの由。所被レ仰下也。仍下知如件。
永正十七年二月十二日
丹波守平朝臣列
上野介藤原朝臣列
右札二枚。上下京ニ打之。(爲三人旨。雜色兩人打之。立賣辻二一枚。四條町辻一枚。)

細川家蔵文書様

德政法條々。(永正十七。)

一 貨物札なしの事。
札ありに同前。但有二相論之儀一者不可被レ打置之。又者於二相論一者。被レ召出土倉帳。可有二糾決一之。
一 賣懸買かけの事。
先規無三其沙汰一之條。不及二德政之沙汰一。
一 替用脚事。
同前。(但官利平沙汰者。可レ德政行。)
一 日鏡事。
於三百文以上者。廿四ヶ月物者廿ヶ月。廿ヶ月物者廿ヶ月。十二ヶ月物は十二ヶ月。七ヶ月物者七ヶ月。但至三百文以下者。任二一倍約月之旨。不及二被二執上二之。
一 貨物取手。或在國或留之事。(但非三土倉私貨。)
一 失貨事。
於レ無證據者。可レ爲三盜人之咎。有二亂明。於レ有證據者。以三資本錢一倍。可レ致三其弁。)
一 去年正月廿七日貨物札事。
爲三小月二之間。不可レ流。爲三六月一者。可レ爲三流貨一。一鞍。あぶみ。くつわ。力革。切付。鞍轡以下皆具事。可レ爲

一 月たての事。材木。
 無三先縦二之間。可レ爲三雜具。
 一 唐汁。はいほの事。
 一 漆事。
 一 毛氈事。付種。
 一 敷革事。
 同前。
 一 牛同車事。
 車は可レ爲三雜具。牛は可レ爲三本物。返々准據之間。可レ依三主之獨月。
 一 やげん事。
 可レ爲三雜具。
 一 佛具花さし等事。
 一 大とのへばたの事。
 一 硯。文臺等事。
 同前。
 一 鈴物ひやし物等事。
 可レ爲三花瓶之類。
 一 食物精進魚類等事。
 可レ爲三米穀類。

一 假銅事。
 可レ爲三花瓶香爐類。
 一 きんらん。とんす。からせり物等事。
 可レ爲三絹布類。
 一 猿樂のおもての事。
 可レ爲三樂器類。
 一 はた。けまん。まんまく。うち敷。水引等事。
 同前。
 一 太刀。刀。鑓。長刀。脇さし以下事。
 可レ爲三武具。
 一 目貫。かうがい。下緒。うてりき等事。
 一 まくの事。
 同前。
 一 茶わんのほち。同さち以下事。
 可レ爲三茶碗の物之類。
 一 つり鐘。同ちやうちんの事。
 可レ爲三金物類。
 一 藥種事。
 一 鏡。爪刀事。
 可レ爲三雜具。
 一 とりかへ買の事。

雖レ爲三細布。雖レ爲三武具。後のなもちひらるべし。但於レ不レ上三利平二者。可レ爲三前々買物。
 一 革類事。
 革。袖ほそ。同はかま。足袋。前かけ。ゆがけ。きやはん。たちつけ。此外は可レ爲三武具。
 一 とくりの事。
 可レ爲三家具。
 一 すき。くわの事。
 可レ爲三雜具。
 一 銚子。ひさげ。なべ。かなわ。包丁。菜刀等事。
 可レ爲三家具。
 一 年ごらの事。
 有三本法二之條。不レ及三徳政沙汰。
 一 預狀事。(可レ依三文章。)
 一 上鏡事。
 一 小袖已下に金物器そふる事。
 こそては小袖。金物はかな物の類たるべし。
 廿八日。丁奉行入建三制札於轉法輪寺。
 制札書榜載
 禁制 轉法輪寺。號三粉河寺。
 右軍勢甲乙人等亂人限藉事。被三停止三畢。若有三違犯之輩。

者。可レ被レ處三罪科二之由。所被三仰下二也。仍下知如レ件。
 永正十七年二月廿八日 丹後守平朝臣列 散位 神宿願列
 廿九日。戊給三御書於畠山次郎。被レ賞三高屋城守事。
 御内書案載
 高屋城事。于レ今堅固之由。尤神妙候。彌被官人等勳三戰功二之條。可レ被レ加三恩詞二候也。
 永正十七年二月廿九日 畠山次郎とのへ
 三月大
 三日。卯依三赤松義村献物二下三給御書。
 御内書案載
 就三今度京都無事之儀。太刀一腰。國長。馬一疋。鹿毛。到來。喜悅也。
 永正十七年三月三日 赤松兵部少輔とのへ
 九日。丁依三城州西京雀森質券地事。奉行入傳三書於三條家雜掌。
 諸家文書案載

對松平泉守質券地城州四京雀森四町事。任今度德政法。進納拾分一之上者。於彼借借者。被弄破訖。可被存知之由。所被仰下也。仍執達如件。

永正十七年三月九日

丹後守 伊勢守

三條宰相中將維繁

十五日。卯三好之長上洛。

二水記云。傳聞。今日三好筑前守以三十德之體。密に令上洛。處々令懸懸云々。都中一變以後雖及數日。澄元不及上洛。子細何事哉。尤不審也。

十六日。甲辰細川澄元入伊丹城。河内國高屋落城。

細川兩家記云。同三月十六日神鬼寺より。澄元は伊丹城へ御入りあり。

祐維記云。三月十六日河内高屋城落了。御曹司。同遊佐。越智請取落シ被申訖。當國一圓ニ越智進止ナリ。武家一向ニ不レ及入部ニ者也。六郎殿ハ去月十六日於ニ尼崎。舟沈テ御他界云々。未踏人六郎殿ヲ見ル者一人モ無レ之云々。又三月十六日河内高屋城以ニ慶之儀ハツシ畢。尾州御曹司。同遊佐。越智令同道ノガレ了。但時刻相違シテ。御曹司并遊佐手負

ル、ト云々。同御馬廻衆。究竟ノ衆共八十人餘打死了。(津國陣。去月十六日被之後三々日之間。彼城タマリ了。)○十七日條云。大和衆自河内ニ悉以歸陣也。赤澤大和ハ亂入之事。自細川六郎殿上總殿へ以三好。大和神國之儀有ニ其恐之間。赤澤亂入不可叶之旨。申付候間。於其方ニ可被感ニ其心得。案内有之。此旨古市播州公胤方へ。上總殿ヨリ又被申送云々。當國ハ武家不入之儀。珍重云々。別本和漢合運云。十七年三月十六日。高屋城没落。

廿七日。卯三好之長入洛。

二水記云。午刻。近邊衆令同道。三好上洛令見物。(小路室町。馬上百餘騎。各着甲冑也。美麗驚目畢。都合二万余人云々。此内過半者京衆邊土衆等也。

拾芥記云。三好筑前守。海部。篠原以下上洛。各具足跡也。

細川兩家記云。三月廿七日に。難波より三好筑前守之長京へ上り賜ひ。都にて威勢中計なし。

四月小

十四日。壬申渡御相國寺。

二水記云。室町殿渡御相國寺。令見物了。

十六日。甲辰細川高國出張江州守山。

二水記云。今日。高國又可出張之由。兼有沙汰。聊又世上

令物恐。都中尊卑。何日住安堵之思。兩家取合。併一天之亂逆也。可レ歎可レ歎。但今日先延引云々。

祐維記五月朔日條云。去十六日。細川高國江州守山ノ八日市迄出頭了。今日少々高國勢於洛中合戦有之由有ニ其聞。三好ハ細川高國ノ屋形ニ在レ之云々。爰六郎殿ハ未上洛無レ之。去二月十六日尼崎合戦之時。海へ被沈歟云々。

廿五日。癸未洛中騷擾。

二水記云。高國明日出張可有之由風聞。仍諸道具又持運。物恐無與也。

廿八日。丙戌細川高國着於坂本。

十七年記云。右京兆坂本着陣云々。

五月小

朔日。戊子三好筑前守謝細川澄元家督一奉レ謁。

拾芥記云。三好筑前守爲三六郎澄元家督御禮。參室町殿。進上御馬。太刀。御禮物二百貫云々。

二水記云。巳刻。三好筑前守爲右京大夫(澄元)御禮之使。參室町殿。令見物了。走來以下人數數多也。衣裳等美麗。目了。傳聞。御禮進物。御馬。御太刀。腰御物。御具足。鶴眼。万疋云々。代替之御禮番例如此云々。高國出張物恐中如此。進上奇特之由。上下令褒獎云々。

三日。庚辰細川高國率大兵。出張東山如意嶽。

元長記二日條云。右京大夫出張沙汰清。山々燒。二水記二日條云。高國出張明日治定由風聞。洛中洛外之物恐云々。入夜東山如意嶽燒。其後所々又燒了。○三日條云。早朝既出張也。披霧見訖。如意嶽其外一乘寺上山等。東山南。東北方從。其勢令三起。洛中安否恐怖此事也。三好筑前守集勢。三條御所。等持寺等四方取陣。上意之趣。與三好無二之御同心也云々。公家直近之衆悉馳去云々。東山衆終日不下。入夜燒。如晴天之星。京衆聊消肝云云。

拾芥記云。細川右京大夫(高國)自近江國出張。東山方々陣取之。六角四郎爲合力。舍弟小原並阿波治部。及三万人出頭云々。三好衆三條等持院並音樂道場陣取之。奉頼三條之御所。

永正十七年記云。高國入洛。兩佐々木合力。數万軍勢自諸口一付入。自丹波内藤出張。人衆八千計。自長坂口村。出舟岡山。於三七社邊居陣云々。高國白川取陣。自江州大將佐佐木小原近江守舍弟云々。公方諸奉公衆二千餘。勢州以下祇候殿中云々。三好。海賊篠原。久米。公方北等持寺邊居陣。今日者先無三條事。不能合戦云々。

畧年代記云。五月三日自江州高國入洛。五日三好衆陣破

了。ウツガヘリ衆六七人アリト云々。公方様ハ三好ト御同心ニテ御ノキナシ。カウセウ院殿ヘニケ入カケレ居ヲ召トリ。三好親子三人。ナイ以下生害了。

仁和寺記云。高國率三猛勢。東山如意嶽粟田口出張。佐々木家ヨリ悉皆高國合力也。筑前守其外海部等三千餘人。武家御近所取陣。澄元攝州伊丹城備候。澄元未三京上二也。

足利季世記云。公方ト高國ハ近江國ヘ落下リ。佐々木六角定頼ヲ頼ミ玉フ程ニ。兩佐々木衆。又朽木民部少輔。蒲生兵衛大夫。多賀豐後守。三上。永原。朝倉彈正左衛門ノ人衆。美濃土岐衆。丸毛。齋藤法印ノ勢馳付ケル程ニ。定頼ヲ先手ノ大將トシテ三万餘人。同年五月三日京東山ノ白川表江攻上リ給フ。三好元長四國勢五千餘騎。二條。三條。四條。高倉ヘ馳向テ實戰云々。

四日。辛。高國兵移陣。久米。河村等來降。二水記云。今日。東山衆悉陣吉田山白川等。於三川原。足輕衆一兩度令二箭合ニ云々。不レ及指合戰。彈幕相互引退了。内藤衆丹波國勢。各從レ四出張云々。

元長記云。如意嶽已下。淨土寺。吉田河原等軍勢滿。拾芥記云。久米。河村等降參高國云々。

五日。辰。兩陣合戰。此夜三好之長遁走。

拾芥記云。高國來自山上二攻下。隔二白河一有野伏。今日内藤自丹波一出頭。與三好海部等二合戰。高國諸勢及四万人云云。三好衆纔二千人計也。入レ夜落行。海部者無爲落行云々。

三好筑前守。同子兩人孫四郎。芥河。三好越後子新五郎。以上四人。奉レ頼ミ壘花院殿ニ被レ隱匿ニ云々。

元長記云。諸勢自早朝一如昨詰寄。筑前守衆。室町殿北築垣邊井東面祇候云々。所々有野伏ニ云々。及レ晚。諸勢引返木陣。戌下刻。三好没落云々。先レ是酉刻許。久米。河村。東條已下九頭降參云々。

仁和寺記云。合戰少々在レ之。去夜。筑前守同心之内。久米。川村。其外數輩。高國降參云々。

二水記云。早旦。河原衆又取三寄陣。已刻許。悉越三東川。即入二上京。小林一兩間燒立。少時已禁中東南取陣。其勢四五万人許歟。時聲及二度々。各消肝。應仁以來如レ此事無レ之云々。今日向候禁中。内々衆少々參候。於三紫宸殿見レ之。若輩之衆猶爲二近見。上三南築地垣之屋見レ之。衣冠跡不レ似合進退也。不可說之。及二午刻。兩三度及二合戰ニ云々。戰場等持寺之東南也。三好勢僅四五千云々。雖レ然合戰却而得レ理云々。武勇之至。見物上下令二褒美ニ云々。今日高國陣所河崎天神社也。雖レ及落日之時。合戰不レ及二數度。依二大將之下知一也云云。聊於二上意之儀ニ細有レ之云々。禁中四足御門役武衛衛助

落失。言語道斷式也。

拾芥記云。辰刻傳訊云。昨日(五日)戌刻ニ。三好陣公方様御近所ニ野陣張有レ之處。無レ戰破レ之。山階寺ヘ落行云々。細川高國七方餘騎有レ之云々。吉田ニ高國ハ被レ取陣。諸勢ハ京中ヘ入了。爰三好ガシワト界數ハ打死云々。其外高國ハ裏歸面々十人餘有レ之云々。次六郎殿ハ未レ被レ見ニ。去二月十六日ニ海沈給事一定云々。

七日。甲。細川澄元遁走播州。

二水記云。三好筑前守前留守壘花院殿之由有雜說。依レ之武士共可レ探寺中ニ之由申入云々。以外物念云々。於二伏見殿又有雜說。是亦落人被二隱匿ニ之由。有其沙汰ニ云云。公私恐怖此事也。洛中處々爲三落人一及二強儀。物念無レ是非一者也。傳聞。賀茂競馬式日。依二世上亂道ニ延引。今日遂二其節ニ云云。

拾芥記云。傳訊云。總州河内入尾ヘ被レ座之處。六日没落云云。片岡向ニ被レ出云々。

細川兩家記云。澄元は攝州伊丹城に御歡樂にて御座。京の合戰の事聞召。取あへず同七日早朝より生瀬口へ落行給ひけるな。河原林對馬守境津にありしが。はや船をこしらへ渡海し。御跡をしたひをつかけ。雜兵以下首二百ばかり討取。然

レ之。以レ次云レ禮了。戌刻許。西國衆大略令二没落一之由有風聞。實否未決也。

永正十七年記云。今日。諸陣取寄大合戰云々。三好方衆久米。香川。安富以下七頭。高國降參云々。其外諸勢過半落散云々。細川兩家記云。高國近江國に佐々木殿を御頼有。同五月三日に京東山白川表ヘ上リ給ふ。此由三好筑前守之長聞給ひ。二條。三條。四條。高倉表ヘ陣取。こころはたけく笑喧のいさみをなされけれども。敵は猛勢三万余騎。味方は五千に過へからず。殊に頼ミ香川。安富。久米。川村は高國ヘ降參申されたれば。三好之長叶はじとて。五月五日賀茂の祭を見すてつ方々ヘ落行ける。然に三好之長父子三人は。壘華院殿ヘ忍び申さるゝなり。

六日。癸。召捕敵方落人。

二水記云。傳聞。在二攝津國ニ之衆始レ澄元。悉令二没落一必定云云。高國今度乍レ催レ諸國之群勢。不レ決二勝負。可レ謂二無念事一歟。落人之在所尋出。雜兵等剪頭云々。一天之變化。併同ニ夢中。何人思二榮耀一哉。

元長記云。落人隱居從ニ在々所々ニ尋出。令二生涯一由。時々有ニ其聞。三好籠居壘花院殿。由風聞。以三軍勢二晝夜相圍。無レ之由被レ陳云々。問答不レ休。

仁和寺記云。去夜。筑前守父子三人。其外皆落散云々。

共澄元は異儀なく播磨へ御のき有ける。河原林方より首共京へ上ければ。高國御惑有る。

九日。丙。三好之長匿。曇花院。諸勢搜之。

二水記云。三好隆盛曇花院之由事治定云々。仍以諸勢二圓御寺。早可被出之由頼申入云々。雖然方丈無御許容。雖及御自害。不可被出之云々。落居如何。勝事之儀也。祐維記云。細川高國モトノ屋形へ歸着之。次公方様。并式部少輔無殊儀者也。勢州ヨリ公方様へ。不可有御仰天旨被申云々。津國ニ六郎殿方ニ勢一人モ無之。悉以退散之間。高國方者共還住之間。寺社。本所所領等。不可有相違旨。有其聞。珍重。

十日。丁。三好父子出降。

二水記云。三好男兄弟芥川二郎。孫四郎。今日爲降人。及出頭云々。先計降歟。不審此事也。元長記云。筑前守之子孫四郎。弟者他名號。芥河次郎云々。爲降參之分。軍勢召具兩人。遣右京大夫許了。拾芥記云。高國諸勢打曇花院殿。可被出三好之由申之。子兩人事。細川可扶置之由依申之。被渡細川。畢。仁和寺記云。以三行縁。高國入洛珍重之由。申道卷數了。畏入候由申之。

永正十七年記云。三好筑前守子息兄弟自曇花院殿召出。降參云々。

細川兩家記云。三好之長父子三人運のつくる事やらん。その上のうちにいつ方へも落行給はて。曇花院殿に忍ばれし事かくれなく。此寺を同九日に二重三重に取巻ければ。之長父子三人腹切らんとし給ひしが。今一度命のへばやとおもはれ。高國へ御詫言申さる。誠にはかなき事ながら降參にまいられる。子息芥川次郎。同弟の孫四郎。寺を出て。同十日に高國へ御對面也。上京安達の宿所へ入給ふ。

十一日。戊。三好筑前守之長父子於百万遍自殺。

拾芥記云。三好筑前守。同新五郎於曇花院殿落髮。敵方降參。被取籠諸勢。於百万遍切腹云々。元長記云。筑前守又爲降人分。如昨日相伴諸勢。入上京。於百万反切腹。同名新介子同切腹云々。每事如夢。孫四郎。芥川二郎死生今日無其聞。二水記云。三好筑前守揚旗上京云々。爲見物。兩三聲令同道。於本誓寺見之。諸勢中只一人歩行之跡不便之次第歟。年來爲數千人之大將。今士卒無一人。見物之貴賤不堪歎息者也。可憐云々。爲降人。令落髮了。免許鐵界也。則直行百万遍。百万遍之寺號。智恩寺云々。於此所切腹

云々。赦免治定之由存之處。臨其期。令覺悟云々。運命極者也。彼往年令滅却堂塔。其惡逆之報難逃之謂歟。生者必滅之境界爲三眼前。何人不思議此理乎。

細川兩家記云。同十一日に之長同名新四郎も御免として此寺を出給ふ。然所に淡路彦四郎殿けんさいおやのかたきとて申請させたまひ。上京百万遍にて腹切給ふ。同名新四郎介錯し。我も則腹切ぬ。淡路守殿むかへり月にかやうに有ければ。只人間の因果はめぐるにはやきもの哉と。人々申也。

祐維記十二日條云。實說曰。三好曇花院殿ニ去五日ヨリ忍テ有之處。細川殿トリマハサレ。可被出之旨嚴重被申之間。無レ力被出之處。三好。子兄弟兩人。并チイ。以上四人出レ之。兩人子チ三好申云。高國ニ被召置。未代御被官ニ被成候テ可被下由。傍事申之間。先以ハカマ着ニテ細川殿へ參ニ。三好ハ小川百万遍ノ講堂ニテ可被生進旨一詰之間。彼チイト兩人同道。三好ハ令出家。道ブクテ着テ彼講堂へ出。既及其時刻之處。三好チクレテ有之チ。チイカイシヤクニ寄テ頼チ打法テ。其後彼チイタチナガラ高聲ニ。我コソ三好ガ内者ヨ。自害ニレミヨトテ。立ナガラ腹チ切ルト云々。大強ノ者ナリト云々。昨十一日午刻事也云々。三好頼ハ同キ未刻ニ細川殿へ參ト云々。次六郎殿ハ去二月十六日海へ沈給。主従共以終焉。サンシウハアハノカミ殿へ。高國ヨリマイセラ

ヲ了。次三好跡ヲバ今度ウラガヘリノ面々ニ被下云々。仁和寺記云。傳聞。筑前守父子三人京洛隱居處。高國引出。共自終云々。

十二日。己。細川高國奉謁。此日。三好孫四郎等於芥河一切腹。

永正十七年記云。今日。高國參武家。申御禮云々。二水記云。右京大夫。今日武家有對面云々。(中略)傳聞。二耶。孫四郎等今日切腹云々。各壯年者也。不便々々。拾芥記云。三好孫四郎。同芥河切腹云々。元長記云。兩人死生未風聞。及レ晚。件兩人切腹云々。不便也。細川兩家記云。同子息次郎。孫四郎事も。彦四郎殿より高國へ色々申されける。降參人いかいと思召けれども。さあらは生害させられよと御返事ありければ。彦四郎殿の御内衆かの兄弟の宿所へ。同十二日におしよせ申けるは。御親父之長は昨日百万遍にて腹切給ぬ。かたがたも只今腹切給へと申ければ。兄弟は親の事を聞て涙を流し。同は一所にて死せんずるものなとて歎き。や、有て申されけるは。人々暫く御待候へ。國へふみを下へしとて現をこひ。二人思ひくにかきとめ。ある人の方へ渡されける有様は。古のさうりそくり兄弟がかいかん波瀾にありつるも。かくやと思ひ出されて。

一しは哀まさりける。去間先孫四郎腹切給ひければ。次郎方介錯あり。そのうち我も腹きり。侍は相互たれにても介錯して給候へと申されければ。しばしあり鎗長刀にて首をとる。見し人皆々涙ながしける。事かりそめながら。人死する事はまて七千あまりにしろされたり。

十五日。壬寅。此日。三好父子以下葬禮。

二水記云。傳聞。今日三好父子兄弟悉葬于本云々。百萬遍僧衆歴々云々。

拾芥記云。三好父子。同新五郎頭。於千木葬禮云々。

六月大

四日。庚申。仍畠山次郎入國。下給御書。

御内書案載

今度早速入國目出候。仍爲禮太刀一腰。馬一疋到來。神妙候也。

六月四日

畠山次郎どのへ

七日。癸亥。此頃。依八幡田中兄清家督事。有御下知。

宜胤記抄云。勤黄門狀來云々。田中兄清家督事相論候。武家

御下知如此候。給旨事申入尹也。可被出之由被御下候云々。

十日。丙寅。細川澄元於阿波國卒。

足利季世記云。細川右京大夫澄元上方ノ軍ニ打負。播州ヨリ四國ニ渡リ。故義澄ノ御所ノ御子阿波御所ヲモリ立。今一度京へ實上リ高國ヲ亡シ。三好之長カ恨ミヲ酬トアリシニ。浮世ハ無常ノ習ニテ。同夏ノ比ヨリ風ノ心地ナリケルチ。イロ

イロ養生アリケレ。定業ノカナシサハ終ニ平愈ナクシテ。同六月十日阿州ニテ終ニ空シク成給フ。號「眞乘院」。行年廿五才ト聞ヘシ。三好ウタレ澄元サヘカク成玉ヘバ。高國一統

シテ威勢万人ノ上ニイキホ。門葉肩ヲ双ル人モナシ。細川系圖云。澄元。實嚴岐守義春之子。爲三政元繼嗣。六郎。右京大夫。永正十七年六月十日卒。三十二歳。法名宗泰。號「安

英眞乘院」。別本細川兩家記云。永正十七年六月十日右京大夫三十二。眞乘院宗泰安英と號す。

十九日。乙亥。於大和國。越智筒井講和。

祐維記云。越智與筒井和睦之事。尾州御曹司。河内二郎殿。井細川殿被仰レ之。遊佐使者ニ。雪松井御曹司一家之俗同道ノ入御云々。筒井返事ニ。一切和與ノ儀不可叶之旨。被申

民窮困先年ト同前也。

七月大

八月大

四日。己丑。表聞御即位延引事於内裡。

二水記云。或人語云。御即位又可レ有延引之儀。其謂者。武家御裝束。又分ハ御新調不事行。又三十万疋之費用途猶以闕如也。又近日右京大夫可レ遣勢於播磨國云々。然者又不可レ有御誓固之儀。旁先可レ有御延引之由。以二伯三位。今日從三室町殿。被申入云々。勅答之趣。延引及二度々。外聞實儀餘以不可レ然。就二是非。可有申沙汰之旨及二御問答云云。有無未定也。度々延引。誠以勝事也。但武家更無御踐辱事也。

五日。庚寅。御書寫觀音經竣功。

永正十七年記云。自武家門跡。觀音經外題金泥ニテ被申云々。此御經事。御影寺觀音。一字三禮ニ。大樹被染御經一經也。

廿二日。丁未。申樂興行。

二水記云。今日。武家有二猿樂。(觀世)右京大夫上洛以後。始而申沙汰云々。

閏六月小

是月。亂後百姓困苦。

祐維記云。閏六月之事。去明應十(辛酉)年ニ在レ之。其時ヨリ外ノ亂也。万人窮困無二其限。當年閏六月有二之天下ニ亂。万

後鑑卷二百八十五 義植將軍後記十三 永正十七年五月一八月 六百六十九

故云々。(廿二日條云。越智與筒井和睦之儀。遊佐強テ腰之間。大略兩方承贈歟云々。則兩方之軍勢打々降陣。

廿六日。壬午。島津修理大夫勝久献物。依之被成。下御内書。

御内書案載

太刀一腰。(盛重)万疋。唐櫃一荷。(沈)棒(蘇芳)銚子。

(沈)提。(沈)同櫓一。(盆)一枚。堆朱。到來。神妙候。仍太刀一振(久國)刀一腰(安則)遣候也。

六月廿六日

島津修理大夫どのへ

廿八日。甲下。給御書於細川淡路守。

御内書案載

京都堪忍迷惑之段。被聞召之。連々時宜相調。奉公可爲三神妙二候也。

六月廿八日

細川淡路守どのへ

閏六月小

是月。亂後百姓困苦。

祐維記云。閏六月之事。去明應十(辛酉)年ニ在レ之。其時ヨリ外ノ亂也。万人窮困無二其限。當年閏六月有二之天下ニ亂。万

廿四日。己酉。荷十合進。獻內裡。

二水記廿五日條云。午前參內。有御法樂連歌。外樣衆上冷泉入道。中御門大納言。中山中納言等也。御會采燭果了。此後又有二盞。各沈醉了。昨日。從武家二十荷十合被進。今此一盞其謂也。

晦日。卯。仍大內義興獻物。下給御書及御太刀。御內書案載。

爲當年之祝儀。太刀一腰。國吉。鷹眼二千疋到來。悅喜候。仍太刀一振遣候也。永正十七年八月卅日

大內左京大夫とのへ

九月大

十四日。己巳。伊勢守貞陸於御所。沙汰風流。

二水記云。傳聞。今日於武家。有風流。是奉公衆益拍物返報。今日伊勢守沙汰也。奔走大儀云々。又見物衆上門屋上。間。屋落。人多破身。剩有死人云々。

十五日。庚午。伊勢守享拍物興行。

二水記云。今日。於伊勢守所有拍物云々。

廿五日。辰。奉行人傳。仰於大傳法院行人。

伊勢家書載

尾州事。殺落。沒江州廣庄。令居住之由。所被仰下也。仍執達如件

永正十七年九月廿五日

前近江守 上野介

大傳法院行人衆中

十月小

十四日。己亥。河原林某切腹。

二水記云。河原林於上京切腹云々。敵通達之儀。依露顯也。

廿一日。丙午。此日。於近江國。佐々木大膳大夫高賴卒。

東寺過去帳云。佐々木大膳大夫。永正十七年十月。

宗椿。永正十七年八月二十一日卒。號龍光院。

足利季世記云。同五月九日。公方義植公近江國觀音寺ノ城ヨリ御入洛アリ。佐々木六角大膳大夫高賴ハ隱居シテオハシケルガ。如何思ヒケン今度ハ御供申スベキ由申シテ上洛アル。去ル永正十五年七月九日子息氏綱早世アリシヨリ。深

クナグキ給ヒケルニ。氏綱ニ家督相繼ノ男子ナクシテ。高賴ノ二男霜野度々忠功ニヨリ。公方管領近年近江へ落來。カノ威勢ヲ頼ミ給フ。誠ニ時ノ面目。當家再興ノ運開ケタリト悦ビ玉ヒケル間。カノ愁ヒヲモ忘レ。トヤカクト馳走アリ。今度ハ老後ノ上洛也ト。公方へ最後ノ御暇被レ申テ。歸國ノ後ニ一病ナクテ終リ玉フ。目出度次第ナリ。法名龍光院宗椿トソ申シケル。公方モ高國モアカクナゲカセ給ヒ。百首ノ和歌ヲ詠シテ。カノ追福ニ備ラレケリ。

廿六日。辛亥。依醍醐領事。奉行人傳。仰於三寶院雜掌。

醍醐陵事。先年對三勸解由少路三位在重。雖被折中。被二

歎申之條。被還付訖。所發早如元一圓可被全領知之由。所被仰下候也。仍執達如件。

永正十七年十月廿六日

下野守判 上野介判 前近江守判

三寶院御門跡雜掌

十一月大

廿七日。辛巳。伏見四宮渡。御幕府。

二水記云。早朝參。伏見殿。四宮御方渡。御武家一也。御童裝束也。供奉衆房官三人也。廳務一人。騎馬侍二人兼參。室町殿云々。出世人依。無其仁不候。御與寄。香脫云々。御童形之故也。近年御童林之時。御參賀之儀無之。武家御祝若云々。申次藤兵衛督也。伯三位相共奉。扶持云々。御與御供此邊侍衆令候了。

十二月大

廿七日。辛亥。依田布施彌太郎借錢事。奉行人傳。仰於大森某。

伊勢家書載

田布施彌太郎申借錢拾貫文事。雖好取預狀。加三利平之段分明上者。今度任。德政法。拾分一進納之條。被弄破之訖。宜被三存知。候由。被仰出也。仍執達如件。

十二月廿七日

秀俊判 貞兼判 大森殿

後鑑卷之二百八十六

義植將軍後記第十四起大永元年正月一迄三月一

大永元年辛巳八月改元

正月小

十日。甲新賀及御參内如例。

二水記云。諸家參賀如例年云々。午後御參内之儀如例。今日五獻參。仍各候御所。時宜快然。珍重々々。

二月小

三日。丙太白犯月。

公卿補任云。二月三日。太白凌月。

拾芥記云。月太白星犯之。占文可有急兵云々。

七日。庚此日。於陸奥國。葦名出羽判官盛滋卒。

會津四家合考記云。二月七日。葦名出羽判官盛滋薨矣。無子。弟盛舜立。

十二日。乙高野山炎上。

仁和寺記二月廿六日條云。傳聞。去十二日高野山大塔。金堂以下諸房。悉以爲火災。燒失云々。慈傷之至無極。但與院等無其苦云々。

此夜。將軍家密御出京。

二水記云。今月廿六日。常徳院殿御卅三年爲御廻向。詩哥御張行也。今日被重云々。哥題。花下言志。尺教。二首也。詩同之。傳聞。詩歌庭田中將一身讀上之。此後及數反。有御酒宴云々。

拾芥記云。今夜室町殿御運電。被召具品山式部少輔云々。

二水記八日條云。去夜。武家密々御出奔云々。子細何事哉。各仰天。物念無是非。但實否未定之處。伯三位馳參。申入事之由了。實正。定當時不隨御成敗一事等多端。此儀退屈之故歟。又式部少輔無遠慮之所爲歟。言語道斷之次第也。御即位期日已迫之處。又可爲御延引之哉。恐天運未測之故也。不_レ堪嘆嘆者也。何人不思此儀。予晚頭候_レ音。正親町代也。少時參_レ御前。庭田中將同候。世上之儀被_レ仰下。御即位間事。不可_レ有_レ御延引之由被_レ仰了。延引無_レ盡期之間。勅定之旨尤之由存候。但對_レ武家。可有_レ如何_レ御事哉。

爲和集云。永正十八年三月廿二日御即位。廿一日に雨降に_レり二日に御延引。同八日早朝に。室町殿阿波へ御座をうつされ侍るなり。

興福寺昇年代記云。三月七日公方樣京都ヲ御ノキアリ。御供式部少輔。四郡。杉原四郡。下津屋修理。品山七郎御供云々。

殿助往年記云。永正十八年二月十二日高野炎上。自四院福智院_レ出火。大塔。金堂已下。寺家伽藍三百余宇。塔婆十九基。衆徒行人等坊三千九百余宇。佛像。經卷。顯密正教燒失。學侶數輩入_レ火中_レ燒死云々。

十四日。丁被_レ進_レ御即位用脚方匹於内裡。

二水記云。從_レ武家_レ方_レ足_レ被_レ進。來月御即位可_レ爲_レ治定之由。傳奏令_レ伺公_レ申入了。

元長記十一日條云。應橋大納言御即位用脚方足。從_レ室町殿_レ被_レ進云々。舊冬品山次郎進上御折紙。被_レ付進_レ之由。御申之外也云々。予申云。近來一向不_レ及_レ沙汰。以此次。當日踏下行分有_レ之上者。御修理方爲_レ後日之沙汰_レ被_レ遂行。可_レ入魂_レ條可_レ然之由。再三口入同心。然者以_レ式部少輔_レ可_レ違條可_レ然歟。仍召_レ光將三位_レ内儀相違。可_レ披露_レ之由申間。則相談了_レ十四日條云。式部少輔來。條々相談。廣在_レ此席_レ入_レ夜。室町殿御同心之由申送。珍重々々。

三月大

朔日。癸諸人拜_レ覽禁中花樹。

二水記云。禁中花甚盛也。終日令_レ歷覽。男女徘徊不_レ休。東北方御掃地奇麗也。細川品山等被_レ官人令_レ沙汰云々。

七日。未依_レ義尙將軍卅三周。有_レ追養詩歌宴。

淡路安宅宅上云。海賊ヲ御タノミアリテ御座云々。尾州德州被_レ仰合。可有_レ御入洛_レ御用意也。

祐維記五月條云。尾州。紀國廣城ヘカゾアラテ相語入給處。散々ニ打負テ。淡路島ヘ被_レ引退_レ云々。公方樣_レ御同所_レ被_レ居歟之由風聞也。

足利季世記云。公方義植公イニシヘ政元ニオシシコメラレ。籠ノ中ニ御座アリシトキノ遺世者。落シ奉_レリ御運ノ開カセ玉ヒシトキ御ヤクソクアリテ。カノ遺世者ガ子息一人召出シテ。品山式部大夫ト名付。万事ニ權威高カリケル。此者公方ノ御意ニ入。如何ニモシテ是ニ管領ヲアタヘタク朝夕思召。御色ニモ出ケレバ。細川殿ト御不快ニテ。萬ニ奇快ナル御振舞アリケレバ。細川高國モ御恨フカクナリ。如何樣落中チダヤカナラズ。カ_レリシ程ニ大永元年辛丑三月七日。公方細川御中不和ニ成。京ヲ出サセ給ヒ。淡路ノ武島ヘ御渡海アリ云云。

仁和寺記八日條云。傳聞。去夜。室町殿忍而出_レ花洛_レ給。御供品山式部少輔。其外一兩人。交名不_レ分明。言語道斷也。

九日。辛渡_レ御堺浦。

二水記云。風説云。武家御遺意之趣。當時諸事不_レ應_レ御成敗。仍御退風云々。御旅宿和泉堺南庄_レ寺云々。ト山四國衆等馳參云々。右京大夫身上定令_レ迷惑_レ歟。終日有_レ談合云々。

仁和寺記云。室町殿塀渡給云々。

十日。壬戌着御淡路。

二水記云。風説云。武家又御下。着淡路國云々。

仁和寺記十五日條云。傳聞。室町殿淡路國スモトニ渡御云云。雖然京洛無爲也。語説少々在之。

廿日。壬申細川高國祇候禁中。

二水記云。右京大夫參禁中。明日御警固之儀。各令談合云云。此次拜見御庭。於常御所御庭。被出御銚子。傳奏其外少々出迎云々。

廿一日。甲戌御即位也。細川高國參候内裡。

皇胤紹運錄云。後柏原院。永正十八三廿二即位於南殿。(五十八)。

拾芥記云。御即位也云々。細川右京大夫(高國)爲御警固。八時分終。珍重也。

二水記云。御警固之事。右京大夫被官人固四方御門了。

高代寺日記云。三月廿三日即位ノ禮ヲ行ル。兵亂故二十余年遅々セリ。今度本願寺ヨリ即位料ヲ調進ス。コレ鑿空ノ計トサタアリ。依テ本願寺門跡號ヲ賜フト云傳フ。

廿六日。戊寅此日。義尚將軍卅三廻忌。有御追養。

二水記云。傳聞。今日常徳院卅三廻之御佛事。於三相國寺。陸坐拈香有之云々。陸坐建仁寺長老(靈嶺)拈香鹿死院。(伏見殿御連枝等貴)

相國教記云。三月廿六日。平安城居住大功徳主菩薩戒弟子從二位行權大納言源義植。適值常徳院殿贈大相國三十三廻忌之辰。先期七日。就三木院(常徳院)莊嚴拈香。修諸白業。命工雕造虚空藏菩薩像者一軀。蓮華經王頓齋漸書印寫看讀各若干部。梵網戒經一卷。四道懺儀一冊。水陸妙供一會。今當放筵。供佛齋僧。延諸郡下諸大考徳於聖像前。備茶果珍羞之儀。以伸供養。特請大僧錄鹿苑大和尚拈香。賦揚佛事。仍集現前清衆。演無上神咒之次。小比丘永瑾(雪嶺和尚)誦承鈞命。陸此座。舉揚宗乘云々。(見于雪嶺陸座散説)

四月小

十三日。乙未武田信虎叙從五位下。

歷名士代云。從五位下。源信虎(甲州武田)同十八四十三。

十八日。庚子依室秀軒事。細川高國傳書於武田伊豆守。

伊豆守。伊勢貞助記載。

就室秀軒之儀。示給候旨傳其意。候。仍若公標於御入。

後鑑卷之二百八十七

義晴將軍記第一起大永元年七月一迄三月一

足利家官位記云。萬松院殿義晴(惠林院殿爲子。實法住院殿男)永正八年三月五日御誕生。同十一年月日自江州御下。向播州。同十八年七月六日自播州御上洛。(十一歲)假以三岩酒院爲御所。

管別記云。武家若公御上洛。右京大夫執沙汰也。(鳥御所依無御返。歸京也。)法住院殿御息也。(母儀者。御末者阿與也。)先年鳥御所御養子也。自播州御上洛也。御歲十一歲云云。白二御幼少之時。赤松奉養育之。若君御所岩栖寺也。(柳原)暫時儀。爲御用心云々。

足利季世記云。永正八年三月。頃。義澄公方ハ近江ノ九里カモトニ御座アリケル。爰ニテ若君一人誕生アリ。然レドモ佐佐木六角高頼ハ京公方義植公へ無二ノ味方ナリシカバ。若君ヲ養ヒ申サルベキ様ナクテ。義澄公若君ヲ御同道アリテ赤松ヲ御頼ミアリ。播州ニ御下向アリ。無程二男若君誕生アリ。一人ナバ赤松アツカリ奉ル。一人ハ澄元ニ預置玉フ。是ハイヅレモ無二ノ忠臣ナレバ。且ハ又此人々ノ心ヲモトラセ玉ハントノ儀ナリ。赤松ニ御座若君ハ。後ニ義晴公ト申ケル公方是也。

洛二者。則參洛候様。相調候者可レ然候。幸當國仁少知行在レ之由之條。可レ被相談一事肝要候。猶吉田三河守可レ申候。

恐々謹言。

永正十八年四月十八日

武田伊豆守殿

高國

五月小

三日。甲寅多田社鳴動。就高國退治。奉行人傳

仰於佐治某。

高代寺日記云。五月三日。御庭鳴動。

古文書載

就高國退治。至淡州。被移御座。近日御歸洛候上者。早速馳參。可レ被致忠節一候由。被仰出候也。仍執達如

永正十八年五月三日

佐治殿

時基列

六月大

赤松記云。四月二日若君様御供にて。英賀のいま在家游清院
まで御出。それよりまたしまの長福寺へうつし申候。さて若
君様細川殿より浦上と申谷合。おなじ六月に御入洛被成。
公方様に御すはり被成候。養晴様これなり。

大永元年八月改元

七月小

二日。壬子細川右馬頭尹賢等奉迎若君。

祐雄記云。今日播州ニ御坐アル若君様ノ御迎。細川典慶其外
アマタ被參云々。當年十一歳ニテ御坐アルト云々。是ハ江
州ニテ御万歳ノキヤウケンイン殿ノ御息云々。公方様ニ細
川高國被居申云々。次アハザノ公方様モ。御出陣アルベキ
由其間有レ之。

六日。丙辰若公御入浴。以岩栖院爲假御所。

二水記云。今日。播州若公(近江御所御息也。數年赤松兵部少
輔奉養了。當年纔十一歳。)御上洛也。仍爲見物。午後出
行。於三條邊一見之。申刻許御上洛。御輿被上座了。御容
頗美麗也。二騎馬衆數十人不可勝計。不慮之御進誠以奇特
也。上京以岩栖院假爲御所云々。
拾芥記云。室町殿御兒自播州爲浦上調法御上洛也。細川
右馬頭以下參御迎云々。

廿六日。丙子御讀書始。

足利家官位記云。同月廿六日。御讀書始。(清三位宣賢卿參
レ之。)

廿八日。戊寅若公御叙爵。大内記菅原爲康持參御
位記。御名義晴。自内染宸翰被進。依之
諸人群賀。

拾芥記云。御叙爵。(從五位下。)御名字(義晴。)菅大納言(和
長卿。)勘進分也。今日午刻。大内記爲康參陣。自是直持參
御位記。(宿紙如例。)入菴蓋。路次柴輿。入二位記蓋於輿中。
下輿之時。令持雜色。參進之時。副使兵衛尉行爲自雜色
手。取二位記。菴蓋授大内記。大内記渡家司。(藤兵衛督永家
朝臣。)家司渡之於簾中女衆。女衆取之。被參御前。歎。其
後入砂金養於菴被出之。大内記賜之退出。如初渡行
爲。行爲取之。渡雜色也。家司爲狩衣之間。大内記下
裾。渡二位記蓋云々。武家御坐所岩栖院云々。砂金代三千疋
也。内前日且拾五貫文分。自傳奏廣橋被渡之。此外參陣
御訪二貫五百文内々渡之。伊勢八郎左衛門貞久申次之云
云。當日有二陣儀。上卿中御門大納言(宣秀卿。)職事頭中將
重親朝臣。大内記爲康。少内記康友同參陣。大外記師富朝臣。
官務子恒。參陣衆御訪如形云々。大内記御訪二貫五百文分。

仁和寺記云。從播州若公(近江將軍息。十一歳)上洛。右京
大夫悉皆申沙汰也。
雜々書禮載

若公様御入浴。千秋萬歳目出存候。仍以參田三郎左衛門
尉。御禮申上候。宜有御披露候。恐々謹言。
七月十日

伊勢守殿

十日。庚申若宮御事奏聞内裡。自内被進銀劍。
此日。諸家賀謁。○畠山上總介義英卒。

二水記云。傳聞。今日武家御禮有レ之。公家節朔之衆許令參
賀云々。○十一日條云。傳聞。今日若公御事申入禁裏。仍被
進銀劍。此後從武家又御馬。御太刀御進上云々。
仁和寺記十二日條云。傳聞。昨日(十一日)武家節朔之衆若
公御禮云々。

兩畠山系圖云。義英。右衛門佐義昭子。上總介。右衛門佐。大
永元年七月十日早世。號勝音寺。

十六日。丙寅供奉近臣於相國寺自殺。

二水記云。傳聞。今度奉附若公一衆五六人。於相國寺一切腹
云々。造意事依露顯。此如云々。實否定未決事歟。數年令
奉公。此切生涯之條。不便之次第也。

請取進之。

二水記廿七日條云。傳聞。今日有二陣宣下。若公御叙爵云々。
御名字義晴。東坊城擲進云々。今日奉行職事頭中將重親朝
臣。上卿中御門大納言。已刻陣儀終。各直參武家云々。御位
記令持參。此外公家衆少々參御禮云々。

管別記云。御叙爵。上卿中御門大納言。奉行職事頭中將重親
朝臣。大内記菅原爲康參陣。官外記衆雖無所役。必令候
床子座云々。(武家之儀相定也。)御名字事。兼日傳奏可撰
進之由。依被相催。雖撰進之。内儀又右京兆有申子細
之間。被申御字等執合。如例三字被勘文二畢。傳奏持參
關白。申談宸筆事。關白即又以傳奏被申出宸筆。今日宸
筆與二本勘文。午刻許被持參。予向就勅者。爲申入御禮
參武家。大内記持參位記。予令同道。先之上卿職事大外
記官務等候武家。今日爲御禮參任人々。民部卿入道。帥大
納言。日野宰相。阿野少將。烏丸侍從等也。申刻許。右京兆同
六郎父子參任。此後傳奏(廣橋大納言)御名字宸筆納御視
蓋。并勘文等。以伊勢備中守被進。次大内記進御位記。納
賀。(菴蓋也。不帶劍笏下裾。)於三兩簀子。渡家司左兵
衛督永家朝臣。文紗狩衣。永家朝臣取賀。就同南面簾下
進之。女房於簾中被取之。即納沙金一表於菴蓋被出
之。永家朝臣取之。授大内記爲康。取之退。更爲御禮。歸

着群參之座。次御禮也。先京兆父子被進御太刀。次如例武家之衆參。其後公家衆也。御所依三狹少。今日東向西向一同也。任例先裝束衆參。中御門亞相。(帶劍笏。但御太刀持參之時。坐置笏。)次頭中將。大內記。大外記師象朝臣。官務于恒等也。已上束帶。次直垂衆也。予。勅者御禮分二腰(金)。一度持參畢。次御上洛御禮。未申入之衆。別各申入之。仍又更持參御太刀一畢。此已後向三右京兆亭。太刀一腰付申次。今日武家御儀申禮畢。帥亞相。大內記等同道畢。今度御名字依爲三宸筆。勅者御禮。總參賀衆。如三次第御太刀令進上。(如三今日)勅者直勸文持參之時者。總御禮以前。先勸者一人御太刀持參。其已後總參賀之衆。公武共被進也。此差別之儀。能可不得其意也。與三傳奏可三示合也。御名字晴也。置三于上之時不宣也。御字申入迷惑歟。(注三別記。)

八月大

朔日。庚辰御憑如舊例。

拾芥記云。室町殿(御兒)御憑。御太刀自前日。內々付取方左近大夫進之。

三日。壬午猿樂興行。

二水記云。傳聞。今日於武家三猿樂觀世有之云々。

七日。丙戌伊勢守貞陸卒。

伊勢系圖云。貞陸。伊勢守貞宗子。始貞陸。七郎。備中守。伊勢守。兵庫助。從四上。勝運院。道號光岳。法名常照。號三茂齋和堂。永正十八八七卒。

九日。戊子齒黑御祝。

繪川親孝日記云。御齒黑美。(時未刻)御祝三獻。(常御所。)

十一日。辛卯故法住院將軍有贈官位宣下。

二水記云。已起有陣宣下。法住院(近江御所)殿御贈官位(左大臣從一位)之儀也。上卿權中納言(實胤)着三陣與座。奉行職事右中辨資定。就上卿之座。下三卿詞退。上卿起座。移着端座。召三官人令敷。次以三官人召三內記。少內記。康貞參進。上卿仰三宣命事。內記承三仰退入。更出令三持三宣命草。(入管)上卿覽了。令三持三內記起座。出三宣仁門令三奏聞歟。此間事不見。(後開。清書取替則奏云々)少時歸着陣。召三官人令敷。此後康貞持三清書三參進。授三上卿退去。次以三官人召三少納言範久。參進着三敷。給三宣命。上卿退出。宣命令三持三參相國寺之間。爲三見物。改三異林三行三彼寺。則少納言來向。(於三惠門外下)與三入三法住院之北門。先之住持出三門內三相待。向三使揖。次少納言對揖。又住持被三揖。(是前行禮歟)又答揖。住持前行。物置三程三少納言進行。(於三

門外撤三劍。入三門內下三禱。昇三佛殿。向三影前一立。住持立三南方。(佛殿西面也)少納言令三懷三中笏。讀三宣命。(先於三右脇三披之。次第高持上。於三左方可三披歟。爲三座下之故也。)近年其由許云々。讀了。一兩步進寄授三住持。長老取之。出三影前(今日御願主出來出々)燒香。此間少納言歸三本所。揖而立。住持供了。向三使一揖。少納言答揖了退去。住持出三中門外一揖。少納言答揖了退去。儀儀雜色。(如木)布衣侍。笠持等也。坊城大納言被三詔云。長享度。常徳院御贈官之時。爲三少納言三參三此使。其度者令三持三參處苑院了。仍昭堂之儀也云々。今日陣儀下行于正云々。少納言三結之御訪也。爲三後人一注之。少納言詔云。贈位之記於陣添三宣命賜云々。拾芥記云。室町殿(御兒雜晴)御親當三正忌。有三贈官位宣下。去十日自三右中辨資定一通到來也。大內記可三陣云々。位記宣命等。內々就三少內記(康友)進之。爲三柱下潤草代二百正分遣三晴文。自三傳奏(廣橋)被三賦之。前將軍義澄可三爲三法住院贈左大臣從一位云々。勅使少納言範久朝臣參向。外間乘輿。雜色如木召三具之云々。贈一位三記不及三記之。宣命事記三左了。少納言參陣。御訪二百正云々。(此外三百正爲三御馬代三可三被三下云々。)

天皇親詔官其方止。故從三位參議左中將源義澄朝臣。詔官止勅命乎開食止宣。專三武化於柳營。志。施三威名於華夏。元惟一

朝之重臣。中興之良將也。不三景。俄雖三赴三江東一也。版落思竟空。爲三治三天下。一。推軍謀云致世間疾病相侵。性命早逝。雖三然。將種今後持三世而。追飾更欲三抽三孝。故是以左大臣從一位上給三贈賜。天皇親詔官乎。遠聞食止宣。永正十八年八月十二日(草無三御世。清書有御世。)

十四日。癸巳謝三贈官位。被三進三御太刀。

繪川親孝日記云。就三昨日公方樣御贈位御禮。九振御太刀之內。助次御太刀一腰裝裏參云々。但依三爲三御上意。橫掃三渡之。右京兆御一獻之時。御太刀拜領付而。助次御進上之旨。注文見之。

廿一日。庚子依三眞如堂供養。被三薦三劍馬。

繪川親孝日記云。右京亮殿御使木澤。就三眞如堂御供養之儀。御太刀。御馬事御披露候處。被三或三御意得三之由候。御太刀被三仰三古阿。可三渡給三之旨承。御馬參次第可三被三遣之旨蒙三仰。以三親順。申入畢。○廿三日條云。眞如堂御供養御奉加之御太刀一腰。親順三渡之。但自三殿中。古阿雖三渡給。依三爲三次。右京兆御進上之內。依三備州樣御意。親順取替遣之由申畢。

廿二日。辛丑御劍及御內書下三給浦上掃部助村宗。

繪川親孝日記云。右京兆御進上之御太刀(安則)被三相三副御內書。被三下三浦上掃部助云々。御使橫川掃部助。親孝直三渡

候。

廿二日。壬寅改元大永。

公卿補任云。八月廿三日。改元大永元。

祐維記云。八月廿三日。大永元年。年號改元ナリ。將軍御替目ニ必以年號改之云々。諸家撰被進中ニ。高辻殿勅點是也ト云々。此年號スマシテ讀レ之。大永元讀之也。

宣胤記援書云。今夜改元定也。世間之年號雖無殊難。依將軍御他國。爲奉立他主君。被川新號之由。細川右京大夫源高國中沙。相談伊勢守貞隆。去七日卒。武家傳奏民部卿。元一卿。前大納言也。奉行職事頭中將重親朝臣也。改元正爲大永。天明以後事終云々。

管別記云。今夜。改元仗議也。新號大永也。予今度始撰出之號也。管宰相勘文字。依難得與奪二事。

廿七日。丙京極某奉賀代始。

蛭川親孝日記云。一京極小原殿御代始之御禮。以番頭中候由。大館殿被申云々。仍備州橋へ太刀一腰。持三百疋。緣阿ニ渡レ之被進之。同名以岩山四郎殿奉之。私宅江來臨。同日御寺へ。以親順令披露者也。則御太刀被遺之。御使淵與三左。彼於宿所。以面渡進之云々。

廿九日。戊諸人參賀代始。

二水記云。早旦。諸家參賀也。御代始之御禮也。

九月大

三日。壬子武田伊豆守元光内献。

二水記云。武田伊豆守十荷十合進上云々。今度上洛。仍申入御禮也。

四日。癸丑此頃。有御祈事。

蛭川親孝日記云。公方様御祈禱。在富御物箱三合。一御一重絹。一御鏡。一同御鏡。河村小四郎調進也。但松丹へ渡レ之。

十日。己未此頃。諸人群參東山勝軍地藏堂。

二水記云。午刻。詣東山勝軍地藏堂。近日貴賤參詣之堂也。年來不知レ之。去年右京大夫出張之時令祈詣。仍彼方令信仰也。今度以右建立了。○十八日條云。午刻詣勝軍地藏堂。今日伏見殿御所。鹿苑院殿。同御侍者御所等令詣給。其外堂上若衆等數輩令供奉了。

十一日。庚申島山左衛門佐義堯奉賀代始。

蛭川親孝日記云。自血殿御申云々。島山左衛門佐殿御代始御禮御申候。御禁忌之條。御披露之旨。私さて御狀を被進者可レ爲御祝賀之由。以女中御申之儀候。可レ被進之歟如

何之由。服部をもて被尋下。可レ被進候旨申上之處。御案事服部被申候間。則所存之通。一筆調進上。自島山殿。御代始御禮御申之旨。令披露候畢。尤以珍重存候。仍此方へ時宜被仰下候者。所仰候旨。

十七日。丙武田伊豆守元信拜觀禁苑。

二水記云。武田伊豆守令拜見御庭。花山院亞相當番也。仍被出達於小御所御庭。盃酌及敷飲。沈醉了。

十八日。丁卯此日。赤松兵部少輔義村爲其臣浦上掃部助村宗被害。

二水記廿五日條云。風説云。赤松兵部少輔切腹云々。大日本傳皇代記云。大永元年八月廿一日。赤松殿於室津御生害。

番爲山十地坊過去帳云。了堂性因大居士。號祥光院。赤松兵部少輔義村。永正十八年己九月十七日。於室津爲浦上村宗生害。

村上源氏系圖云。義村。從位下。實攝州之赤松刑部少輔政資次男也。政則以無男子。使義村娶其女。續其家。政則卒後生次郎晴政。然義村與其室不和也。就浦上掃部助欲使次郎晴政家。故父子不和也。以是義村爲浦上於播州室津所害矣。世以爲病死被露之。

赤松系圖云。義村。兵部少輔。永正十八年九月十八日爲浦上被討。

赤松記云。永正十七年美作の住人中村五郎左衛門浦上一味のものにて。美作の岩屋と申城に橋籠候分御成敗のために。小寺加賀守則元うけたまはりとして。同四月廿日のをく彼城へとり詰候。御屋形様もはしきまで御馬を出され。その後城へとり詰。自旗の城へ御陣がへあり。既に中村離儀にをよぶ。浦上後卷をいたし候へば。岩屋の陣取の御間の中に。中務丞と申人。これは下野守村秀の弟にて候。城衆と心を合て。十月六日寄手を討破り。小寺加賀守同子ども三人不

叶自害。自旗より御屋形にあらうにて御歸陣候。この鉢にて浦上理運になり。小離に船出出来。とかく御隠居被成可レ然とあつかひ。同十一月御曹司様七歳の御時。浦上掃部助村宗に御渡し候。村宗受取まいらせ室津へ入申候。めし様御二人とも。最前より浦上と御同心の事にて。御屋形をすて御屋形御曹司様とひとつに御出被成候。其後先御屋形御ぐしおろされ。常印と御名を御付被成候。此鉢になり候へば。小離の鉢離説とりくにて。十二月廿六日の夜公方様(義晴將軍)御供にて小離御のきなされ。明石の沖にはし谷と申所に。衣笠五郎左衛門館にて御としをめされ。翌十八年正月御著まで御出張被成。御先勢弘岡殿を大將にて。御馬廻

りの衆少々。太田の城まで御出候所に。弘明殿こゝろ替にて先手破れ候間。俄に御答を御のき。東條の玉泉寺と申寺に御座候。其後浦上督紙を以ていよく懇望申候間。同四月二日若君様御供にて。英賀のいま在家遊清院迄御出。それよりかたしまの長福寺へうつし申候。さて若君様細川殿より浦上と申合せ。同六月に御入洛被成。公方様に御すはり被成候。後晴様これなり。其後先屋形様を室津へ入申。浦上被官實佐寺所に囚人の様にして置申。翌年九月十七日の夜宵野。花房。岩井彌六など申もの大勢おし込。常印様討はたし申候時。岩井彌六左の手をくびよりうちおとされ申候。これほど御働比類なく候へども。大勢不叶御果被成候。さる間屋形様へ一味申衆は皆他國して。淡路其外おもひくゝに居られ候。

播磨鑑云。置鹽三世ノ城主兵部少輔播磨守政村。始ハ藤村。實父刑部少輔政資ト號シ。七條家ノ末也。嘉吉ノ比ヨリ盤居ノ身トナリ。幽ニシテ日數ヲ送り居ル處ニ。應仁ニ政則當國ヲ奪ヒ返シ武威日々ニ暉ク。然ト云ヘドモ相繼ノ質子ナキ故ニ。嫡流ナレバ藤村ヲ猶子トシ。執事浦上美作守則宗嫡子播部介村宗ヲ後見トシ。赤松ノ家ヲ守ラシム。然ルニ村宗權威日々ニ衰リ奢テ極テ。政村ヲ蔑ニスル故。政村確執ニ及ビ浦上ヲ亡シ戰國度々ニ及ブ。浦上謀ヲ廻ラシ和陸シテ。晴政

ニ政村世ヲ渡シ。政村ニハ室津ニ隱居ヲ進メ移レ之。置鹽ノ城三世ノ城主ハ左京大夫播磨守晴政。政村ノ長子也。政村室津へ押込ラル、時ノ和歌アリ。(此和歌英賀ノ城へ送ラレケル由。三木東水所持ス。)立ヨリテ影モウツサツ流レテハ浮世ヲ出ル谷川ノ水。永正十五年九月十七日卒ス。法名祥光院殿。了堂性因ト號ス。此月。前將軍家有ニ上洛風聞。一。祐維記云。九月近般。島之公方様可有御上洛之由。以外之物悉在レ之。國中サハギ此事也。

十月小

六日。西武田豆州沙汰申樂。

二水記云。傳聞。今日。於武家御所ニ有ニ申樂。武田申沙汰云云。

十一日。庚細川高國亭猿樂張行。

二水記云。今日。細川猿樂有レ之。爲見物一同道也。少時行レ彼家。出ニ一間之所見レ之。各養頭之休也。今日儀。武田振舞云云。入夜六番了歸家。後聞。酒宴及ニ曉天。猿樂十番云々。廿一日。庚武田馬場有ニ射犬儀。

廿二日。辛前將軍着ニ堺浦給。

二水記云。伊州馬場犬追物令見物。今日武田招請云々。草野爲和集云。淡路武家十月廿二日に堺迄御渡海。祐維記云。廿三日島ノ公方様。泉界迄御上洛之山。筒井へ自所々ニ注進云々。○廿四日條云。上總殿與尾州和陸有レ之。而河内次郎殿ヘトリカケラレテ。アマ野迄御出頭云々。既燒レ之畢。越智。筒井。風森迄。河内ノウシロツメニ可被陣立一用意ト云々。次河内ノ屋形ハマサシキ尾州ノ御息也。然ニ攻殺サントノ御所行。不思議ナル題目ナリ。公方様ハ界ノカタキ屋ニ御座云々。京ノ公方様ト御和談之暖有レ之云々。内郡燒レ之了。上總方遊佐出頭シテ燒レ之云々。

二水記廿七日條云。風説云。淡州御出船。已御着岸云々。京兆邊有談合云々。洛中安否如何。恐怖此事也。○廿九日條云。和泉堺邊之事。至今日一無殊事。

廿六日。乙飛鳥井雅康卿十三回。依レ之追養歌興行。

二水記云。今日。二樂院爲二十三回。仍有三法事云々。品經子講レ之。武邊之衆右京大夫。右馬頭許詠レ之。

十一月大

朔日。己此頃。前將軍家退ニ坐和泉槇尾。

祐維記云。十一月朔日公方様界ノカタ水屋ヲ退キ給云々。泉ノカソノチ迄御出ノ山風聞云々。公方様へ引渡諸大名一人モ無レ之。然間淡島ノ面々界迄送捨テ。此間御座アル御所ニ火ヲ懸ルト云々。總州内郡マテ御出頭之處。御陣破テ散々ニ成給。自河内并當國越智。筒井大軍ニテアル間。總州被退散了。次尾州ハ無ニ出陣シテ。讚州。六郎殿ノ後室ノ許へ暫入ト云々。當國衆少々總州ト引渡有レ之。去月廿六日自三土中方。過文狀共三十通余。古市内衆一人所持シテ上洛スルヲ取テ。中方筒井へ被遣之處。自筒井ニ細川殿。同河内次郎殿へ被遣レ之。當國之引渡衆以外之仰天也。先以風聞説。古市。萬歳。岡。著尾。片岡。此五人根本歟之山其沙汰アリ。島之公方様泉ノマキヲ迄御出アルト云々。

四日。壬御叙爵祿物頒給。

拾芥記云。室町殿御叙爵祿物之殘四貫文。爲三磨橋方沙汰被渡之。三千疋之内。相殘分未下十一貫也。此外柱下參陣御訪未進。同五十疋被渡之。三貫文分也。

請取案。室町殿御叙爵祿物未進十五貫文之内。合四貫文者。

右且所ニ請取申一如レ件。

大永元年十一月四日

六百八十三

六日。甲諸家參賀。

二水記云。傳聞。今朝武家參賀有之。節朔之衆許云々。

十二日。庚申細川右京大夫高國叙從四位下。

歷名土代云。從四位下。細川右京大夫源高國。大永元十一年。同日任左馬頭。

十九日。丁卯武田伊豆守元信下國。

二水記云。傳聞。武田今日令下國云々。

廿五日。癸酉叙正五位下。令任左馬頭。給消息宣下也。節朔衆參賀。

拾芥記廿四日條云。就武家御加級。正五位下。被任左馬頭。御位記柱下持參。局務左馬頭宣旨持參。砂金代各三千疋之內。有且下行八百疋。津元進出折紙二道。松田丹後守加判於御殿。大津屋正實歟。請取之。局務師象朝臣此分歟。副使兵衛尉行爲也。

宣胤記拔書云。今日武家令任左馬頭。給云々。消息宣下也。御元服以前也。上卿中山中納言康親卿。職事頭中將重親朝臣云々。

二水記云。傳聞。今日武家御加級。正五位下。越階。令任左馬頭。消息宣下也。節朔之衆申御禮云々。

廿八日。丙子細川右京大夫高國任管領職。

二水記云。傳聞。今日右京大夫參管領之御禮云々。廿六日補之歟。今日先內々爲出仕云々。就來月御元服之義。補職。

伊勢家書云。大永元年十一月廿八日。細川右京大夫高國被任管領職。御使兩度。伊勢守貞忠京兆參申。初度被任之旨御仰出之御使也。二度目は御請御喜悅之旨之御使也。此後右京兆被任候。御三益參。惣別は三夕度可有出仕之由候。御禮御太刀持。同御御拜領。御使伊勢守。裏打。官領出仕。同前裏打。右京大夫出仕之供衆。香川美作守。裏打。太

刀持。秋庭備中守。長鹽又四郎。京兆同名衆計一各京兆へ禮に參。金を進之。一公方様へ京兆同名衆計御太刀進上之也。

十二日大 三日。辛巳武田大膳大夫元信卒。

武田系圖云。元信。彦太郎。信親子。文明三十二年五日元服。加冠管領勝元。因例請字。明應三十二年八月爲御相伴。准禮於三官。禮與叙從五下。同十年正十叙從四下。越階。伊豆安藝守。大膳大夫。佛國寺大雄相壯。叙從三位。文應元十月擊。二色破遠。領丹後國加佐郡。永正年中忠節上階。文武長。嗜和歌。俗號若狹二樂。因似手。大永元十二卒。建佛國寺於伏原。若州屋形。兼領安藝丹後兩國。宣胤記拔書十二月七日條云。十二月初武田父死去。叙二位云々。當年令入道。其以前分歟。

拾芥記十一月廿四日條云。今月初頃。武田大膳大夫元信中三位。勅許也。位記事。永正十六年十一勅許分宣下也。禮物且二百疋。爲廣橋取次。被送之。乏少至也。禁裏御禮物五千疋云々。被拜北御門云々。大膳大夫自去年入道云々。

七日。乙酉以明年正月當慈照院將軍卅二回。逆於相國寺。有追薦儀。於禁中。同有御供

養。○此日。細川高國任武藏守。又叙從二位。

二水記云。今日。於相國寺。陞坐拈香有之。奉慈照院卅三廻追善。雖爲明年正月七日。今日被修之。爲見物。罷向(養頭)。彼寺。同道衆數輩也。午前拈香始之。長老可尋。長老泔雪云々。陞坐長老建仁寺月舟。壽桂云々。直參大慈院。御南御所。有御經供養。勅願也。御導師定法師僧正。公助。伴僧。妙觀院。蓮光院。不動院。公卿中山中納言。甘露寺中納言。殿上人左中將雅繩朝臣。藤兵衛督永家朝臣。六位中務丞源勝仲。奉行頭中將重親朝臣。今日。月卿雲客各束帶也。月卿不帶劍笏。若座之後持。檜扇。道場之機。(被拂方丈。圖畧)予同道衆向理覺院。入風呂。有二一。盡。月卿下階畢。抑爲臣下。御經供養事無其例歟。仍願文御草無之云々。公卿着座。各從休所。經小緣。從二座後。若之。不及座。取布施。各復座。導師參進之時。堂前無香脫之間。經東南簀子。參上。伴僧同之。於從僧者先從堂前參上了。御願文清書行季卿。草菅大納言。散花役雅繩。永家等朝臣役之。堂童子依不參。如此云々。兩朝臣。聊可有所有事歟。但舊例有之歟。六位可宜也。撤之時。猶役之。當座各無覺悟歟如何。可尋。殿上人所役之時。各引裾。願語六位取之。渡伴僧了。御布施被物。兩度中納言置

後鑑卷二百八十七 義晴將軍記一 大永元年十二月

六百八十五

レ之。裝物。御導師前雅純朝臣。題名僧前第一永家朝臣。第二源諸仲。第三奉行職事置レ之。流例云々。

相國政記云。同年蔭月七日。左典藤源義晴。明年大歲壬午正月單七日。俯迎三慈照院殿喜山大居士三十三回諱辰。預於三斯日。營三辨法事。特就三本院。三慈照院。先甲七日。莊嚴緝字。延三請細倫。香三子晨。燈三子夕。誦三經于晝。坐三禪于夜。彫刻以三虛空像菩薩尊容一軀。頓漸書寫以法華經王。各如千部。普門懺摩以修レ之。甘露妙供以設レ之。梵網心地戒品煩三戒師。以演三說之。今當三散場。現前必勤。同音諷三誦神咒之次。院宰孝叔四堂殿傳三鈞旨。拜三屈與典堂上和尙。拈香。讚三揚佛事。副三命建仁住持小比丘壽柱。月舟和尚。登三華座。拈三藤杖。爲三他亂道云々。(見三子月舟陸座散說。)

拾芥記云。就三慈照院殿(義政公。三三三回。爲三禁裏御沙汰。於三南御所。被レ行三御經供養。御導師定法。若座上卿中山中納言。并甘露寺中納言也。御布施取殿上人藤兵衛督永家朝臣。中將雅純朝臣等也。各束帶云々。予可レ參三看座三之山。雖三相屬。依三不具三不參。願文事。爲三勅願三而皆大納言草進之。宣胤記援書云。細川右京大夫源高國任三武藏守。其後令レ叙三從三位云々。三位ハ於レ家初例也。又不及三次第加級三歟。禁裏進三万疋。

十二日。卯進三劍馬於内裡。令レ謝三高國官途。

不見及。管領同レ之。

管別記云。若公御元服也。以三慈照院殿御例三武家様也云々。理髮細川奥州。加冠管領也。去月廿八日補三管領。々々四品。自三武家二御推任也。(此事先規未曾有也。當時道遠院就三知音内奏也。不可レ然。又武藏守事。自三武家二被三執奏。任レ之云々。是又先例不レ然歟。此等之官位等者。自三前々三攝津守爲三其所役。令三申沙汰之處。今度一向不レ知之様也。尤不審事也。御元服奉行攝津也。今日管領出仕始云々。其様如三本儀。龍安寺(勝元朝臣。出仕之例也云々。(同評定始之出仕等。度度出仕云々。御元服御禮。自三武家。砂金三委禁裡へ被レ進云々。御使傳奏也。

宣胤記援書云。室町殿御元服也。今日御三移三條御亭。加冠武藏三位高國。

公廣記云。義晴御元服御視之次第。

當官領より參。初日。廿六日。二對瓶子(一具。御會所に立申候。此役者はなうみ仕候。然ば三々日立申。後には彼なうみ方へ拜領仕候。一式三獻。并御手懸參。當官領は細川殿御しやうばん。細川殿への式には。三々か月不レ參候。公方様の御盃拜領也。是蓋御會所にて參分也。其後常の御所へ御成にて。分供并御着三獻參。五獻之用意仕候へども。夜ふけ候間如レ此。これは細川殿依三御意見。かやう候つる也。二日目。

後鑑卷二百八十七 義晴將軍記一 大永元年十二月

六百八十七

二水記云。右京大夫來三高倉許。先日謝三管領之禮。其返報也。傳聞。今度任三武藏守。叙三四位二等御禮申入。從三武家二以三傳奏(廣橋)被三執申了。(武州御禮。御馬。太刀。叙品之御禮也。十帖。金ラン。盆。香宮。御太刀等五種云々。)

廿三日。辛。丑怪物飛行。

高代寺日記大永二年條云。去巳ノ十二月廿三日。光物自三寅卯二乘三中西ノ間。

廿四日。寅御元服也。加冠武藏守高國。理髮陸奥守尹經。先レ此渡三御三條御所。被レ行三其式。

二水記云。今日。武家御元服也。仍渡三御于三條御所。今日始也。(於三三條邊三令三見物。老若兒女子如レ雲。辰刻渡御。御乘輿。(垂簾)騎馬七騎。同朋一人如レ常。已刻武州令三出仕。乘三網代。力者昇レ之。(先力者五人。次中間六人歟。不三體覺。各着三裏打直垂三着三大口。如何。次騎馬衆十人。各白小袖。裏打直垂也。各赤直垂六人。持三太刀三中間一人。着三裏打二也。)

御管領出仕事。故政元朝臣不レ及三如此儀式三歟。近代行粧云云。引川往古之例云々。頃之令三退出。更又出仕。今度騎馬三人。於三衣裳二者同前。但武州初度裏打。今度白張云々。御元服所役之衆悉以着三白張云々。事了退出。又令三出仕云々。今度小袖云々。路次室町南行。二條東折。東洞院南行。此前

廿七日。畠山殿より參。一式三獻并御手懸。如三初日三御會所にて參。分供御さかな三獻。これも初日如く。當御所へ御成にて參也。三日。廿八日。武衛より參。一式三獻并御手懸。御會所にて參分。供御御着三獻參。其外同前也。一御要脚御下行之事。初日は當官領細川殿より。以三勘略之儀三千疋御下行。先規者五千疋也。渡申時之奉行は。波々伯部兵庫助。中澤越前守也。一二日めの御要脚は。畠山殿より拾貫文下行也。これも先規は三千疋にて候を。俄事に候とて國一人を下申候ても。難三和調一と申候て。松田孫左衛門尉かたより千疋下行申也。此分御視調進候也。松孫色々依三袴言申。調進上申。非レ例。一三日目の御要脚は御殿より御下行。これは武衛下行也。今日對上へ一御敵と御座候間。從レ上之下行千疋。一二日めに御列初在レ之。式三獻。并御參着三獻參。以三勘略之儀。十貫文御殿より出申候。

廿五日。癸。征夷將軍宣下。又有三禁色勅許。

二水記云。傳聞。有三陣宣下。將軍。禁色兩條云々。(上卿帥大納言。奉行職事頭中將季國朝臣。辨實定期朝臣。(非職。已刻事了。大外記師象朝臣。左大史子恒等。直參三三條御所云々。從三禁裏。御馬銀劍被レ進。(御元服儀云々。勸修寺中納言爲三御使云々。足利家官位記云。十二月廿四日御元服。加冠武藏守高國朝

臣。理髮陸奥守。同廿五日任征夷大將軍。同日禁色昇殿。拾芥記廿四日條云。折紙案。

明日(廿五)就御昇進。位記持參。祿物内且八百疋。御元服要脚正實。以所納可有下行一候。恐々謹言。

十一月廿四日

元造判

松田丹後守殿

菅別記云。將軍宣下也。上卿權中納言(實胤卿)奉行職事頭中將也。官務于恒持參宣下。大外記師象朝臣禁色宣下同持參。今日御判始等如例云々。

公卿補任云。源義植(五十六)征夷大將軍。兵長者。兩院別當。十二月廿五日止將軍。于時在四國。以左馬頭義晴一爲征夷大將軍。宣下。

廿六日。甲辰就御元服段錢事。佐々木定頼傳仰

於朽木彌五郎。

古文書載

今度公方様御元服段錢事。所々棟別に申付候條。郡事

同前候。委細對越中。田中申遣候間。時示合。急度可

レ被申付候。猶後藤但馬守可申候。恐々謹言。

十二月廿六日

定頼判

朽木彌五郎殿

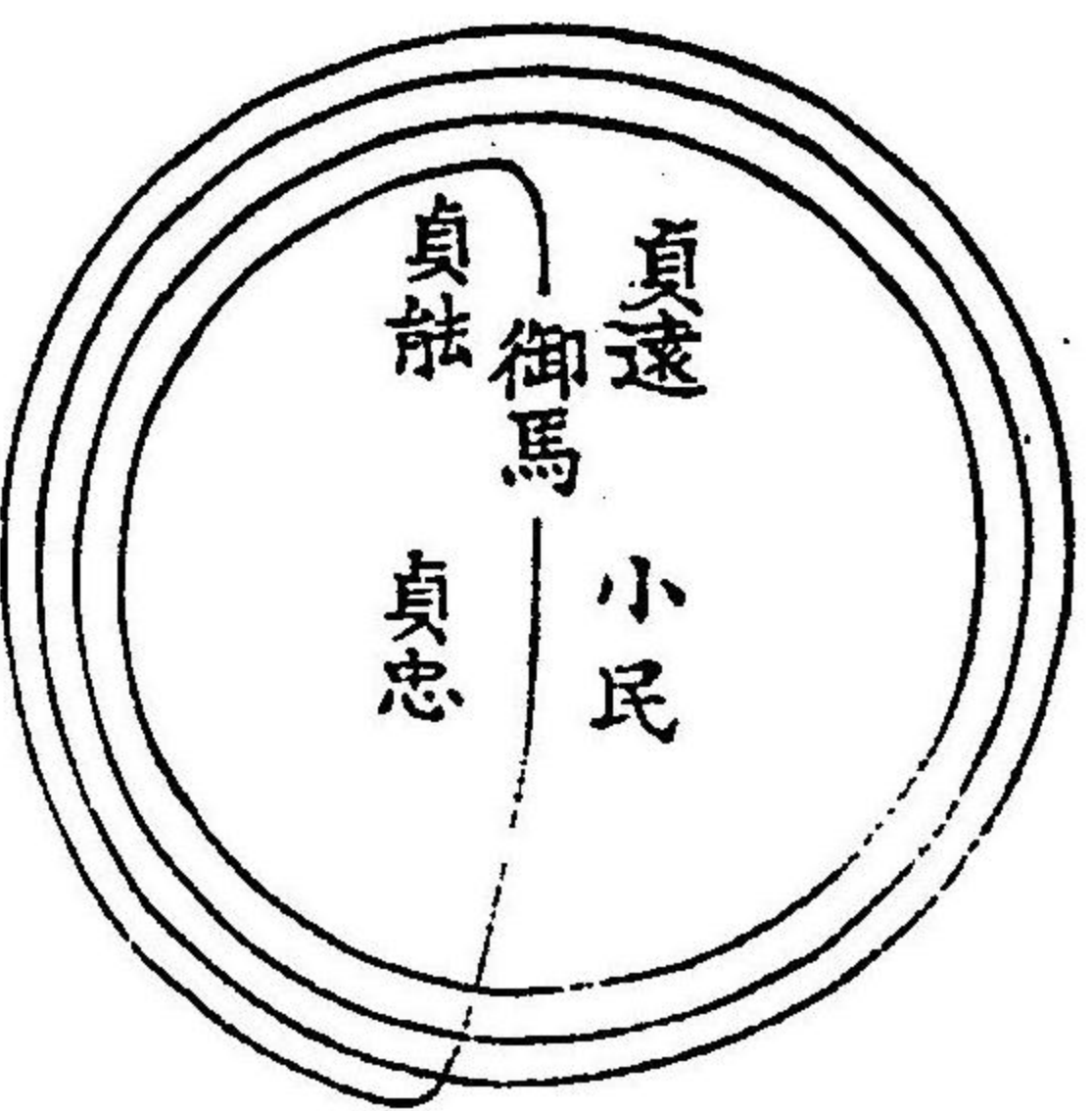
廿七日。乙巳公武參賀。

菅別記云。大樹參賀也。如例。先武家衆番方已下之後。公家衆東向四向等也。今日御太刀二振也。御元服將軍宣下等之分也。自御元服日。三條御所有御坐。仍今日御禮等邊。下御所年始迄可有御座之由有沙汰者也。

晦日。申於三條御所。有御乘馬始。

武雜禮云。大永元年十二月晦日。於三條御所御乘馬始あり。御厩之前南面也。(御年十一歳也)。一御役者之事。伊勢加賀守貞遠御馬曳之。御鞭御寄伊勢又七貞能。伊勢守貞忠いだき乘申候也。小笠原六郎御鞭さしせ被申候。今日民部少輔二官途也。御鏡貞能押申也。

御厩前南面



御馬ハ管領河原毛也。惣別河原毛之事。御當家之御川之毛也。依之今日毛御川

後鑑卷之二百八十八

義晴將軍記第二起大永二年正月二日迄十二月二日

大永二年 正月小

十日。戊辰新賀如例。

元長記云。武家參賀。召進中納言。實宣公記云。今日武家江參賀如例年。各被給也。花山院大納言同道。御寺前御一參也。次細川くわんれいの禮。舊冬不報之間行向。他行之由申也。

十二日。辛酉於御所。申樂興行。

二水記云。傳聞。於武家。猿樂有之。武州申沙汰云々。

十九日。丁卯是日。大友備前守親治卒。

大友系圖云。親治。豐後守親繁三子。童名小僧丸。次郎。從五位下。備前守。法名梅屋。號見友院。母竹中氏。自義右一家相續。領豐後豐前筑後三箇國并筑前肥前之内。大永二年壬午年正月十九日於三府内館逝去。

豐府紀聞云。大永二年正月十九日。大友親治卒。牌銘。見友院殿梅屋大禪定門。

院殿梅屋大禪定門。

此月。有節分御祝。

澤聖阿闍書載

節分御一獻之事。

一御太刀二腰(金)。代二十疋申付之。

一御馬 一疋。但近年ハ代三百疋。在富方ハ渡遣之。

以上 御目錄之次第如レ此。但御自筆。

一御式三献料之事。百疋。近年ハ中島ニ申付也 一供御料事。三百疋。太田孫右衛門尉方ハ下行也 一鷹一。同太田

かたハ遣之。一搦引一尺。同太田かたハ遣之。一鷹一桶。同太田かたハ遣之。但到來次第也。一ふり。一桶。同

太田かたハ遣之。一御かばらけの物。數五組。壘二也。信濃ハ申付之。一御禮。(三荷定。但御用次第申付之。)中史

かたハ下行也。一御らうそくの事。大三丁。小十丁。一御舟の事。但大引二。小引。其外杉原數ハ不定。御料紙繪和

州ハ遣之。御調進。例年如レ此。一殿中御打大豆事。於供御所調進。御下行代二十疋にて。下笠次郎左衛門に下行

の注文等在レ之。供御の御す。へり御拜領之。

大永元年十二月十三日 聖阿闍有之

廿八日。丙子高國朝臣享散樂。左典廐渡御。

二水記云。傳聞。今日於三武州許二有「猿樂」。武家中入云々。

二月大

十七日。甲午左典廐叙從四位下。任參議。兼左近衛中將一給。

管別記云。大樹御四品并參議中將等有二禮儀。又是皆御推任也。當時高事御推任。是何事哉。代々御例。殊又慈照院殿御例。皆以非三御推任。二條并傳奏。伊勢守。攝津守等申沙汰也。悉皆道從之儀也。尤不可然。不可說也。上卿廣橋大納言。奉行職事右中辨賴繼。大內記爲康。大外記師象朝臣等參陣。儀已後。如例位記言官等各令持參云々。

二水記云。傳聞。武家御昇進。(宰相中將。御加級從四位下。有小除目。已上刻。上卿廣橋大納言參陣。奉行職事右中辨賴繼。執筆同勳之。今日陣之儀御推任也。公人下行爲「禁裡」被出之云々。但外記內記等沙汰代事。從武家「被」下之歟。元長記云。今日被行小除目云々。武家參議中將御任官云云。同御四品云々。

廿三日。庚子御參內始。

管別記云。大樹御參內始也。兼口依有參會之儀。攝參記。今日子第一也。參會衆。傳奏。廣橋相。帥大納言。中山中納言。

言。甘露寺中納言。上冷泉右衛門督。山科宰相。日野左大辨宰相。伯三位。頭中將重親朝臣。飛鳥井中將。雅繩朝臣。右中辨賴繼。左少辨伊豐。藏人侍從兼秀。白河侍從孝顯等也。於御直廬(長筒局)。御裝束。永家朝臣奉仕。御袍。御袴。綵色。蘇芳。紋桐。御指貫。濃物。二重織物。(丸白。御紋龜甲。腹白。)即常御所御裝。一獻如例。三獻之時。御馬御太刀御進上。(平輪分也。)御蓋之召出如例。武家罷近衆許也。廣橋以下。伯三位等也。四獻又有進物。御益香合。(桂漿也。)五獻進物。御給三幅。(中者王立本。腋者君澤。)今度天酌召出也。近臣參會衆等也。但右衛門督。右中辨等不參。六獻進物。御食籠。(居盆。)今度召出。御酌藤內侍。右衛門督始參入。七獻御進物。段子三段。(居盆。)召出可爲武家御酌之處。御幼少之間。帥大納言御酌也。此後御退出也。又於御直廬三獻。勾當給御折紙(千疋)且先例也。三獻之度武家御酌也。子第一參仕畢。尤祝着々々。此後還御。申一點許也。參會衆各參御後。乘輿之程踰躡如例。今日。葉室右中辨賴繼召出不參。非武家罷近衆之上。未聽常御所之間。不參勿論也。慈照院殿御代御參內之時。御前一獻及二大飲之時。傳奏。外樣參會之衆可召歟之由被三伺申。以三時宜被召出三事不及三度々。大略末津方只一度歟。右衛門督爲和卿今日始參會。法住院御時。父民部卿入道朝奉令三罷近。依之。以御執奏。御參內之

時。常御所令參畢。以其好今日令參會。候御直廬。剩三獻之御通可參之由。類所存之處。傳奏不可然之由被制云云。抑法住院殿御代始參會。同被聽常御所之上者。自其相續而可參仕之處。淡路御所御代至迄去年春。參會等右衛門督不參仕之條。今日之進退不覺悟。由廣橋被相談之間。尤令同心畢。六獻之時。始參常御所。尤爲朝拜也。伯三位雅樂王。彼一流元來外樣也。雖爲武家節朔之衆。代非三獻衆之處。淡路御所有別儀。(有御寵愛之事。依御執奏。三獻衆相加畢。仍今日不相替三獻同參仕畢。如後卿右衛門督。法住院殿以來參會等可令參次第歟。今日始參會。不得其意也。民部卿入道俗休之時。一身令參事者。爲各別儀歟。凡三獻召出之事。自往代別而有子細。許許令參之間。其人數不及多之儀也。故不及三聽望者也。當時以三聽望及御執奏之條。於子今者無曲者歟。仍前々皆存三聽望不及三聽望也。聽望尤不可然事也。

二水記云。今日御參內始也。(上京室町南行。一條東行。南折。東洞院南行。)已刻令參內給。(子時雨止。於三置石一即下輿。白御直垂也。)參會衆如例。(大樹向三上首一聊有御氣色。此事武州內々申入云々。可然事歟。於三伏見殿。密々令三見物一畢。今日辻固衆島山中付云々。傳聞。於御直廬(長筒局)被吹御衣冠。(御下結藤兵衛督永家朝臣奉仕也。近日有

違時宜一事。依着直垂。參此所許也)被參御前。三獻御酌如例云々。從三獻至七獻御進物(御馬。太刀。給三幅。居盆。食籠。居盆。益香合。段子三段。居盆。)五種云云。於御直廬三獻了御退出。子時申刻也。今日供奉衆五騎歟。御劍右馬頭役也。

三月小

三日。庚戌六角彈正少弼定賴上洛。

二水記云。午後。近邊衆令誘引。六角上洛之見物也。於東山十等寺前。一見之。未刻令上洛。數十人也。各美麗。目了。殿助往年記云。大永二三月三日。六角少弼上洛。廿キ。人衆三千計云々。

五日。壬子細川高國御直垂拜受。○此頃。勸進能與行。

伊勢貞助雜記云。右京大夫高國朝臣へは。大永二年三月五日。に公方様よりからの御ひたれと。むらさきのそめわけの御しりがい。を拜領候而。則其日大追物外檢見ありし事。希代の面目の由。尤有其沙汰事也。内檢見へ小笠原民部少輔。於三高國馬場二百疋在之。二水記云。已刻。觀世勸進發樂令見物一也。從今日始也。近衛坂。姉小路等令同道。於三笠瀨六棧數見之。

十四日。辛。諸人奉賀御昇進。

二水記云。傳聞。今日武家參賀有之。御昇進御禮云々。今日朔之衆云々。

十八日。乙。伏見貞敦親王來視三條御所。

二水記云。參伏見殿。三條御所御見物也。令三供奉。

四月大

三日。己。將軍家渡御六角定頼亭。

二水記云。傳聞。今日。佐々木彈正少弼武家中入云々。旅所法華堂。本能寺也。

廿七日。癸。右京兆馬場有犬追物。依之渡御。

二水記云。傳聞。今日。於細川馬場有犬追物。武家御見物也。仍右京大夫被官衆不射之。奉公衆計也云々。

伊勢家書云。大永二年四月廿七日。細川殿高國馬場御成日記。日記付伊勢六郎左衛門尉貞久。再拜本郷龜松。右筆伊勢守貞忠。

勿犬追物手組事。

藤兵衛督。(四疋。)

桃井治部少輔。(六疋。)

大和彦三郎。(六疋。)

細川六郎。(十八疋。)

進士九郎左衛門尉。(八疋。)

伊勢加賀守。(九疋。)

小笠原兵部少輔。(四疋。)

種村刑部少輔。(六疋。)

右京大夫。(十一疋。)

檢見。

小笠原民部少輔。

大永二年四月廿七日

犬追物手組事。

藤兵衛督。(八疋。)

大和彦三郎。(六疋。)

小笠原兵部少輔。(四疋。)

進士九郎左衛門尉。(九疋。)

伊勢八郎。(十二疋。)

細川六郎。(十五疋。)

檢見。

小笠原民部少輔。

大永二年四月廿七日

五月小

十日。丙。辰。六角頼定下國。

二水記云。傳聞。佐々木彈正少弼今日令下國云々。

廿八日。甲。依江州保坂關務事。奉行人等傳仰

於朽木某。

朽木文書載

小林小五郎國家申江洲高島郡保坂關務一方公文分事。對御下知二數十ヶ年當知行無相違之處。近日横田孫次郎無謂致三押妨之企云々。事實者。好而招三其咎者歟。官語道斷次第也。所詮若令三亂入者。進可被三退三競望之儀。次彼關務公用事。近年寄三事於左右。減少之條大不可。向後如三先々。嚴密可被三執沙汰。更不可被三離三之由。被三仰出一候也。仍執達如件。

大永二年五月廿八日

賴忠列

長俊列

佐々木朽木殿

六月小

六日。辛。引進神馬於祇園社。

祇園社記載

祇園社御神馬登定(河原毛。印兩目結。)可三進進之由。所被三仰下二也。仍執達如件。

大永二年六月六日

祇園社御師

十三日。戊。子細川高國參宮。

廿七日。壬。祇園會御覽。

二水記云。傳聞。今日有京大夫令三參宮云々。依御不例一也。京極中沙汰也。爲三舊例云々。御棧敷八ヶ間也。坤角方被三和構了。山鏡等。等持寺前東行。御所前南行渡之。七日山鏡等渡了。於御所一獻云々。數刻後十四日山鏡又渡也。此間雨脚下。無與之林也。武家今日早朝渡御三條御所云々。

祇園會御見物御成記云。大永二年祇園會爲三御見物三御成之時。從三上平一御一獻三付而。次第山鏡爲三御見物。下御所江波御。一御供之事。御劍役細川右馬頭。同九郎。大館兵頭。細川駿河守。一色兵部大輔。伊勢守。伊勢左京亮。千阿。一走衆。飯川能登守。結城八郎四郎。安東平治那。安成兵部少輔。沼田彌五郎。小林小五郎。一御一獻有之。佐々木中書入道(京極殿。)申沙汰之。一御相伴衆。鹿苑院。日野殿。右京大夫殿。一此外祇候。藤兵衛督。細川民部大輔。大館伊豫入道。其外申次衆。攻衆等也。一京極中書進物種々有之。岩山民部少輔祇候也。

廿九日。甲。辰。從下御所一還御。

祇園會御成記云。早朝還御。一御供衆同前。但駿河守。伊勢

左京亮兩人。依三所勞二不登云々。右條々。大館伊豫入道殿被二相注。以二自筆二寫置之。還御御供衆。細川右馬頭殿。細川九郎殿。大館兵庫頭殿。一色兵部大輔殿。伊勢守殿。吉阿。走衆飯川能登守。沼田彌五郎。小林小五郎。安東平次郎。結城八郎四郎。能勢彌太郎。一御進物次第。式三献。御鏡。銀劔。御征矢。御弓。但代物五千疋參。七日分山鉾有御見物。還御之後。初献。御太刀一腰。(盛景。)御馬一疋。(以二目錄二掛二御目。三)御見物。還御之後。五献。段子三端。御盆一枚。(堆紅。)七献。御香合一。(堆紅。)御盆一枚。(堆朱。)九献。御太刀一腰。(國安。)

目錄

進上(爲二御名代。岩山殿道堅モ御祗候。爲二御兄弟。目錄被レ調候處。京兆以二御意見二被レ調之。)
御太刀一腰。(盛景。)
御馬一疋。(鞍毛。印雀目錄。)
以上。

中務少輔。(御名乘被レ遊かた付可有レ之由候つれ共。御書のうら付無之事候間。唯御字計可レ被レ調之旨。岩山殿御存分候つれ共。御判なき物候間。御官計被レ調可レ然由。京兆御意見。扱

如レ此に相調候。

一 式三献參。
初献。
鳥。
五しゆ。
二 献。
ひや參。
三 献。
くらげ。
御ゆづげ。
たこ。
あへま。御ゆづげ。
かうの物。かまぼこ。御ゆづげ。ふくめ鯛。
二。
御引。
にし。
からすみ。
三。
すし。

かいあはび。御しる。(かん。あつめに。)

さかれます。

おちん。

くらげ。

いか。

五。

はむ。

さしみ。

あひ。

御くわしあり。

御さかな。(よこむ。)

のし。

たこ。

五献。

まんぢう。

六こん。

しほびき。

まきするち。

七こむ。

うけいり。

御そ(物。(ひばり。)

かん。

がん。

やうかん。

八こむ。

はむ。

くるく。

九献。

いりこ。

かいあはび。

以上。

御そ(物。(さしみ。)

あひ。

あゆ。

御汁。(たい。わらび。)

くるく。

ひしほいり。

是月。於ニ西國。尼子經久發向藝州。毛利元就陷ニ鏡山城。

安西軍策云。大永二年大内義興數萬騎ヲ卒藝州發向。尼子一
味ノ城四五ヶ處攻取。即同國鏡山ニ城ヲ築。藏田備中守。同
日向守ヲ撤置。我身ハ筑前へ小田龍藏寺亂入到來ニ依テ。藝
州ヲ開陣シ給フ。平賀。天野。阿曾沼。竹原一味シケレバ。藝
州半國ハ大内ニ屬シタリ。毛利。吉川。武田ハ尼子ト縁者親
類ナレバ皆尼子方ナリ。尼子經久鏡山ヲ攻メントテ藝州へ發
向。先陣ハ毛利元就。吉川治部少輔元經ヲ被レ頼。龜井能登守
ヲ爲ニ檢使ニ被レ差添。六月十三日寄手城下ヲ放火セシカバ。
城ヨリ突出終日戰。打入ントスル哉。多勢隘路ニ引ツドヒ

進退心ニ不任。城兵多討レケル。其後尼子モ。銀山ノ向下見
崎ニ陣ヲ取。元就ハ城下滿願寺ニ陣ヲ寄。無レ障攻戰。藏田モ
能兵ニテ城ヲ堅固ニ抱タリ。此時元就運レ籌。藏田日向ヲ方
便リ。惣領備中ヲ討テ出サバ彼ガ領地ヲ可ニ宛行。無レ左バ落
城後處々ノ一門ヲ可ニ打果。所詮ハ名字ヲ斷サシランコソ好
ラント云遣給ヘバ。日向領掌シテ元就ノ七百餘騎ヲ二ノ丸
ヘ引入ケレバ。備中俄ニ本丸ヘ取籠。拵楯カキ一日一夜防戰
ス。寄手ノ惣勢モ概テ費上レドモ。本丸節處ニシテ無レ左右
難レ落見エケルガ。備中ガ頼切タル兵三十九人討レケレバ。
備中ハ無力トテ。元就ハ妻子ノ命ヲ乞。自ハ腹搔山失ニケ
リ。八歳ニナル菊法師。其外妻子ヲ助ケ。本原備中ニ預給フ
ガ。後藏田市助トテ元就ニ奉公シケルニ。勇者ノ名ヲ得タ
リ。其後日向守ハ猶子ナガラ。惣領ノ備中ヲ殺不義無レ謂ト
テ。尼子被レ殺ケリ。扱元就ヘ。今度ノ戰功偏ニ在元就。藏田
ガ領地無レ殘領知シ可レ給ニ定リ。七月五日經之ハ雲州ヘ歸
陣。元就ハ經ハ雲州ヘ打入給也。

七月大

是月。六角定頼攻ニ近江日野城。

長享年後畿内兵亂記云。二年。定頼公七月國日野蒲生城。

八月小

四日。戊寅。是日。爲ニ管領入洛法樂。宗長法師千
句連歌張行。

宗長手記云。伊勢大湊へわたり山田につき侍り。則參宮す。
かれて立願の事ありて。當宮に在いて千句宗碩法師さそひ
くだし侍り。七月下旬下若。頓て八月八日よりはじめ。毎日
二百韻兩吟。五日にはてぬ。此千句の事。今の官領高麗江州
より御入洛の刻。御法樂として立願申せし事なり。紫野大徳
寺(一休の寺。眞珠庵の傍に有し時。御芳恩且は其謝とも可
レ申にや。第一の御發句京都より申下す。

あさ日かけ四方にはへるかすみかな。高國
梅咲てあらしもなびく柳かな。宗長

十一日。酉三雲源内左衛門依ニ白傘袋。赤毛鹿鞍
覆御免。有ニ獻物。仍給ニ御書。○北畠具康叙ニ
從五位上。

御内書案載

就百傘袋。赤毛鹿鞍覆御免之儀。太刀一腰。家助。馬一
疋。(赤毛。印雀目結。)青銅五千疋到來。目出度候也。

八月十一日

三雲源内左衛門とのへ
歷名土代云。從五位上。源具康。大永二八十一。

十四日。戊戌。御相國寺。

二水記云。武家爲ニ御燭香。渡御于相國寺云々。

十六日。庚寅。島山尾張守尙順卒。

畧年代記云。大永二年壬戌八月十六日。島山殿下山他界。
祐維記廿七日條云。去十七日。尾州於ニ淡國一頓死云々。必定
也。去年此院有レ之。雖レ然雜說也。近般當國へ可レ被ニ打入ニ旨
用意之處。万歳々々。偏神慮云々。

二條寺主家記云。八月十六日。島山殿下山他界。國ニテ死去
也。

島山系圖云。尙順。尾張守政長子。尾張守。常徳院殿賜ニ御一
字。父生害之時十三歳。自和州入ニ本國。十八歳隱居出家。
法名ト山。號ニ勝仙院龍源。又號ニ德陽。

十月小

七日。庚辰。細川被官出陣。

二水記云。傳聞。今日右京大夫被官入丹波國人丹波國人大涯出陣云
云。浦上爲ニ合力ニ也。近日牢人令ニ峰起。四國衆又出張之由雜
説。仍京兆邊及ニ談合云々。

九日。壬午。大寶寺晴氏叙ニ從五位下。任ニ左京大夫。

歷名土代云。從五位下。藤晴氏。同二十九。同日左京大夫。

十二日。乙酉。御慈照寺。

二水記云。傳聞。今日武家渡御于東山慈照寺云々。

十一月大

二日。甲辰。此頃。有ニ播州牢人上洛風聞。

二水記云。風説云。播州牢人與ニ浦上ニ合戰事。或稱ニ和睦。又
不然而云々。各入國必定。彼是共以無實説。京兆邊定恐怖云
云。

十二月大

十九日。辛卯。北畠具房叙ニ從五位下。

歷名土代云。從五位下。源具房。同二十九。

廿七日。己亥。諸家參ニ賀歲抄。○就ニ石清水神燈油

事。有ニ被ニ仰下ニ旨。

二水記云。傳聞。武家歲暮。諸家禮有レ之云々。

諸家文書案載

御判

石清水八幡宮大山崎神人等申請國散在程胡麻油賣買事。
早任ニ去文和元年十一月十五日。明德三年十二月廿六日。
應永廿一年八月十六日。正長二年八月十二日。康正三年四
月十三日。延徳二年十一月九日。文應二年十二月廿七日御

判之旨。諸國渡津料不可有。其煩。次諸葉課役事。彌可令停止之狀如件。

大永二年十二月廿七日

後鑑卷之二百八十九

義晴將軍記第三起大永三年正月

大永二年未

正月大

十日。壬無御參內。○公武參賀。

二水記云。武家參拜如例云々。今日無御參內。子細何事哉。元長記云。武家參賀。中納言歡樂之間予所參也。

二月小

三月大

廿一日。壬岩城修理大夫謝官途有獻物。仍給御書。

御內書案載

爲官途之禮。太刀一腰。(成宗)馬二疋。(鹿毛。鶴毛。黃金。卅兩。)到來。珍貴候也。

大永三年三月廿一日

岩城修理大夫との
廿六日。丁御參內。

二水記云。今日御參內也。當年初度。正月十日。聊有子細御延引。今日珍重也。午刻令參給。其儀如去年。不及巨細。於御前二五獻了。於長橋局三獻如常云々。右衛門將(爲和)今日三獻御酌之時令參候云々。此間連々申了。定爲祝着。歎。例年之儀。兩傳樂日野飛鳥井等外。雖爲參香。參會之衆不召出也。及三五獻之時。各有召出爲常。是月。怪物飛行。

高代寺日記云。三月。光物自東西二飛去。

閏三月小

五日。丙子足助中務少輔氏秀叙從五位下。

歷名土代云。從五位下。源氏秀。大永三壬三五。

廿日。卯依島山尾張守植長獻物。給御內書。

應右集載
就入國之儀。藥方エ太刀一腰馬一疋到來。日出候。聆晴

光可申候也。

閏三月廿日

尾張守との

四月大

九日。己前將軍義植公於阿州撫養薨去。

足利系圖云。大永三年四月九日。於阿州撫養薨。五十八歲。

號惠林院摩山道滿。

公卿補任云。權大納言從二位源義植。(五十八)氏長者。獎學

淳和兩院別當。於阿州撫養。四月九日薨給云々。數年後風

聞。號惠林院殿山。天文四四八贈太政大臣從一位。少納言

長雅朝臣向相國寺。○同四年補任云。四月九日。於阿波國

薨。(此事無風聞。依不任替。大永七年四月比內々奏聞。)

相國致記云。四月九日前將軍義植薨。法名道舜。號殿山。安

御牌於惠林院。乃號惠林院殿。

十八日。戊青蓮院宮依相論事出奔。

二水記云。青蓮院門跡今曉御返電云々。勝事儀也。此題目者。今度智恩院與知恩寺有相論事。依此事也。門跡者智恩院之義被執申訖。巨細之儀。依可登筆力。不能記之。

五月小

十三日。癸青蓮院宮渡御大和內山。○日野中納言內光卿招請細川高國於其亭。○此日。洪水。

二水記云。青蓮院宮近日渡御子奈其邊(在所內山云々。大和國歟)之由有沙汰。今度万里小路爲宮御方御使下向

高野一也。乃先渡御子內山(此寺住持者。万里小路會弟也。)

歟。且珍重也。今日。日野中納言亭招請右京大夫一也。

二條寺主家肥云。五月十三日大洪水。佐保田庄悉令破損。在所々破了。八幡御社以來洪水云々。

六月小

六月小

十日。己依青蓮院宮進退事被遣御書。

伊勢貞助記載

今度御進退之儀驚入候。早々歸室可目出一候。猶員充可

申候。恐々謹言。

六月十日

青蓮院殿
御列

青蓮院殿

員充至和州內山。爲御使下向。御內書持參。直被派申之。

十三日。壬青蓮院宮歸洛。○浦上掃部助則宗依

白傘袋。毛氈鞍覆御免。有_二献物。仍給_二御書。
二水記云。背遊院門跡今日御歸洛也。爲_二御迎_一。廣橋大納言。高倉少納言。姉小路少將等參_二城南_一。伏見。各直垂。乘物也。
(廣橋小典。少納言馬。未明下向了。申廻許各歸宅了。傳聞。門跡今日已刻許渡_二御城南_一。從_二宇治_一御乘舟云々。於_二般舟_一。三味院。有_二一獻。此儀了廣橋已下歸宅云々。門跡又御歸院云云。爲_二武家御使_一。伊勢右京亮去十日下向。十一日參_二岩内山_一。昨日令_二歸洛_一云々。
御内書案載

爲_二白傘袋。毛氈鞍覆救免之禮。太刀一腰。(貞守)馬一匹。
(河原毛。印兩目結)鴨眼五千疋到來。日出候也。
六月十三日

浦上掃部助とのへ

廿五日。甲子。前左府實香公與_二細川被官_一。有_二塚論事_一。

二水記云。入_レ夜。參_二前三條左府家_一。有_二地界相論之事_一。太以及_二物忿_一了。相論相手細川被官也。名字堀云々。(一本爲_二廿四日事_一)

廿六日。乙丑。依_二塚論事_一。洛中物忿。

二水記云。三條家依_二昨日喧嘩事_一。今日細川馬廻之衆押寄云

參勤可_レ申候間。可_レ預_二御心得_一候。

來五日晝時分。私宅へ御成御坐候。可_レ有_二御參勤_一之山。被_二御出_一候。

七月廿九日

伊勢守

一御相伴日野殿。(内光)冷泉入道殿。(宗清)右京大夫殿。(高國)依_二翌日御禮被_レ申_一之。堂上御兩所へは御太刀。京兆へは御馬。御太刀なり。一御供。同朋吉阿。一式三獻參。御手懸へ不_レ參。先規如此云々。中島調進之。一一獻方。御前并御相伴衆までは下津屋三郎左衛門調進之。一御供衆走衆以下一獻方。堤三郎兵衛尉申付之。一御走衆六人。御小者六人。一獻以下申付之。御小者之相伴へ。淵田與三左衛門尉也。

條々可_レ有_二用意_一事。

一御坐敷失禮奉行。一御坐之事。一御屏風等之事。一御中よりめしの御てうしの事。一御てうしたての事。一御くちながの事。一御ばんたての事。一めしの御ゆのひさげの事。一御らうそくの事。一めしの御酒冷道具の事。一御前の事。一御茶の湯。小日記在_レ之。右小注_レ之。一御は入さう。たらひ。同御手のい。同は入さうぬぐい。小日記在_レ之。一御うがひぢやわん。一御硯。御料紙。一御四淨。内棚。雜紙。一柄杓。御手水桶以下。一

云。仍忿_二參彼等_一。堂上地下之衆悉以群集。談合評定。物忿無_二是非_一次第也。右京兆方度々以_二使者_一被_レ示_二此旨_一。返答之儀。委細得_二其意_一了。強々之儀曾以_二不可_レ有_レ之。堅可_二申付_一之。仍且安堵之處。勢任事一定由。從_二方々_一告來。恐怖此事也。公家此時以及_二滅亡_一之由。各相議之砌。從_二京兆_一有_二使者_一。堅固申付之間。不可_レ被_レ苦之由示_レ之。各成_二安堵_一之恩。訖。抑今度背門御事不慮之出來。今又如_レ此。凡公家儀如_レ踏_二源水_一。可_レ慎之。右京大夫每々穩便之儀。尤大切之事也。可_レ感之。

七月大

是月。毛利幸松丸卒。元就繼_レ家。

安西軍策云。大永三年。毛利幸松丸殿御逝去。義晴ノ命ヲ蒙リ。元就毛利家ヲ相繼シ給フナリ。
毛利譜云。大永三年七月幸松丸卒。元就家督。

八月小

五日。卯。伊勢守貞忠亭。

伊勢家書云。大永三年八月五日未刻。伊勢守貞忠亭へ御成。公方様御十三歳。貞忠四十一歳。一御供衆次第不同。細川右馬頭殿。島山大郎殿。大館兵庫頭殿。細川九郎殿。一色下總守殿。細川駿河守殿。伊勢備中守殿。伊勢左京亮殿。(御門役

おりに。街てのいあり。一御小便所。かけ籠あり。

一要戸。かけ籠あり。一御こんりう。おふと。三ぞく。

一御こしたて。一御賑は公人。御こしかき以下。御櫛被_レ遣_レ之。小日記在_レ之。

一御門こちやうちん二。一御茶湯之日記右に注_レ之。同前。

一御進物奉行。(堤新左。倉内民)翌日以_二御注文_一御進上。御使(堤新左。倉内民)殿中へ持參申。御供之同朋(渡。注文引合暨_二配_一之。一御小者坐敷。淵田與三左衛門宅也。相伴淵田與三左。配贈之人數。(河田小三郎。下笠又次郎。河村又五郎。宇野與次郎。關藤彌七)一公人御應者。御輿昇。御牛飼。車ぞへ。舍人。河原者以下櫛被_レ遣。小日記在_レ之。一右京兆供衆。藥師寺。長鹽。波々伯部。一獻在_レ之。蝮川式部丞所にて一獻有_レ之。同中間衆へも櫛被_レ遣之。一同名衆御太刀にて御禮。(備中守。左京亮。又七。猿千代。加賀入道。又次郎。八郎。右京亮)翌日_二實殿如_一御進上。以_二注文_一申上。杉原折紙なり。御太刀持_レ之。一あかり御膳の事。女中へ拜領。先規如此云々。一御供衆配膳。(蝮川三郎。同孫右衛門。三上與次郎。倉内民部丞。堤小三郎。高岡右京亮。蒲生伊賀守。在江彌四郎。古市彈正忠。淵田與三左衛門)一御膳。御手長。蝮川新右。(親順)同左將。(貞誠)同彦三郎。(親典)一御走衆配膳。(蝮川孫

三耶。野依又四耶。三上與三左衛門。杉江主計。橫山雅樂助。古市次郎。河井孫三郎。淵田與五郎。河村小四郎。橫井新四郎。御進物目錄別紙在之。觀世大夫并其外各二ハ被レ遺折紙等在之。不及及寫置。

十四日。壬子。依法住院將軍十三周忌。渡御彼院。相國政記云。八月十四日法住院殿十三年忌。府君義晴就于法住院。設於大法會。特命萬松主盟。宗山和尚。陸座觀法。法語中云。台靈法諱見々。尊號即是山僧蒙府殿命。書旭山二字。以奉之。見于惟高和尚萬松院殿小祥忌座。

九月大

十五日。壬子。於殿中護摩修行。大永二年不動護摩日記云。十三日天雨。午刻。自大館伊與入道一書狀到來。從明後日。十五日。於殿中護摩可有御參勤之山被仰出。無相違可有存知云々。無餘日。彼是不合期之條。雖有御迷惑。邂逅之爲御祈禱之間。不能申之。則御請被申。予則登山。以報恩院內々被仰出之趣。門跡江申入之處。今朝自大館入道。以折紙當院江被仰出之旨被申入。自出度思召之由御返事也。前々者。自傳奏以御教書。直被申者也。今度之被仰出。御無案內之故歟。如何。一香鈍色事。以二大藏卿上坐。門跡御

裝束申渡之。一減金佛具。報恩院借用了。一以永增御祈言趣。道場并休所之樣狀。供料等之事。尊法可有申歟事條。大館被相尋了。一供料千疋。自勢州可有下行。供僧不召加之。御一身可有御參住之由。一々返答了。十四日降雨。自正御房先御出京。十五日天晴。法印。永增律師出京。壇場之料理。可三見計之由申付之。予出京。御宿坊參着。岡伽棚假新調之。足桶蓋。御撫物机。(六足。帳蓋木等新調。其外大壇脇机二脚。禮盤等。此間太元之護摩被用古物也。シラケサセラレ畢。新調。西半刻。殿中二御參。御樂與。御供。丹後法橋。(白袴。小衣。)岩千世。彦八。小三郎。彦九郎。千鶴。千菊。其外中間四五人也。其後予又參。同乘與也。先左衛門督局御出。予同罷向。修中之義取合可有等閑之由也。御祈奉行細川治部少輔。進士九郎左衛門尉兩人也。御作事奉行金山民部少輔以下終日壇場之代見計之云々。御撫物之事。右馬頭御尋之由也。至御時之時刻。大館兵庫助持參。永增律師請取之。於道場被渡之。承仕給次也。六足之上置之也。二尺計之御腰刀袋(綾紅梅)被入之。御觀蓋二居之。閉白無事珍重也。神供予行之。御了聞也。

十六日。癸未。護摩法御聽聞。大永三年護摩記云。十六日天晴。初夜時御了聞。今日於殿中大殿若有之。相國寺僧衆云々。正五九月。今日必被行

伊與同入來。先日御懇之至。長存之由也。以其次。御加持之事任被申。則披露之處。然者明日御加持可有之時刻重而可被仰出之由也。一色七郎御宿坊入來云々。初夜時御了聞。

十八日。丁酉。御加持。大永三年護摩記云。十八日天細雨。御加持午刻。大館兵庫助中次也。御裝束香鈍色同裝等如常。御退出之後。重而以兵庫助。明日猶御加持可被申之由被仰出。御咳氣今日猶被得御減之條。御祈効驗。公私大慶之由。面々被寶申。御粟一折。進上。左披露。佐局(大館。一荷二種被遣之。於左衛門督局見參有之。少納言上座。門跡御使入來。神事々。御再與治定。可有御存知之由也。德院。予細川治部少輔爲御使罷向。粟一折被遣。進士九郎左衛門尉。御權一荷兩種被遣之。同予罷向了。入江殿祇候。御對面。御進被下了。御粟被進上也。初夜時御了聞。神供予行之。慈心院。殿院來。昨夜進士一瓶隨身。於左衛門督局。孟酌有之。治部少輔以上雜談。利口催興了。進士治部少輔御宿坊御禮被了。

十九日。戊戌。御加持如昨。大永三年護摩記云十九日。天晴。御加持有之。中次如昨日。

之。仍休所指令之由。內々被示之間認之。早且御退出。本尊壇上等之儀。御拜見云々。日中時。後夜之事。若殿中有御差合。同者日中行。可有御了聞之由。內々爲上意之旨。御祈奉行入魂。自正御房被申云。自他門一日中之時。後夜之事。大都此分候哉。雖然日中二御了聞有度。一座ナド之義ハ。可任上意之由被申入了。左衛門督局御出。御權一荷兩種。予罷向。一色七郎。進士。諏訪信濃守。珍阿彌召寄。一蓮有之。大館伊與入道。同兵庫助許江御出。各一荷兩種被持之。予同御同道。御作事奉行金山民部少輔。御宿坊祇候。御目出度存候由也。彌一祇候。平家二三句申之。此間一部被語之內也云々。

十七日。甲申。護摩如昨。大永三年護摩記云。十七日天曇。細川治部少輔祇候御前之處。日中之時。ヤウク之由爲上意之間。後夜御時。日中候事。先規。雖然爲御了聞。日中可有行之由於上意者。一座日中可有被行之之由。阿爾梨被中之趨披露之處。勢々不可有其儀。如前々可有行之由上意也。御懇儀長存之由被申入。然之由入魂。通被申入。畢。右馬頭參御休所。數雜談。御宿坊之事。陽源菴可被爲在所之間。懇申付之由也。雖然珍阿彌許無子細之間。不可及移住之由被仰了。伊勢備中守。同加賀入道御禮被了。大館

後鑑卷二百八十九 義晴將軍記三 大永三年九月

御退出之後。猶殿中可有祇候。於三休所。御酒可被勸之由上意之趣。兵庫内々入魂。仍不能御退出。右馬頭。伊勢守以下爲三相伴。雖被召。勢州所勞。右馬頭夜。就喧嘩之儀。之故不能祇候。仍細河駿河守。(右馬頭弟。大館兵庫被出。兩人。御土器等(五種)被儲之。於三休所九間之内。自屏風四方。一獻在之。御相伴細河駿河守。大館兵庫永增等也。予同罷出了。配膳用阿彌。御末者下津野與二郎以下也。一獻之後。細河治部少輔。伊勢又二郎。進士九郎左衛門尉。三上彌三郎等。其外珍阿。罷出。及大飲。岩于世召出。詔之式。當于時。面目者哉。上意御怒之段。阿彌梨御名譽。不可說之事也。自酉半起至戌半起。及三數盃。仍御時遲々。雖有御迷惑。尙御酒可被下之由。度々被仰出之條。不能是非者也。及承仕。(幸順。駝士(千鶴)等御酒被下云々。此事治部少輔下知歟。初夜御時御了。大館兵庫御宿坊被參。同三郎爲伊與入道代官。入來。御見參了。

廿日。丁御加持如例。

大永三年護摩記云。廿日天晴。今日猶御加持有之。申次如昨日。予未御禮不申入之間。以此大懸御目度之由。内左衛門督局談合之處。可然之由異見。仍以御太刀(金)御禮申畢。申次大館兵庫助也。先僧正御坊御加持御參。則於御前御盃被下。其後予御禮申。則御對面。御盃頂戴。退出

了。面日之至。祝着不慮之者也。御酌大館兵庫。御次祇候衆佐五局。左衛門督局。御乳人。大館伊與入道。島山二郎等也。其後於三佐五局。一盡興行。左衛門督局。御乳人。大館兵庫。伊勢右京亮。進士九郎左衛門尉。三上彌三郎。海老名將監。以下也。島山二郎依三上意。局被來之間彌催與。及三數盃了。此事珍阿彌於御前申利口。島山二郎局令誘引云々。局左衛門督局。一荷兩種予遣之。於局一盡有之。進士伊勢右京亮。與法寺等也。自門跡以三寺主。神事方之儀條々御尋。五智院口說之分。予一々御返事申了。初夜時御了。神供予行之。

廿一日。戊護摩結願。

大永三年護摩記云。廿一日天晴。御結願。修中無事珍重。御卷數予認之。自昨夕。道場角御撫物机立立之。以三館兵庫。御卷敷進上之。同御撫物永增渡之。御咳氣悉御本復。來廿五日東山松茸山可有御成。併御祈禱効驗之由。諸人嘆美被申了。佛具木具等悉運送宿坊之後。殿中御退出。宿主珍阿彌。御撥代御看兩種被遣之。和之事。馬場之間。御下知可被申返之由。昨夕注進之旨。高田將監申來。修中如之吉事。尤以珍重々々。則御入寺。御乘輿。御供衆以下如先日。一機布事。承仕請取代物。直布雖可令用意。前之布敷之也。仍以別人用意之。一段別百四尺云々。機布四

十二月大

廿三日。己千秋將監晴季叙從五位下。

歷名土代云。從五位下。藤晴季。同三十二廿三。

此年。命明人宋素卿聘明國。播州合戰。

高代寺日記云。今年始而商人船大明へ渡ス。高國コレヲ沙次ス。

段。禮敷一段。以上五段用意了。懸革在之間。承仕不及三下行。一木具事。四方阿伽折敷。二手水桶。三厨櫃。神供桶。二(無拘)。佛具。洗桶。一已上駝士請之下行。此間大元護摩之時之分也。但少加増在之。一桶奔走。丸間伽折敷。古物無子細。不能新調。一御佛供之事。十六杯五合。佛供。前々護摩之時。或四杯。或六杯備之。今度以殿重之儀。如御修法備之了。此餅菓子下行。此間大元被用分下行也云々。駝士請取之者也。一世林之事。如大元護摩之時。下行了。御撫物机事。先規四足或六足也。祖師公殿僧正六足加用意了。今度被用此說。一本尊左。御撫物机置之事本法也。今度可爲其分之處。御了御指合之間。右可置之事如何之由上意問。右被置之了。一神供予行之。承仕一人。(幸順。駝士一人。(千鶴)一御佛供櫃事。長櫃無之。俄用意不事行之間。此間大元之時。略儀ニテ被用足長ヒツ被用也。向後長櫃用アルベキ歟。一御加持之事。初中後三度可有之由雖三思食。初日御忘却之間。中日ヨリ以後三々日ツツケテ。可有之由被仰出了。

十月小

十一月大

國朝獻儀錄日本志云。嘉靖初。其主幼冲不能制羣臣。右京兆大夫高直使宋素卿貢。亡何。左京兆大夫內藤與連宗殿

貫。成強請勸合。後先至寧波。爭長不相下。宗設乘盛於宋。遂攻敗之。追北至紹興。諸郡縣。剽掠以千計。都指揮劉錦及千戶百等官遇之皆死。後以紹指諭。且下宋案刑獄。始肯聽徐々解。自是有輕中國心矣。

國書島夷志云。嘉靖二年。其四海道大內誼與見林按。誼與誼與同。道僧宗設入貢。居數日。案刑復爲南海道海川高國。見林按。海川海賞作細。所道與僧瑞佐以來。皆止寧波江下。故事番使止寧波。有宴。先至者居上。案刑前市舶大監義。先因宴之。坐上坐。宗設乘不平。攻瑞佐殺之。追逐案刑。抵紹興城下。案刑置入慈谿。縱火掠。指揮劉錦與戰死。遂蹂躪兩寧紹間。

蒼霞草日本考云。宋案刑。嘉靖二年再奉使。至是時。國王源義植厚。賭島爭貢以邀利。大內與與道宗設。謀遣先案刑一至。俱留寧波。故事使以先後至爲序。市舶中官賴恩。案刑財。先案刑。宗設大怒。相繼殺。我指揮劉錦。大掠寧波。奪舟去。巡按御史以聞。禮臣仍右案刑。以給事御史官。乃下案刑獄。論死。沒其貨。絕貢者十七年。

赤松再與記云。大永三年。屋形方人等蜂起。播州大騷動。此時但州住人山名次郎。乘隙入于播國。永良。東浦上衆。立計清戒焉。蓋揭言郡敵。而與二仙州山名之軍。決一戰也。既而和議成就矣。翌日因備守村國變。約執戰。浮田能家據嶮牛

日。小勇四郎戰死。能家欲入軍中。決死生矣。敵軍忽潰。擊數千人首。而獻于村宗云々。細川加勢。村。河原林視之。皆高國。以三惑書賜浮田能家。

赤松記云。大永三年。方々に居申候屋形方一味。伊豆孫次郎殿。浦上因備守村國。小寺藤兵衛。其外れき。催し。淡路國よりふくとまりへ舟をつけ。大買うへの高みれと申山に陣どりしを。浦上掃部助つめ候所に。但馬口より山名どの亂入候間。俄に和陸をあつかひ浦上陣を引申す。されども御座の地をしたひ合戦に及び。城衆打候。浦上は室津まで御いれ。其後備前へはたされ候。然れば但馬衆は長良口より入長良の城に居陣候。山名殿屋形を立しに。い

さんをも打破候。彼増井阿彌陀坊と申に。我等荷物預け置。性善院殿の御判。御惑得悉失ひ候。不及是非候。扱又先年逆心にて。さき山にて御果候播州の御子。とくほうじ殿と申て丹波に御座候を。浦上室津へよび出し申候。其時は有田殿は浪人衆一味にて野間をしつらひ。浪人衆のたまりにいたし候へども。野間の手あてに自然の時さしむけらる。謀によび出し申さる。其比徳法師殿法林被成。寒松軒と申候。然則室津より有田の庄へ入部被成。野間より則人數をいだし合戦度々あり。寒松軒打討死被成候。崎山にて播州一味し果候。得平源二子を源太と申。寒松軒につき参しが。有

田にて討もらされ。後には有田殿衆になり。たよりにて高見對馬と縁者になり。我々知行押領し候。上より度。有田殿へ被仰候へども。其頃は東西わたりたる林にて。公儀をもしかじか。東方を西には用候はの時分にて。兎かく延引候。

後鑑卷之二百九十

義晴將軍記第四 起大永四年正月 迄十二月

大永四年甲

正月小

十日。丙新賀如例。

元長記云。武家并諸家參賀。召進中納言。

十三日。甲。此日。於關東。北條氏綱與上杉朝

興一合戰。

東風記云。大永四年正月十三日上杉ノ家老太田源六。同源三郎謀叛ヲ起シ。小田原衆ト引合相圖ヲ定シカバ。則レ不レ移シ時刻一北條新九郎氏綱伊豆相摸ノ軍兵ヲ引率シテ江戸ノ城ヘ寄玉フ。江戸ノ城主上杉修理大夫朝興居ナカラ敵ヲ請ルハ

廿八日。己御所引遷事。伊勢守貞忠等申達管領

高國。

御作事日記云。大永四年正月廿八日三條御所上京へ可被引移之事。伊勢守貞忠。常與以二人。於殿中。右京兆(高

國朝臣。被_レ申入_レ之。尤御意得之由仰也。

二月六日

五日。庚辰。吉日。御所引遷。評定始被_レ行。

御作事日記云。今日吉日。在富朝臣勸進之間。御作事方奉行伊勢加賀入道。結城十郎。金山民部少輔。松田丹後守。松田豐前守。飯尾中務大夫。其外飯尾近江守。就_レ御談合。被_レ召_レ加之。各於_レ殿中。勢州。常與以_レ兩人。被_レ仰出_レ之。仍御要由棟林并御在所等之事。所存之趣可_レ有_レ言上_レ候由也。仍御對面所次於_レ九間_レ申_レ之。

御要脚事。國役可_レ被_レ仰出_レ候段。凡定れる御儀。雖然今時分急度難_レ相調_レ候歟。所詮先棟別之事。可_レ被_レ仰付_レ段。

一御在所事。花御所御跡。高倉御所御跡。伊勢守近邊新地。凡此所之儀。御方之事。被_レ尋_レ仰在富朝臣。隨_レ其可_レ被_レ相定_レ也。其分右京兆。可_レ申_レ仰也。然間波々伯部兵庫助方。自_レ殿中。以_レ番狀。雜掌可_レ被_レ進_レ候旨。可_レ申_レ之由申_レ道之。

十一日。丙戌。首御參内。

元長記云。大樹御參内也。去月十日依_レ御歡樂延引也。召_レ進中納言_レ了。

十六日。辛亥。月次和歌御會。

御作事日記云。今日御月次和歌御會。右京兆御申沙汰。就_レ其被_レ參。仍於_レ殿中_レ申_レ承_レ之也。

廿四日。己未。召_レ陰陽頭在富朝臣。被_レ議_レ營築事。

御作事日記云。在富朝臣殿中。めめて。御作事方國役并棟別已下可_レ被_レ仰出_レ日限事。三月四月間。何れ月可_レ然說。其内可_レ有_レ勸進_レ旨可_レ申_レ之。則於_レ殿中_レ注進_レ之。三月十二日。廿九日。卯月五日。如此注中。三月。四月も不_レ苦_レ之由申_レ之。仍此注文備_レ上_レ覽。其後於_レ殿中。京兆へも見_レ申_レ候。いそがれたく存候間。十二日可_レ被_レ仰出_レ事可_レ然_レ之由。京兆承_レ之也。

三月六日

六日。辛未。御細川右馬頭尹賢亭。

元長記云。大樹今日渡_レ御右馬頭亭云々。大永四年御成配云。大永四年三月六日午刻御成。從_レ小門_レ在_レ之。御驗與。御立烏帽子。御直垂。御服者御織物。薄_レくは。是様も御直垂。小門外に北向に御長有。御内衆も年寄衆各籍出長。御屋形様は前より是様御座有。平中門の外長有。御小すわう。御成御供者大館兵衛助殿。御飯_レ九郎殿。駿河守殿。島山大郎殿。勢州。伊勢備中守殿。伊勢左京亮。平阿彌。御妻より御成有。於_レ御殿殿_レ三五番。御盃御給有。御太刀

(金)御進上。隨而御直垂を御ぬき有。御小すわう。式三献

參。御進物次第。式三献之時。御太刀一腰。(白)御飯一領。御弓一張。御征矢一腰。以上。此色々は前より御殿殿之御座に被_レ置候。銀劍御參。式献參て以後。御馬一匹。(鶴毛。印)被_レ置候。御進上御馬。但駿河守殿直垂にて。御馬二白手繩さる。屏中門外迄は能勢兵衛尉引て參。駿河守殿被_レ掛_レ御目御馬一候時者。御屋形様。是様。其外悉御座上に御長有。其後少々間有。初献參。二献。三献。

一三献目の御着を被_レ。御相伴に可_レ有_レ御參_レ由。以_レ大館豫州一勢州被_レ仰出_レ種々雖_レ有_レ御料酌。數刻御屋形様。年寄衆。祓候衆に。悉御談合有。尤可_レ然由申間。御相伴に御參之。爲_レ御禮。御太刀一腰。(行平)御馬一匹。(川原毛。印)目結)五千匹御進上有。是者御相伴之御禮也。一御太刀一腰。(正恒)御練貫五重。引合十帖。勢州被_レ懸_レ御目一候也。但御太刀は御持參。是は三献目の御進物也。四献。五献。御太刀一腰。(直守)御香合一。(別紅)御盆一枚。(堆紅)六献。七献。御太刀一腰。(次依)御給二幅。(王季本筆)御盆一枚。(堆朱)八献。九献。段子五堀。(色々)御盆一枚。(桂葉)十献。十一献。御太刀一腰。(包平)御刀一腰。(吉光)十二献。十三献。御太刀一腰。(持)御馬一匹。(鶴毛。印)雀目結。宮齋殿御進上。是様御書司様也。

御太刀一腰。御やかたの御進上。御太刀一腰。(持)同六郎殿御進上。御一家衆御進上。御太刀一腰。(金)五郎殿。

御太刀一腰。民部太輔殿。御太刀一腰。五條殿。御太刀一腰。駿河守殿。御太刀一腰。九郎殿。御太刀一腰。(淡路)刑部少輔殿。御太刀一腰。治部少輔殿。御太刀一腰。又二郎殿。御相伴衆。一御屋形様。冷泉殿。日野殿。三献目より是様御參有。六郎殿様者御相伴に無_レ御參候間。奥之御番所之其奥の御さじきにて。御喝食と御一所に御湯漬。御點心まいるなり。無_レ御相伴被_レ參公家。外様衆。御供衆。替_レに御納戸の北の四間并奥の六間にて御湯漬御點心まいる。或御前に隙入。或能を御見物候間。無_レ御隙候て。御着者不_レ參候。飛鳥井中將との。薩兵衛殿。五郎殿。民部大輔殿。五條殿。大館豫州。其外少々不_レ參。申次並詰衆悉被_レ參候。一匹者兼以使者候て。可_レ被_レ參_レ之由依_レ被_レ仰由。是も御湯漬。點心計。替_レに奥の於_レ番所_レ被_レ參。相伴赤澤兵衛助。長藤又三郎打替に。一御走衆六人。さじきへ御腕を屏風にてしつらい。南向には障子を立。於_レ御前_レ不_レ見候様。屏風を立なり。御湯漬。點心計。着者略_レ之。相伴赤澤兵衛助。麻植修理。一御小者六人。奏者所。一疋も南四。し障子をたて。御屏風にて立塞ぐ。湯漬。點心計。相伴南郎與介。六人共御座に着坐仕候迄。與介罷出。請入候也。一侍雜用三(千

百地蔵。湯濱。點心。是も奥の番所にて。御伴者成也。翌日に二百匹被下也。一御與昇中へ。柳二荷兩種被下候也。一かないわと。御てうしやく。御牛飼以下者。何も柳一荷兩種被下候也。一御むまの者。兩種柳二荷被下也。

十二日。丁御作事議定。

御作事日記云。伊勢加賀入道。結城十郎。金山民部少輔。飯尾近江守。松田丹後守。飯尾中務大夫。松田豐前守。各殿中二祇候。今日吉日間。兼日ニ伊加に申て。如此參上也。一岡役事。今日可被仰出事。一棟別事。始末爲右京兆被申付候。可有進納候事。一惣奉行品山尾州可有上洛之由。可被仰出。右京兆御使(伊加。飯江。松丹。三人被遣之て被仰出也。御返事者。國役事今日可被仰出候段。尤可然云々。次總奉行事も其分可然存候。先爲上意。御下知をも被成被仰出候て。又京兆より。内々可申進之候。棟別事ハ。可被申付一段斟酌云々。

十九日。甲申飯尾近江守爲御作事奉行。獻劍奉謝

御作事日記云。御太刀。(金)飯尾近江守被召加御作事奉行御禮也。以常與申之間。即以御局申入候。

廿日。乙酉四條黃門家災。

元長記云。今夜有二火事。四條中納言出火云々。

四月小

二日。丁酉筒井順盛卒。

筒井家記云。大永四年甲申四月二日。順盛行年六十八ニシテ筒井城ニ卒ス。圓應寺ニ葬リ。領知モ三萬五千石ニ至リ。麾下六万五千石余。合テ十万余石也。任職五十九年也。

十九日。甲寅依御所造營要脚事。奉行人傳仰於朝倉孝景許。

古文書載

來年御所御造作要脚事。爲越前國役。如先規二千貫文。來十月以前。被致其沙汰者。可爲神妙之由。所被仰下也。仍執達如件。

大永四年四月十九日

前近江守列
散位 列
豐前守 列
丹後守 列

五月大

朝倉源正左衛門尉殿

此月。大内介義興出兵。攻三藝州諸城。

安西軍策云。大永四年五月廿日。大内義興與周防介義隆防長戰。勢三万餘騎。卒周防ニ打出。岩國永興寺ニ着陣シ。茲ニテ二手三分。一方ハ義隆大將トシテ陶道越相加二萬餘騎。佐東ノ銀山武田光和ヲ城ニ押寄。一方ハ義興自大將トシテ一萬餘騎。草津二保島ノ城ヲ攻落。其ヨリ櫻尾佐伯與藤ガ城ニ寄テ攻戰フ。毛利元就飛脚ヲ以テシカクノ趣ヲ尼子經久ヘ告給。尼子ハ從正月一伯耆國ヘ發向シ。山名ト度々戰數箇城ヲ切取ケレバ。山名入道ハ不埒因州ヘ引退ケレバ。合戰ハ未レ止。進退不自由。藝州出張少ク有延引。然共兩城ハ堅固ニ守リ寄手モ仕寄ヲ付。ハカクシキ合戰ハナシ。寬リケル處ニ。熊谷兵庫助。山中佐渡守。香川。飯田。山縣等近半武田ノ幕下ナレバ。此度可三見限ト會議シケレバ。敵大軍ニ中々接詰モ難成。先彌ノ坂ノ上マテ打出。敵ノ機林ヲ窺ケリ。此事敵陳ヘ聞ヘケレバ。杉伯耆守。同勘解由。岡田掃部。同紀伊等。是非可三追拂ト云ケルナ。陶入道強テ留ケレ下モ。各二千餘騎同六月廿四日夜半ヨリ打立。谷路一里許忍ビ密。未夜深トテ待居タリ。熊谷等此由ヲ聞テ。味方ハ小勢ナリ。尋常ノ行ニテハ叶マシト軍評定能シテ。熊谷ハ若武者ナレバ香川美作守相加。坂上七八町下リ。一段高切岸先ニ營四百餘騎陣ヲ取。其外餘處ヲ固メ伏匿キ。峯々ニハ處ノ一獲原ニ手ノ者二三人宛添置。相圖ヲ聞テ旗ヲ舉ヨト約束シ

待懸處へ。明方ニナレバ敵時分ハ能トテ押上ル。一陣ノ山中佐渡。飯田。遠藤。福島二百計ニテ十町バカリ出迎。矢合シ引退。敵隊ニ乘三十餘町追上ル。熊谷。香川能程ニ引受眞道ニ落シ懸レバ。敵不堪二三町引退。熊谷モ本ノ陣ニ引上レバ。敵又返シ上處ヲ。相圖ノ貝ヲ吹バ。伏兵悉ク起テ前後ノ峯谷ヨリ討テ懸レバ。敵一度ニ崩レテ逃下ルヲ百三十討取バ。殘兵共ハ跡モ不見大内ガ陣ヘ逃入ケル。又城主武田ハ角對陣シテモ云甲斐ナシトテ。七月三日三千餘騎ヲ五手ニ分。城ノ尾崎ニ打出。先陣ハ麓ニ下リ。楯ヲ一面ニ衝待懸ル處ニ。大内勢杉。石田。岡田三千餘騎ニテ打懸。武田ガ兵楯ノ際ヨリ無一透間一射ケレバ。敵進カネタル處ニ。岡田ガ勢森坂已下五百計眞先ニ突懸レバ。杉。二保右衛門大輔ガ勢モ三千計續タリ。武田勢不慮相懸ニシテ手痛働共。小勢ナレバ少退ク處ナ。内藤彌四郎唯一人踏留ルヲ見テ。青木。楢瀬。篠村等ヨリ返ス。内藤敵四人突伏。我モ手引引無危ク見ル處ニ。武田五百許横鎧ヲ入レケレバ。杉。石田突立ラレ引取。陶安房守等入營進メバ。武田六七人ニテモ張兼タル大弓ニテ。楯モ鎧モタマラス。一先ニ馬人三重計。二筋三筋射貫テ見。敵怖畏テ颯ト引。安房守押返。太刀鎧入遊稱戰ケレバ。武田モ薄手負ケレ下モ。五度ノ懸合ニ兩ガ若者七人迄突伏給。カケテ日暮メレバ。相引ニ打ハケリ。大内方ニハ豐田。湯田ヲ先トシテ。

能兵三百餘騎打レケレバ。城兵モ百七十餘人討死シマシク

六月小

八日。壬寅。依御小袖獻上。給御内書於近江九里伊賀入道。

御内書案載

御小袖進上。尤神妙。仍刀一腰。(吉光)太刀一振(國俊)遺之候。猶貞忠可申候也。

六月八日

九里伊賀入道との

御重代御小袖進上。尤珍重候。仍被遺御自筆御内書。并御腰物一腰。(吉光)御劍一振(國俊)候訖。而日之至。賊無二比類候。猶以忠節之次第。被感思食之由。懇可申旨。被仰出候也。恐々謹言。

六月八日

九里伊賀入道殿

貞忠

七月小

十七日。庚辰。自此日。禁中御入講。贈皇后卅三周也。

公卿初任云。十月自二十七日。至廿一日。禁中御入講。贈后宮

三十三回忌也。

廿日。癸未。依御小袖出現參賀。

背別記云。今日。室町殿有總參賀事。子細者。昨日御小袖始被安置。其御禮云々。仍不能故障。令參賀。法住院殿御代。江州岡山御座之時。九里被預置之處。六角四郎九里依令退治。此御小袖于今不返上。京兆廻計略。今度以內儀。令進上。爲奇特者歟。有御對面。御太刀進上如上。

廿三日。丙戌。此頃。叡山衆徒等依日蓮宗事會議。

叡山叢記云。大永四年七月廿三日。山門大講堂集議會日。可早爲三應務沙汰。被申入座主宮事。夫吾此法花宗者。高扇一乘教風二兮。撥二天之邪雲。廣湛四分法水二兮。靜四海之逆浪。是則桓武天皇。傳教大師依靈山禪法之芳契。待一乘緣之純熟。三變地鎮而開九重之帝都。七重結界而建九院之佛閣。大師釋曰。桓武聖皇帝發無緣慈悲。建立法華宗。以三城山門。類三車兩輪。比爲雙翼。若國一二。俱不可安穩云々。爰頃年日。蓮法師不傳二月。氏震且之佛教。起三獨立自慢之邪見。恣號法華宗。動無智迷闇之迷信男女。入詐誘正法之極惡邪見。輕蔑神明佛陀之威光。停止靈佛靈社之參詣。其形雖似剃髮染衣。其志劣自毛羽麟介。刺殺眞言上乘之教法。名亡國之邪法。嫉持戒律儀之僧侶。

誠二國賊之惡徒。雖在生極樂之念佛。爲無間之修因。是佛法破滅之惡覺也。寧非正道零落之因緣乎。凡太祖勅云。易レ踏邪徑。難レ入聖道云々。世澆季。人好邪路。因茲毒氣深入之盟共許之。稱惡不善之類同心之。既是佛敵不可不誠。仍令般於坂本。追討彼黨。被却此舍宅。如風聞近年都鄙之日。靈熱三所望。大僧正。大僧都高官被成。直下云々。爲事實者無勿體。次第也。早速被成。改易之御下知。自今已後可被止御許容之由。可有御執奏旨。可預御披露二者也。邪道邪類退散。佛法王法彌繁昌。而國王之御榮花。開萬春德化。送千秋智月之旨。詳讀如斯。

八月大

七日。己未。被定明年節分御方遠在所。

御作事日記云。來年節分御方遠御在所。七條道場之事。以寺奉行。飯江今日被仰出之。

九月小

廿三日。乙酉。細川高國參宮。

神宮年代記云。九月廿三日。細川參宮。

廿七日。己丑。大和國合戰。

祐維記云。同四年九月廿七日。曉笠置へ仁義七郎。江州九里一

十月大

十一月小

十三日。甲戌。河内國合戰。

祐維記云。十一月十三日。筒井龍田迄出陣云々。越智衆。同河内次郎殿へ合力也。同日越州之陣所。仁王山(河内)田井城寺衆ツメヨスルト云々。次河内遊佐ハ又コト井寺へ入之ト云々。次次郎殿身方根來一山。悉以越州後へ出陣云々。吉野衆長藏城衆トトツニ成テ。是モ同越州後へ取寄ト云云。○十七日條云。筒井ヲ始テ布施。万歳越智。各當國衆。悉以河内ノ國分マテ被出陣云々。

十二月大

九日。己亥。大和國合戰。

祐維記云。十二月九日傳說越州陣被了。去六日夜高野へノキ給云々。河内次郎殿エホシカト云所へ寄詰給故ニ。越州人勢無人之間不レ叶ノキ給云々。細川殿御サウシ津國トシテ迄御出陣云々。旁以不レ叶給ト云々。當國衆各歸陣候。次越智無二出陣。欠)越州ト同心之由風聞了。

後鑑卷之二百九十一

義晴將軍記第五 起大永五年正月 訖十二月

大永五年 酉

正月小

朔日。酉。四方拜不レ被レ行。

公卿補任云。四方拜。出御(元日)俄被略。依用脚未濟也。四日。甲。渡御伊勢守貞忠亭。還御後。又爲御方達。御成七條道場。

御作事日記云。御方達御成。七條道場也。西上刻。還御亥刻。鳥をうたはせらる。役人伊勢右京亮貞充。一御三盃まゐりて如レ此。此御三盃。下津屋三郎左衛門尉調進也。寺家ニハ無二存知候也。一年始事候間。今日靈勢州へ御成初有レ之。

七獻并供御參て。還御成て。其後七條へ渡御也。一御出奉行兩人。至道場令參祇。松田丹後守。飯尾彈正忠。近江守依所勢。彈正參也。至道場御辻固。島山殿より被レ懸申之也。

十日。庚。新賀如レ例。○御參内。

元長記云。武家參賀。召進中納言。御參内。參會。同中納言參了。

二水記云。未刻許。武家御參内如レ例。於御前三獻。於御直座三獻了。御退出云々。

廿五日。乙。依御造營。棟別被レ懸國役錢。

殿助大僧正記云。當國在々被レ相懸棟別。奉行京兆内衆十人。今日罷越當所。寺町三郎左衛門尉。波々伯部兵庫介。上原新兵衛。石田四郎兵衛尉。河田右衛門大夫。井上中務丞。飯尾備前守。齋藤三郎衛門尉。長澤越前守。已上九人。宇津依在國。九人罷下云々。

二月大

六日。乙。被レ進栗子于親王御方。

殿助大僧正記云。禁裏宮御方。武家御栗進上。廿一日。庚。御方遠御成。

御作事日記云。御方遠御成。同前在レ之。

廿四日。癸。於右京兆馬場。犬追物令見物了。

二月大

五日。甲。細川右京兆謝賜直垂。進獻劍馬鶴目。

伊勢貞助記云。大永五三三五日細川右京兆へ。公方様ヨリ御直垂上。(香色)於殿中一拜領。則犬追物着用。紫ノ織鞆ト拜領。仍爲御禮。御馬。御太刀。鶴目三千疋進上之。

十九日。戊。吉田三位兼滿宅自燒。

二水記云。去夜吉田侍從三位(兼滿)宅令自燒。其外在家不殘二一屋二燒拂。各退散。侍從逐電云々。官語道斷候也。從去年二有断陳事。(敵方親類云々)於奉行所。對決難及二度。遂以不レ得其理。敵方恣掠中。奉行權閑相語云々。仍如此歎。不便之次第也。一社滅亡。歎而有餘者乎。後聞。於社頭二者不レ苦云々。齋場所同無事云々。

四月小

三日。壬。二條尹房公辭關白。

公卿補任云。關白從一位藤尹房。四月三日辭退。

五日。甲。近衛植家公爲關白。

公卿補任云。關白正二位藤植家。四月五日訖。同日内覽。氏長者。隨身兵仗。牛車一坐宣下。

十六日。乙。此日。於關東。管領上杉五郎憲房卒。

其子憲政襲家。

關東管領記云。同五年春。山内憲房病氣不木快。終二同四月十六日於鉢形城令卒去。上杉ノ諸勢等力ヲ落然傷ニ不レ堪。是北條家ノ大幸也。于時憲房ノ實子憲政。于レ時五歲。家督ヲ繼トイヘドモ。幼穉ニシテ危ガ故ニ。京都ノ公方ノ上意ヲ親ヒ。古河御所高基ノ御次男賢壽王丸殿ヲ憲房ノ養子ト定メ。是上杉三郎憲廣ト稱シ。憲政ノ後見トシ。暫ク關東ノ管領職トス。山内ノ老臣大石。小幡。長尾。白倉等政事ヲ相談シテ。關東ノ成敗ヲ沙汰ス。

喜連川列傳云。四月十六日山内管領五郎憲房卒ス。高基ノ次男三郎殿ヲ憲房養子トシテ。山内ノ跡ヲ繼シム。憲廣ト號。憲房實子憲政幼穉ノ間。成人ノ程憲廣管領タリ。

上杉系圖云。憲房。管領顯定養子。實周法師子。五郎。右馬頭。永正十二年任管領。大永六年四月十六日五十九歲死。號龍洞院道憲大成。

十八日。丁。被レ引御馬於六條八幡。

殿助大僧正記云。龍泉院來臨。自武家二六條八幡宮被レ引進

御馬先々社司給之歟。今度門跡被仰付一事。可爲初例一哉。右兵衛督相語云。前兵部卿進退。

廿日。巳御作事評定。右京兆出仕。

御作事日記云。今朝辰刻。御作事奉行衆。伊勢加賀入道。結城十郎。金山民部少輔。杉原伊賀守。飯尾近江守。但依三所勞。彈正忠祇候。松田丹後守。松田豐前守。飯尾中務大夫。此外勘解由小路宮内卿在宮朝臣。土御門中務大輔有春祇候。一此御敷地者。香川以下四五人の蒞跡也。仍御所望候段。そと以三御使二被仰出候。可然候由。内々典厩談合候て。今朝早高信ヲ爲二御使。右京兆ハ被仰出候處。悉長存候旨。御返事被申。高信ニ對面云々。今夕京兆出仕。今朝御使之御禮也。仍於三常御所ニ御對面御盃をい。御酒有レ之。

廿一日。庚細川右京大夫高國落髮。改名道永。

御作事日記云。今夕。右京兆入道の御暇俄被申之。仍御作事一方之儀。先可有二御延引之由御氣色也。其分對二典厩一申レ之也。

廿二日。辛細川右馬頭尹賢就營築事。有言上旨。

能二是非。内乘俄七人罷成入道。

御與御供衆事。(御飯役)細川右馬頭。細川九郎。大館兵庫頭。二色下總守。細川駿河守。伊勢守。百阿。走來六人。御小者五人。一還御成て御太刀參。禁裏樣方同御太刀參。傳奏(廣橋殿)持參。其後御作事奉行(號二役者)伊勢加賀入道。結城十郎。杉原伊賀守。金山民部少輔。飯尾近江守。松田丹後守。松田豐前守。飯尾中務大夫。御太刀(金)二振。持參。御尊請始。御事始之御禮也。其後六郎殿。御太刀(持)二振。御馬一正進上之。御尊請始ハ御太刀一腰。御事始御禮御太刀。御馬也。其後細川奥州。同中務大輔。攝津掃部頭。二階堂山城守。一色三郎。御太刀(金)二振。進上之。其後御供衆細川典厩。細川九郎。予。細川駿河守。一色下總守。大館兵庫頭。伊勢守。其外申次冷泉入道殿。廣橋殿。三條西殿。勸修寺殿。中山殿。日野殿。山科殿。藤兵衛督殿。伯少將殿。在宮朝臣。有春等。各御太刀(金)二振。進上之。百阿同進上之。但レトテ也。

殿助大僧正記云。今日。公方御事始也云々。

五月大

六日。甲子。命護摩修行事於殿助僧正。

殿助大僧正記云。於三武家。護摩可有二參勤之由被仰出。飯尾近江守折紙到來。前々者如此事。從二傳奏申送也。

後醍醐卷二百九十一 義晴將軍記五 大永五年五月一七月

七月大

十四日。辛未。少納言雜色與仁木家人。於御所四

足門一有喧嘩事。

二水記云。已後。少納言雜色與仁木家人。於御所四

中。二物念。言語道斷曲事也。兩方共打擲了。午後。從仁木(六

郎四郎。當時御門役也)方。有兩使。問答事之子細。移レ剋

之處。又以多人數已欲及二強々儀。此方不肯之身。每事存二釋

便之段如此。無力次第也。雖レ然先當座無爲也。一家滅

亡只利那之間運命也。可レ怖之。入レ夜。爲三武家有二御使(率

行飯尾孫右衛門)仁木方條々中入子細有レ之。又此方儀如

何。可レ被聞食其子細云々。仍大方少納言申入事儀了。

○十六日條云。仁木強々儀。御陣下曲事之由。以二兩傳奏二被

御朝供御精進(御寺たるによりてなり)まはりて還御也。

御作事日記云。典厩被參候。以予被申入子細者。御作事可有御延引候由。内々承候。還存候。入道暇事。更以非二別儀。彌不レ存二疎畧二可レ致三奉公二覺悟候。併無二相違二御作事之儀被仰付て可三添存二候由。種々右京兆御申候由承候間。其分以御局一申入候處。如此被申入上者。御心得候由被仰付之云々。

廿五日。甲寅。依御方遠。渡御七條道場。

御作事日記云。今夕爲二御方遠。七條道場へ渡御也。一夜御逗留也。一獻有レ之。寺家より被中分にて。島山殿より被申付之云々。

廿六日。卯御普請御事始。

御作事日記云。今朝(卯刻)御普請始在レ之。御作事奉行伊勢加賀入道。結城十郎。金山民部少輔被申合。そと御沙汰あり。一御事始。かむり。そくたいにて。冠木にす。みよりて三拜。(正月十一日のとくなり)御馬(鬃毛)御太刀(持)被下レ之也。次槍皮大工同前。御馬。御太刀被下レ之。次殿大工同前。御馬。御太刀被下レ之。御太刀ハ伊加州被渡レ之。御馬者御厩の二郎四郎。孫七引渡之云々。一如此兩條事すみて。伊加州より御方遠之御在所へ注進之。其後還御也。御朝供御精進(御寺たるによりてなり)まはりて還御也。

十二日。庚午。從二此日二護摩修行。

殿助大僧正記云。從今日。於三室町殿御所。六字護摩御參勤。予結縁行之。修中記別有レ之。

十八日。丙護摩結願。

殿助大僧正記云。御祈結願。入寺修中無事。珍重珍重。

六月小

七月大

十四日。辛未。少納言雜色與仁木家人。於御所四

足門一有喧嘩事。

二水記云。已後。少納言雜色與仁木家人。於御所四

中。二物念。言語道斷曲事也。兩方共打擲了。午後。從仁木(六

郎四郎。當時御門役也)方。有兩使。問答事之子細。移レ剋

之處。又以多人數已欲及二強々儀。此方不肯之身。每事存二釋

便之段如此。無力次第也。雖レ然先當座無爲也。一家滅

亡只利那之間運命也。可レ怖之。入レ夜。爲三武家有二御使(率

行飯尾孫右衛門)仁木方條々中入子細有レ之。又此方儀如

何。可レ被聞食其子細云々。仍大方少納言申入事儀了。

○十六日條云。仁木強々儀。御陣下曲事之由。以二兩傳奏二被

御朝供御精進(御寺たるによりてなり)まはりて還御也。

申武家了。午後當番候。則參御前。件間事條々有勅定。

八月小

三日。庚寅立柱御祝。

二水記云。武家御立柱云々。

四日。辛卯節朔衆參賀。

二水記云。傳聞。今日節朔之衆參賀云々。昨日御立柱也。珍重。三條御所此間被引了。昨日先番衆所御末等立柱云云。

七日。甲午諸家參賀。

二水記云。今日諸家參賀也。(立柱御禮)予當御代未致出仕。仍可參賀之由。前日以藤兵衛督。丙午。何時宜了。早且行在宮前。直垂。黃門。正親町少納言。五辻。薄等同道也。已冠參武家御所。(當時岩網院)大畧參候云々。予仍初參。御太刀別進上之。(付藤兵衛督進之)頃之有御對面。先東乘。(申次伊勢左京亮)次四乘。申次藤兵衛督。近衛殿以下次第參進。予無案內之間。權中納言參進之程。聊伺見御前候了。御座數依程近。聊昇長押。申御禮退出。於在宮朝臣宅。改異體。傾一室一歸家。

九日。丙申去月十四日喧嘩事。猶未判決。

二水記云。今日。爲武家。仁木喧嘩間事。返事被申訖。所詮於番屋一致。三張籍之間。田口兩人可有御成敗之由御申分云々。至今日。數十日不落居。無與之事也。

廿七日。申寅常御所上棟。

二水記云。室町殿常御所。今日御上棟云々。

廿八日。卯節朔衆參賀。

二水記云。傳聞。今朝節朔之衆參賀云々。上棟御禮也。

廿九日。丙辰細川被官人發向江州。爲六角定頼合力也。

二水記云。去曉。細川被官人江州合力諸勢出陣云々。中番被官アサイ城。此間六角少弼攻之。雖然至于今一城堅固也。結句國中一揆。起仍六角及離儀之間。近日度々合力勢出陣也。但未起海陣。大津邊云々。長享年後。畿內兵亂記云。五年。定頼公淺井城大津見發向。九月淺井亮政沒落。

九月大 二日。戊午江州黑橋口合戰。

古證文載

大永五年九月廿五日

忠廣判 賴數判

朽木殿 雜掌

十月小

七日。癸巳被命來月八幡社參布衣役於朽木彌五郎。

郎。

朽木文書載

來十一月十四日八幡御社參始布衣事。可被參勳之由。被仰出候也。仍執達如件。

十月七日

貞運判 秀俊判

佐々木朽木彌五郎殿

廿日。丙午依來月八幡社參。被命力者事。

殿助大僧正記云。來月十四日就八幡御社參。御力者事。二手之分。當門跡被仰出。前者二手之分被進款。今度普法寺迄者。可爲御板與之間。二手之分可被進由也云々。次御出之御加持之事。慈照院殿御社參之時。取護院御參款。長得殿御社參之時。法身院御參也。

就今度伊庭九里出張。去九月二日黑橋口合戰。御忠節無比類。候。於我等。面目視着之至候。尤參難可申。延引之候。先令啓候。仍還々承候。矢野跡藏被官之事。進之置候。然間從當年者。爲直務可被仰付候。猶委細者深尾七郎左衛門尉可申候。恐恐謹言。

十二月十日

高雄(花押)

杉山殿

四日。庚申諸家參賀。

二水記云。傳聞。今日諸家參賀云々。是常御所上棟之御禮。予依不合期。不及其沙汰也。

六日。壬戌此頃。有江南北和陸風聞。

二水記云。傳聞。江州南北和陸云々。但京勢未開陳。○十九日條云。傳聞。江州南北和陸。一旦令和陸之機。雖相談。遂以不然。京極中書二家悉以令沒落云々。

廿五日。辛巳就丹後物念。被命出勢於朽木彌五郎。

郎。

就丹後物念之儀。可被立御人數一候條。各有御用意。可被相待武田殿御左右。聊不可有御油斷。由。被仰出候也。仍執達如件。

廿三日。酉。細川六郎植國卒。道永入道息也。有落髮及殉者。

二水記云。去曉。細川六郎令逝去云々。言語道斷。不便之題目也。及二十八歲云々。當年爲家督。不幾如此。上下萬民感嘆此事也。可措可哀。所勞只四五日事也云々。父入道心中令察者也。當年四十二。依爲厄年。令出家讓家之處。猶以如此。尤可憐々々。

細川系圖云。植國。高國息。六郎。法名宗麻。號了然。清源院。大永乙酉年冬十月二十三日卒。時年十八。

細川兩家記云。京高國四十二才の御時。大永七年乙酉四月に御出家なり。法名は道永と申。御代は御子六郎殿へ御ゆづりあり。めでたかりけりける所に。六郎殿御歎樂にて御他界。御曹子の事は是非ならず。道永御運の末とぞ人々申ける。翰林五鳳集云。細川六郎殿十八歳逝。悼之。

人生今日已堪悲。十八年間一夢移。桑海縱然枯作土。豈斯別淚有乾時。

殿助大僧正記云。今夜。細川六郎他界。道永一男也。諸人感嘆。不及是非。方衆卅余人落髮。長鬘遺世。前田自害。但有入取支之隨向。被相停之間。半死半生也。

十一月大

朔日。丙辰。依細川六郎事。社參延引。

殿助大僧正記云。八幡御社參。就細川六郎事。御延引云々。九日。甲子。細川六郎葬儀也。

二水記云。傳聞。今晚六郎葬送云々。閏十一月小

五日。庚寅。依河州米運送事。奉行人傳下知狀。伊勢家傳載

御領所河州十七ヶ所公用米貳千斛。連運可運送云々。河上諸關。無其煩。可勸過之由。所被仰下也。仍下知如レ件。

大永五年閏十一月五日

前近江守三善朝臣判丹後守平朝臣判

廿三日。戊申。依近江地事。奉行人傳仰於朽木家

雜掌。

朽木文書載

高島郡等積庄内所々買得地之事。任証文旨。可有知行。此名内。年貢諸公事物諸役等之事者。放券狀に書載訖。如レ

先々可有御沙汰。支証ニ目錄符裏。向後不可可有相違一由。被仰出候也。仍執達如レ件。

大永五年閏十一月廿三日

忠廣判 貞弘判

朽木民部少輔殿 雜掌

廿八日。癸丑。渡御萬松軒。

二水記云。傳聞。今日。室町殿渡御于万松軒。從是直可有レ移。徒本殿云々。

是月。蝮川大和守親孝卒。

寬永蝮川系圖云。親孝。新右衛門尉親元ノ子。大和守義晴ニツコフ。大永五年十一月逝ス。法名道致。

十二月大

十日。甲子。新御所鎮宅結願也。

殿助大僧正記云。新御所鎮宅。今日結願云々。

十二日。丁卯。此夜。上御所御遷徙。

二水記云。室町殿今夜(戌刻)御移徙也。珍重。節朔之衆今夜參御禮云々。衣裳之色被禁也。ヒヨ。モヘギ。ヒソタ。赤色等云々。クチバ。此色モ近來有沙汰云々。カウ色事。今度如何之由有沙汰。可尋。傳聞。クチバ。カウノ色ハ相交云々。

但希有云々。

二條寺主家記云。京都下ノ御所ナ上へ被引。十二月十三日。大樹御移徙也。

殿助大僧正記云。今日。新御所御移徙云々。大藏卿法印。右兵衛督律師等移徙云々。

十九日。癸酉。御遷徙參賀。

二水記云。今日午時諸家參賀也。御移徙之御禮也。予依不レ合期不レ候。

殿助大僧正記云。今日詳參。於護持僧者。如番帳次第。不レ論資賤。任薦次。申御禮云々。

廿三日。丁丑。仍近江什畑庄事。奉行人傳仰於朽木民部少輔植綱。

朽木文書載

山門西塔院南付雜掌中江州高島郡什畑庄事。先度被成奉書一候處。寄事於左右。難達云々。太不可然。早任度度請文等之旨。嚴密可被致其沙汰之段。重御成敗之條。不可被渡付彼代。更不可有緩怠候由。被仰出候也。仍執達如レ件。

大永五年十二月廿三日

長俊判 秀秋判

晦日。甲申北島具國佐々木朽木民部少輔殿三五位下。

歷名土代云。正五位下。源具國。大永五十二卅。改晴具。

是歲。於關東。古河高基舍弟義明自立。住下

總小弓城。里見安房守義弘奉之。

喜連川判鑑云。御舍弟右兵衛佐義明先年御父政氏ト御不和

ノ事アリ。奥州へ落玉フ。今歲武田豐三大將ニ取立。總州小

弓城主原左幸ヲ攻落シ。義明愛ニ居住。是ヲ生實ノ御所ト稱

ス。里見左馬助義弘其外近國ノ武士從テ威勢盛ナリ。是ヨリ

關東ヲ伺フ。

關東管領記云。抑小弓ノ御所右兵衛佐義明ト申ハ。古河ノ公

方政氏朝臣ノ御次男ニテ。高基朝臣ノ御舍弟也。先年兄弟御

不快ニ依テ。奥州へ流浪セラレ。山伏ノ形ト成テ八性院ト號

シ。漂泊ノ御身トシテ幽ナル御世途ナリキ。然處上總國小弓

ノ城主ヲ原ノ次郎友幸ト云。是下總國ノ守護人千葉介カ家

來也。扱上總ノ守護代ヲ武田豐三眞里谷三河守ト云。三河守

ハ是前ノ相州ノ守護三浦元次郎義忠カ舅也。眞里谷武田ト

原次郎。常ニ所領ノ境ヲ論シテ。度々合戦ニ及ガ故ニ。武田

毎節打負。其耻ヲ雪カン爲ニ謀計ヲ廻シ。八性院殿武勇ニシ

テ。大力無双ノ器量ヲ感シ。吾館へ呼取奉テ大將ト仰ギ。己

ガ力ト頼申ス。八性院殿御俗在テ御元服御官位坐シ。右兵衛

佐源朝臣義明ト號ス。房總兩州ノ國人等皆此御所ノ味方ト

成テ三ヶ年ノ合戦終リ。原次郎友幸終ニ小弓ノ城ヲ没落ス。

於レ是義明即チ此城ニ御住居在リ。小弓ノ御所ト稱シ。遠近

ノ國人等崇敬スル事鎌倉ノ公方ノ如シ。終ニ友幸カ家ノ子

高城越前守父子ヲ討取。同下野守ヲ追失ヒ。後ニハ友幸ヲモ

討取玉フ。是ヨリ猛威ヲ關八州ニ振ヒ。後ニハ古河御所ヲ亡

シ。義明自ラ關東ノ公方ト成玉ハン事ヲ企テ。其計謀ヲ相催

サル。古河ノ御所大ニ怒リ思召テ。縁類ノ好ニ依テ北條氏綱

ヲ御頼アリ。小弓御所ヲ追討ノ御企也。氏綱許諾ニ及トイヘ

ドモ。當時上杉ト相戦テ寸隙ヲ不レ得ガ故。先ヅ其時ヲ待

カ爲ニ。小弓ノ御所ヘ令ニ和睦。時々使者ヲ立テ音信ヲ通シ。

年月ヲ經ルノ處ニ。却テ北條方千戈ノ威ニ恐レテ。小弓家ヘ

隨身ノ由被思召。今義弘ニ仰テ及ニ此事ニ者也。里見義弘ハ

小弓御所義明ノ甥也。

後鑑卷之二百九十二

義晴將軍記第六起大永六年正

大永六年丙戌

正月小

七日。卯給ニ新春御書於細川高國入道道永。

大永六御内書記錄載

新年之賀悅。漸雖ニ事甚候。更不レ可有盡期。猶期ニ面候也。

正月七日

右京大夫入道どのへ

十日。甲午新賀如レ例。○無ニ御參内。

二水記云。傳聞。諸家參賀如レ例云々。今日御參内無之。如何。

十一日。乙未渡コ御墨華院。

伊勢貞助記云。大永六正十一日御所殿中ニ御成のとき。御所

之御供衆に。御酒被下之由。盛華院殿。春日殿之被仰たる。

典廩。大典州。貞忠談合ありて。三合三荷遣之。南御所杉原を

御末へ召之。椿河渡レ之。於ニ御水屋。おのく受用之。

十三日。丁酉殿中猿樂興行。

二水記云。室町殿有ニ猿樂ニ云々。御移徒以後初度也。

二月大

十一日。甲子島山尾張守義堯上洛。

二水記十二日條云。傳聞。尾張守昨日上洛。今日參ニ武家ニ云

云。

十二日。乙丑尾州奉謁。

(事注二十一日條。)

十三日。丙寅北島中將具國參洛。

二水記云。未刻。伊勢國司上洛。乘輿也。馬上卅騎許有レ之。密

密上洛云々。仍各笠。十徳之林也。

十四日。丁卯賜ニ宗山和尚佛眼天祐禪師號。

相國政記云。二月十四日。佛眼天祐禪師之徽號。特賜ニ當寺第

八十六世宗山和尚。其奎翰云。勅。塵裡聚落境。仰ニ相國巨刹

之盛興。表外規矩場。探ニ臨濟四喝之興願。等貴和尚(宗山之

諱。仙岩的嗣。佛慈法孫。名高才高。貯ニ經史於丹府。禪熟詩

熟。表ニ禮樂於緇衣。宗門固ニ道根。何人其得ニ測識。武將育ニ帝

業。舉世共致ニ敬尊。時々對ニ王床。箇々談ニ玄要。特賜ニ佛眼天

祐禪師。

十五日。戊辰道永入道等下コ向八幡。

二水記云。今日。道永入道尾州等下向云々。

十六日。己巳仍ニ石清水遷宮。將軍家御參。

二條寺主家記云。二月十六日。室町殿石清水御社參。

二水記云。今日。石清水社遷宮也。上卿久我中納言。弁頼繼朝

臣(非職。右大弁。)云々。午時。室町殿御下向。御乘輿如恒。(香御直垂)見物之騎馬十騎也。各美麗也。雨脚此時止。奇特珍重也。於八幡之儀。可尋記耳。後聞。室町殿於善法寺。被着御淨衣。(平緒)御下結。御乘輿(板輿)云々。布衣侍等可尋。供奉衆日野中納言。(内光)永家朝臣(御劍役)左中弁尹豊。(御齊役)左少將孝顯。(御幣役)右各布淨衣云云。歩行云々。日野板輿也。廣橋大納言下向也。雖然非供奉之衆云々。右分傳記不分明。尙可尋矣。

有二獻。廣橋大納言。右京大夫入道。尾州等祓候云々。女中一兩所被參候云々。御眉目之儀云々。

十九日。壬申北島具國參内。

二水記云。伊勢國司(中將具國)今日禁裡御禮申也。親父先帝御代申入云々。入夜祓候。於議定所御對面有之。於御末。令頂戴御盃云々。於小御所。有御對面(下界)。

廿二日。丙子於伊勢守亭。有射犬儀。

二水記云。午後。伊勢守内馬場犬追物令見物之。

廿四日。丁丑諸人參賀社參。○於道永亭。犬追物興行。

二水記云。八幡御社參珍重之御禮。諸家參賀云々。依不合期。不參賀也。傳聞。伊勢國司今日行。右京大夫入道宿所。有二犬追物。終夜酒宴云々。

廿六日。己卯於細川馬場。又有犬追物。

二水記云。傳聞。國司今日於細川馬場。犬追物擊之。終嘗有酒宴云々。

三月大

廿五日。戊申主上此頃御遠和。

二水記云。午後參内。月次御樂也。御樂之後。上池院祓候。御

十七日。庚午從八幡還御。

二水記云。武家還御令見物。雖然及薄暮之間歸家了。後開。乘烟之程御還向。先被詣北野社云々。後聞於善法寺。

往年事記云。二月十六日八幡御社參。從善法寺。職掌御手與也云々。御警固山細川云々。同騎馬十キ。御走衆廿八。

貞忠存分也。尤之由各被申云々。

覺悟候。みのを若うつねぬれ候へば。水をふせぐべきために繩にて結事也。笠をさし候ほどの雨には結ぶまじきし。

御成ノ時。雨降り候間。御供衆尹賢を始て。各うつば荒繩ニテ結て。貞忠一人は不結。其故は雨ふり候へども。笠をさすほどの時は。うつば雨にぬれざるに。なわにて結事は無

脉胃上之通爲御同爲。雖然御無力。勝事之御儀也云々。近日又一向無御食事。於三積聚者不指煩也。從去年一御不食儀也。至今無御本復。如何可有御坐哉。天下重事。何事若之哉。清法眼竹田法印等。去年御藥進上了。從正月末。上池院致御療治了。依武家御申也。

廿九日。壬申大友次郎五郎義鑑叙從四位下。

歷名土代云。從四位下。源義鑑。同六三廿九。元無位。

四月

七日。庚申主上崩。

二水記云。卯刻。送以崩御也。(御年六十三)。

管別記云。今朝辰終刻許。主上崩御。(甲子六十三歲)前夜。自常御所一奉移小御所。於彼所崩御。又奉移記錄所上壇。

皇年代畧記云。今上太永六年四月七日崩。小御所。(六十三)。

公卿補任云。四月七日。天皇崩。御於記錄所。

九日。壬戌淺井新三郎高政卒。

淺井系圖云。高政。備前守亮政子。新三郎。大永六年四月九日早世。

十一日。甲子此夜御入棺。

後繼卷二百九十二 義晴將軍記六 大永六年四月

二水記云。戌刻有御入棺事。

管別記云。今曉。入棺也。俄有相違事延引。入夜有此事。

十四日。丁卯内裡用脚六萬疋奉獻。

二水記云。傳聞。今日民部卿(葬禮傳奏)中御門前大納言。(詔問傳奏)勸修寺大納言。萬里小路中納言(踐祚傳奏)等。依召參武家。今度吉凶問事。種々有御談合。六万疋可被進之由被仰出云々。然者惣用不可事行間。先御喪禮可有之歟之由。内々相議云々。抑御踐祚已前御喪禮事。無其例之由。兩局兼申之。然者非例可有如何哉。御喪禮又及二週々者。溫氣時分勝事儀也。僅十萬匹許之儀。尙以不事行。當時之昧不可說事也。

廿六日。己卯奉先皇御追號。奉稱後柏原院。

公卿補任云。四月廿六日。奉號後柏原院。御年六十三。

二水記廿七日條云。御追號事。可爲後柏原院之由。有其沙汰云々。今度依仰。各被撰申。御追號後柏原院治定了。

廿九日。壬午親王踐祚。

皇胤紹運錄云。後奈良院。明應五十二廿三降誕。永正九四八立親王。(十七)同廿六御元服。加冠關白。(九條尙經公)理

髮頭中將實胤朝臣。小御所藤中。寂密儀也。同十八四廿七叙二品。大永六四廿九踐祚。同夜移本殿。皇年代畧記云。後奈良院。大永六年四月廿九日踐祚。同夜移本殿。菅別記云。今夜踐祚儀也。雖然劔覆渡御作法等一向無其沙汰。

五月大

三日。乙酉先皇御送葬也。

公卿補任云。五月三日。御葬禮泉涌寺。

菅別記云。今夜御葬禮也。泉涌寺葬場殿以下之作法。寺家致嚴重之沙汰。化儀又壯觀之體也。以今夜之作法。聊慰近日之鬱積一畢。

廿六日。戊申御中陰盡七日。

二水記云。御中陰盡七日。有二御入講。

宗長手記云。去四月七日崩御。御葬禮は東山泉涌寺。雨さへふり道の草木もうちしほれたれども。其夜は天氣たちなほりけると也。御七々日は伏見御山庄般舟三昧院。後柏原院と申すとかや。御吊山の座主。寺の長吏。紫野龍寶山。南禪五山。律衆。淨土門。御焼香ひまなしとなむ。この間は京中な

にはのともたへはて。火をけちたるやうにぞ聞えし。御踐祚は去三日とぞきこえし。

廿七日。己酉依主上御開葦。被獻魚物。

二水記云。主上今日始御魚食也。從武家美物濟々被進進云。

六月小

十五日。丁卯依入江殿事。御觸穢。

二水記云。傳聞。今日競馬有之。式日依觸穢延引云々。午後雷鳴。暴雨以外也。依入江殿御事。武邊定觸其穢。仍馬皆可爲不淨一也。依此儀。有急雨二歎之由。人皆稱之云云。入江殿方丈去十日御入滅。九十四才云々。希有御事也。

廿三日。乙亥御參内始。此日。今川修理大夫氏親卒。

二水記云。今日始御參内也。爲見物。出二條邊。午後御參。騎馬七騎如例。後聞。御前儀如常。三獻了御退出。於長橋局。又三獻有之云々。御馬御太刀可有御進上之由。兼有沙汰。但御馬無其聞。可尋。後聞。御太刀白御太刀也。御馬未レ被進云々。

今川系圖云。氏親。治部大輔義忠子。五郎。修理大夫。上總介。大永六年丙戌六月廿三日卒。増善寺殿裔山紹賢。

十三日。甲細川道永入道誅其臣香西四郎左衛門尉元盛。

細川兩家記云。御内の香西四郎左衛門敵心ありとて。大永六年丙戌七月十三日に屋形にめして。是非なく生害させられければ。兄波多野。同弟の柳本遺恨におもひ。阿波國へ申合。大兵亂を出來す。抑香西四郎左衛門生害させられ候由來を如何と尋るに。典厩尹賢と香西四郎左衛門中あしき故。尹賢連々譴言申され。香西失ふべき工みありける折節。香西が内の物書矢野宗好といふもの有。香西文盲仁にて。常に判紙を十枚二十枚宗好に渡し置き。書札相調候處に。折節宗好非公事を取沙汰仕候間失三面目二牢人と種々詮言申候へ共。しばらくくらしめの爲相延候刻。典厩尹賢宗好を相頼み。内々知行過分に可遣など。約束にて。かの判紙少々殘候を以。澄元其外方々へ謀叛企る作状を調。尹賢竊に高國へ御目にかけられ候處に。香西四郎左衛門左様にはあるまじき者と。不審に思召けれども。判形顯然の上は生害させらるべき内談なり。然りとはいへども猶も不審に思召。直に御尋あるべしとて。小姓二人被三仰付二様は。直に御不審あり度事候間。道具を出し御前へ罷出候へと申て。道具を出し候は。召連参り候へ。若何かと申道具不出候は。則生害させ候へと被三仰付候處に。御意の通り香西に申聞候へば。不レ。是非一併所

今川家譜云。今川一流ノ御傳紀ハ初祖心省入道殿ヨリ以來。皆御他界被レ成テ。御中陰ノ内ニ雨降レバ。是ヲ硯水ニ受テ墨ヲ摺。先考御二代ノ傳ヲ書付候事。上總介氏親事増善寺殿御代迄不レ絶。是御家ノ例法也。大永六年六月十三日喬山様御遠行之御中陰ニテ。右之通書付申候時分。大上様御所望ニテ。大原和尙ノ一冊ニ縮候テ文ニ被レ遊候。宗長手記云。大永六年六月廿三日喬山御他界の飛脚。臨川庵より山城新酬恩庵七月廿九日到着。(中略)來春中罷下るべき事。御ちの人の御方。泰以時茂へ文して申候し。八月より遣邊院殿奉レ頼。御帛本經廿八品。諸家の御懷紙申調侍る。折節京都の忍劇に延引して。やうく當年二月十六日矢島へ下給畢。則三月四日矢島罷立。此四月に下着持參。折ふし中御門殿歷歷御下向。御講殊勝珍重本望。(中略)喬山御幼少御時は御暇申紫野徘徊。心ざしにのみ御ことごとしく。廿ヶ年ありて罷下罷上。異レ他御めかけられし。(中略)喬山も十ヶ年先より。御心も御中風氣につきて。御成敗の様も調儀の御心案も。いかにぞやと承及び候事のみ候し。今もまたはたちの御内。御わらはの心の御程は。何事も御心のほどおさまりがたく。奉公の人々も心にまかせらるべし。されば此度當國罷下。我等休まで雜言空言。傍若無人の事のみ耳にみち候。

七月大

にて道具を出し。御使兩人と參候處に。その已後座敷通ひの
間にて尹賢をそきと被仰と申され候へば。早此分召連參候
と申候へば。尹賢兩人が耳に差寄。生害事をそきと仰らるゝ
と切々申され候。兩人には直に可有御尋一由仰られつる。
不審に乍存。何れも若仁に候故叫やみ。と討取申き。尹
賢内存は。如此直に御尋被成候へば我が認言願候に付て。
その間に附居切々被申也。高國御内存は道具を不引出故。生
害させしと思召。不被及三是非。手前は打過也。連々尹賢被
レ仕様。御耳に入候へ共。早生害候上は不及了簡。天下相破
事皆人々認言による也。香西もかの判紙宗好方に殘候事思
ひよらず。只かやうの儀も文盲故とぞ聞えける也。

足利季世記云。丹波國ニ住シケル香西四郎左衛門ト云者アリ。高國ノ家ニテ万事ヲ執行ヒ。威諸人ノ上ニ立。其御弟柳本彈正ト云者アリ。幼稚ノ時ハ美童ニテ。高國殊ニ男色ニフケリ寵愛勝レケレバ。成人ノ今以テ榮祿ニ餘リ榮耀人ニ越タリ。其頃右馬頭ノ居城ノ尼崎ノ城ヲ築ント。高國諸家ニ命ゼラル。香西兄弟モ下リ。細川一家ノ人々日夜土木ノ役ニアツカリシ中ニ。右馬頭ガ人夫ト香西ガ人夫ト。土一誓ヲ争ヒ口論ニ及ビ。下部共數百人兩方ヘ引分ケ。瓦礫打ニ成リケルガ。他家人々色々取擾ヒ兩方ヘ隔テ分ツ。右馬頭ノ者ハ城中ヘ入ケル。香西ガ人夫モ丁場ヘ歸ケルニ。下知チモ聞分ズ。

盜レ者居殘テ城中ヘ瓦礫ヲ打込ケル。右馬頭驚テコト何事ソト問ヘバ。シガシガノ事也ト申セバ大ニ怒リケル。下人等ニ對シ。扱ノ上ニ又打擲スベキニモアラズト。イカリヲササヘ静リケル。香西モ此事ヲ典厩ニ陳謝ニモ不及。右馬頭ハ口比香西ガ振廻雅意ナリト思フ上ニ。此事出來ケレバ。如何ニモシテ。香西ヲ認失スベキ由思ヒ立ラレケルゾ當家滅亡ノ端ナリケル。(此下典細川兩家記一同。故略之。其間暫ク時刻ウツリケルヲ高國ハ待カネ。香西チソシトアリケルチ。右馬頭カノ兩人ニ。チソキチ早ク討ト被仰付ケル。兩人ノ若侍高國直ニキラント宣ヒシハタト忘レ。即時ニ首ヲ討落。無故ト云モチロカナリ。其マ、彼ノ文箱ヲ柳本ガ宿ヘ被レ遣。兄チバ國家ノ爲ニ誅セリ。其方恨ヲ含ムベキニアラズト懇ニ被仰下ル。柳本則文箱ヲ不レ開持參シ殿中ヘ參リ。香西ガ罪科ニ依テ被誅。國家ノ爲ニ候ヘバ某少モ恨ヲ含ミ不レ申。御醫文ヲ開キ見ルニ不レ及ト頂戴シ。文箱ヲ返シ奉リ。舍兄縁座ノ罪名ヲ御宥免アツテ某被召仕事。生々世々之恩難レ有存トテ宿所ニ歸リ。平生ノ行義ニカハル事ナシ云云。

八月小

十六日。丁渡ヨ御泉涌寺。爲ニ御燒香一也。

二水記云。午時。武家爲ニ御燒香。(今度之後初度也。)渡ヨ御子泉涌寺。令ニ見物了。騎馬七騎如恒。傳聞。於ニ御寺。被レ改シ着御衣冠ニ云々。御香典万疋被レ付ニ寺家ニ云々。尙可尋。

十九日。庚午出ニ御坂本一。

高代寺日記云。八月十九日公方坂本ニ出勢ヲ見聞シタマフ。七日ヲ經テ歸京。

廿四日。乙亥江州地年貢事。奉行人傳ニ仰於朽木民部少輔植綱一。

朽木文書破

法金剛院雜掌申江州高島郡後三條事。年貢無沙汰之旨被ニ歎申レ條。太不レ可然。所詮如ニ先々。殿幣可レ被レ致。其沙汰。更不レ可有ニ緩急ニ之由。被ニ仰出ニ候也。仍執達如件。

長俊列 爲光列

佐々木朽木民部少輔殿

九月大 是月。波多野備前守。柳本彈正賢治下ニ向丹波一。

足利季世記云。カクテ兩月過テ後。丹波國ニアリシ香西ガ兄波多野備前守上リテ。尹賢ノ認言ヲ聞テ大ニイカリ。弟柳本

チ同心シ。早々國ヘ下ラントシケルガ。夜ニ入り曉峨ヘ夜川綱引ニ出ルニ事寄テ。家子郎等引率ノ下リケル。高國ノ侍ニ高島甚九郎ト云美童アリ。柳本ガ男色ノ因アリケレバ。是ニ暇乞ノ爲ニ北野ノ宿所ニ行テ。カヤウニ思立也。貴方日頃ノ好ミアレバ知セ奉ル。同心アリテ給フベキヤト申シケレバ。高島ヤヤ暫ク思案シ申シケルハ。誠ニ其方ト知音ノ事。人ノ存タル儀ナレバ。同心申度ハ候ヘ共。君ト臣ト上下ノ禮。恩義至テ重シ。エコソ領掌申スマシ。思召立事ナレバ留メ申スニ不レ及。早々下向アリテ用意アルベシ。某ニ告知玉フ儀朋友ノ交尤モ深ケレバ。君ニカヘ申テ丹波ヘ入玉ハシ程ハ告知セ奉ルマツ。其方大軍ヲ起シ貴上リ玉ハシ。某不付ナリトモ。マカリ向テ一矢仕ルベシト。此ハ君臣ノ義ヲ重シ。彼ハ朋友ノ睦ヲ厚シ。互ニナクナク別レケル。心ノ中コソ哀レナレ。柳本兄弟睦峨ニ行。角倉ガ家ニ立ヨリ。心閑ニ酒飲ミ打甘タル跡ヲ見セケルガ。角倉推量ノヤアリケン。鑑腹巻取出シ首途ヲ祝ヒケル。柳本嬉シト喜ビ。コレヨリ丹波ヘ下リ云云。

十月小

五日。乙卯奉行人傳ニ御代始射事於本郷治部少

輔一
本郷文書載

來十二月二日。御代始御的事。爲三射手二可被參勤候由。所被仰下也。仍執達如件。

大永六年十月五日

信濃守
散位判

十九日。已申樂御覽。

二水記云。室町殿有發樂。觀世。今春立達。大和國一兩人申沙汰云々。

廿七日。丑洛中騷擾。○波多野。柳本分ヲ據丹州諸城。

二水記云。世上物念之由有雜說。此間於丹波國。細川被官人一兩度及合戰一歟。亦四國邊令峰起之沙汰有之云々。仍彼此雜說以外之儀也。入夜諸道具已持運。即時物念出來。併天荒之所爲。京中又可二變。可慎々々。○廿八日條云。世上物念。猶以增長也。室町殿可有御登山一之由有沙汰。如何々々。○廿九日條云。世上今日聊靜謐也。先以案堵也。於丹州無指事。四國邊事。是又無實說云々。雖然諸道具密々預置云々。

足利季世記云。十月下旬。兄ノ波多野備前守ハ矢上ノ城ニ籠リ。柳本ハ同國神尾寺ニ據コモリテ。四國衆ト牒シ合セケル。

十一月大

四日。癸未細川右典厩出陣丹州。

二水記云。傳聞。今日細川右馬頭出陣也。可越丹州云々。○五日條云。或人云。内藤令没落云々。爲三事實者。京都儀難儀事也。如何々々。今度物念濫騰。七月香四依有隱謀之儀。令三生害了。此事未盡之沙汰也。仍伴兄弟波多野柳本兩人企隱謀也。南方牢人。四國衆等不峰起者。不可有指事歟云々。

六日。乙酉給御書於伊勢守貞忠。催促朝倉上洛事。

御内書記錄載

就三念劇。對三朝倉彈正左衛門尉。先日遣三内書候。不存油斷。不日令參洛。別而可致三忠節之旨。猶以急度可申下候也。

十一月六日

御判

九日。戊子被命。出勢事於山名右衛門督誠豐。

御内書記錄載

就三念劇。重而成三内書候。此時抽三忠節者尤神妙。被三澤思食候。猶右京大夫可被申候也。

十一月九日

御判

十三日。壬辰道永入道麾下發向。○給御書於武田伊豆守元光。催其出軍。

二水記云。早且。右京兆入道馬廻衆出陣。令見物了。都合勢數千五六百人云々。

足利季世記云。十一月十三日細川右馬頭伊賢大將ニテ。池田彈正。長鹽民部少輔。奈其修理亮。藥師寺九郎左衛門尉。同與二波々伯部兵部允。荒木大藏丞以下。高國馬廻八十餘騎馳下ル。

御内書記錄載

就三念劇。不日抽三忠節者神妙候。爲其重而少憲和尚差上候。猶被三澤思召候也。

十一月十三日

御判

武田伊豆守とのへ

十八日。丁酉自此日。京勢圍ニ神尾寺城。

足利季世記云。同十八日ヨリ。柳本ガ城神尾寺城ヲ取巻責戰

ヒケル。同廿日ノ夜ニ城中ヨリ物ナレタル足輕ヲスグリ。長鹽ガ役所ヘ夜打ニ入。首廿餘打取リテ返リ入ケル。

二水記廿六日條云。風聞云。丹州之義京勢雖爲多勢。急速不責寄。仍城之内堅固也云々。結局長鹽陣屋夜中敵打入。數十人蒙。隨分者討死了云々。太以京勢ノヨハリナリケリト。諸人稱之云々。勝事之儀也。南方四國等又可峰起云云。

廿一日。庚子命赤松又次郎晴政及其家人。使勵戰忠。

御内書記錄載

就三今度敵出張之儀。不日令進發。抽戰功者。尤可爲三神妙候也。

十一月廿一日

御判

赤松又次郎とのへ

就三今度敵出張之儀。無三疎畧之由。被三聞召候。尤神妙。彌抽戰功者。可爲三感悅候也。

十一月廿一日

御判

赤松又次郎とのへ

赤松下野守とのへ

別所小三郎とのへ

明石修理亮とのへ

浦上掃部助とのへ

晦日。己丹波合戦。京勢敗走。

足利季世記云。晦日丹波赤井五郎近國ノ勢ヲ備シ三千餘人。柳本ガ後詰ノ爲ニ出張ス。京方十三頭ノ勢ヲ分テ。赤井衆ト合戦シ。京方打負三百餘人打死ス。藥師寺ト荒木モリ返シ賞戦ヒ。赤井衆以上二百餘人打死シケル。去レドモ京方終ニ打負テ過半ハ京ヘ引返シケル。此時ノ高名ニヨリテ。藥師寺ハ備前守ニ任シ。荒木ハ安藝守ニ任シケル。又右馬頭尹賢ヲ始メトシテ。波多野ガコモリシ矢上ノ城ヲ賁ラル。神尾寺ノ寄手後卷ノ敗北ト聞テ力ヲ落シ。陣中雜説アリテ過半京ヘ引上ル。同十二月朔日池田彈正ハ波多野備前ガ甥ナレバ。則伯父ト一味シ。川原林。鹽川等ガ引ケル道ヲサヘギリ矢軍ヲシカケケル。京方除カチタリ。然レドモ右馬源二郎道永一味ナレバ。各有馬郡ヘ除キニケル。池田ハ池田ノ城ニ楯コモル。二水記十二月朔日條云。傳聞。丹州昨日及ニ合戦。京方敗北也。今日右馬頭已下。諸勢悉以令ニ上洛云々。言語道斷之義也。京勢數千人不得其利。武畧零落歟。又道永運命及ニ盡期歟。郡中安否。如履薄氷。可怖。

宗長手記云。此度丹波の軍何となく破て。若槻次郎無二比類一討死き。えあり。父若槻守先年河原林の城に遊入入て。名譽

の死のき。えありしなり。父子ともになれみし人なり。歌のことなどなげきて。道通院殿へも常にまいりかよはれし。あはれにも不便にもこそおもひたまひけめ。取傳へ若槻弓のいせれや死なぬが中のあらぬ死をする。取つたへは父子名譽の心なるべし。十二月小 亥此日。建ニ德政札。二水記云。今日。德政之札所々打之云々。今度邊土一箇衆依ニ訴訟一如此。四日。癸。五洛中騒擾。○此日。讃岐合戦。二水記云。上下京土倉昨今及ニ物念。德政事雖爲ニ御法。多以及ニ強々儀。土倉一向不承引ニ之跡也。仍ニ輕ニ上意ニ歟。不足言事也。今度丹州敵方未レ及ニ出京之沙汰。仍先京中無ニ一變儀。雖ニ然無頼体也。歌破國大日記云。大永六年十二月四日。阿州三好氏以ニ數百兵士。欲ニ救ニ讃州十川城。子時寒川氏出張而討レ之。世人謂ニ津柳合戦。十一月。辛。酉吹田合戦。足利季世記云。故澄元ノ生人岡郡中島ヘ峰起ス。三宅吹田大ニ悦ビ。河ヲ越シ吹田ニ陣ヲ取ル。道永御方伊勢神戶衆伊丹

方ト評定シテ。同年十二月十二日吹田ヘ押寄賁ケレバ。三宅吹田打負。吹田其頃十六才美童ナリケルガ。終ニ不退シテ打死シケル。是ヲ初百餘人打死シ。伊丹衆方ヘ首トモ取來ケル。然レバ中島ニアリシ右馬頭澄賢ノ衆モ堺ヘ引退ケリ。

十三日。壬。細川澄賢以下。自四國上着堺浦。○道永入道與ニ書於諸士。賞ニ吹田戰功。二水記十四日條云。或人云。今日從三和泉堺ニ有ニ注進。四國衆。其外島山式部少輔。上總等七八千許渡海云々。落着如何。可怖。

足利季世記云。同十二月十三日阿波ヨリ。細川右馬頭澄賢。同和泉守護三好越後守。子息左衛門督。弟神五郎。川村淡路守以下。故澄元方人衆淡州本ニテ勢汰シテ。同十三日堺津ニ着ケ。則欠郡中島ヘ陣ヲ取ル。爰ニテ年ヲ暮シケル。森本文書載

去十一日於吹田合戦時。首一討捕之由。尤粉骨。神妙候。謹言。十二月十三日 道永判

森本新左衛門尉とのへ 去十一日於吹田合戦時。打ニ太刀ニ被レ疵之由。尤粉骨。神妙候也。謹言。十二月十三日 道永判

後鑑卷二百九十二 義晴將軍記六 大永六年十二月 七百三十三

森本新左衛門尉 去十一日於吹田合戦時。被官人少路又三郎打ニ太刀ニ被レ疵之由。尤粉骨。神妙也。謹言。十二月十三日 森本新左衛門とのへ

去十一日於吹田合戦時。打ニ太刀ニ被レ疵之由。尤粉骨。神妙也。謹言。十二月十三日 道永判

吉祥寺 (案。以下所レ與ニ寶藏坊。森本源五郎。森本新五郎。積善坊。四通文書皆同。畧レ之。) 廿七日。丙。就ニ忿亂。給ニ御書於諸將。御内書記錄載

就ニ忿亂。不日令ニ參洛。抽ニ忠節ニ者。尙以可レ爲ニ神妙ニ候。仍差ニ下右馬頭ニ候條。委細可レ有ニ演說ニ候。併被ニ邊思召ニ候也。十二月廿七日 佐々木運正少弼とのへ

今度阿波よりの書狀見參に入候。尤神妙。いよく可レ致ニ忠節ニ事。俊覺候也。十二月廿七日

後鑑卷二百九十二 義晴將軍記六 大永六年十二月 七百三十三

伊勢守との

就三念劇。度々被仰訖。不日遂參洛。抽三忠節者。尤神妙。爲其差下貞辰一候。猶貞忠可申候也。

十二月廿七日

朝倉彈正左衛門尉との

就三念劇。不日令三參洛。可抽三忠功之段。對次郎三遣内書一候。仍差下松崎長老并貞充一候。急度遂其節。可爲三神妙一候也。

十二月廿七日

浦上掃部助との

赤松被官中(別紙也。)

無疎慢之旨。以三爵文官上之處。神妙。彌可致三忠節一候也。

十二月廿七日

一色下總守との

別紙 伊勢備中守との

種村刑部少輔との

こんどそうけきにつきて。二耶のぼりてちうせつ候は。しんべうのよし申くだし候。さうく上らく候やうに。いけむをくばへられ候べき事。よろこび入候事。

わか松うばの局へ

わか松こうしつの局へ

就三念劇。不日令三參洛。可抽三忠節之段。對次郎三遣内書一候。仍差下松崎長老并貞充一候。早々遂其節者。可爲三神妙一候也。

十二月廿七日

藥師寺與四郎との

就三念劇。馳走之段。尤感悅。彌抽三忠節者肝要候。仍只今次郎參洛事依被仰。差下松崎長老并貞充。早々遂其節者。可爲三神妙一候也。

同日

明石修理進との

今於於三丹州。抽戰功之段尤感悅。彌可致三忠節一事肝要候。仍只今次郎就三參洛之儀。差下松崎長老并貞充一候。早遂其節一候者。可爲三神妙一候也。

同日

赤松又次郎との

是月。於關東。里見實堯泛海。攻入相州鎌倉。

東亂記云。大永六年十二月ノ頃安房ノ守護人里見左馬頭義弘小弓ノ義明ノ下知ニシタガヒテ。數百艘ノ兵船ヲ用意シ。倫ニ相州鎌倉ヘ押アタリ。社家ヘ亂入。宮寺ノ神寶ヲ奪取リ

七日。乙諸大名出仕。

二水記云。早旦。室町殿出仕。令見物。道永以下悉以片衣。小袴也。當時先無爲之間。不可然之寐也。併似招亂歟之由。各有沙汰。誠以異様之事也。武田出仕之寐同之。(大フトチハク。此事如何。)

十日。戊子。參賀如例。○此日。伊勢貞充奉御使。

下。向播州。仍給御書于赤松及家人等。

二水記云。諸家參賀如恒云々。御參内無之。若御不具之故歟。可尋。

伊勢貞助記云。大永七年(丁亥)正月十日。爲御使貞充至播州下向。御内書十二通。貞忠御案文調進。貞久調進。爲子半切ノ寸法モ。貞忠ヨリ被レ出レ之。

阿州諸軍人出張之由。注進之條。不レ移三時日。至播州令三進發。抽三忠賞一者。可爲三神妙。猶貞充可申也。

正月十日

浦上掃部助との

御文官同前。不レ及注。以上十二通。喜多野。別所。藥師寺。小寺。其外十二通。明石。上原。中村。大河原。

一赤松兵部少輔義村へノ御内書。御立文ナリ。就三此儀。道永御中旨。貞忠談合アリテ。御立文ニ調進之。今日越州へ貞辰

後鑑卷之二百九十三

義晴將軍記第七 起大永七年正月 訖二十二月

大永七年 丁亥

正月大

佛閣ヲ破リ。鶴ガ岡ノ寶藏ヲ破却スト聞ヘケレバ。氏綱大ニオドロキ。コハ如何ニ。島ノ夷ナリトモ是程ノ狼藉ヲバスベキカ。吾朝ハ神國也。殊ニ里見ハ源氏ニテ。八幡宮ノ氏人ナリ。禮ヲ存セバ寄進ヲコソシ奉ルベキニ。神爵ヲモ不レ顧。前代未聞ノ惡逆也。カハ放逸ナル凡下ノ奴原一々ニ召捕テ後代ノ惡習ヲコラシメヨトテ。伊豆相摸ノ早雄ノ若者共我先ニト打立。鎌倉ヘ向テ四方ヲ圍テ攻ケレバ。案ノゴトク房州勢物トリニ散テ。一所ヘモ不レ打寄。神爵ヤアタリケン。一方ノ大將里見左近大夫馬ヨリ落テ時レケレバ。義弘不レ叶トヤ思ハレケン。早々船ニ取乘引退ク。小田原勢舟ニ乘テ追懸タリ。兩陣ノ兵ドモ渡中ニ帆ヲ突テ。扣舷トキチ作ル。鹽ニシタガヒ風ニ隨テ。推合々々攻戰シガ。神爵ニヤアタリケン房州ノ先陣惡逆ナシケル軍勢ドモ。一人モ不レ殘討レ。義弘小勢ニ成テ引退ク。

爲御使下向。此内書ハ貞充調進。何モ御文言以下同前。阿州諸年人至攝州出張之由。注進候條。催軍勢。不廻二時日二馳上。抽戰功者。可爲神妙候。委曲右京大夫入道可被申。猶員充可申候也。

正月十日

赤松兵部少輔とのへ

赤松祖母大めしと申。同母なばこめしと申。被成御内書。御立文なり。

ちう人しゆつちやうのよし。ちうしんのあひだ。あか松出だんの事申遣し候。きつとぐんぜいをもよなし。ちうせつ候やうにいけん候は。悦入へく候。ななさだみつ中べく候。かし。

正月十日

あか松うばのつぼれへ

御文言同前。

正月十日

あか松こころしつ局へ

廿日。戊。畠山式部少輔被害。

二水記云。風聞云。畠山民部少輔於三和泉堺被殺害云々。爲二事實者。爲三京都一聊宜事歟。後聞。治定云々。爲二上忍守一被害云々。

廿八日。丙。丹波勢出張。

二水記云。傳聞。今朝。丹州敵方足輕衆少々出張云々。仍京勢一雲軒。其外少々馳下四岡邊坊二也云々。

二月小

三日。辛。丹波勢攻山崎城。

二水記云。早朝。丹州敵猶以出張。四岳悉以焼失。其外下桂邊少々焼之。京勢雖馳向。機陣三西京邊云々。右馬頭陣三北野經堂。落着如何。恐怖云々。

五日。癸。山崎落城。藥師寺兄弟敗走。

二水記云。今日又賭勢加レ之云々。○六日條云。傳聞。山崎陣藥師寺九郎左衛門尉没落云々。○七日條云。四京之賭勢。敵方依レ無指事。先引退云々。

與福寺略年代記云。二月五日。自丹波一取出。山崎へ打入。藥師寺九郎左衛門尉。同興次兩郡代雖防不叶而落了。仍楊本鳥羽着陣。

足利季世記云。正月中ニ互ニ合戦モナシ。二月ニハ道永打立玉フベキ由議セラレケレドモ。越前ヨリ朝倉太郎左衛門爲ニ手合ニ可有ニ上洛ト。兼テヤクソク有シテ待玉ヒケケル間。延引トソ聞エシ。二月三日丹波ヨリ柳木貫上リ。全月四日未明ヨリ藥師寺兄弟ガコモリシ山崎ノ城ヲ責ケレバ。則貫落。

兄備前守落行高槻入江へ落ケル。弟與二ハ引返シ。自身太刀打シ實戦フ。柳木ガ爲ニハ小ジウトナレバ。馳ヨリ鐵ヲ與ニニ取付テ。スハタスグルソ與ニ殿。御方へ降参アレト被申ケル。藥師寺聞テ。忠臣二君不仕ト謂ヘリ。何面目アリテ今更降参可申ヤ。腹切テ見セント。已ニ草ズリチタ、ミ上ケレバ。柳本刀ヲ奪取リテ。道永ノ陣ヘソ送リケル。山崎ノ城落ケレバ。攝州上郡芥川城。太田城。茨木城。安威城。福井城。三宅城等。聞落ニシテ明退ケル。

九日。丁。被下御書於道永入道。

御内書記録載

大館兵庫頭かたへの一札披見候。就二先年之儀。いんころ

に被申候。尤喜悅に候。委細猶高信可申候也。

二月九日

右京大夫入道とのへ

十二日。庚。六條本國寺御動座。

二水記云。今日有御動座。近邊之衆令同道見物之。辰刻。右馬頭一雲軒等出陣。(今度爲二番合戦。可レ赴二鳥羽邊云々。)已刻。道永(可レ陣東寺云々。)出陣。此後武田伊豆守出陣。午刻室町殿御出。(唯密々儀。爲二御鷹野之跡。仍風折鳥帽子。御直垂。御乘馬也。御供奉之衆。各片衣。小袴也。)騎

馬三人。大館兵庫。細川駿河。伊勢守等。此後柳相隔。軍兵四五百人有レ之。(後聞伊勢守被官人云々。)幸公衆雜々歟。御陣本國寺。(法花堂。六條也。)見物衆云。典既一雲軒等都合二千四百人歟。(京勢數八千也。武田衆一千三四百歟。但人人口不同也。)抑今日御動座事。對柳本二可レ被動御座事。餘以柳爾之儀。未曾有事也云々。雖然種々奉公衆加二談合。治定此儀了云々。或人云。上意與道永二間事。依レ有ニ雜説一被寄御座云々。六角合力事。度々雖令催促。子今不三上洛。纒二千許被官人着三北白河。今日不三出陣云々。足利季世記云。柳本ハ山崎ニ陣取リ。此由堺津へ注進シケレバ。三好左衛門佐命弟神五郎ヲ大將トシテ。同月九日ニ堺ヲ立。同十一日山崎ニ着テ。柳本ト軍評定シテ打立テ。同十二日京勢ト桂川ヲ隔テ。矢軍シ。其日戰幕テ夜ニ入バ。久我ニ陣ヲ取ル。同十三日御所標モ六條へ御動坐アリ。道永モ妙本寺へ出張ス。御勢ハ。本海道。鳥羽。鶴森ニ陣取テ敵ヲ待カケタリ。興福寺畧年代記云。公方條。道永。二月十二日御動坐。公方條本國寺。道永東寺。御供武田殿。江州之三雲。馬瀨。三千許ニ被立了。

十三日。辛。桂川合戦。日野大納言内光卿以下戰死。

二水記云。早且。於桂川之邊有二合戰。武田衆數輩打死了。一番合戰。道永馬廻衆又敗北云々。京勢恐怖。安否之境也。至薄暮。數度合戰。兩方相引退去云々。今日合戰。道永自身馳向加下知。武家同被寄御馬云々。雖不能得其理。諸人稱歎也。六角北白川衆頭馳加云々。敵方柳本自本之人也。波多野孫右衛門平生所勞。今日上洛云々。但不不知其實否。將又此間和泉堺所在四國衆同馳加。仍敵方以外多勢云々。尚以京方無頼也。(同十四日條云。後聞。昨日合戰敗軍之砌。日野大納言(内光卿)打死云々。言語道斷之次第也。當時内外之儀。分限超過也。凡餘十分之牀也。當時不相應之間。不思饑出來歟。今度就御動座。人數相催。百人許卒之。仍道永合力。馳向彼戰場之處。折節敗軍諸勢北走之間。於其中被殺害云々。不運至極。不足言事也。入道相國二男也。去年左府被薨。當年又如此。老後連年之思。悲傷令推置哀者也。

東寺過去帳云。仙慶禪門。蘆田彌三郎心存弟。今度細川殿與柳本二合戰之時。細川殿内有井上忠兵衛手打死。大永七年二月十三日。○又云。細川右京大夫入道道永與波多野井柳本二依二確執。去年(大永六)以來。京都。丹波國。攝津國所々合戰之時。兩方打死亡靈。殊當年(大永七)二月十三日桂橋邊。仙乘寺。四七條所々合戰。敵御方武田方等打死亡靈等數

百人。日野殿。大永七年二月十三日爲三公方衆一打死。興福寺略年代記云。十三日合戰。京衆討死數多。武田方粟屋父子。熊谷父子。其外數百人討死。道永馬廻。荒木以下三十人許討死云々。四國衆。香西。赤澤新次郎以下討死云々。足利季世記云。武田伊豆守元光。四七條泉樂寺へ陣取り。桂ナ上ル敵ヲ待。三好左衛門督舍弟神五郎一手ニ成テ桂川ヲヲタリ。武田伊豆守ト合戦シ。武田方打負。粟屋。逸見ヲ初八十餘人三好方へ打取リケル。是ヲ聞テ道永荒手ヲ入替テ。赤松ヲ初桂口へ向ヒ玉フ。日野大納言高光卿。道永ト從弟ニテオハシケレバ。武勇ノ家人ナラネ能同ク向ヒ玉ヒケル。奈長修理亮元吉。同子息與三郎ト云者二人。大將高國へ參リ。唯今御先ニ打死シテ見セ奉ルベシト申ステ。一雷ニス。ミ。阿波衆ノ先陣赤澤新次郎。香西元盛ト名乗リテ出ルニワタシ合。散々ニ實戦ヒ。赤澤。香西ヲ奈長ガ手へ打取リケル。丹波衆波多野備前守。荒手ニ入替テ戦ヒタレバ。奈長修理亮父子。同源吾モ打死シ。日野大納言殿。通所ナクシテ打レ玉ヘバ。道永馬廻衆荒木父子十四人枕ヲ双テ打死ス。雜兵三百餘人被討ケリ。敵方ニモ荒手ニカケ合テ。丹波衆。阿波衆八十餘人討死也。高島甚九郎先度ノ辭ヲタガヘシト乘入。名乗カケ一先ハモリ返シタレドモ。引立タル勢ナレバ。ツバイテ返合スルモノナクテ。高島終ニ遁レテケリ。夜ニ入りケレバ互

ニ相引ニシケル。日野系圖云。内光。權中納言政資子。母下野守源教春女。五藏。辨頭。參議。左大辨。待從。權大納言。正三位。木高光。實太政大臣實淳公二男。大永七年二月十三。大樹陣。六條本願寺。於三川勝寺二合戰之時討死。三十九歳。法名道榮。道號花谷。號後廣壽院。伊勢系圖云。貞久。下總守貞數三子。六郎左衛門尉。法名道昭。大永七年二月十三桂川御動座之時。於三清住寺河原二合戰之時討死。

十四日。壬辰。昨日敗軍。將軍家遜。近江國一給。

二水記云。早朝。御陣已以敗北。武家。道永。武田悉以出奔坂本二也。時刻到來。言語同斷。不足三嗟嘆一耳。公家之儀。彌可二零落。數而有餘者歟。

足利季世記云。十四日公方様モ。道永モ。武田伊豆守。都ニタマルベウモナク。近江ヲ指テ落行ケル。細川兩家肥云。明日十四日に御所様(義晴)。道永武田殿都に叶はせ給はて。また近江へのかせ給ける。然ば阿波柳本はいさみ京へ打まはり。柳本は山崎へ下陣取。阿州衆は中島へ下て陣取也。こゝに一つ不思議あり。たとへば今度御所様御動座なる所に。大將三好左衛門尉その恐れなまじき手なれる間。十三日の合戦に薄手負ふ。くるしかるまじき手なれ

ども。煩出死たりける。末世といへども日月は地に落さるし。と皆人申侍る也。しかれば山城。丹波。攝津國城々方々へ落行ところに。道永方に。伊丹城ばかり警固也。誠に不思議哉とぞ申なり。

長享年後載内兵亂記云。七年二月。義晴將軍至江州長光寺。道永供奉移御座。

宗長手記云。大永七年二月十三日七條わたりの合戦。武田伊豆守代々粉骨の勝利をうしなはれ。さらば敵といふへきも誰ならず。丹波山家樵夫やうのものにや。(中略) 冬丹波ふる牢人等峰起して。刺戟。西京。桂川を過て。七條邊まで亂入す。しかれば六條大宮わたりまで御動座。道永東寺南大門一日一夜桂川左右の合戦。御動座とて御敵槍をふせ射矢なとめかしこまりけるとなり。夢のさめたる様にして。十四日に坂本へ御下向。志賀。木濱。山田。矢橋。守山。二三日長光寺かりの御所しつらはれ御うつり。筑地以下警固。しばらく御座の様にきこゆ。長光寺名詮自性な。

此時とあふがざらめや春の日の長き光を四方にしき筒。東海道。北陸。西國。中國の侍參給。萬の名乗むかし木丸殿のゆくはたが子ぞなぞもさながら長光寺のいまにや。あらあら行すへ筆にまかせ侍るべし。

十七日。乙丑。柳本以下入洛。

二水記云。午前諸勢入洛令見物。柳本。波多野。(父)不(上)落也。(澤)藏。三好越後。其外雜々數千人上落了。天下轉變只如夢中。何人辨是非哉。洛中物恐儀一向無之。成敗嚴重也。先可然事歟。○十八日條云。風聞云。武家道永等。悉江州守山御居住云々。○廿日條云。食後近邊之衆令同道。右馬頭道永等庭見物也。各驚目物也。

十九日。卯。柳本。波多野發向攝津。

二水記云。傳聞。柳本波多野出陣也。攝津イタミ城可貴云云。

廿一日。巳。給御內書於朝倉孝景。

御內書記錄載

今度京都下慮之儀。無是非次第候。此時節別而令馳走。可抽軍功事肝要候。猶貞忠可申候也。

二月廿一日

朝倉彈正左衛門尉とのへ

至今度江州北郡堺。可相立勢衆一由。被仰之處。早速申付之條。尤神妙。猶貞忠可申候也。

二月廿一日

朝倉彈正左衛門尉とのへ

廿四日。壬。此夜。鹿苑院炎上。

二水記廿五日條云。去夜。相國寺鹿苑院悉以燒失。言語道斷事也。自火云々。武運及御零落之基歟。可嘆々々。○廿七日條云。鹿苑院燒痕見物。不可說之跡也。小堂庭前栢樹。東大門。四淨等殘了。其外及三竹木。悉以焦色也。

廿七日。亥。道永入道依獻重器。給御褒書。

御內書記錄載

被預置本國寺二重代進上候。尤神妙候。入洛之時。可有御感一候。先得其意。演說肝要候也。

二月廿七日

右京大夫入道とのへ

三月大

五日。壬。賞丹州在陣。給御書於山名右衛門督誠豐。又有被仰下佐脇三河守旨。

御內書記錄載

今度於丹州。長々在陣。粉骨之至。尤感悅候。出張之砌。彌有馳走者。可爲神妙一候。猶右京大夫入道可被申候也。

三月五日

山名右衛門督とのへ

就今度悉劇。早々令上洛之條。尤神妙候。只今者先致

下國二調時宜。入洛之砌。則馳參者。彌可爲思節一候也。

三月五日

佐脇三河守とのへ

六日。癸。給御書於鹿苑院。勉其造立。

御內書記錄載

今度當院寺務職事。辭退由候。雖然早被歸住。可被專造立之段肝要候。猶蔭涼軒可有演說一候也。恐惶謹言。

三月六日

義晴御判

鹿苑院

十三日。庚。依去月戰死。今日有施餓鬼。

二水記云。傳聞。今日去月合戰死人月忌始也。於彼戰場跡。從所々有施餓鬼等云々。又自若州男女上落。討死之齒。妻於此齒跡。發露涕泣。數聲割髮云々。哀事也。彼戰場者。謂ニセンシニ寺在所一也。七條之通四京桂川等之邊也云々。抑四國若公御上洛事。未無治定。三好兩入宋和陸。仍不事調云々。江州之儀。又無一途之儀。洛中無武士之族。頗希有之跡也。

十五日。壬。依獻物。給御書於島山左衛門佐義

御內書記錄載

十七日。甲。給御書於北畠中將。土岐次郎。關民部大輔等。

御內書記錄載

爲當年之祝儀。太刀一腰。馬一疋到來候。悅喜之狀如件。

三月十七日

北畠中將殿

水銀三筒到來候。喜入候之狀如件。

三月十七日

北畠中將殿

入洛之儀。於定日。重而可被仰出候。然者即馳參。可抽戰忠事。可爲神妙一候也。

三月十七日

關民部大輔とのへ

分國之儀。未詳諳一候哉。不可然。早相調之。入洛候砌。馳參抽戰忠事。可爲神妙。猶右京大夫入道可被申候也。

三月十七日

土岐次郎との

廿二日。己亥四國若君及細川聰明丸着堀浦。

足利季世記云。三月廿二日阿波若御所様。(十七才)細川澄元ノ嫡子聰明殿(十四才)堀へ御着津アリテ。爰ニテ御元服アリ。御所様ヲマ界御曹司義維ト申ス。聰明殿細川六郎殿ト申ス。晴元是也。

二水記廿四日條云。風聞云。一昨日四國若公(法住寺殿御息云々)和泉堺御着岸云々。但實否未定也。後聞。治定云々。落着如何々々。

廿三日。庚子有被仰下朝倉孝景旨。

御内書記錄載

入洛之儀。於定日者。重而可被仰候。然者即馳參。可抽戰功。次至江州南北之堺。在置勢衆者。彌可爲忠節一候也。

三月廿三日

朝倉彈正左衛門尉との

今度朝倉左衛門尉事。このみぎり致三忠節一候。可爲神妙一候。しからば供衆にめしけはふへ候。いか存申候哉。かし。

三月廿三日

伊勢守との

廿六日。卯給御書於海部下野守。大友修理大夫。令抽其戰功。

御内書記錄載

今度之儀。致御方。抽忠節者。可爲神妙。猶右京大夫入道可被申候也。

三月廿六日

海部下野守との

就今度敵出張。至阿州令亂入。抽忠節者。可爲神妙。猶右京大夫入道可被申候也。

三月廿六日

大友修理大夫との

四月小

三日。庚戌波多野。柳本等下向堀浦。

二水記云。早朝。波多野孫右衛門尉。(依所勢。乘板輿)柳本等下向和泉堺。令見物之。武者出立也。兩人勢都合千五百人云々。見物廣橋向道。

四日。辛巳。牡丹花宵柏歿。

二水記云。夢庭(宵柏法師。近年號牡丹花)死去云々。(八十有餘云々)梅菴古傳云。宵柏。宗祇門弟也。族中院。其號尤多。夢庭。弄

花軒。牡丹花。著述有今案新式。宵圃弄花。九代抄。閑居抄。六家抄等。詠草曰春草草。入新筑波作者。東山常菴爲柏作贊辭。

六日。癸丑依先皇御一周忌。被獻香資。

二水記七日條云。今日先皇御一周忌也。於般舟三昧院。一七夕日隨行念佛。今朝曼陀羅供(黑衣衆執行也)有之云々。爲武家(近江)御香典万疋。昨日被進禁裏了。奇特之由人皆稱之。此御香典之内。遠近臣下窮困之輩。各百疋被下之了。御憐愍之至也。

十九日。丙寅賞河内高屋城固守。給御書於島山尾張守植長。

御内書記錄載

當國高屋城堅固段。尤感悅候。仍歸洛事。急度相催候半候。彌忠節可爲神妙。猶貞忠可申候也。

卯月十九日

島山尾張守との

廿七日。甲戌給御書于伊丹入道及武田左京大夫。有被仰下旨。○此日。於近江假營。有申樂。

御内書記錄載

今度所々要害退散之處。當城堅固之段。尤神妙思食候。彌可抽軍忠事肝要候也。

卯月廿七日

伊丹大和入道との

就京都都念劇。至江州被取退候之處。驚入候旨。早速注進申候。殊可勵忠節之段。神妙候。然者急度令參洛。抽戰功者尤肝要。猶右馬頭可申候也。

卯月廿七日

武田左京大夫との

二水記五月一日條云。今日。高倉從江州歸洛。相語云。御上洛可爲今月之由。有其催。雖然必定未定歟云々。去廿七日。六角中沙汰觀世猿樂有之。就之進物派分奔走云々。

五月大

朔日。丁巳蝕。

御湯殿上日記云。みまひつじん時日しよくにて。御所つみまいらする。

二日。戌給御書於赤松次郎。令抽其忠功。

御内書記錄載

到堺津。敵着岸上者。急度令出陣。抽忠節者。尤可被悅思食一候也。

五月二日

赤松次郎どのへ

六日。壬給御書於山名左衛門督誠豐及治部少輔諭其和議事。○此頃。洛中盜竊公行。

御内書記錄載

治部少輔和興事。以內書一重而申遣之候。得其意。可令申合之段。肝要候也。

五月六日

山名右衛門督どのへ

右衛門督間之事。先度被仰候處。未休之段不可然。關是非。早速令和興者。尤可爲忠節候也。

五月六日

山名治部少輔どのへ

二水記云。風聞云。從所々。強盜數十人馳聚下京邊。每夜及物念云々。結句此近所可打入之由有雜談。各成用心。禁裏四足東門等役所無之。御無用心之儀勝事也。當時之林可有如何哉。凡天下滅亡爲林也。南方武家未御出京。此段又何子細哉。江州儀是又無御一途云々。然間京中盜人風情。種々不思議可出来。可恐々々。可嘆々々。

十九日。未依阿州事。有被仰道永入道事上。

御内書記錄載

今度至阿州。可令亂入給事。可爲喜悅旨。對一條殿。得其意。早々可被傳達申候也。

五月十九日

右京大夫入道どのへ

晦日。丙頒御書于松田上野介。勸其軍功。

御内書記錄載

今度御入洛之砌。馳參抽忠節者。尤可爲神妙候也。

五月三十日

松田上野介どのへ

六月小

二日。戊頒御書於大傳法院衆。使勵戰功。又賞山左衛門督義總功勞。賜太刀。

御内書記錄載

就今度忿亂。無疎畧之旨。被聞食畢。尤神妙。彌抽忠節者肝要候。猶右京大夫入道可被申候也。

六月二日

大傳法院衆徒中

大傳法院行人中

大傳法院預衆中(三通御文言同。)

今度種々馳走。よろこび入候。仍太刀一振(國綱)刀一腰(左文字)つかはし候。猶尹賢可申候也。

六月二日

山左衛門佐どのへ

十三日。未依丹州事。給御書于山名赤松兩人。

御内書記錄載

入洛事。土用過者即可出張之間。至丹波國。早々令進發。抽戰功者。可爲神妙。猶右京大夫入道可被申候也。

六月十三日

山名右衛門督どのへ

入洛事。土用以後即可進發之間。此砌彌抽忠節者。可爲神妙候也。

六月十三日

赤松又次郎どのへ

十七日。癸四國若公被進劍馬於内裡。

二水記云。今日。南方武家被申御禮。御馬。(川原毛)御太刀也。奉行(齋藤)兩人參長橋車寄。於此所。傳奏右中辨兼秀(左中辨尹豐相副云々)請取之云々。

十九日。丑就忿亂。給御書於關東上杉以下諸

人。

御内書記錄載

就今度京都忿亂。被召上武田左京大夫之間。不存等閑申合之者。可爲神妙候也。

六月十九日

上杉どのへ

諏訪上社大祝

木曾

七月大

十三日。戊此日。南方義維主叙爵。○給御書於道永入道。

二水記云。傳聞。今日有陣儀。南方武家(義維)御叙爵。御任官(左馬頭)也。仍有小除目。上柳甘露寺中納言。登講持明院宰相(執筆)等也。奉行戰事頭辨資定朝臣云々。抑宣旨事。各令下向(和泉堺)可持參之處。遠路儀難事行。砂金代物雖上納。不被渡者不可下向之由。官外記申之云々。南方御事。去三月廿四日。和泉堺御着岸。未及御上洛。法住院殿御息。(武衛)江州武家御舍弟也。島御所爲御猶子分歟。可尋。御元服於堺密々有其儀歟。今度御名字。東坊城撰進之。此間御名字義賢云々。

歷名土代云。從五位下。源義維。大永七十三。同日左馬頭。御内書記錄載

當國南北和興之事。馳走之由可然候。さりながら無途一候間。急度罷し被調之尤神妙。よろこび入べく候。かしこ。

七月十三日 御列在之

右京大夫入道とのへ

十六日。卯此日。於關東。宇都宮下野守忠綱卒。

宇都宮系圖云。忠綱。下野守成綱子。從四位。侍從。下野守。左馬權頭。母那須太郎資親女。大永七年丁亥七月十六日卅一歳卒。法名密山長雲。

十九日。甲給御書於日野晴光朝臣。被賞乃父戰死。

御内書記錄載

去二月。至桂川合戰之時。故亞相討死。無比類候。仍家領所々事。自然雖有訴訟。不可許容之上者。任當知行官。可被全領知候也。

七月十九日 御列在之

日野殿

廿四日。己依琉球國進貢。給御返章。

御ふみくはしく見申候。進上のもども。たしかにうけとり候ぬ。又この國と東羅國と。わよの事申とのへられ候。めてたく候。

大永七年七月廿四日 御列在之

りうきう國のよのわし

廿七日。壬寅守山御出張。

二水記云。若殿云。江州之事。今日武家御出張云々。守山御逗留。於此所。諸國之勢可被相待云々。

爲和集云。七月廿五日。將軍家江州長光寺に御牢人にて御座候間。爲和長々牢人にて奉公申なり。同廿七日に守山まで御出張。御供申。御先へ參。

八月大

廿九日。甲戌先驅入浴。

二水記云。早日東山勝軍地蔵堂之邊燒。江州御出浴近々也。仍少々昨日着坂本云々。今朝之儀人不之見。見山筋相驚了。已烈。足輕衆既以入浴了。近日四國丹波等之衆悉下國了。京中一人無之。仍今日。諸勢即刻入浴。無別義也。將又從山科口。藥師寺九郎左衛門尉等出張。方々彼是引卒也。西邊致打廻云々。○晦日條云。昨日出張之衆。及晚引

退云々。今日又無別儀。如何々々。江州儀不三相調之由。又有異說。兩段不三治定。蒙然也云々。

是月。遣明書成。

續善隣國寶記載

日本國王源義晴

大明一統。歌文王德於周詩。萬歲三呼。徵武帝壽於漢史。論其封疆。則隔中華者幾千萬里。仰其光賁。則耀扶桑之六十餘州。廢明廢昌。有典有則。恭惟大明皇帝陛下。綽々餘裕。競々成功。文物之盛。莫過于今。昭道之興。何愧于古。自西自東。自南自北。孰不貢苞茅之矣。繫日繫月。繫時。齊耳。庶修禱好式沐。茲自琉球國。遠傳勅書。賁宥之教。不三忘三側陋。感戴々々。謹表以聞。臣源義晴誠惶誠恐頓首謹言。

嘉靖六年丁亥八月日

日本國王源義晴

別幅

近年吾國遣僧瑞佐西堂。宋素卿等。齋弘治勘合。而進貢。又聞。四人宗設等。竊持正德勘合。號進貢船。蓋了龍梧西堂東歸之時。弊邑多虞。干戈梗路。以故正德勘合不達東都。吾即用弘治勘合。謹修職貢。示不怠也。如勅諭。宗設等爲僞。不可言知矣。大内多々其氏義興。舊下臣神代源太

耶爲其元惡。故就誅戮。彼所三虜而來。大邦之人。前年既發船以還之。中流遇風。船不克進。尚滯西鄙。近日當還焉。大邦所留妙寶。素卿。其餘生而存者。不三論多少。以仁見恕。幸甚幸甚。然則先令妙寶等。到琉球。自琉球而可歸吾國。前代所賜金印。頃因兵亂。失其所在。故用花列。而爲信。琉球僧所知也。伏希察察。妙寶。素卿歸國之時。賜新勘合并金印。則永以爲寶。聖德及遠。不可誤焉。吾當方物件。隨例進貢。妙寶。而兩三人。命管領道永。以遣書矣。

咨禮部。

嘉靖六年丁亥秋捌月 日

日本國王源義晴

九月小

十三日。戊子依佐々木定頼供奉。有被命進藤

新介旨。

御内書記錄載

就入洛之儀。定頼供奉事。致馳走之通。内々被聞食候。尤感悅。彌加意見者。可爲神妙候也。

九月十三日

進藤新介とのへ

御列在之

十七日。壬辰。三好元長等攻伊丹城。

細川兩家記云。九月十四日に前筑前守之長の孫に三好筑前守元長大將にて。諸勢悉く境を打立て播州尼崎へ渡り。同十七日に伊丹の城へ取り懸。同十月廿八日迄せめられけれ共落さる。

十九日。甲着。御東坂本。

二水記云。風説云。今日江州大樹。同道永等坂本御着岸云々。爲和集云。九月十九日に東坂本まで御出張。佐々木彈正少彌御伴。廿五日に渡海也。

廿五日。庚令。躰。湖水。給。

(專注二十九日條)

十月六

二日。丙午。佐々木定頼着坂本。

二水記云。今日。六角少彌着坂本。數千人云々。

六日。戊戌。朝倉教景以下坂本參着。

二水記云。風説云。今日越前國衆朝倉太郎左衛門尉已下卅餘頭着坂本云々。

十三日。丁着。御東山若王寺。

二水記云。今日御出張一定也。未明。東山所々燒了。早且。

於三條邊見物。藥師寺九郎左衛門尉。同與二等上落。其勢數百人也。食後又出河崎天神邊見物也。右馬頭以下。馬廻之衆等都合貳千人許歟上落了。此後行三四條橋邊。越前衆上落令見物。朝倉太郎左衛門尉。其外同名以下其勢數千人也。二十餘頭令上落之由。兼有沙汰。午刻六角少彌上落。若東福寺云々。勢數一万五千人之由各稱之。越前衆之陣所。建仁寺之門前。其外四條在家等云々。後聞。道永午時上落。(早且。陣。東山勝軍地蔵堂。)若東山神護寺。此後大樹御上落。御陣所若王寺云々。今日諸勢都合五六万人可有之由。兼有沙汰。勸修寺大納言爲御使。參。武家云々。

爲和集云。十月六日に。越前衆坂本へ着陣。同十三日に東山若王寺まで御着陣。同廿四日東寺まで御着陣。與福寺略年代記云。同十月十三日從坂本。被三京都御入落。御供道永。典殿。并六角一万五千。朝倉庶子太郎左衛門。人數一万二千。致御供一畢。長享年後幾内兵亂記云。七月至坂本。御進發。十月至東福寺。被進御馬。定頼公供奉。東寺過去帳云。自大永七(丁亥)十月廿四日。至同大永八(戊子)四月二日。當寺御陣之間。敵御方人數當國并越前。近江。若狹。大和。河内。丹波。攝津。伊賀。伊勢。阿波。淡路。設岐衆。此外於諸國。戰死數千人等。

十四日。戊午。諸人參賀。

二水記云。今日。大略參賀云々。多分異林云々。但人々所爲不同也。於三若輩者。異林可然歟。小倉前亞相。東坊城等異林云々。老者聊不似合歟。但如此御陣等。烏帽子却而不相應。歟。可尋決之。帥。柳。万里小路。中院等同道。各直垂也。晚陰。黃門。(直垂。少納言(異林。令參上)了。有御對面。若王寺云々。(道永(神護寺。同令對面云々。予依不令期不參也。無立錫之地。亦幸者乎。各馳走。不弁之至也。

廿四日。戌移。御陣於東寺。給。

二水記云。大樹今日可被寄御陣云々。曉天。諸勢出陣。辰刻許道永出陣。午刻御出云々。奉公衆都合三千人許有之由。見物衆稱之云々。今日。惣都合可及八万人歟。由有沙汰。超過之事也。縱雖爲五六万人。無子細歟。今度合戰。可得其理。一事案之内也。珍重々々。後聞。武家御陣東寺之西。寺云々。道永在唐橋里云々。先勢渡河。桂西丘寺所々令放火云々。

與福寺略年代記云。同十月廿二日御陣替。公方棟東寺。道永カラ橋。六角下鳥羽。朝倉太郎左衛門山中。云所。陣取。

廿五日。己給。御書於島山尾張守。

御内書記錄載

至東寺。陣取之上者。不移時日。可抽戰功一事。可爲肝要。猶道永定頼可申候也。

拾月廿五日

御判

廿七日。辛未。洛中災。

二水記云。土御門室町殿在家三十間燒亡。任風聲。從乾方吹之間。此邊不苦。然而近邊之衆。馳參禁中了。

廿八日。壬申。三好元長上洛風説。

細川兩家記云。道永は越前の朝倉を御たのみあり。また近江の兩佐々木殿を御頼分有。下京東寺四。七條。唐橋。鳥羽。橋森に三百計にて陣取給ふよし。四岡かいてかたより注進候也。三好元長さあらば京へ上り相果べしとて。丹波へ人をつかはし。波多野。柳本と相談し。伊丹城を打置。十月廿八日に上る。

三日。丁丑。武田伊豆守元光上洛。

二水記云。午刻。武田衆上洛云々。仍見物之。粟屋右京亮同名許云々。其勢八百人許有之。武具美麗之由各稱之。當春多分同名討死。雖然又令上洛。奇特也。可謂武勇之專一者歟。抑御陣雖被相寄。至今日不令合戰。雖得其意之休也。各談合計。武略之由有沙汰。雖敵方爲無勢者。

何急々不決三勝負一哉。不審也。

十六日。庚寅丹波勢出張。

二水記云。已剋許。柳本其外丹波國人引卒出張云々。長坂。足上山。其外龍安寺等山。所々燒。此間雖有其沙汰。未定之由各油斷之處。急速出張。上京願助以外也。又桂川之邊終日有三野伏云々。然而不指合戰一歟。可尋。

十八日。壬辰柳本。波多野。及三好等入洛。屯兵各所。

二水記云。早朝。柳本。波多野。赤井等數千人入洛。即陣下京法花堂。此後三好筑前守(故筑州孫也)同陣。サイ井。則東寺御陣。東北方奉。固也。雖不指合戰云々。落着如何。恐怖此事也。上京中。又敵方往還希有之林也。一月中轉變。併天寃之所爲歟。可憐々々。

十九日。癸巳泉乘寺口合戰。

二水記云。午後合戰及數度。兩方死人繁多云々。東寺之通路已以不容易。甚不便之事也。仍御陣之儀不。如何々々。

廿二日。丙寅島山尾張守植長移陣。

二水記云。未明。島山尾張守(此間陣。建仁寺)寄陣於因幡堂云々。吹貝。其聲數多也。

廿六日。巳下京合戰。

二水記云。傳聞。於下京(五條邊)有合戰。波多野數十人討死云々。

廿七日。庚給御書於朝倉孝景。被賞其家人戰功。

去十九日從三泉乘寺取出。於四院口。朝倉太郎左衛門尉并孫九郎。同心與力被官人以下。碎手及合戰。大四與次郎。遊佐彈正忠。河村四郎次郎。其外數輩討捕。忠節尤感思召候。仍或討死。或手負輩。神妙候。彌可勳戰功一候也。

十二月廿七日

御内書記錄載

朝倉彈正左衛門尉どの

就三今度京都念劇。爲三朝倉彈正左衛門尉代一令三參洛。殊去月十九日。從三泉乘寺取出。於四院口。息孫九郎同心與力被官人以下。碎手及合戰。數輩討捕。忠節無比類一候。仍

細川兩家記云。あくる十九日に島山上總介殿の遊佐河内守。阿州方にて泉乘寺口へ七られける處に。越前衆渡合切勝て。河内衆の首百三十あまり討取悦處へ。又三好衆渡合切勝て。戦し。三好衆切勝て越前衆の首二百計討取て。本陣へ取入けり。其後は三好方の太刀におそれ合戦なし。

廿九日。卯越前勢入洛。

二水記云。後聞。越前衆二番之督五六千人上洛云々。近日定可有合戰一歟。

十一月小

十二月大

十四日。丁兩陣合戰。

討死。或手負輩。神妙候。彌可抽軍功一事。可爲感悦一候也。

十二月廿七日

朝倉太郎左衛門尉どのへ
朝倉孫九郎どのへ(御文言同)

廿九日。壬申此頃風説不一。依北島中將出陣。頒給御書。

二水記云。御陣儀已以雖至今日。不能落居。勝事儀也。且時刻未到之故歟。御陣中諸勢。如風聞者十万人餘云々。超過之事也。敵方幾二万許可有之云々。以之思之何不得其理一哉。不可思議之林也。結句或説云。有和睦之沙汰云云。不足言事也。

十二月廿九日

御内書記錄載

就京都念劇。至長谷一出陣。尤感悦候。彌忠節可爲三肝要一候狀如件。

十二月廿九日

北島中將殿

御判

御判

後鑑卷之二百九十四

義晴將軍記第八 起享祿元年正月一
享祿元年子八月改元

正月小

七日。庚辰。仍御方違。渡御東福寺。

二水記云。傳聞。武家爲御方違。渡御東福寺云々。和陸事有其沙汰。於三箭軍者。每日有之云々。

十日。癸未。御在陣。無參賀者。

二水記云。武家參賀事。諸家無之。依御在陣也。

十七日。庚寅。兩陣和睦。

二水記云。風說云。今日御陣儀和睦云々。可謂珍重歎如何。諸國軍勢上落。似無其詮。可思々々。

廿二日。乙未。四國勢上落。

二水記云。四國衆上京徘徊。見物之。

廿八日。辛丑。柳本三好等下向本國。

二水記云。傳聞。今朝柳本彈正忠本國退散云々。抑今度和陸事。兩方種々儀有之。仍此間雖經數日。至今日未落居也。而柳本可逐電之分相定之處。其儀不同心。仍今朝破

事儀。任三雅意。令出奔云々。結句庶子三好神五郎。其外少少同意之衆數百人。隨逐柳本云々。道永甚以無與之味也。落替又如何。於三好筑前守。今和睦。無相違云々。

細川兩家記云。年くれて大永八年戊子に成之。越前衆と三好方相談して。細川双方和睦の慶有。同正月廿一日に互に人質出し可然處に。三好神五郎柳本一味同心して。和睦を破り。三好元長を背て境へ下り。元長の儀。色々譴責申されけるなり。

二月大

九日。辛亥。開陣延期。

二水記云。大樹今日可有御開陣之由。兼有沙汰。然而三好筑前守下向和泉界。申云。六郎上落之儀。未事調。先可有御延引之由申入也。仍今日無御開陣云々。

細川兩家記云。元長は道永へ對面申し。境へ下りてあやまりなき旨申上らせければ。六郎殿御心得ゆかず。

十四日。丙辰。山名右衛門督誠豐卒。

山名系圖云。誠豐。彈正少弼政豐三子。右衛門督。大永八年二月十四日卒。年三十六。法名玄峰。大通光明院。

三月小

六日。戊寅。朝倉孝景下向越前。

二水記云。風聞云。去曉朝倉太郎左衛門尉不及申御暇。忍以令下國云々。子細何事哉。奇異事也。縱雖有千万之述。當時和睦未落居之砌。可堪忍事也。尤不番云々。太郎左衛門下國之上。越前衆不殘一人。令歸國云々。勝事之儀也。將又六郎上洛事。是又雖經數日。未事調。結句和睦事。不庶幾之衆。同意數千人有之云々。三好筑前守尙以不及了簡一歎。天下之休。併天覽之所行無疑者也。○十八日條云。風聞云。和泉界六郎上洛。和談事不事調。令治定。仍爲三好合力。京勢數多令下向云々。落替勝事之儀也。

十九日。卯辛。此頃。三好筑前守元長下向四國。

二水記云。卷說云。三好筑前守京儀不及相談。令下向四國云々。事實歟。然者又可二物念一也。如何。摠別難得其意。爲體也。東寺御陣未。能御歸陣。御稟然察者也。只天覽之所行。亂逆不可止之條無疑者也。鬼云角云。天下零落。又公家之儀滅亡之時刻到來也。殘命難計者歟。可哀可悲。是月。畠山左京大夫義忠遣南禮寺僧昌虎於大明。請藥方。

筒井家記云。享祿元年三月前ノ管領畠山左京大夫義忠。昌虎首坐トイフ南禪寺ノ僧ヲ使トシテ。朝鮮ヨリ大明ノ世宗廟

帝へ。黄金千兩ヲ贈シテ云ラク。我日本ニ藥方乏シ。願クハ萬人ヲ救フ藥方ヲ傳ヘヨト。世宗其志ヲ感シ。鄭上三官拜功ト云フヲシテ。同二年二月上旬我國へ來ラシム。持スル所ハ豐心丹ノ藥方丸藥也。茲ニ薩摩國ノ律僧實妙房光淳國ヲ出テ。本寺大和國南都西大寺へ到ラントシテ。鄭拜功ト海路船ヲ同セリ。時五月上旬霖雨ニ逢。舟中濕溢起リ。百餘人枕並ベテ伏セリ。光淳モ亦爾リ。拜功憐レミ。件ノ豐心丹ヲ出シテ各々へ服サシムルニ。諸疫頓ニ快愈シテ。船中皆拜功ヲ拜スル事神ノ如シ。或夜實妙房拜功ト語ルニ。霖雨始テ晴テ夏月殆下鮮也。舟中歎ヲ窮メ。亂辭シテ前後ヲ不知。實妙房拜功ガ坐ニ因リ。竊ニ語リテ曰。我ハ此國薩摩ノ律僧ナリ。本寺和州南都ノ四大寺ニ赴カントス。國家亂逆ノ時ニシテ我本寺藥方ニ乏。願ハ件ノ法ヲ我ニ傳ヘヨ。四大寺ニ到リ。調合シテ衆僧ヲ救ハ。利益甚シカラント云。拜功對テ云。此甚々安シ。然共我明帝ノ命ヲ受テ。是ノ土ニ來ル事ハ。件ノ藥法ヲ前管領畠山殿ニ授ケンガ爲也。歸路ハ必汝ニ授ケント云。實妙歎シテ曰。吾子ガ志最也。然共管領ノ志ハ。衆病ヲ救ハントニ在。我志モ亦然リ。寬仁ハ君子菩薩ノ行也ト。傳ン事ヲ強テ止ズ。鄭拜功已事ヲ得ズ。竊ニ是ヲ傳フ。後上京シ畠山義忠ニ傳テ送ニ歸船セリ。其法今ニ畠山氏。神保氏ニ傳ヘリ。實妙房四大寺ニ來リ住シ。此法ヲ調合シ。僧俗ノ

諸病ナ愈ス事。扁鵲華陀ニ勝レリ。衆人ノ禮報。米穀千石。黃金數千兩ヲ得テ登寺ヲ賑セリ。寛妙大喜シテ曰。我一カヲ以テ四大寺ノ逼迫ヲ緩フセリ。望ミ足レリ。今ヨリ價ヒナ定メ。三十粒一錢ヲ銀一錢目トセリ。今ニ至リテ。四大寺ニ其法ヲ守レリ。煉藥ニシテハ沈澱圓ト云。此藥今ヤ一天下ニ信シ服セリ。寛妙房此功ニヨリ。四大寺三十八代ノ長老職ニ補任セラレ。明壽上人ト號セリ。上人鄭舜功ガ妙傳ヲ懷ヒ。四大寺ノ永代過去帳ニ其ヲ記セリ。今ニ至ル迄毎年八月十八日ヨリ。二十五日迄ノ光明眞言會ニ。大明鄭三官ト稱セリ。上入後ニ此法ヲ南都興福寺ノ門跡大乘院主理趣院ニ傳ヘリ。天文七年五月二十二日ニ。上人七十六歳ニシテ於テ四大寺ニ遷化ス。永代過去帳ニ載レリ。誠ニ一代ノ名傳也。

四月小

二日。癸卯開陣。渡御相國寺。

二水記云。卯刻。武家御開陣。渡御相國寺。(万松軒)此後道永。六角少弼等同開陣也。各在寺中云々。先以可謂珍重一歎。但堺之儀如何々々。

爲和集云。四月六日に相國寺まで御陣替。

長享年後畿内兵亂記云。四月。義晴將軍自東寺至相國寺御歸座。

八日。己御懺法結願也。細川尹賢。六角定頼祇候。

二水記云。御懺法結願日也云々。細川右馬頭。六角少弼等令二聽聞。於三小御所御庭有二一蓋。堂上衆參會。各及數盃云云。一御門役所事。被申武家了。今度細川一雲軒申付云云。當時被官人不在京歟。甚以無人數也。四足唐門等同衆也。

廿一日。壬將軍家自東寺移御萬松軒。

伊勢貞助記云。常怡黑衣ニテ御出頭ノ事。(七十四ノ御時ナリ)万松院殿檢御十八ノ御時。東寺ノ御陣ヨリ。直ニ万松軒へ被移御座刻ナリ。黒衣ノ出仕。邂逅之儀面目之至也。衣ハ聖衣ナリ。戻ナリ。教恩院ヨリ申請衣ナリ。(大永八戊子四月二十一日。申次大館兵庫頭殿ナリ。)

五月大

十四日。甲道永入道。及右馬頭尹賢等遁走。

二水記云。巳刻。道永。右馬頭等没落。(先可謂坂本云々)於三河崎東邊令見物。其勢纒一千人許也。去年出張數万人。如夢可嘆也。抑今度和睦事。六角少弼相調。雖終以不事調。已以道永失面目了。言語道斷之儀也。於東寺可決其勝負之處。和睦之儀出來。仍不能合戰。今以此

ザムザト落居了。不足言事也。道永心中無與所察也。武家御事雖有二種々説。先近日六郎御禮之儀申レ之。仍無相違一也。雖然卷説云。四國之衆心底尙以難測歟。可有如何哉云云。六角被官下笠後藤兩人令誓固云々。備前之衆松田等此間在京。今日令供奉了。纒二三百人許歟。

廿八日。戊御陣徙於東坂本。

二水記云。早旦。武家御動座。六角少弼今日下國。仍先可有御坐坂本ニ之由也云々。上下馳走。言語道斷之儀也。抑和睦事。六郎不存別心ニ之由。度々令言上。雖然堺武家御在坐之上者。心底之通猶有其疑。仍先可被移御座ニ之由。此間御談合申了云々。今日六角軍兵一万余云々。雨中美麗見物之眼云々。雖然今度儀。少弼一身所行之故。不被開御座。不可説之事也。美麗無其證者歟。

足利季世記云。藥師寺備後守。同三郎左衛門尉。攝州上下衆。伊丹ヲ初テ堺ヘ參。六郎晴元ヘ降參シケレバ。近江兩佐々木勢モ。越前ノ朝倉衆モ。和睦ノ時皆國々ヘ下リケレバ。公方義晴公モ道永モ京ニ叶ハズ。又近江國朽木ガ谷ノ佐々木民部少輔種綱ヲ頼ミ。朽木ガ谷ニカケレ玉フ。然レドモ三好方ト柳本ハイコン有テ。更ニ諸人モ安堵セズ。洛中ノ人ノ心モオサマラズ。

爲和集云。五月廿八日に又東坂本まで被移御座。爲和御伴

申。公家衆は高倉兵衛督永家朝臣。阿野少將季時朝臣。烏丸右少辨光康。爲和。以上四人。近日又江州朽木袖迄被移御坐。由其沙汰あり。飛鳥井稚綱卿は東寺まで御伴申。今度坂下へも御伴不申候。言語道斷。今京都に公方と申は。誰人の息とも諸人不レ知之。

六月大

七月小

十日。亥大内義興雖申請追討少貳。無御免。依命大館晴光。有被仰遣大友修理大夫義鑑旨。

鎮西要略云。夏六月。大内介義興訴京都將軍家。而請退治少二大友等。而不許容。此時京都引付衆大館晴光好。奮事以皆豐後大友。其際云。

就少二殿之儀。從大内左京兆。御下知之事被申上候。然共無御承引候。可御心安候。(餘略)恐々謹言。

七月十日

大友修理大夫殿

大館左衛門佐晴光

十二日。癸此頃。仍地子事。洛中騷擾。

二水記云。傳聞。近日從和泉堺。右馬助代次郎中坊寺等。

又從三坂本。伊勢守(ナカウラ)。新藤等上洛云々。是則當季地子等可及三物怨之間。無事儀相談可三所務之旨被定云々。○十四日條云。上下京在々所々地子事。從三兩方各令三上洛。雖三相談三不事屆。動及三物怨之儀云々。勝事跡也。

十八日。戊子。細川刑部少輔晴廣叙從五位下。歷名士代云。從五位下。細川刑部少輔源晴廣。同八七十八。

八月大

廿日。己未。改元享祿。

二水記云。今日改元定也。公卿補任云。八月廿日改爲享祿元。

廿八日。丁卯。御上洛延引。

二水記云。坂本大樹今日可有御上洛之由。此間風聞。雖然堺儀不三事調一歟。御心中御不定事有之。仍又延引也。結句可被移御坐於他國之由有沙汰。兎角和談之儀不可三事調一也。天下之跡。不可說之事也。道永進退一圓無沙汰。計三武界一歟。又存三穩便之儀一歟。不審云々。

九月大

八日。丁丑。被移御陣於近江朽木。

二水記云。風聞云。今日大樹被移御座於朽木。(高島)和睦

儀。遂不三事調。不可說事也。皇年代略記云。享祿元九月八日。將軍陣于朽木。

九日。戊寅。給御書於狩野左京亮。賞其勳功。又供奉諸人同給御褒書。

狩野文書載

今度江州已來參勤。尤神妙。彌可抽三忠節三事肝要候也。

九月九日

狩野左京亮とのへ

御内書記錄載

今度江州以來參勤。尤神妙。彌可抽三忠節三事肝要候也。

九月九日

公家衆。外檢衆。御供衆。御部屋衆。申次。雷方。奉行。同朋。

御末衆。各如此也。此外又もなざる事あるべし。

高代寺日記云。八月下旬義晴出京。江州へ赴。朽木ヲ頼ム。朽木能奉公ス。

閏九月小

廿一日。辛酉。柳本彈正入大和國。

二水記云。風聞云。柳木入大和國。則一國切取。不及合戰。此後入河内國。攻畷田城云々。奇異事也。道永進退無三卷說。如何。大樹御事は又不及沙汰。洛中似無守護武士。希

有之式也。

十月大

朔日。己日。蝕。

御湯殿上日記云。みむまの時日しよく。御取所のみいつも如し。しよくしかくとも見えぬよし申。

六日。甲戌。朽木民部少輔植綱謝加御供衆。獻馬

太刀。

朽木文書云。至當谷處。御座。爲三忠節。被加御供衆一候。享祿元年十月六日御禮中上候。御太刀一腰。(持)御馬一足(塵毛)致三進上二候也。同十日三慈光院御方違。御供申也。其時御供衆大館兵庫頭。同又三郎。一色新九郎。

享祿元年十月十一日書之。

十日。戊寅。渡御慈光院。

(事注三六日條)

十一月小

十六日。甲寅。細川道永移陣伊賀國。○此頃。柳本

彈正攻河内諸城。○依坊城家領事。奉行人

傳。仰於朽木民部少輔植綱。

二水記云。風聞云。道永今日移陣伊賀。(此間江州山上に居)

依之聊有雜說一歟。○又云。六角被官新藤。書云々。此子細者。今度和陸之儀。悉皆彼等所行也。仍爲三忠衆三及三強々儀。已殺害云々。少彌定而。或又雜說云々。○又云。河内國。城遂以不落。柳本其外諸口雖攻之。城內堅固也。

仍柳本七八丁引退。近日止攻云々。城衆小勢奇特之由。世稱美云々。

朽木文書載

坊城家領洛中差所地之代官職事。被三仰付二之訖。於三公

用一者。如先々被三執沙汰。至預所職一者。可被三存知二之由所被三仰下二也。仍執達如件。

享祿元年十一月十六日

能登守列

彈正忠列

佐々木朽木民部少輔殿

廿七日。乙丑。給領邑案堵御書於朽木植綱。

朽木文書載

御列

近江國高島郡朽木庄針畑等事。帶三御判以下證文。當知行云々。任三本新領知之旨。佐々木朽木民部少輔植綱領掌

不可有相違之狀如件。

享祿元年十一月廿七日

廿八日。丙寅。攝津晴直任中務大輔。

歷名主代云。從五位下藤原直。攝津元造朝臣子。享祿元十一
廿八。同日中務大輔。

十二月大

三日。庚午。三好元長被官人等上洛。

二水記云。傳聞。三好同名被官等數十人上洛。山城國郡代相
定云々。

廿日。亥。此日。於鎮西。大内左京大夫義興卒。

鎮西要略云。冬十二月廿日。從三位大貳左京兆多々其朝臣大
内介義興卒。世子義隆嗣家。二十一。(永正四年丁卯誕生。)
國事。陶。杉。桂。相良。吉見等也。

大内系圖云。義興。左京大夫政弘子。龜壽丸。左京大夫。永正
八年八月二十二日上洛。於三舟岡山。大戰勝。同九年三月二十
六日叙三位。依去年八月軍功也。

大内多々其譜牒云。義興。凌雲院殿傑叟義秀大居士。享祿元
年戊子十二月廿日於防州本館病死。五十二歲。防長豐筑備
藥石七州大守。左京大夫。從四位。

廿三日。寅。給御書於赤松次郎以下。使抽軍

忠。

御内書記錄

到江州朽木逗留候。此砌抽忠功者肝要旨。對次郎一

遣内書二候。可加意見事。可爲神妙。仍差下元通一
候。猶常與可申候也。

十二月廿三日

御判

浦上掃部助どのへ

相三談村宗。此砌抽忠功者。尤可爲神妙。猶元通可申
候也。

同日

同

宇野下野守どのへ

播州東西事。不日令三和典。抽忠節者。可爲神妙二候。猶
元通可申候也。

同日

同

別所大藏少輔どのへ

小寺藤兵衛尉どのへ

有田源次郎どのへ
橋橋豐後守どのへ

至江州朽木逗留候。此砌別而抽忠功者。尤可爲神
妙二候。仍差下元通一候。併被頼思食二候。猶常與可申候
也。

同日

同

赤松次郎どのへ

播州東西事。不日令三和典。可致忠節候趣。加下知候

者。尤可爲神妙。猶元通可申候也。

同日

同

あふみくつ木にとりう候。この時へつしてちうせつ候
ばい。かんとうに候。そのためにもと通をさしくだし候。
又東さいの事も。さうくわよいたし候やうに。げちせら
れ候べく候。よろづしかるべきやうに。いけんをくばへら
れ候は。よろこび入べく候。なを御さこの局申されへ
く候。かし。

十二月廿三日

御判

あか松うげの局へ

高代寺日記云。十二月。京物念。諸卿ノ室家出京人多。

卅日。丁。柳本禪正出洛。

二水記云。傳聞。柳本出洛。仍鹽田若狹守(近日出京。爲山城
國郡代也。)以下悉下國之處。今朝於三山崎邊有合戰。并丹
□打死。(與三好同意。)仍柳本乘勝云々。三好柳本根本不
快也。是又天魔之所爲歟。奇異世上之体也。

是歲。以太宰少貳資元子冬尙。爲大宰少貳。

鎮西要略云。享祿元年戊子。豐後屋形大友左馬權頭親致後
改三磯船。將三萬餘騎。伐三菊池義國。而在陣于肥後國。義

國依三和談二降。是城赤星。隈部等之所諭也。大友親致殺三菊
池義國及州伯等之人質。而歸陣矣。雖三菊池隔於豐州。星野
防折而不卻。大友之軍兵超年陣。少貳肥前守資元(稱少二
屋形)將肥前之兵一萬。而陣于筑前。(或陣三松浦)蓋此
所以欲復入三於太宰府也。於是乎資元頼三京都管領細川
高國。以述三職於將軍家。義晴公。萬松院。資元之兄冬尙。
(小字法師丸)補三太宰少二。且賜三屋形號。因三太友之吹舉
也。冬尙在國肥前。大友少二結親。大内衆在三筑紫者。災害
將及身。訴事於山口。

後鑑卷之二百九十五

義晴將軍記第九起享祿二年正
享祿二年己丑

正月小

朔日。戊。山崎合戰。

細川兩家記云。享祿二年己丑正月一日未明に山崎にて。柳木
方と三好と。伊丹彌三郎方合戦あり。柳本切勝。伊丹彌三郎
を初て同名以下六人討死なり。此事開付。京より三好遠江
守。鹽田若狹守山崎へ懸付られければ。柳本叶はじとおも

ひ。河内枚方の道場へのきにけり。かやうの儀ども屋形様御心中なりとぞ。

是月。多田院御家人參賀。

高代寺日記云。正月當族ノ頭人十二騎江州ニ參賀ス。太刀一腰。一疋代トシテ二千五百疋ヲ獻ズ。朽木モテナシ皈ル。

二月大

三月小

四月小

廿一日。丙戌此頃。大和合戰。

祐維記云。四月廿一日辰刻。古市陣破テ奈良中ヲ退散了。柳本彈正之内四人衆富森越中。後藤。木之島。能勢若狹同以令ニ退散了。筒井ヨリ以テ證鏡ニ被レ噓。如此云々。柳木ヨリ早々可ニ上洛旨。飛脚ヲ下ト云々。總而已刻ニ筒井衆奈良へ入了。○廿七日條云。柳本彈正忠當國亂入了。則五ヶ庄。高極。椿尾等攻落之。今市ニ着陣了。彌寺社ノ曆年貢等可レ令ニ無足一者也。

與福寺著年代記云。享祿二年己丑。柳本彈正和州入國。一國皆以燒了。内山ノ寺へ込入了。寺法師數多討死。其後法華寺

三陣取。四五日アリテ上洛云々。木島爲レ噓。筒井柳本和與。三千貫ノ禮ト云々。一國柳本段錢相懸被レ出了。

是月。於鎮西。大内義隆追討少貳資元殘黨。

鎮西要略云。二年夏四月。大内新介義隆命ニ太宰權少二與連。(杉氏)追討少二資元之黨。杉與連。筑紫尙門。朝日賴實。原田隆種等應ニ義隆之命ニ而會ニ於太宰府。以ニ多兵出陣。少二資元引退于肥州。大内勢迫來。逼ニ落基障養父所々城營。而陣于三根郡。少二衆馬場肥前守賴周。同中務大輔賴員。或曰政員。父子一族。筑紫左馬頭維門。横岳兵庫頭資誠。宗職岐守入道一鶴。小田駿河守資光。江上肥前守與種。姉河。大塚出雲。本吉。坊所。重松等。三根神崎郡士各戍ニ其處。拒ニ大内衆。以警ニ衛少二館。

五月大

是月。朝倉孝景爲御供衆。

高代寺日記云。五月初倉ナカ方供衆ニ被レ加。

六月小

朝倉記云。元年五月廿五日御相伴衆ニ被レ成五ノ。

七月大

十六日。己給ニ御書於朽木植綱。賞ニ忠節。

朽木文書載

爰元之義。連々粉骨。尤神妙。彌抽ニ忠節者肝要候。仍料所近江國首領之事申付候也。

七月十六日

佐々木民部少輔とのへ

御列

八月大

十日。癸三好元長下ニ向阿波國。

細川兩家記云。三好元長は境にありても所詮なしとて。同八月十日に阿波へ下國なり。

十六日。卯柳本可竹齋圍ニ伊丹城。○此日。筑紫合戰。

細川兩家記云。柳本高貞可竹齋悦て。八月十六日に伊丹は三好方同意とて則城を取巻けり。鎮西要略云。秋八月十六日少二館令ニ龍造寺一族追討宰府之敵。龍造寺民部大輔胤久。同山城守家兼。同三耶兵衛尉家門。同左近將監胤門。同伊賀守家直等退懸而越々武夫三千餘騎。東方出ニ張子田傳原。今朝未明。發レ圍而相戰乎朝日賴實。互接レ鋒突衝前進。而不レ願ニ死生ニ也。朝日之兵敗賴實討死。二陣筑紫尙門。後陣杉與連。類進而不レ卻。以ニ死手ニ搏戰。其闘半時。鍋島平右衛門尉清久。同左近九清正。同孫四郎清

房。父子兄弟一族。赤熊武者一撥三百許。突ニ出乎四陣。動レ地而奮擊。於是宰府軍兵忽敗。死也創也充ニ滿於道路田野ニ矣。龍造寺家兼。同家門父子乘レ勝而防堵。鍋島裕遂ニ北擊ニ被本陣。筑紫尙門討死。杉與連引退于筑州ニ也。於是。小二館賞ニ龍造寺之武功ニ益封之。亦登ニ揚鍋島清久。而封ニ永庄八十町ニ也。龍造寺家兼吹ニ鍋島孫四郎清房之援群之功ニ培レ之。以ニ嫡子家純之女ニ妻レ之矣。

是月。諸士退散。

殿助往年記云。八月於ニ朽木谷。公方衆十七人退散。被レ相背細川常桓ニ故也云々。

九月小

十日。癸未就ニ御料所事。奉行人傳ニ仰於朽木植綱。

御料所近江國首領庄事。今度種村刑部少輔逐電之條。被ニ先行ニ訖者。早任ニ先度御内書之旨。令ニ領知。可レ被レ抽ニ忠勤ニ之由。所レ被レ仰下ニ也。仍執達如レ件。享祿二年九月十日

信濃守列

佐々木民部少輔殿

十月大

十日。壬申。依入洛。給御書於朽木植綱。

朽木文書載。入洛候者。於京都二所可被仰付候。彌可抽奉公忠節之事肝要候也。

十月十日

御判

佐々木朽木民部少輔とのへ

是月。日蓮宗僧徒多被誅戮。

高代寺日記云。十月。京都ニテ日蓮派ノ僧多成敗。

十一月大

八日。庚子。地震。

高代寺日記云。十一月八日地震。

廿一日。癸丑。攝州伊丹落城。

細川兩配記云。同十一月廿一日の子の刻に城落なり。古和州元扶初て三十餘人討死なり。柳本おせいなか申計りな

殿助在年記云。十一月廿一日。攝州伊丹城柳本彈正實落之。

十二月小

十二日。甲戌。近江勢退散。

東寺執行日記云。今度就天下悉亂。近江六角殿御内衆東福

寺ニ陣取者也。柳本方ヨリ可實之由依有風聞。十二月十一日曉悉退散之間。則柳本方ノ衆其外所々物共走出。彼寺ニ亂入シ一時ニ破者也。彼寺滅亡懇歎。不_レ及_ニ是非一儀也云々。

廿三日。酉。大内義隆叙從五位上。

歷名士代云。從五位上。多々其義隆。同二十二廿三。

後鑑卷之二百九十六

義晴將軍記第十 起享祿三年正月 訖十二月

享祿三年 正月大

廿日。辛卯。將軍家叙從三位。任大納言。給

二水記云。傳聞。午時有二小叙目。并叙位。室町殿依御昇進也。此人々有叙任云々。上卿帥大納言。參議滋野非宰相

中將。奉行職事頭右大辨伊朝臣云々。

足利家官位記云。三年正月廿日任權大納言。同日叙從三位。廿歲。

高代寺日記云。三年正月廿日朽木へ勅使。義晴亞相三位二叙入。コレ近年出京シ京ノ守ナシ。故ニス、マセ玉フト沙汰ア

廿三日。甲寅。官人參向朽木。

二水記云。傳聞。大内記爲康朝臣。大外記業賢朝臣等。參朽木云々。傳奏廣橋同下國。爲_レ請_ニ取_ニ宣旨_一也云々。

廿六日。丁巳。此日。於内裡申樂興行。

二水記云。參内。今日内々申沙汰也。於清涼殿。當御代初度也。猿樂。(大夫上京シフ屋子坐衆美麗也。當面已終之程也。臨能右近云々。役所事。伊勢守被_ニ仰_ニ出_ニ畢。數罷祓候了。

二月小

廿一日。壬戌。今日。有勸進申樂。

二水記云。傳聞。從今日。於少將井四。勸進能猿樂。(大夫上京柳本云々。)

三月大

九日。己亥。依渡唐船事。奉行人傳仰於大内義隆。

伊勢家書載。渡唐船事。近年有名無實之條。任_ニ先例_一可_レ被_ニ相調_一之條。言上之旨。被_ニ兩召_一畢。速可_レ被_ニ致_ニ其沙汰_一之由。所_レ被_ニ仰_一下也。仍就達如_レ件。

享祿三年三月九日

沙彌

能登守

大内左京大夫殿

四月小

十日。己卯。柳本彈正忠賢治於大德寺。薨髮。

二水記云。風聞云。柳本彈正忠今日於大德寺。出家。其外被官人數十人同拂_ニ本結_一聞也。又松井同出家云々。奇異事也。

後聞。今日各出家。其子細者。朽木御所御上洛事。彈正。松井。伊勢守等令_ニ談合_一。與_レ堺和與之段申合之處。可_レ竹軒至_レ今無_ニ一途之儀。六郎令_ニ上洛_一。參_ニ御迎_一事無_レ之。又堺大樹無_ニ一途之趣。予_レ今同篇。仍朽木無_ニ御上洛_一之條其儀尤也。然者各談合之段。以火_ニ面目_一歟。仍對_ニ可_レ竹軒_一。述_ニ懷愁_一之儀也云々。

於勢州者。不_レ能_ニ出家_一。彈正中_ニ留_一之云々。又可_ニ物念_一歟。恐怖也。

十五日。甲辰。柳本出陣播州。

興福寺略年代記云。十五日柳本播州へ出陣。爲_ニ小寺後詰_一罷立。ヨリ藤中狀取寄。東條谷ノ玉蓮ト云寺ニ陣取。

廿四日。丑。波多野孫八郎出陣。

二水記云。波多野孫八郎出陣。令見物也。其勢纒三百許。太以無人數也。如何々々。入二丹波。可取合孫衛門云々。

六月大

八日。丙寅波多野孫衛門卒。

二水記云。波多野孫衛門死云々。昨日事歟。不知定日。

廿九日。丁卯柳本正忠賢治於播州一遭害。

二水記云。後聞。柳本正忠賢治於播州。藤城攻之。今日戰及二度々一歟。而今夜醉中同居之者令致害云々。無道天命難逃之故也。不打死事。且又不便也。惡逆之者。皆以如此歟。可思之。同名悉以打死。相殘衆所々沒落了云々。○同三十日條云。彈正死去事治定之間。京中早以騷動。大物恐也。不慮之儀不足言事歟。上京被官人所々家。又道具持運於川原。惡黨取之。物恐云々。

足利季世記云。享祿三年夏之比播州冷泉ノ三木ノ別所上落シテ。柳本ヲ頼テ依藤ヲ對治アルベキ由望ミ給ヘバ。柳本同心ノ諸勢ヲ備依藤ノ城ヲ實ル。コ、ニ何者カシタリケン。同六月晦日ノ夜半計ニ。柳本正忠ヲ指殺テ置ケル間。是ニ諸陣サハギ立別ケルニ。城中キナヒ。カノ柳本ガ首ヲ奪トリ百餘人討トリケル。然ル間播州ノ四方浦上掃部打立。東方小寺ノ城ヘ取カケ貴ケレバ。三木別所城ヘモ取カケ攻ケレバ。

二城一時落テ一千餘人討死シケル。

高代寺日記云。六月廿九日柳下賢治播州ニテ自害ス。○又云。六月十八日伯耆守一千餘騎ヲ催シ。天王寺今宮ヘ出張ス。高國ガ先手ヲ支。宗英。仲延。定滿。宗基。頼繁。平尾以下タリ。難波。野田。福島所々ニテ合戦。廿四日勝利。高國討死。或曰。八日共。二脱ヲ兼ル。○又云。去六月尼崎合戦ノ時。赤松ガ族浦上掃部七千討死ス。カレハ高國ガ方ナリ。○又云。六月天王寺。尼崎。水津。神崎。野里ノ邊ニ合戦。三好海雲ガ催シタリ。當家ヘ將軍家ヨリ御内書故ニ。細川ヘ相通シ。兩代公方ノ字ヲ賜リ。故ニ鷹晴元能奉公ス。

與福寺某年代記云。然處ニ内ノ者忍入テ。六月廿九日夜彈正忠チ一刀ツキ了。腹ヲタ以外出了。然間アチタニテ退處ニ。敵チツカケ柳本生害也。則陣破了。常桓播州ヨリ御出張。七月六日ニカカカミト云所チ立。高砂ニ著陣ト云々。

長享年後畿内兵亂記云。三年。柳本賢治至播州依藤城發向。於陣中。浦上村宗以賄通近侍士。刺殺賢治云々。常桓至有馬郡一進發。

東寺過去帳云。享祿三(庚寅)年。播磨。丹波。攝津。山城所々合戦討死衆。并柳本正忠賢治以下死亡數百人。

此月。於關東。北條氏康與上杉朝興合戰。東亂記云。享祿三年ノ夏ノ頃上杉修理大夫朝興ハ河越ノ城

幕ノ内ヘイリ手負ヲ助ケ。心靜ニ兵糧ツカヒ扱馬チ入玉フ。

七月小

三日。卯伊勢守貞忠沒落。

二水記云。午刻。伊勢守沒落。不思議之味也。京中今有何事一哉。餘以未練之由。見物衆稱之。每度此心中不可說云々。

八日。申伊勢守被官人等出張。

二水記云。巳刻。勢州被官人古市。上野泰九郎等打廻。其勢纒五六百人許也。常桓出御事。近々由觸レ。雖レ然于今無其儀。又運々儀如何。依レ之京中餘黨又馳集。地子等之可ニ違亂云々。

十四日。寅牢人於六條河原合戰。

二水記云。牢人今日出張内堀東雲。其外馬廻之衆出張。巳刻既以鳥羽邊有火。所々物恐云々。傳聞。今日出張之衆。於六條河原万壽寺等之邊合戰。京勢雖レ爲ニ無勢ニ得其理。出張衆悉以打死。雖レ有三千五六百人。皆以退散云々。官語道斷之儀也。常桓運命未到來一歟。早以落居。近比事也。四國衆トワ條大強力爲ニ獎贈云々。

廿七日。乙播州小寺城合戰。

二水記云。後聞。播州小寺城今日沒落。悉以打死切腹云々。寄

ニアリケルガ。小田原ノ氏綱ヲ對治シテ先年ノ耻ヲ雪ベシトテ。難波田彈正。上邊藏人以下宗徒ノ兵五百騎ヲ引卒シ。武州府中迄出陣シケルト聞エケレバ。氏綱是ヲ聞。何程ノ事ノアルベキ。押寄テケテラセトテ。子息新九郎氏康ヲ指向ラ。氏康生年十六歲。軍ハ今日ヲ初ナル。器置骨柄父ヲ越。謀賢ク弓馬ノ業モ達者也。腕ノ力筋太ク股ノ肉厚クシテ。肩ヲ隻ル人ゾナキ。乳夫子ノ志水太郎ヲ初メ。我ニ劣ラヌ若者共。今日ヲ晴トカセギケル。同六月十二日上杉ノ陣ヘ押寄一矢射ト見エシガ。大山ノ崩ル。様ニ援連テ切テカ。リ。十文字ニ割テ通り巴ノ字ニ追廻シ。東西南北ニ打破リ馳遠フ。比ハ六月炎天ニテ草モユルガヌ照ル日ニ。軍勢モ喚叫テ攻戰フ聲息モ突アヘズ。只坤軸モ押テ忽ニ沈ムカト覺ユル計也。小田原勢ハ小勢ナレ共大將モ若ク。相隨フ兵ドモ何モ若キ兵ドモニテ。今日ノ軍ニ大將上杉ヲ討トラズバ何ノ時チカ待ベキ。唯トラント進ム。然レドモ何レモ大將ノ下知チテ度シカバ。一度モ終ニ不打負。互ニ味方ヲ助ケテ引ナリト計ナリ。上杉方ハ大勢ナレドモ人ノ心不調シテ。カハルトキモソロハズ引時モ不助。思々心々ニ戰ケレバ。一度モ不勝毎度追立ラレケリ。夜ニ入ケレバ上杉勢散々ニ懸負引退ク。氏康ハ初陣ニ敵ヲ押落シ物始ヨシト悦テ。勝凱ヲ上猶

手隨分之衆。數輩打死云々。常桓放生會已後可出張云々。殿助在年記云。廿八日。播州小寺城落居。別所已下敗北。數百人討死。浦上理運云々。

八月大

十七日。甲。青蓮院尊親王自若州上洛。

二水記。十八日條云。昨日青蓮院宮從若州御上洛。去三日御下向也。聊公事驚之儀也。而大膳大夫稱隱居不能承伏。御在坐之儀一圓不申付云々。言語道斷曲事。不足言事也。當于時被失面目了。不可說事也。

廿七日。甲。細川常桓入道自西國上洛。先驅著攝州。

攝州。

二水記。廿二日條云。常桓出張事又未定云々。奇異事也。細川兩家記云。道永御出張之儀伊勢國にて御名を替させ給ひ。常桓と申候。伊勢より近江へ御越し候て。兩佐々木殿を御頼みありけれども御同心なし。越前へ御越し候て仰けれども同心なし。それより北海を渡り出雲國へ御あがりあり。尼子を御頼み候けれども同心なし。折節播磨三ヶ國浦上備前守隆景の進退なればとて。備前國へ御越候て浦上を御たのみあり。同心申され則三ヶ國ふれさせられる。然ば常桓より諸軍人催候て。享祿三年庚寅八月廿七日に。先陣播州神

九月。乙。此頃。攝州合戰。
二水記云。此一兩日。於攝州合戰及三度々。常桓方得三其理云々。朽木御上洛可爲近々云々。
十九日。乙。常桓入道移陣于富松城。
細川兩家記云。十月十九日にまた神咒寺より諸勢出る。又伊丹城より高島甚九郎衆打出。宮松南にて合戦あり。阿波衆をりまけて。井上新八郎を始めて三十餘人討死する。殘勢は伊丹城へ取入。其日より常桓方富松城に陣取なり。
十一月大

三日。己。細川勢出。張東山。

二水記云。常桓軍人衆。今朝東方出。張如意嶽。其外兩神寺山上。北方高野邊所々燒。終日見物也。雖。然勢數不見。不。及。打。回。不。知。其。謂。之。休。也。

六日。壬。攝州大物落城。

二水記云。傳聞。攝州井丹(後聞。於城者未落也。)城没落。四國衆數百人打死。一國平均云々。尙可尋也。細川兩家記云。十一月六日に大物(取懸るに。藥師寺三郎左衛門は山崎にての詞に相替り。又常桓へ歸參申候間。大物落るなり。然ば山中遠江守。河原林左衛門尉始て五十餘人討死

兜寺へ陣どり給ふ。境屋形晴元方高島甚九郎は伊丹城にこもり。池田筑後守は我が城にこもる。藥師寺三郎左衛門國盛は富松城に楯籠云々。
二水記。廿日條云。傳聞。常桓出張。於攝津國。少々有合戦云々。存命如何々々。堺四國衆不仰天。可及合戦云々。恐怖此事也。
此月。將軍家先鋒到著坂本。
長享年後畿内兵亂記云。八月。義晴相公先勢三雲資胤。蒲生至坂本。出陣。水澤及上洛。

九月小

十九日。丙。常桓入道出張攝津國。

二水記云。傳聞。常桓今日出張于攝津國。必定云々。池田城圍也。播磨國衆同攻之云々。
廿一日。戊。細川勢拔富松城。
細川兩家記云。同九月廿一日に神咒寺より富松城へ朝懸して。實落て廿四人首討取。則神咒寺へ上り。軍始に目出度とぞ常桓方に申なり。又境より藥師寺三郎左衛門に山中遠江守。和泉衆相加へ。尼崎の大物へいられけり。此外境より諸勢出。久々知と坂部に陣取云々。

十月大

也。殘る勢は中島へ落行也。抑今度藥師寺三郎左衛門我子を境屋形へ人質に參らせて捨けるよと。皆人淺猿がりけるなり。此子七歳也。明るとし三月十五日に。境北の釋迦堂にて生害させられたり。見る人涙をながしけり。
十一日。丙。諸軍人出張。
二水記云。東方軍人衆數百人。東福寺邊今熊野等云々。
十二月大

十一日。丁。江州勢歸國。柳本餘黨亂妨諸寺院。

二水記云。早朝巽方有火。後聞。去曉江州合力衆(ミクボ)不待番替之勢。卒爾歸國。仍敵方(柳本)餘黨能知之。未明押寄之間。一雲軒。香川等不相支退散。仍法性寺在家入町之程皆以放火。相殘小家打破。其外亂入寺中僧坊。多分破取。一兩所燒失。三門之雜漢等。少々取散也。言語道斷林無。限云々。先年大亂相殘奇特之由存之處。今又如此。只佛法破滅。至此時二者也。

十一日。戊。柳本殘兵攻勝軍城。

二水記云。後聞。今日柳本徒數千人出張取掛于勝軍(内藤彦七城也)雖。然。不。及。合。戰。先。引。退。云々。
十二日。己。殘徒又出東河原。

三水記云。早朝。柳本衆又取出東川原。見物之。三千人許之。由各稱之。今日又不合戰。暫而引歸。如何。後聞。彦七無勞之間。定可退散之。由存之處不。然。結句一乘寺罷打出。勢數莫大也。仍引歸云々。京童部太以欺笑。江州番替之衆。五頭五六千人上洛。陣北白河云々。

十八日。甲。兩陣箭戰。

三水記云。今日又取懸。聊有箭戰。木澤衆五六人負手云々。木澤者。島山被官人也。而依令。避佐出奔之後。爲常桓被官之分。今度河內國於所々。有武勇之譽。而稱有述懷。又近日境六郡爲被官云々。言語道斷。無所存之由。各笑之。近日入洛度々取出。勢數多勢也。殊以美麗驚目了。但至合戰。可無指事之旨。各咲談了。

十九日。乙。奉行入等建德政札。

一。相布類給彩物書籍。屬樂器具。足家具雜具等。置月外限二十夕月一事。
一。盆香合茶碗花瓶香爐金物以下。可爲三十夕月一事。付武具類。可爲二十四夕月一事。
一。米穀井雜穀等。可爲二十七夕月一事。
右條々。任三先例。所被定置一也。所詮十分の一なわたり。

種便に女をもつて白晝に可取之。札なし同前。馳過此約月二者。可爲流質二候上者。不可及德政沙汰。万一寄事於左右。及嗽々儀者。置てといひ取てといひ。共以可被處二殿科。此外借録以下事。相互ニ令注進。守二書(別紙在之)旨。可有其沙汰一由。所被仰下二候也。仍下知如件。

享祿三年十二月十九日

丹後守平朝臣判 能登守平朝臣判

德政條々。

- 一。神物事。限伊勢講。熊野日吉社講。不可有改動之儀。但不載神名二者。雖被信用。歟。
- 一。永領地事。(但爲出領主之返狀之年記内者。不及其沙汰。)
- 一。永代賣寄進地事。同前。
- 一。祠堂錢事。(限三文字)同前。但不載祠堂帳者。雖有御許容。
- 一。帶下知狀一地事。於二年紀。本物返地者。可被返本主。
- 一。本物返地。同屋事。同前。
- 一。年紀沽却地事。同前。
- 一。質券地事。同前。
- 一。借書事。(不可依文章。雖帶預狀。沽却等不及三利。

後鑑卷之二百九十七

義晴將軍記第十一 享祿四年正月

享祿四年 正月小

二日。戊。此日以後。東兵屢出上京。

宣秀卿記云。東陣衆打出云々。下京衆出向。即退散云々。○三日。條云。東陣衆又上京へ打出。
二。水記五日條云。東出張之衆今日又打出。京勢少々馳向。無二指合戰云々。今日。川崎觀音爲二軍兵燒失。言語道斷之事也。京中七觀音内也。淺増々々。後聞。於二本尊二奉取出之。

六日。壬。奉行入建德政札。

二。水記云。德政札今日打也云々。所々物念也。木澤。柳本等張行云々。

十一日。丁。兩陣巷戰。

二。水記云。京勢打出。聖護院。岡崎等在家悉以放火也。在々所不慮燒失。亂世間。言語道斷次第也。東衆又出合。於三所々一有合戰。死人十餘人有之云々。及晚兩方引歸。
宣秀記云。今日。柳本衆。木澤衆以下東山へ取懸。兩度有二野伏。見物之。(岡崎聖護院角の所放火云々。)

平二乎。

廿八日。甲。東兵放火。

二。水記云。東衆打出。燒川崎在家。京勢馳向。有二野伏云々。不及指合戰。兩方引退了。○廿九日條云。午時又東衆出張。田中里悉燒拂了。京勢又出合。無指事。

晦日。丙。兩陣巷戰。

二。水記云。午刻東衆打出。京勢馳向。數刻有二野伏云々。大將陣二條烏丸。此邊武者群集。恐怖之極也。雖然又不及合戰。晚兩方引退了。東衆打出之事。京中地子爲其障礙云云。仍京中上下共。地下人不出之也。本所各貽其憑二者也。但物念却而可無怪歟。

是年。明國禁我邦人往來。

國書島夷志云。嘉靖九年。國王源曉復附琉球使來言。爲素卿乞宥罪。并請復修貢賦。是時夏言爲兵科給事。言夷人仇殺之禍。皆起市舶。禮部請罷之。而日本使貢絕矣。

廿一日。丁未法勝神護兩寺兵燹。

二水記云。早旦。京勢打出。吉田在家少々放火也。東山法勝寺。神護寺等同燒失云々。律家古所也。可憐之也。東衆出逢。又無指事一歟。午前各引退了。京軍申云。今度合戰。唯兩方爭放火。有與事也。舉世咲之。於合戰者無指事一也。此月。移陣堅田一給。

長享年後畿内兵亂記云。正月。義晴自朽木至堅田進發。若狹記云。二月。江州北郡淺井高島へ發向。依テ朽木ノ御所。標征夷大將軍堅田へ被寄御座。

二月大

朔日。丙辰葛川御動座。

二水記云。朽木武家夜今葛川へ御動坐候。其子細者。江州北郡衆不慮打入于高島之間。被移御座云々。

長享年後畿内兵亂記云。二月。至坂本被進御座。三日。戊午京勢放火高野。

二水記云。京勢打出。高野レナウ館放火云々。東衆出合無指事。又午時引退了。

宣秀記云。京陣衆高野連陽坊所放火云々。歸路江州衆ト少野伏有之。見物之。

四日。己未伊丹城落去風説。

二水記云。抑攝州儀。此間種々有所説。悉以不同也。仍不決一定之間不審也。近日多分之説。伊丹城大畧可落。今度常相可勝歟之由。世以稱之。如何々々。攝州勢一萬五千。常恒同之云々。又四國衆五六千云々。向之。有合戰。未決三勝負云々。落着如何。

七日。壬戌歸陣堅田。

二水記云。傳聞。大樹今日江州片山へ御動座云々。

八日。癸亥從此日。兩陣接戰。

二水記云。京勢打出。東衆又出向。無指事。○十日條云。今日又兩方出合。無指儀一歟。○十三日條云。早旦。東軍衆打出。至此邊徘徊了。京勢則出逢。東衆引退。又不能指合戰。兩方難得得意之狀也。每度東川ヲ隔テ有野伏云々。兩方共以不越川。東衆多分近江衆也。只其由許也。遂以無指儀也。如何。○十五日條云。兩軍出合如例云々。○十六日條云。兩軍又如昨無指事。

宣秀記云。東山衆下京衆野伏有之。下京衆歟。先北山地下少放火云々。○十日條云。東山勢衆大界打出云々。報恩寺邊ニ來。下京衆ハ小勢衆合。東山衆早引退。○十一日條云。勝軍勢衆少々河原邊打廻。即引退云々。○十三日條云。東足輕衆二

廿八日。發未攝州伊丹落城。

細川兩家記云。然に高島甚九郎伊丹の城にたてこもる間。常恒の御勢又播磨勢入かへくせむれども落さる間。あつかひに成て。同廿八日に城明て池田へ退也。

三月小

五日。庚寅兩陣卷戰。

二水記云。東衆打出。數百人也。至近衛邊馳走。暫而京勢出合。人數幾也。雖然相擽之。於禁門之東野伏有之。兩方相追合。近頃之見物也。於築地屋上各見之。多分異狀也。雖亂中可存其儀。不可説之事也。今日東衆尤有男林也。晚頭引退了。江州諸勢相加云々。

宣秀記云。東勢衆過半打出。京衆ハ少々出。野伏事也。三反有之。自禁中一見之。

六日。辛卯巷戰如昨。○此日。攝州池田落城。

二水記云。午時又東軍打出。如昨日。太以物忿也。兩方追合及三數度。諸人騒動。時聲及三度々。陣下合戰爲三眼前。言語道斷爲林也。中刻許引退。○又云。後聞。去六日池田城没落。四國其外討捕衆三百餘。於死人者不知其數云々。四國名譽侍共悉以打死了。常恒衆四五人。播磨衆五六人打死云々。一國平均也。男人數四千人許有之云々。三好一合戰可致歟類一者歟。

廿一日。丙子三好元長著堺浦。

宣秀記云。東衆勢河原ヲ南へ打廻云々。

細川兩家記云。去程に境の屋形より三好筑前守元長へ。御書共又度々の御使にて。望共とくく相叶へらるべき也。早々罷上れとの御事にて候へば。力及ばず享祿四年辛卯二月廿一日に。境へ着岸にて御番申さるなり。

廿二日。丁丑東西接鋒。

宣秀記云。東西勢打出。於河原野伏云々。東衆以之外惡之由申之。見物之。

二水記云。午後。東軍兵打出。京勢馳向。東衆不支レ之引退。京衆追之。支神。岡云々。近江衆。勝軍衆各恐怖云々。雖然暫尙京勢引歸了。兩方被批數盟云々。若狹死去。結句京勢勝跡也。武勇之度。見物衆褒美云々。木澤爲勇者。無比類一者歟。

如何。(四國衆アリモリ。ドウナウ。サイガウ等。隨分之武者也。皆打死了。)

宣秀記云。東勢衆悉以打出。岡崎山へも見之。於禁中矢藏一見之。

細川兩家記云。三月六日に池田城へ取掛則其日攻落す。阿波の有様を初て二百餘人討死也。東條又四郎。波多野孫四郎落行道山田にて腹きる。かやうに成行ければ。御所様御屋形も難儀に及といへども。三好元長在津候の間不苦云々。

七日。辰。柳本。木澤等没落。

二水記云。依風雨。今日東衆不打出云々。薄暮。木澤可没落。之由有沙汰云々。後開。入夜没落治定也。東衆少々追之。於之所々數十人討取云々。木澤多分走本願寺。柳本以同所云々。實不可未定也。

宣秀記云。風雨甚。東衆足輕打出云々。今日柳本衆。木澤衆悉以行云々。於清嚴寺山一打留之由申之。

八日。癸。勝軍山兵入洛。

宣秀記云。勝軍衆悉入洛。成敗事堅申云々。

二水記云。若説云。播州池田城落居。四國衆究竟衆打死。一國落居了。常桓衆是又隨分之衆。是又打死云々。

九日。甲。菊池重治叙從四位下。

歷名士代云。從四位下藤重治。享祿四三九。同日左兵衛佐。改義右。

十日。乙。攝州中島合戰。

細川兩家記云。同十日に境を攻へきとて。常桓の御勢。播磨勢淀川をこし。欠郡中島へ陳替し。先陳は住吉のこつまに陳取を。堺よりおしよせ切勝て。播磨のあしがるに谷福島を初て八十餘人が首討取。堺晴元方は悦也。常桓方は利を失ひて天王寺。今宮。木澤。難波に陳取。常桓は中島の内うらいに陣取給ふ。浦上は同野田。福島に陳どる也。其勢二万餘騎と風聞也。境の町人は仰天し。門々に垣をしたりければ。賊に御被などの日と見ゆる也。

廿五日。癸。細川讚岐守持隆著堺津。

細川兩家記云。三月廿五日讚州政之境へ御着津也。その勢八千餘騎と申也。此時節より又島山方の木澤左京亮政長晴元方へ委られける也。

四月大

六日。庚。申近江箕浦合戰。

長享年後畿内兵亂記云。四月六日箕浦合戰。淺井敗北。定頼得勝。

五月小

廿三日。丁。丹波國合戰。

二水記云。後開。今日於丹波國有合戰。浪人二千餘人不慮出張。内藤彦七數度合戦終打死了。三井寺佛持院同時打死云云。彦七此間運分致忠節而今討死。無其詮之跡也。此間ホット云在所城籠了。小勢無益之事也。牢人衆定乘勝之間。從丹波口又可出洛一歎。恐怖也。然者山科衆中出。是又可合手歎。勝軍衆終以不可過三四百云々。恐怖之式也。風聞云。和泉堺之儀無一途。勝事之跡也。常桓近日寄陣於天王寺云々。落着如何々々。今度常桓不披運。所期何哉。只寺社本所領可滅亡之天道歎。可嘆可耻。

閏五月小

十三日。丙。阿波勢自堺出張。

細川兩家記云。閏五月十三日に阿波衆堺より出張也。典厩香川中務丞築島に陣取給ふ。三好筑前守元長衆は住吉の澤の口。遠里小野に陣取給ふ。久米。河村。東條。七條。一宮。三好山城守等は吾孫子。蒲田。堀に陣取。この勢數壹万五千餘と申也。此外八千餘は境に。御所様。同御屋形晴元の御番也。毎日天王寺へ取懸矢軍あり。然處に浦上掃部と申は。古赤松殿を誅し申。當赤松殿親のかたきなる間無念に思召けれ共。とかく打過給ひけり。此初よき時分と思召。常桓御合力風聞あ

り。攝州神咒寺迄御出張あり。境の晴元へ仰合られ。御敵にふれられければ。浦上に付したがふ衆。われもくと赤松殿へ委りければ。次第くにごとに成る也。

是月。依清三位下。向能登國。奉行人傳下知狀。○大友義鑑。少貳資元申請星野親忠追

伐事。

古文書載

清三位入道能登國下向。人拾人。(荷駄荷物有之。馬一疋。諸關渡無其煩可勸過之由。所被仰下也。仍下知如件。

享祿四年閏五月

丹波守平朝臣判
河内守藤原朝臣判
沙 彌判

鎮四製略云。四年夏閏五月。大友。少貳會於筑後。賊逆人征伐之事。依管領細川及引付大館。以所於將軍家許。星野親忠以下逆人追伐之事。

六月大

四日。丙。天王寺合戰。常桓軍敗。浦上掃部助村宗及伊勢貞能戰死。

二水記云。天王寺常桓今日敗軍。數千人討死。大畧没水云